

2 0 2 3 年度

講義計画と内容

教 育 学 研 究 科

【注意事項】

UTAS (<https://utas.adm.u-tokyo.ac.jp/campusweb/>) の内容と相違がある場合には、UTASの内容を正としてください。

2023年3月20日

目 次

I. 2023年度 大学院教育学研究科授業日程	1
II. 教育学研究科の成績評価基準について	4
III. 試験時の不正行為について	5
IV. レポート作成時の留意点について	6
V. 授業科目表	7
VI. 講義内容（シラバス）	
総合教育科学専攻	
基礎教育学専修	
基礎教育学コース	18
教育社会科学専修	
比較教育社会学コース	49
生涯学習基盤経営コース	89
大学経営・政策コース	114
心身発達科学専修	
教育心理学コース	139
臨床心理学コース	171
身体教育学コース	203
学校教育高度化専攻	
教職開発コース	226
教育内容開発コース	249
学校開発政策コース	274
vii. 教員のオフィスアワー及び連絡方法一覧	296
viii. 事務室のオフィスアワー及び連絡方法一覧	306
ix. 地図	307

2023年度教育学研究科授業日程

進学ガイダンス	4月4日(火) 〈※大学経営・政策コースは4月1日(土)〉		
[S1S2]		[A1A2]	
授業期間	4月5日(水)～7月31日(月)	授業期間	10月3日(火)～1月30日(火)
		祝日授業実施	10月9日(月)：スポーツの日 11月3日(金)：文化の日
授業休止	4月12日(水)：入学式（東京大学記念日） 5月12日(金)午後のみ：五月祭準備 5月13日(土)：五月祭	授業休止	11月24日(金), 11月25日(土)：駒場祭 11月27日(月)午前のみ：駒場祭片付け 12月28日(木)～1月3日(水)：冬季休業 1月12日(金)：大学入学共通テスト準備 1月13日(土)：大学入学共通テスト
修了試験	7月18日(火), 7月19日(水), 7月20日(木), 7月21日(金), 7月24日(月) 〈※大学経営・政策コースは7月22日(土)〉	修了試験	1月17日(水), 1月18日(木), 1月23日(火), 1月26日(金), 1月29日(月) 〈※大学経営・政策コースは1月27日(土)〉
補講・集中講義	7月25日(火), 7月26日(水), 7月27日(木), 7月28日(金), 7月31日(月) 〈※大学経営・政策コースは7月29日(土)〉	補講・集中講義	1月24日(水), 1月25日(木), 1月30日(火)
※5月12日(金)午前のみ, 5月29日(月), 5月30日(火), 6月1日(木)は、S1科目の補講日のため、S1S2科目の授業を休止する。		※11月1日(水), 11月21日(火), 11月27日(月)午後のみ, 11月28日(火)は、A1科目の補講日のため、A1A2科目の授業を休止する。	
[S1]		[A1]	
授業期間	4月5日(水)～6月2日(金)	授業期間	10月3日(火)～11月28日(火)
		祝日授業実施	10月9日(月)：スポーツの日 11月3日(金)：文化の日
授業休止	4月12日(水)：入学式（東京大学記念日） 5月12日(金)午後のみ：五月祭準備 5月13日(土)：五月祭	授業休止	11月24日(金), 11月25日(土)：駒場祭 11月27日(月)午前のみ：駒場祭片付け
修了試験	5月22日(月), 5月23日(火), 5月25日(木), 5月31日(水), 6月2日(金) 〈※大学経営・政策コースは6月3日(土)〉	修了試験	11月14日(火), 11月16日(木), 11月17日(金), 11月20日(月), 11月22日(水) 〈※大学経営・政策コースは11月18日(土)〉
補講・集中講義	5月12日(金)午前のみ, 5月29日(月), 5月30日(火), 6月1日(木)	補講・集中講義	11月1日(水), 11月21日(火), 11月27日(月)午後のみ, 11月28日(火)
[S2]		[A2]	
授業期間	6月5日(月)～7月31日(月)	授業期間	11月29日(水)～1月30日(火)
		授業休止	12月28日(木)～1月3日(水)：冬季休業 1月12日(金)：大学入学共通テスト準備 1月13日(土)：大学入学共通テスト
修了試験	7月18日(火), 7月19日(水), 7月20日(木), 7月21日(金), 7月24日(月) 〈※大学経営・政策コースは7月22日(土)〉	修了試験	1月17日(水), 1月18日(木), 1月23日(火), 1月26日(金), 1月29日(月) 〈※大学経営・政策コースは1月27日(土)〉
補講・集中講義	7月25日(火), 7月26日(水), 7月27日(木), 7月28日(金), 7月31日(月) 〈※大学経営・政策コースは7月29日(土)〉	補講・集中講義	1月24日(水), 1月25日(木), 1月30日(火)
夏季休業	8月1日(火)～9月30日(土)	春季休業	1月31日(水)～3月31日(日)
集中講義（夏季）	8月1日(火)～9月1日(金)		

[修士論文関係日程]

修士論文題目届提出期間	11月24日(金)～12月1日(金)
修士論文提出期間	1月4日(木)～1月10日(水)
修士論文要旨提出期間	1月4日(木)～1月11日(木)

[授業時間割]

	時限	(105分)
午前	第1時限	08時30分 ～ 10時15分
	第2時限	10時25分 ～ 12時10分
午後	第3時限	13時00分 ～ 14時45分
	第4時限	14時55分 ～ 16時40分
	第5時限	16時50分 ～ 18時35分
	第6時限	18時45分 ～ 20時30分

2023年度教育学研究科授業日程

〔Ｓセメスター授業等日程〕

○授業期間 4月5日(水)～7月31日(月)

○授業休止 4月12日(水)：入学式（東京大学記念日）

5月12日(金)午後のみ：五月祭準備

5月13日(土)：五月祭

〔Ｓ１Ｓ２科目〕

週１コマ		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	修了試験
月曜日	午前	04/10	04/17	04/24	05/01	05/08	05/15	05/22	06/05	06/12	06/19	06/26	07/03	07/10	07/24
	午後														
火曜日	午前	04/11	04/18	04/25	05/02	05/09	05/16	05/23	06/06	06/13	06/20	06/27	07/04	07/11	07/18
	午後														
水曜日	午前	04/05	04/19	04/26	05/10	05/17	05/24	05/31	06/07	06/14	06/21	06/28	07/05	07/12	07/19
	午後														
木曜日	午前	04/06	04/13	04/20	04/27	05/11	05/18	05/25	06/08	06/15	06/22	06/29	07/06	07/13	07/20
	午後														
金曜日	午前	04/07	04/14	04/21	04/28	05/19	05/26	06/02	06/09	06/16	06/23	06/30	07/07	07/14	07/21
	午後														
土曜日	午前	04/08	04/15	04/22	05/06	05/20	05/27	06/03	06/10	06/17	06/24	07/01	07/08	07/15	07/22
	午後														

○補講・集中講義 7月25日(火), 7月26日(水), 7月27日(木), 7月28日(金), 7月31日(月) (※大学経営・政策コースは7月29日(土))

※5月12日(金)午前のみ, 5月29日(月), 5月30日(火), 6月1日(木)は、Ｓ１科目の補講日のため、Ｓ１Ｓ２科目の授業を休止する。

〔Ｓ１科目〕

1日2コマ連続		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回							
								修了試験							
月曜日	午前	04/10	04/17	04/24	05/01	05/08	05/15	05/22							
	午後														
火曜日	午前	04/11	04/18	04/25	05/02	05/09	05/16	05/23							
	午後														
水曜日	午前	04/05	04/19	04/26	05/10	05/17	05/24	05/31							
	午後														
木曜日	午前	04/06	04/13	04/20	04/27	05/11	05/18	05/25							
	午後														
金曜日	午前	04/07	04/14	04/21	04/28	05/19	05/26	06/02							
	午後														
土曜日	午前	04/08	04/15	04/22	05/06	05/20	05/27	06/03							
	午後														
週２コマ		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	修了試験
月曜日	午前	04/06	04/10	04/13	04/17	04/20	04/24	04/27	05/01	05/08	05/11	05/15	05/18	05/22	05/25
木曜日	午後														
火曜日	午前	04/07	04/11	04/14	04/18	04/21	04/25	04/28	05/02	05/09	05/12	05/16	05/19	05/23	06/02
金曜日	午後														

○補講・集中講義 5月12日(金)午前のみ, 5月29日(月), 5月30日(火), 6月1日(木)

〔Ｓ２科目〕

1日2コマ連続		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回							
								修了試験							
月曜日	午前	06/05	06/12	06/19	06/26	07/03	07/10	07/24							
	午後														
火曜日	午前	06/06	06/13	06/20	06/27	07/04	07/11	07/18							
	午後														
水曜日	午前	06/07	06/14	06/21	06/28	07/05	07/12	07/19							
	午後														
木曜日	午前	06/08	06/15	06/22	06/29	07/06	07/13	07/20							
	午後														
金曜日	午前	06/09	06/16	06/23	06/30	07/07	07/14	07/21							
	午後														
土曜日	午前	06/10	06/17	06/24	07/01	07/08	07/15	07/22							
	午後														
週２コマ		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	修了試験
月曜日	午前	06/05	06/08	06/12	06/15	06/19	06/22	06/26	06/29	07/03	07/06	07/10	07/13	07/20	07/24
木曜日	午後														
火曜日	午前	06/06	06/09	06/13	06/16	06/20	06/23	06/27	06/30	07/04	07/07	07/11	07/14	07/18	07/21
金曜日	午後														

○補講・集中講義 7月25日(火), 7月26日(水), 7月27日(木), 7月28日(金), 7月31日(月) (※大学経営・政策コースは7月29日(土))

[A セメスター授業等日程]

○授業期間	10月3日(火)～1月30日(火)	
○祝日授業実施	10月9日(月)：スポーツの日	11月3日(金)：文化の日
○授業休止	11月24日(金), 11月25日(土)：駒場祭	11月27日(月)午前のみ：駒場祭片付け
	12月28日(木)～1月3日(水)：冬季休業	1月12日(金)：大学入学共通テスト準備
	1月13日(土)：大学入学共通テスト	

[A 1 A 2 科目]

週 1 コマ	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	修了試験
月曜日	午前 10/09 午後 (祝日)	10/16	10/23	10/30	11/06	11/13	11/20	12/04	12/11	12/18	12/25	01/15	01/22	01/29
火曜日	午前 10/03 午後	10/10	10/17	10/24	10/31	11/07	11/14	12/05	12/12	12/19	12/26	01/09	01/16	01/23
水曜日	午前 10/04 午後	10/11	10/18	10/25	11/08	11/15	11/22	11/29	12/06	12/13	12/20	12/27	01/10	01/17
木曜日	午前 10/05 午後	10/12	10/19	10/26	11/02	11/09	11/16	11/30	12/07	12/14	12/21	01/04	01/11	01/18
金曜日	午前 10/06 午後	10/13	10/20	10/27	11/03 (祝日)	11/10	11/17	12/01	12/08	12/15	12/22	01/05	01/19	01/26
土曜日	午前 10/07 午後	10/14	10/21	10/28	11/04	11/11	11/18	12/02	12/09	12/16	12/23	01/06	01/20	01/27

○補講・集中講義 1月24日(水), 1月25日(木), 1月30日(火)

※11月1日(水), 11月21日(火), 11月27日(月)午後のみ, 11月28日(火)は、A 1 科目の補講日のため、A 1 A 2 科目の授業を休止する。

[A 1 科目]

1日2コマ連続	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回 修了試験							
月曜日	午前 10/09 午後 (祝日)	10/16	10/23	10/30	11/06	11/13	11/20							
火曜日	午前 10/03 午後	10/10	10/17	10/24	10/31	11/07	11/14							
水曜日	午前 10/04 午後	10/11	10/18	10/25	11/08	11/15	11/22							
木曜日	午前 10/05 午後	10/12	10/19	10/26	11/02	11/09	11/16							
金曜日	午前 10/06 午後	10/13	10/20	10/27	11/03 (祝日)	11/10	11/17							
土曜日	午前 10/07 午後	10/14	10/21	10/28	11/04	11/11	11/18							
週 2 コマ	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	修了試験
月曜日	午前 10/05 午後	10/09 (祝日)	10/12	10/16	10/19	10/23	10/26	10/30	11/02	11/06	11/09	11/13	11/16	11/20
火曜日	午前 10/03 午後	10/06	10/10	10/13	10/17	10/20	10/24	10/27	10/31	11/03 (祝日)	11/07	11/10	11/14	11/17

○補講・集中講義 11月1日(水), 11月21日(火), 11月27日(月)午後のみ, 11月28日(火)

[A 2 科目]

1日2コマ連続	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回 修了試験							
月曜日	午前 12/04 午後	12/11	12/18	12/25	01/15	01/22	01/29							
火曜日	午前 12/05 午後	12/12	12/19	12/26	01/09	01/16	01/23							
水曜日	午前 11/29 午後	12/06	12/13	12/20	12/27	01/10	01/17							
木曜日	午前 11/30 午後	12/07	12/14	12/21	01/04	01/11	01/18							
金曜日	午前 12/01 午後	12/08	12/15	12/22	01/05	01/19	01/26							
土曜日	午前 12/02 午後	12/09	12/16	12/23	01/06	01/20	01/27							
週 2 コマ	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	修了試験
月曜日	午前 11/30 午後	12/04	12/07	12/11	12/14	12/18	12/21	12/25	01/04	01/11	01/15	01/18	01/22	01/29
火曜日	午前 12/01 午後	12/05	12/08	12/12	12/15	12/19	12/22	12/26	01/05	01/09	01/16	01/19	01/23	01/26

○補講・集中講義 1月24日(水), 1月25日(木), 1月30日(火)

教育学研究科の成績評価基準について

本研究科の成績評価は、以下の基準に基づいて行なわれます。

評価	基 準
優	授業の科目目標となっている課題を十分に満たす、優秀な学習・研究成果を示した。
良	授業の科目目標となっている課題を満たす学習・研究成果を示した。
可	授業の科目目標となっている課題に関して、ある程度の学習・研究成果を示した。
不可	授業の科目目標となっている課題に関して、評価できる学習・研究成果を示すことができなかった。

試験時の不正行為について

1. 筆記試験による場合

試験は公正に行われるべきであり、不正行為は許されない。

不正行為を行ったと認められた者は、その学期の全科目の得点を無効とされ、学生処分の対象となる。

2. 平常点による場合

授業中に不正行為を行ったと認められた者も、試験の際の不正行為と同様、その学期の全科目の得点を無効とされ、学生処分の対象となる。

3. レポートによる場合

科目によっては学生が提出したレポートに基づいて成績の評価を行うことがある。その際、教員から特別な指示がない限り、レポートは学生個人が自己の責任において作成するものである。レポートで他の文章やデータ、URL を引用する場合は、引用符などで引用箇所を明示し、出典を明記しなければならない。これに反する不正行為が認められた場合は、当該レポートが無効と判定されるだけでなく、試験の際の不正行為と同様、その学期の全科目の得点を無効とされ、学生処分の対象となる。またレポート提出者のみならず、不正なレポート作成に協力した者も、同様に取り扱われる。

レポート作成時の留意点について

レポートは学生個人が自己の責任において作成するものである。レポートで他者の文章やデータ、Web 上の情報等を引用する場合は、引用符などで引用箇所を明示し、出典を明記しなければならない。これに反する不正行為が認められた場合は、当該レポートが無効となるだけでなく、試験の際の不正行為と同様、その学期の全科目の得点が無効とされ、学生処分の対象となる。また、レポート提出者のみならず、不正なレポート作成に協力した者も同様に取り扱われる。

(2) 教育学研究科授業科目表

〔 自 2023年4月
至 2024年3月 〕

総合教育科学専攻 基礎教育学専修

基礎教育学コース

【備考欄の＊印は、基礎教育学コース所属学生のみ履修可】

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-211-01	教育哲学基本研究	教育哲学演習Ⅰ	教授	山名 淳	2	S1S2		*2
23-211-02	教育人間学基本研究	教育思想演習	教授	小玉 重夫	2	S1S2		*2
23-211-03	教育人間学基本研究	教育人間学基本演習	准教授	片山 勝茂	2	S1S2		*2
23-211-04	教育史基本研究	日本教育史演習Ⅰ	教授	小国 喜弘	2	S1S2		*2
23-211-05	教育史基本研究	高等教育・研究の歴史Ⅰ	教授	隠岐 さや香	2	S1S2		*2
23-211-06	教育史基本研究	教育社会史研究	非常勤講師	江口 潔	2	8-9月	集中講義(8-9月)	
23-211-07	教育臨床学基本研究	教育臨床学基本演習	教授	田中 智志	2	S1S2		*2
23-211-08	教育臨床学基本研究	臨床現象学Ⅰ	准教授	大塚 類	2	S1S2		
23-211-09	基礎教育学特殊研究	基礎教育学総合演習	教授 教授 教授 教授 准教授 准教授	田中 智志 小玉 重夫 山名 淳 小国 喜弘 隠岐 さや香 片山 勝茂 大塚 類	2	通年	* 隔週	*2
23-211-10	教育哲学特殊研究	教育哲学演習Ⅱ	教授 非常勤講師	山名 淳 Markus Rieger- Ladich	2	A1A2		*2
23-211-11	教育人間学特殊研究	教育政治学演習	教授	小玉 重夫	2	A1A2		*2
23-211-12	教育人間学特殊研究	教育人間学特殊研究	准教授	片山 勝茂	2	A1A2		*2
23-211-13	教育史特殊研究	日本教育史演習Ⅱ	教授	小国 喜弘	2	A1A2		*2
23-211-14	教育史特殊研究	高等教育・研究の歴史Ⅱ	教授	隠岐 さや香	2	A1A2		*2
23-211-15	教育臨床学特殊研究	教育臨床学演習	教授	田中 智志	2	A1A2		*2
23-211-16	教育臨床学特殊研究	臨床現象学Ⅱ	准教授	大塚 類	2	A1A2		
23-211-17	教育哲学論文指導	教育哲学論文指導	教授	山名 淳	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-211-18	教育哲学論文指導	教育哲学論文指導	教授	山名 淳	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-211-19	教育人間学論文指導	教育思想論文指導	教授	小玉 重夫	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-211-20	教育人間学論文指導	教育思想論文指導	教授	小玉 重夫	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-211-21	教育人間学論文指導	教育人間学論文指導	准教授	片山 勝茂	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-211-22	教育人間学論文指導	教育人間学論文指導	准教授	片山 勝茂	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-211-23	教育史論文指導	日本教育史論文指導	教授	小国 喜弘	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-211-24	教育史論文指導	日本教育史論文指導	教授	小国 喜弘	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-211-25	教育史論文指導	西洋教育史論文指導	教授	隠岐 さや香	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-211-26	教育史論文指導	西洋教育史論文指導	教授	隠岐 さや香	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	

23-211-27	教育臨床学論文指導	教育臨床学論文指導	教授	田中 智志	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-211-28	教育臨床学論文指導	教育臨床学論文指導	教授	田中 智志	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-211-29	教育臨床学論文指導	臨床現象学論文指導	准教授	大塚 類	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-211-30	教育臨床学論文指導	臨床現象学論文指導	准教授	大塚 類	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	

総合教育科学専攻 教育社会科学専修

比較教育社会学コース

【備考欄の*印は、比較教育社会学コース所属学生のみ履修可】

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-212-01	教育社会学基本研究	現代日本社会における教育・仕事・家族	教授	本田 由紀	2	S2		*2
23-212-02	教育社会学基本研究	市民社会・国家・教育	教授	仁平 典宏	2	S1		*2
23-212-03	高等教育論基本研究	教育と不平等の社会学Ⅰ	准教授	多喜 弘文	2	S1S2		*2
23-212-04	比較教育システム論基本研究	教育社会学の諸概念	教授	中村 高康	2	S1		*2
23-212-05	比較教育システム論基本研究	教育社会学方法論研究	教授	三輪 哲	2	A1A2	合併科目(学際情報学府)	*2
23-212-06	教育社会学特殊研究	教育社会学の研究課題	教授	本田 由紀	2	A1A2		*2
23-212-07	教育社会学特殊研究	教育言説の社会学	教授	仁平 典宏	2	A2		
23-212-08	高等教育論特殊研究	教育と不平等の社会学Ⅱ	准教授	多喜 弘文	2	A1A2		
23-212-09	教育社会学特殊研究	障害の社会理論を読む	准教授	星加 良司	2	S1S2		
23-212-10	教育社会学特殊研究	教育社会の計量分析	教授	佐藤 香	2	S1S2		*2
23-212-11	教育社会学特殊研究	格差・不平等研究のための社会的埋め込み論	准教授	石田 賢示	2	A1A2		
23-212-12	教育社会学特殊研究	社会科学のためのベイズ統計モデリング	非常勤講師	浜田 宏	2	8-9月	集中講義(8-9月)	
23-212-13	教育社会学特殊研究	Ethnicity, Nationalism and Education	非常勤講師	高橋 史子	2	A1A2		
23-212-14	比較教育システム論特殊研究	教育と選抜の諸問題	教授	中村 高康	2	A1A2		*2
23-212-15	比較教育学特殊研究	質的方法論研究	教授	額賀 美紗子	2	A1		*2
23-212-16	比較教育学特殊研究	グローバル時代の国際移動と教育	教授	額賀 美紗子	2	A2		
23-212-17	教育社会学論文指導	教育社会学論文指導	教授	本田 由紀	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-212-18	教育社会学論文指導	教育社会学論文指導	教授	本田 由紀	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-212-19	教育社会学論文指導	教育社会学論文指導	教授	仁平 典宏	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-212-20	教育社会学論文指導	教育社会学論文指導	教授	仁平 典宏	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-212-21	教育社会学論文指導	教育社会学論文指導	准教授	星加 良司	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-212-22	教育社会学論文指導	教育社会学論文指導	准教授	星加 良司	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-212-23	教育社会学論文指導	計量教育社会学論文指導	教授	佐藤 香	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	

23-212-24	教育社会学論文指導	計量教育社会学論文指導	教授	佐藤 香	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-212-25	教育社会学論文指導	計量教育社会学論文指導	教授	三輪 哲	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-212-26	教育社会学論文指導	計量教育社会学論文指導	教授	三輪 哲	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-212-27	教育社会学論文指導	計量教育社会学論文指導	准教授	石田 賢示	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-212-28	教育社会学論文指導	計量教育社会学論文指導	准教授	石田 賢示	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-212-29	高等教育論論文指導	高等教育論論文指導	准教授	多喜 弘文	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-212-30	高等教育論論文指導	高等教育論論文指導	准教授	多喜 弘文	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-212-31	高等教育論論文指導	高等教育論論文指導	客員教授	橋本 鉦市	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-212-32	高等教育論論文指導	高等教育論論文指導	客員教授	橋本 鉦市	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-212-33	比較教育システム論論文指導	比較教育システム論論文指導	教授	中村 高康	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-212-34	比較教育システム論論文指導	比較教育システム論論文指導	教授	中村 高康	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-212-35	比較教育学論文指導	比較教育学論文指導	教授	額賀 美紗子	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-212-36	比較教育学論文指導	比較教育学論文指導	教授	額賀 美紗子	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-212-37	比較教育学論文指導	比較教育学論文指導	客員教授	恒吉 僚子	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-212-38	比較教育学論文指導	比較教育学論文指導	客員教授	恒吉 僚子	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	

総合教育科学専攻 教育社会科学専修

生涯学習基盤経営コース

【備考欄の*印は、生涯学習基盤経営コース所属学生のみ履修可】

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-213-01	生涯学習論基本研究	生涯学習論基本研究Ⅰ	教授	牧野 篤	2	S1		*2
23-213-02	図書館情報学基本研究	図書館情報学研究方法論	教授	影浦 峯	2	S1S2		*2
23-213-03	図書館情報学基本研究	図書館情報学総合研究	教授	影浦 峯	2	通年	隔週	
23-213-04	生涯学習論特殊研究	生涯学習論特殊研究Ⅰ	教授	李 正連	2	A1		*2
23-213-05	生涯学習論特殊研究	生涯学習論特殊研究Ⅱ	准教授	新藤 浩伸	2	A2		*2
23-213-06	社会教育学特殊研究	排除型社会におけるコミュニティ、労働、学習	非常勤講師	大高 研道	2	S2		
23-213-07	社会教育学特殊研究	プログラム評価論	非常勤講師	安田 節之	2	8-9月	集中講義(8-9月)	*2
23-213-08	図書館情報学特殊研究	情報媒体構造論	講師	宮田 玲	2	A1A2		*2
23-213-09	図書館情報学特殊研究	図書館情報学理論研究	准教授	河村 俊太郎	2	S1S2		*2
23-213-10	図書館情報学特殊研究	図書館情報学特別講義	客員准教授	池内 淳	2	A1A2		
23-213-11	図書館情報学特殊研究	分類科学特論	非常勤講師	網谷 祐一	2	8-9月	集中講義(8-9月)	
23-213-12	生涯学習論論文指導	生涯学習論論文指導	教授	牧野 篤	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	

23-213-13	生涯学習論論文指導	生涯学習論論文指導	教授	牧野 篤	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-213-14	生涯学習論論文指導	生涯学習論論文指導	教授	李 正連	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-213-15	生涯学習論論文指導	生涯学習論論文指導	教授	李 正連	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-213-16	生涯学習論論文指導	生涯学習論論文指導	准教授	新藤 浩伸	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-213-17	生涯学習論論文指導	生涯学習論論文指導	准教授	新藤 浩伸	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-213-18	図書館情報学論文指導	図書館情報学論文指導	教授	影浦 峽	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-213-19	図書館情報学論文指導	図書館情報学論文指導	教授	影浦 峽	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-213-20	図書館情報学論文指導	図書館情報学論文指導	准教授	河村 俊太郎	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-213-21	図書館情報学論文指導	図書館情報学論文指導	准教授	河村 俊太郎	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-213-22	図書館情報学論文指導	図書館情報学論文指導	客員准教授	池内 淳	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-213-23	図書館情報学論文指導	図書館情報学論文指導	客員准教授	池内 淳	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-213-24	図書館情報学論文指導	図書館情報学論文指導	講師	宮田 玲	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-213-25	図書館情報学論文指導	図書館情報学論文指導	講師	宮田 玲	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	

総合教育科学専攻 教育社会科学専修

大学経営・政策コース

【備考欄の*印は、大学経営・政策コース所属学生のみ履修可】

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-214-01	大学経営政策基本研究	高等教育論	教授	阿曾沼 明裕	2	S2		*2
23-214-02	大学経営政策基本研究	高等教育政策論	教授	阿曾沼 明裕	2	A1A2		*2
23-214-03	大学経営政策基本研究	大学経営政策演習(2)	教授 教授 教授	阿曾沼 明裕 福留 東土 両角 亜希子	2	通年	隔週	*2
23-214-04	大学経営政策基本研究	大学経営政策研究	教授 教授 教授	阿曾沼 明裕 福留 東土 両角 亜希子	2	通年	* 隔週	*2
23-214-05	大学経営政策基本研究	比較大学論	教授	福留 東土	2	A1A2		*2
23-214-06	大学経営政策基本研究	大学経営論	教授	両角 亜希子	2	S1		*2
23-214-07	大学経営政策特殊研究	大学経営政策各論(1)	教授	福留 東土 両角 亜希子	2	S1S2		*2
23-214-08	大学経営政策特殊研究	大学経営政策各論(2)	教授 客員教授 非常勤講師	両角 亜希子 林 隆之 齋藤 芳子	2	A1A2		*2
23-214-09	大学経営政策特殊研究	高等教育調査の方法と解析 (1)	非常勤講師	大多和 直樹	2	8-9月	* 集中講義(8-9月)	*2
23-214-10	大学経営政策特殊研究	高等教育調査の方法と解析 (2)	非常勤講師	濱中 義隆	2	A1A2		*2
23-214-11	大学経営政策特殊研究	比較大学経営論(1)	教授	福留 東土	2	S2	集中講義(S2)	*2
23-214-12	大学経営政策特殊研究	大学経営事例研究(2)	教授	両角 亜希子	2	通年	不定期開講(詳細は掲示等 参照)	*2
23-214-13	大学経営政策論文指導	大学経営政策論文指導	教授 教授 教授 客員教授 客員教授	阿曾沼 明裕 福留 東土 両角 亜希子 栗田 佳代子 深堀 聡子 林 隆之	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	

23-214-14	大学経営政策論文指導	大学経営政策論文指導	教授 教授 教授 客員教授 客員教授	阿曾 沼 明裕 福留 東土 両角 亜希子 栗田 佳代子 深堀 聡子 林 隆之	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
-----------	------------	------------	--------------------------------	---	---	----	----------------	--

総合教育科学専攻 心身発達科学専修

教育心理学コース

【備考欄の*印は、教育心理学コース所属学生のみ履修可】

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-215-01	教授・学習心理学基本研究	教授・学習過程の心理学Ⅰ	准教授	清河 幸子	2	S1S2		
23-215-02	発達心理学基本研究	感情と進化・文化	教授	遠藤 利彦	2	S1S2		*2
23-215-03	発達心理学基本研究	ことばと認知の発達Ⅰ	教授	針生 悦子	2	S1S2		*2
23-215-04	教育認知科学基本研究	創造的認知の心理学Ⅰ	教授	岡田 猛	2	S1S2	合併科目(学際情報学府)	*2
23-215-05	教育情報科学基本研究	心理統計学演習	准教授	岡田 謙介	2	S1S2		
23-215-06	教育情報科学基本研究	心理統計学特論	准教授	岡田 謙介	2	A1A2		
23-215-07	教授・学習心理学特殊研究	教授・学習過程の心理学Ⅱ	准教授	清河 幸子	2	A1A2		
23-215-08	発達心理学特殊研究	関係性と子どもの社会情緒 的発達	教授	遠藤 利彦	2	A1A2		*2
23-215-09	発達心理学特殊研究	ことばと認知の発達Ⅱ	教授	針生 悦子	2	A1A2		*2
23-215-10	教育認知科学特殊研究	創造的認知の心理学Ⅱ	教授	岡田 猛	2	A1A2	合併科目(学際情報学府)	*2
23-215-11	教育情報科学特殊研究	量的研究法	准教授	宇佐美 慧	2	S1S2		
23-215-12	教育情報科学特殊研究	心理統計学の近年の展開	准教授	宇佐美 慧	2	A1A2		
23-215-13	教育情報科学特殊研究	心理測定のための数学的 道具	非常勤講師	前川 眞一	2	S1S2		
23-215-14	教育情報科学特殊研究	心理統計学概論	非常勤講師	山本 倫生	2	8-9月	集中講義(8-9月)	
23-215-15	教授・学習心理学論文指導	教育心理学論文指導	准教授	清河 幸子	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-215-16	教授・学習心理学論文指導	教育心理学論文指導	准教授	清河 幸子	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-215-17	教育認知科学論文指導	教育心理学論文指導	准教授	植阪 友理	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-215-18	教育認知科学論文指導	教育心理学論文指導	准教授	植阪 友理	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-215-19	発達心理学論文指導	教育心理学論文指導	教授	遠藤 利彦	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-215-20	発達心理学論文指導	教育心理学論文指導	教授	遠藤 利彦	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-215-21	発達心理学論文指導	教育心理学論文指導	教授	針生 悦子	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-215-22	発達心理学論文指導	教育心理学論文指導	教授	針生 悦子	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-215-23	発達心理学論文指導	教育心理学論文指導	准教授	野澤 祥子	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-215-24	発達心理学論文指導	教育心理学論文指導	准教授	野澤 祥子	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-215-25	教育認知科学論文指導	教育心理学論文指導	教授	岡田 猛	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-215-26	教育認知科学論文指導	教育心理学論文指導	教授	岡田 猛	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	

23-215-27	教育情報科学論文指導	教育心理学論文指導	准教授	岡田 謙介	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-215-28	教育情報科学論文指導	教育心理学論文指導	准教授	岡田 謙介	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-215-29	教育情報科学論文指導	教育心理学論文指導	准教授	宇佐美 慧	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-215-30	教育情報科学論文指導	教育心理学論文指導	准教授	宇佐美 慧	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-215-31	教育認知科学基本研究	教育認知科学特論	准教授	植阪 友理	2	S1S2		
23-215-32	教育認知科学特殊研究	教育認知科学演習	准教授	植阪 友理	2	A1A2		

総合教育科学専攻 心身発達科学専修

臨床心理学コース

【備考欄の*印は、臨床心理学コース所属学生のみ履修可】

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-216-01	臨床心理システム論基本研究	臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習）	教授 講師 特任講師	能智 正博 野中 舞子 稲吉 玲美	1	S1S2	* 修士2年必須	*5
23-216-02	臨床心理システム論基本研究	臨床心理実習Ⅱ	教授 講師 特任講師	能智 正博 野中 舞子 稲吉 玲美	1	A1A2	* 修士2年必須	*5
23-216-03	臨床心理カリキュラム論基本研究	臨床心理学特論Ⅰ	講師	野中 舞子	2	S1S2	* 修士1年必須	*5
23-216-04	臨床心理システム論基本研究	臨床心理学特論Ⅱ	教授	高橋 美保	2	A1A2	* 修士1年必須	*5
23-216-05	臨床心理システム論基本研究	臨床心理面接特論Ⅱ	教授	能智 正博	2	A1A2	* 修士1年必須	*5
23-216-06	臨床心理カリキュラム論基本研究	臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践）	准教授	滝沢 龍	2	S1S2	* 修士1年必須	*5
23-216-07	発達臨床心理学基本研究	臨床心理査定演習Ⅱ	准教授 教授	滝沢 龍 高橋 美保	2	A1A2	* 修士1年必須	*5
23-216-08	臨床心理カリキュラム論基本研究	臨床心理基礎実習Ⅰ	教授 講師	高橋 美保 野中 舞子	1	S1S2	* 修士1年必須	*5
23-216-09	発達臨床心理学基本研究	臨床心理基礎実習Ⅱ	教授 教授	高橋 美保 能智 正博	1	S1S2	* 修士1年必須	*5
23-216-10	発達臨床心理学基本研究	臨床心理面接特論Ⅰ（心理支援に関する理論と実践）	教授	高橋 美保	2	A1A2	* 修士1年必須	*5
23-216-11	臨床心理カリキュラム論特殊研究	臨床心理学研究法	教授 准教授	能智 正博 滝沢 龍	2	S1S2		*2
23-216-12	発達臨床心理学特殊研究	メンタルヘルスマネジメント基礎（福祉分野に関する理論と支援の展開）	教授	能智 正博	2	S1S2	* 隔年で開講。2024年度は開講しない。	
23-216-13	発達臨床心理学特殊研究	メンタルヘルスマネジメント応用（教育分野に関する理論と支援の展開）	講師	野中 舞子	2	A1A2	* 隔年で開講。2024年度は開講しない。	
23-216-14	臨床心理システム論特殊研究	コミュニティアプローチ特論（家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践）	教授 非常勤講師	高橋 美保 安 婷婷	2	A1A2	* 隔年で開講。2024年度は開講しない。	
23-216-15	発達臨床心理学特殊研究	精神医学特論（保健医療分野に関する理論と支援の展開）	准教授	滝沢 龍	2	A1A2		*2
23-216-16	発達臨床心理学特殊研究	心理療法特論：スーパービジョンⅠ	非常勤講師	田中 究	2	S1S2	*	*2
23-216-17	発達臨床心理学特殊研究	心理療法特論：スーパービジョンⅡ	非常勤講師	田中 究	2	A1A2	*	*2

23-216-18	発達臨床心理学特殊研究	心理療法特論:スーパービ ジョンⅢ	非常勤講師	林 潤一郎	2	S1S2	*	
23-216-19	発達臨床心理学特殊研究	心理療法特論:スーパービ ジョンⅣ	非常勤講師	林 潤一郎	2	A1A2	*	
23-216-20	発達臨床心理学特殊研究	障害学演習	教授	福島 智	2	A1A2		*2
23-216-21	臨床心理システム論論文指 導	臨床心理学論文指導	教授	高橋 美保	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-216-22	臨床心理システム論論文指 導	臨床心理学論文指導	教授	高橋 美保	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-216-23	臨床心理システム論論文指 導	臨床心理学論文指導	客員教授	大橋 靖史	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-216-24	臨床心理システム論論文指 導	臨床心理学論文指導	客員教授	大橋 靖史	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-216-25	臨床心理カリキュラム論論 文指導	臨床心理学論文指導	教授	能智 正博	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-216-26	臨床心理カリキュラム論論 文指導	臨床心理学論文指導	教授	能智 正博	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-216-27	臨床心理カリキュラム論論 文指導	臨床心理学論文指導	准教授	滝沢 龍	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-216-28	臨床心理カリキュラム論論 文指導	臨床心理学論文指導	准教授	滝沢 龍	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-216-29	発達臨床心理学論文指導	臨床心理学論文指導	講師	野中 舞子	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-216-30	発達臨床心理学論文指導	臨床心理学論文指導	講師	野中 舞子	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-216-31	発達臨床心理学論文指導	障害学論文指導	教授	福島 智	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-216-32	発達臨床心理学論文指導	障害学論文指導	教授	福島 智	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
	発達臨床心理学特殊研究	メンタルヘルスマネジメント 基礎(産業・労働分野に関 する理論と支援の展開)			2	S1S2	* 隔年で開講。2023年度は 開講しない。	*5
	発達臨床心理学特殊研究	メンタルヘルスマネジメント 応用(心の健康教育に関 する理論と実践)			2	A1A2	* 隔年で開講。2023年度は 開講しない。	*5
	臨床心理カリキュラム論特 殊研究	司法・犯罪分野に関する理 論と支援の展開			2	S2	* 隔年で開講。2023年度は 開講しない。	

総合教育科学専攻 心身発達科学専修

身体教育学コース

【備考欄の*印は、身体教育学コース所属学生のみ履修可】

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-217-01	身体教育科学基本研究	身体教育科学の諸問題Ⅰ	教授	野崎 大地	2	S1S2		*7
23-217-02	教育生理学基本研究	身体システム論Ⅰ	教授 准教授	山本 義春 森田 賢治	2	S1S2		*7
23-217-03	発達脳科学基本研究	発達脳科学特論Ⅰ	教授	多賀 厳太郎	2	S1		*7
23-217-04	健康教育科学基本研究	健康教育科学の諸問題Ⅰ	教授 教授	佐々木 司 東郷 史治	2	S1S2		*6
23-217-05	身体教育科学特殊研究	身体教育科学の諸問題Ⅱ	教授	野崎 大地	2	A1A2		*7
23-217-06	身体教育科学特殊研究	スポーツ脳科学特論	客員教授	柏野 牧夫	2	8-9月	集中講義(8-9月)	
23-217-07	教育生理学特殊研究	身体システム論Ⅱ	教授 准教授	山本 義春 森田 賢治	2	A1A2		*7
23-217-08	発達脳科学特殊研究	発達脳科学特論Ⅱ	教授	多賀 厳太郎	2	A1		*7
23-217-09	健康教育科学特殊研究	健康教育科学の諸問題Ⅱ	教授 教授	佐々木 司 東郷 史治	2	A1A2		*6
23-217-10	身体教育科学論文指導	身体教育科学論文指導	教授	野崎 大地	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	

23-217-11	身体教育科学論文指導	身体教育科学論文指導	教授	野崎 大地	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-217-12	身体教育科学論文指導	身体教育科学論文指導	准教授	森田 賢治	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-217-13	身体教育科学論文指導	身体教育科学論文指導	准教授	森田 賢治	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-217-14	身体教育科学論文指導	身体教育科学論文指導	客員教授	柏野 牧夫	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-217-15	身体教育科学論文指導	身体教育科学論文指導	客員教授	柏野 牧夫	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-217-16	教育生理学論文指導	教育生理学論文指導	教授	山本 義春	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-217-17	教育生理学論文指導	教育生理学論文指導	教授	山本 義春	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-217-18	教育生理学論文指導	教育生理学論文指導	教授	東郷 史治	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-217-19	教育生理学論文指導	教育生理学論文指導	教授	東郷 史治	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-217-20	発達脳科学論文指導	発達脳科学論文指導	教授	多賀 徹太郎	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-217-21	発達脳科学論文指導	発達脳科学論文指導	教授	多賀 徹太郎	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-217-22	健康教育学論文指導	健康教育学論文指導	教授	佐々木 司	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-217-23	健康教育学論文指導	健康教育学論文指導	教授	佐々木 司	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	

学校教育高度化専攻

教職開発コース

【備考欄の*印は、教職開発コース所属学生のみ履修可】

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-301-01	教職開発・理論研究 (授業研究・基礎研究)	保育学研究	准教授	野澤 祥子	2	A1A2	隔週	*3
23-301-02	教職開発・理論研究 (カリキュラム研究・基礎研究)	教育実践の歴史的研究	教授	浅井 幸子	2	S1		*3
23-301-03	教職開発・理論研究 (授業研究・発展研究)	学習デザインの理論と方法	准教授	一柳 智紀	2	A1		*1
23-301-04	教職開発・理論研究 (カリキュラム研究・発展研究)	学校教育研究と談話分析	教授	藤江 康彦	2	S1		*1
23-301-05	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)	教師のライフヒストリー研究	非常勤講師	高井良 健一	2	S1	合併科目(教育内容開発 コース・学校開発政策コース)	*3
23-301-06	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)	対話的教育の理論と実践	非常勤講師	河野 哲也	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教育内容開発 コース・学校開発政策コース)	*3
23-301-07	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)	比較授業分析と教師教育 学研究	非常勤講師	Sarkar Arani Mohammad Reza	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教育内容開発 コース・学校開発政策コース)	*3
23-301-08	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)	国語科教育の理論と実践	非常勤講師	濱田 秀行	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教育内容開発 コース・学校開発政策コース)	*1
23-301-09	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)	地球規模課題とESD	非常勤講師	永田 佳之	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教育内容開発 コース・学校開発政策コース)	*3
23-301-10	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)	生涯学習時代の美術教育 における鑑賞のデザイン	客員教授	杉浦 幸子	2	S2	合併科目(教育内容開発 コース・学校開発政策コース)	*1
23-301-11	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)	教育法の現代的課題	非常勤講師	小泉 広子	2	A1A2	合併科目(教育内容開発 コース・学校開発政策コース)	*3
23-301-12	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)	教育制度の公共政策分析	非常勤講師	宗前 清貞	2	A1A2	合併科目(教育内容開発 コース・学校開発政策コース)	*1
23-301-13	教職開発・実践研究 (授業研究・事例研究)	カリキュラムの事例研究	教授	藤江 康彦	2	S2	合併科目(教育内容開発 コース)	*1

23-301-14	教職開発・実践研究 (授業研究・事例研究)	授業の事例研究	准教授	一柳 智紀	2	A2	合併科目(教育内容開発コース)	*1
23-301-15	教職開発・実践研究 (教職開発・事例研究)	教科学習の事例研究	教授	北村 友人	2	S1	合併科目(教育内容開発コース)	*1
23-301-16	教職開発・実践研究 (教職開発・実地研究)	授業の実地研究	教授	浅井 幸子	2	A1A2	合併科目(教育内容開発コース)	*1
23-301-17	教職開発・実践研究 (教職開発・実地研究)	教科学習の実地研究	教授	藤村 宣之	2	A1A2	合併科目(教育内容開発コース)	*1
23-301-18	教職開発・論文指導 (授業研究・論文指導)	授業研究論文指導	准教授	一柳 智紀	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-301-19	教職開発・論文指導 (授業研究・論文指導)	授業研究論文指導	准教授	一柳 智紀	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-301-20	教職開発・論文指導 (カリキュラム研究・論文指導)	カリキュラム研究論文指導	教授	藤江 康彦	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-301-21	教職開発・論文指導 (カリキュラム研究・論文指導)	カリキュラム研究論文指導	教授	藤江 康彦	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-301-22	教職開発・論文指導 (カリキュラム研究・論文指導)	カリキュラム研究論文指導	教授	浅井 幸子	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-301-23	教職開発・論文指導 (カリキュラム研究・論文指導)	カリキュラム研究論文指導	教授	浅井 幸子	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	

学校教育高度化専攻

教育内容開発コース

【備考欄の*印は、教育内容開発コース所属学生のみ履修可】

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-302-01	教育内容開発・理論研究 (言語教育・基礎研究)	国語科教育の理論と実践	非常勤講師	濱田 秀行	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教職開発コース・ 学校開発政策コース)	*1
23-302-02	教育内容開発・理論研究 (人文社会教育・基礎研究)	地球規模課題とESD	非常勤講師	永田 佳之	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教職開発コース・ 学校開発政策コース)	*3
23-302-03	教育内容開発・理論研究 (芸術教育・基礎研究)	生涯学習時代の実地教育 における鑑賞のデザイン	客員教授	杉浦 幸子	2	S2	合併科目(教職開発コース・ 学校開発政策コース)	*1
23-302-04	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・基礎研究)	Research Methods in Education	非常勤講師	荒木 啓史	2	8-9月	集中講義(8-9月)	
23-302-05	教育内容開発・理論研究 (数学・科学教育・発展研究)	数学的・科学的思考の発達 と授業過程	教授	藤村 宣之	2	S1S2		*1
23-302-06	教育内容開発・理論研究 (言語教育・発展研究)	英語教授法	客員教授	斎藤 兆史	2	S1S2		*1
23-302-07	教育内容開発・理論研究 (人文社会教育・発展研究)	Education in the Era of Globalization: Asian Contexts	教授	北村 友人	2	A1	合併科目(新領域創成科学 研究科・総合文化研究科)	*3
23-302-08	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・発展研究)	教師のライフヒストリー研究	非常勤講師	高井良 健一	2	S1	合併科目(教職開発コース・ 学校開発政策コース)	*3
23-302-09	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・発展研究)	対話的教育の理論と実践	非常勤講師	河野 哲也	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教職開発コース・ 学校開発政策コース)	*3
23-302-10	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・発展研究)	比較授業分析と教師教育 学研究	非常勤講師	Sarkar Arani Mohammad Reza	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教職開発コース・ 学校開発政策コース)	*3
23-302-11	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・発展研究)	教育法の現代的課題	非常勤講師	小泉 広子	2	A1A2	合併科目(教職開発コース・ 学校開発政策コース)	*3
23-302-12	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・発展研究)	教育制度の公共政策分析	非常勤講師	宗前 清貞	2	A1A2	合併科目(教職開発コース・ 学校開発政策コース)	*1
23-302-13	教育内容開発・実践研究 (教育内容開発・事例研究)	教科学習の事例研究	教授	北村 友人	2	S1	合併科目(教職開発コース)	*1
23-302-14	教育内容開発・実践研究 (教育内容開発・事例研究)	カリキュラムの事例研究	教授	藤江 康彦	2	S2	合併科目(教職開発コース)	*1
23-302-15	教育内容開発・実践研究 (教育内容開発・事例研究)	授業の事例研究	准教授	一柳 智紀	2	A2	合併科目(教職開発コース)	*1
23-302-16	教育内容開発・実践研究 (教育内容開発・実地研究)	教科学習の実地研究	教授	藤村 宣之	2	A1A2	合併科目(教職開発コース)	*1
23-302-17	教育内容開発・実践研究 (教育内容開発・実地研究)	授業の実地研究	教授	浅井 幸子	2	A1A2	合併科目(教職開発コース)	*1
23-302-18	教育内容開発・論文指導 (言語教育・論文指導)	外国語教育論文指導	客員教授	斎藤 兆史	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	

23-302-19	教育内容開発・論文指導 (言語教育・論文指導)	外国語教育論文指導	客員教授	斎藤 兆史	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-302-20	教育内容開発・論文指導 (人文社会教育・論文指導)	人文社会教育論文指導	教授	北村 友人	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-302-21	教育内容開発・論文指導 (人文社会教育・論文指導)	人文社会教育論文指導	教授	北村 友人	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-302-22	教育内容開発・論文指導 (芸術教育・論文指導)	芸術教育論文指導	客員教授	杉浦 幸子	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-302-23	教育内容開発・論文指導 (芸術教育・論文指導)	芸術教育論文指導	客員教授	杉浦 幸子	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-302-24	教育内容開発・論文指導 (教育内容開発・論文指導)	教育内容開発論文指導	教授	藤村 宣之	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-302-25	教育内容開発・論文指導 (教育内容開発・論文指導)	教育内容開発論文指導	教授	藤村 宣之	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	

学校教育高度化専攻

学校開発政策コース

【備考欄の*印は、学校開発政策コース所属学生のみ履修可】

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-303-01	学校開発政策・理論研究 (教育政策研究・基礎研究)	教育政策基礎論	教授 准教授	村上 祐介 橋野 晶寛	2	S1S2		*3
23-303-02	学校開発政策・理論研究 (教育政策研究・基礎研究)	教育法の現代的課題	非常勤講師	小泉 広子	2	A1A2	合併科目(教職開発コース・ 教育内容開発コース)	*3
23-303-03	学校開発政策・理論研究 (学校教育経営・基礎研究)	現代学校改革の諸問題	教授	勝野 正章	2	S1S2		*1
23-303-04	学校開発政策・理論研究 (教育政策研究・発展研究)	教育政策研究方法論Ⅰ	准教授	橋野 晶寛	2	S1S2		*1
23-303-05	学校開発政策・理論研究 (教育政策研究・発展研究)	教育制度の公共政策分析	非常勤講師	宗前 清貞	2	A1A2	合併科目(教職開発コース・ 教育内容開発コース)	*1
23-303-06	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)	教師のライフヒストリー研究	非常勤講師	高井良 健一	2	S1	合併科目(教職開発コース・ 教育内容開発コース)	*3
23-303-07	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)	対話的教育の理論と実践	非常勤講師	河野 哲也	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教職開発コース・ 教育内容開発コース)	*3
23-303-08	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)	比較授業分析と教師教育 学研究	非常勤講師	Sarkar Arani Mohammad Reza	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教職開発コース・ 教育内容開発コース)	*3
23-303-09	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)	国語科教育の理論と実践	非常勤講師	濱田 秀行	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教職開発コース・ 教育内容開発コース)	*1
23-303-10	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)	地球規模課題とESD	非常勤講師	永田 佳之	2	8-9月	集中講義(8-9月) 合併科目(教職開発コース・ 教育内容開発コース)	*3
23-303-11	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)	生涯学習時代的美術教育 における鑑賞のデザイン	客員教授	杉浦 幸子	2	S2	合併科目(教職開発コース・ 教育内容開発コース)	*1
23-303-12	学校開発政策・実践研究 (教育政策研究・事例研究)	教育行政事例研究Ⅰ	教授	村上 祐介	2	8-9月	集中講義(8-9月)	*1
23-303-13	学校開発政策・実践研究 (学校教育経営・事例研究)	学校経営実践の開発Ⅰ	非常勤講師	福嶋 尚子	2	A1A2		*3
23-303-14	学校開発政策・実践研究 (教育政策研究・実地研究)	教育行政実地研究	教授	村上 祐介	2	A1A2		*1
23-303-15	学校開発政策・実践研究 (教育政策研究・実地研究)	教育政策実地研究	准教授	橋野 晶寛	2	A1A2		
23-303-16	学校開発政策・実践研究 (学校教育経営・実地研究)	学校経営実地研究	教授	勝野 正章	2	A1A2		*1
23-303-17	学校開発政策・論文指導	学校経営研究論文指導	教授	勝野 正章	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-303-18	学校開発政策・論文指導	学校経営研究論文指導	教授	勝野 正章	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	
23-303-19	学校開発政策・論文指導	教育行政研究論文指導	教授	村上 祐介	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-303-20	学校開発政策・論文指導	教育行政研究論文指導	教授	村上 祐介	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	

23-303-21	学校開発政策・論文指導	教育政策研究論文指導	准教授	橋野 晶寛	2	通年	* 隔週 修士課程のみ	
23-303-22	学校開発政策・論文指導	教育政策研究論文指導	准教授	橋野 晶寛	2	通年	* 隔週 博士課程のみ	

共通科目

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-214-15	共通科目	大学教育開発論	教授	栗田 佳代子	2	S1S2	研究科規則第6条2項及び第7条2項における他コース科目と同様の扱いとする。	
23-214-16					2	S1S2	隔週。 本科目は同一の内容を4回実施する。	
23-214-17					2	A1A2	本科目は1回のみ履修とし、年度に関わらず複数回履修することはできない。「Teaching Development in Higher Education in English」は本科目とは別の科目として履修できる。	
23-214-18					2	A1A2		
23-214-19	共通科目	Teaching Development in Higher Education in English	教授 非常勤講師	栗田 佳代子 Gabriel Hervas	2	S1S2	研究科規則第6条2項及び第7条2項における他コース科目と同様の扱いとする。 隔週。 本科目は1回のみ履修とし、年度に関わらず複数回履修することはできない。「大学教育開発論」は本科目とは別の科目として履修できる。	

教育研究創発国際卓越大学院

時間割 コード	授業科目	講義題目	職名	担当教員	単 位 数	開講 時期	備考	教職課程 認定区分 (教科)
23-901-01	教育研究創発国際研修	教育研究創発国際研修Ⅰ	－	各教員	1	その他	WINGS-CERプログラム生限定。 研究科規則第6条2項及び第7条2項における他コース科目と同様の扱いとする。	
23-901-02	教育研究創発国際研修	教育研究創発国際研修Ⅱ	－	各教員	1	その他	WINGS-CERプログラム生限定。 研究科規則第6条2項及び第7条2項における他コース科目と同様の扱いとする。	
23-901-03	教育研究創発国際研修	教育研究創発国際研修Ⅲ	－	各教員	1	その他	WINGS-CERプログラム生限定。 研究科規則第6条2項及び第7条2項における他コース科目と同様の扱いとする。	

教職課程認定区分(教科)	記号
中高専修(本学で認定されている課程の教科すべて)	*1
中専修社会・保健体育・保健、高専修地歴・公民・保健体育・保健	*2
小専修、中専修社会、高専修地歴・公民	*3
小専修	*4
中専修社会、高専修公民	*5
中専修保健、高専修保健	*6
中専修保健体育、高専修保健体育	*7

時 間 割 コー ド	23-211-01	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	山 名 淳				
授 業 科 目	教育哲学基本研究				
講 義 題 目	教育哲学演習 I Seminar in Educational Philosophy I				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育哲学および教育思想史の知見を基盤として現代における人間形成と教育の問題を考察することはいかにして可能だろうか。本授業では、教育哲学におけるいくつかの鍵概念をとりあげ、関連するテキストを読解しつつげんだいの人間と社会の問題を検討する。本授業を通じて、受講生は(1)教育哲学・思想史の基礎概念および問題構成を習得することができる。(2)現代社会における教育について批判的に論じる基本的な構えを身につけることができる。(3)以上のことを前提としつつ、各受講生の個人研究を批判的に再検討する一視点を獲得することができる。
授 業 計 画	教科書として指定した文献の各章ごとに担当受講生を決めて報告を行っていただく。その内容をもとにしてディスカッションを行う。また、教科書以外の関連文献を授業担当者もしくは受講生自身が選定し、その内容を検討することによって、議論のさらなる展開について考える。上級者においては、個人の研究関心を本授業の問題関心とかわらせつつ、関連文献を紹介し、議論の発展可能性について考察を行う。今回のキーワードは「記憶」と「想起文化」である。
授 業 の 方 法	授業担当者によるイントロダクションの後、各章担当受講生による報告(あるいは授業担当者もしくはゲスト・スピーカーによるレクチャー)を行う。その後、まず受講生はリアクションペーパーに各自の感想を記す。その記述をもとにしてディスカッションを行う。ディスカッションの形式(グループ討議か全体討議か)については受講生数によりあらためて判断する。最後に、もう一度リアクションペーパーに各自のコメントを記す。授業担当者はそれを持ち帰り、次の授業においてそれに対するコメントを行い、次の内容へと向かう。
成 績 評 価 方 法	平常点(毎時授業の出席状況および議論への貢献度)および担当報告の総合評価とする(前者 50 パーセント、後者 50 パーセント)。
教 科 書	山名淳編『記憶と想起の教育学』勁草書房、2022 年
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	「教育哲学演習Ⅱ」も合わせて受講することが望ましい。受講生の積極的な参加を求める。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-211-02	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	小玉 重夫				
授 業 科 目	教育人間学基本研究				
講 義 題 目	教育思想演習 Seminar in Educational Thought				

授 業 の 目 標・概 要	朝、布団の中で寝覚めて起きなければいけないのに、登校したくない、出勤したくないという葛藤に直面したことはないでしょうか。そのような葛藤の中から、政治的主体化の可能性を探るために、ベンヤミン、アレントを経てアナーカフェニズムに至る系譜を検討したいと思います。テキストとしては、ベンヤミンの「暴力批判論」などや、高島鈴『布団の中から蜂起せよ』、柿木伸之『断絶からの歴史 ベンヤミンの歴史哲学』を取り上げ、ベンヤミンからアレントを経て現代に至るアナキズムの可能性を再検討します。
授 業 計 画	今のところ予定している授業計画(シラバス)は以下の通りであるが、一部変更する可能性もある。第1回ガイダンス第2回『布団の中から蜂起せよ』第1章 アナーカ・フェニズムの革命 第2章 蜂起せよ、〈姉妹〉たち第3回 同上 第3章 ルッキズムを否定する 第4章 布団の中から蜂起せよ——新自由主義と通俗道徳第4回 同上 第5章 動けない夜のために——メンタルヘルスと優生学 第6章 秩序を穿つ——ナショナリズム／天皇制に抗する第5回 同上 第7章 儀礼から遠く離れて 第8章 死者たちについて第6回 ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」前半第7回 ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」後半第8回 ベンヤミン「歴史の概念について」第9回 ベンヤミン「暴力批判論」前半第10回 ベンヤミン「暴力批判論」後半第11回『断絶からの歴史』Ⅰ 想起と救済第12回 同上 Ⅱ ベンヤミンとハイデガー第13回 同上 Ⅲ 歴史の媒体第14回 同上 Ⅳ 名もなき者たちの歴史へ第15回 まとめ
授 業 の 方 法	講義とグループによる討論を主とし、論文作成支援を兼ねたレポート作成と授業中の学生によるプレゼンを、随時導入する。各人の感心に応じて、論文の準備にも資するようにしたい。
成 績 評 価 方 法	レポート・発表と平壤点によって行う。授業中にプレゼン、発表が求められる。
教 科 書	小玉重夫『教育政治学を拓く』勁草書房
履修上の注意・備考	初回の授業時に発表の分担等を行う予定である。
そ の 他	本授業は感染状況にもよるが、原則、教室での対面で行う予定であるが、一定の条件希望者の希望者のオンラインでの受講も認める。

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-211-03	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	片山 勝茂				
授 業 科 目	教育人間学基本研究				
講 義 題 目	教育人間学基本演習 Basic Seminar in Educational Anthropology				

授 業 の 目 標・概 要	「ケアの倫理と教育」をテーマに、以下の英語文献と日本語文献(教科書)を講読することで、日本語文献と英語文献を精確に読み、理解する能力を向上させるとともに、テーマに関する問題について、(他の人々とコミュニケーションをとりながら)批判的に考える力を身につけることを目標とする。
授 業 計 画	授業の初回にオリエンテーションを行い、説明する。奇数回(オリエンテーションと日本語文献講読と研究報告会)が対面、偶数回(英語文献講読)がオンライン授業の予定。
授 業 の 方 法	文献講読を基本とする。英語文献については、訳読による精読とディスカッションを行う。日本語文献については、報告者が概要と(疑問点や討論の論点を提示する)コメントを発表し、討論を行う。また、各自の研究を発表する研究報告会も行う予定である。対面とオンラインを隔週で組み合わせる予定。授業で使用する教材やレジュメは ITC-LMS やメールを通じて電子的に配布します。
成 績 評 価 方 法	毎回 ITC-LMS の「課題」から提出するコメントとゼミでの報告および討論を合わせて総合的に評価する。
教 科 書	Michael Slote (2009) Caring, empathy, and moral education, in: Harvey Siegel ed. (2009) The Oxford Handbook of Philosophy of Education (Oxford: Oxford University Press). キャロル・ギリガン(2022)『もうひとつの声で—心理学の理論とケアの倫理』川本隆史・山辺恵理子・米典子訳、風行社。
履 修 上 の 注 意・備 考	正当な理由があって欠席する人や通信環境の問題でオンライン授業に参加できなかった人は配慮するので、ITC-LMS の「課題」から欠席連絡を提出すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-211-04	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	小国 喜弘				
授 業 科 目	教育史基本研究				
講 義 題 目	日本教育史演習 I Seminar in Japanese Educational History I				

授 業 の 目 標・概 要	二つの目的をもって演習を設定する。第一に修論・博士論文執筆に向けて、教育史の研究手法、論文作法について、各自の論文発表を通じて習熟すること。第二に、教育実践に焦点をあて、教育実践からどんな教育史像が浮かび上がるのかについて検討すること。今年度は、前半において共通文献を、後半において個人発表を行うこととする。
授 業 計 画	第一回:オリエンテーション第二回:文献購読 1 第三回:文献購読 2 第四回:文献購読 3 第五回:文献購読 4 第六回:文献購読 5 第七回:事例検討 1 第八回:事例検討 2 第九回:事例検討 3 第十回:事例検討 4 第十一回:事例検討 5 第十二回:事例検討 6 第十三回:事例検討 7
授 業 の 方 法	基本的に対面のみで行う。なお、対面については、二つの教室(学部棟 208 と 261)を確保し、そこでのグループワークなどを可能にするものとする。ただし事情がありオンラインでの参加を希望される場合は個別にご相談ください。
成 績 評 価 方 法	個別の発表によって評価する。3分の2以上の出席をもって、単位認定の最低要件とする。
教 科 書	適宜指示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	初回に発表の順番を決めるので、初回に欠席する場合は予め連絡をすること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-211-05	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	隠岐 さや香				
授 業 科 目	教育史基本研究				
講 義 題 目	高等教育・研究の歴史 I History of Higher Education and Research I				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	18 世紀の西洋は教育の歴史にとって重要な概念や実践が生まれた時代として知られる。このゼミではとりわけ、当時のフランスでなされた世紀の大事典編纂事業であった『百科全書』に含まれた教育思想・教育理論のあり方を考察する。『百科全書』は周知の通り現代の大型事典やオンライン事典等のルーツともいえる代表的な書物であるが、実は教育制度も含めた当時の宗教・政治体制一般への異議申し立ての意図を含んだ闘争的な書物でもあったことで知られる。編者のデイドロ、ダランベールや著者の一人であるルソーなどはその教育思想でも知られるが、そうした著名な著者以外にも、ペダゴギー (pédagogie) そのものの議論や、科学、文学、芸術など各分野の教育の理想と方法について語る項目が見られる。受講生は本ゼミを通じて、近代教育思想および公教育論の概要を理解した上で、研究の中で歴史資料を分析・考察するにあたり留意すべき事項を学ぶことが出来るであろう。
授 業 計 画	以下は暫定的な案(かなり理想的な進行)なので、受講者との議論の上変更もありうる1 イントロダクション2 18 世紀西洋の教育制度と主要な論争3 『百科全書』の実物を見る(図書館での見学)4 史料としての『百科全書』とその思想的背景5 文献講読 知の分類と序列化6 文献講読 教育論7 文献講読 子ども／女性8 文献講読 学級 (classe)／教師9 文献講読 修辞法／雄弁さ10 文献講読 哲学／科学／数学11 文献講読 制度:コレージュ／大学12 文献講読 制度:アカデミー13 総合討論
授 業 の 方 法	最初に 18 世紀の教育制度や主要な教育論争、『百科全書』の思想的背景について理解を深めるための講義を行う。その後、『百科全書』原典の構造やあるいは翻訳版のあり方について説明を行う。文献講読では「教育」に関連のある項目読解を行う。テキストは各人の語学能力に応じて日本語、英語、フランス語から選択可能なように取り計らう。発表の機会がなかった者には同程度の作業量となるレポートを課す。なお、作業量の公平性の観点から、文献講読に日本語を選択した者に若干の追加課題を課すこともある。
成 績 評 価 方 法	平常点(毎時授業の出席状況および議論への貢献度)および担当報告の総合評価とする(前者 50%、後者 50%)。
教 科 書	各人が解読可能な言語のバージョンを選択する『百科全書』日本語版(翻訳版:後日紙あるいは PDF で配布)授業当日に配布する。『百科全書』英語版(翻訳版) The Encyclopedia of Diderot & d'Alembert. Collaborative Translation Project https://quod.lib.umich.edu/d/did/ 『百科全書』フランス語版(原典のオンライン校訂版) ENCREE 版 l'Édition Numérique Collaborative et CRitique de l'Encyclopédie de Diderot, de D'Alembert et de Jaucourt (1751-1772) http://encree.academie-sciences.fr/encyclopedia/ シカゴ大学版 Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, etc., eds. Denis Diderot and Jean le Rond d'Alembert. University of Chicago: ARTFL Encyclopédie Project (Autumn 2022 Edition), Robert Morrissey and Glenn Roe (eds), http://encyclopedia.uchicago.edu/ .
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	初回に必要な文献を配付し、発表の順番を決めるので、初回に欠席する場合は予め連絡をすること。
そ の 他	重要事項は適宜 ITC-LMS で告知する

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-211-06	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	江口 潔				
授 業 科 目	教育史基本研究				
講 義 題 目	教育社会史研究 Seminar in Social History of Education				

授 業 の 目 標・概 要	近現代の日本において学校における学習と職場における学習との関係はどのように論じられるだろうか。ここでは教育社会史あるいは社会経済史に関わる研究を取り上げて、受講者のみなさんとその研究の位置づけとそこで示された課題が有する可能性について考察していくこととする。このような取り組みを通して、関連領域の研究と教育学研究とを結びつけて研究をまとめる方法の修得を目標としたい。
授 業 計 画	1 イントロダクション 2 教育社会史研究の課題 3 教育制度の社会史 4 教育社会史における史料 5 リテラシーの再検討 6 通俗道徳と人間形成 7 大衆文化と人間形成 8 たたき上げから学校卒へ 9 職業婦人再考 10 自営業者の学習 11 分業化と技能形成 12 学歴の一元化 13 青年期の再検討 14 まとめ
授 業 の 方 法	本授業では指定した文献に関して、レポートを作成し、発表していただきます。関連する文献も提示しますので、複数の文献を視野に入れて検討していることが望ましいです。加えて、それぞれの研究に関して自身で関連する研究を取り上げて検討できれば、より望ましいです。取り扱う文献に関しては、こちらでいくつか案を示しますが、最終的には、初回の授業において受講者と調整することにしたいと考えています。
成 績 評 価 方 法	授業時の議論への参加状況(30%)と、それぞれが担当したレポート(70%)によって評価します。
教 科 書	初回授業時に指示します。
履 修 上 の 注 意・備 考	初回の授業では、本授業の目的について解説するとともに、レポートの担当を決めます。そのため、集中講義に先立って、初回のみオンラインで行うこととします。集中講義の日程が決まり次第、初回のオンライン授業の日時と接続先についてもお知らせします。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-211-07	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	田中 智志				
授 業 科 目	教育臨床学基本研究				
講 義 題 目	教育臨床学基本演習 Basic Seminar in Clinical Approach to Education				

授 業 の 目 標・概 要	この演習では、有能性、有用性に大きく傾く現代社会の思潮を踏まえつつも、ヨーロッパの存在論的思考に立ち返り、失われつつある「自然」(フュシス)ないし「存在」(エッセ)の概念を彫塑するという試みである。古典的文献だけでなく、現代の芸術文化のなかにも、これら存在論的概念を見いだしていく。
授 業 計 画	第1回 教育臨床学の目的第2回 教育臨床学の方法第3回 教育臨床学の概念第4回 臨床哲学の主題1 存在論第5回 臨床哲学の主題2 交感論 1 第6回 臨床哲学の主題3 交感論 2 第7回 臨床哲学の主題4 詩作論 1 第8回 臨床哲学の主題5 詩作論 2 第9回 臨床哲学の主題6 経験論 1 第10回 臨床哲学の主題7 経験論 2 第11回 人間と自然1 人間性とは何か第12回 人間と自然2 人間の自然論 1 第13回 人間と自然3 人間の自然論 2 第14回 人間と自然4 人間性の終焉？第15回 演習のまとめ
授 業 の 方 法	授業は、基本的に毎回、報告者を定めて、報告、討議を行う。とりあげる事例や文献については、参加者(報告者)の意向を最大限に尊重する。基本的に制限をもうけない。たとえば、少年犯罪の生育歴にかんする事例分析も、授業における子どもの発話分析も可能である。デューイについての考察も、デリダについての考察も可能である。内容のうえで報告者に求められることは、その分析ないし考察によって、人(子ども)がよりよく生きるための知恵(思考活動)が暗示ないし示唆されていることである。
成 績 評 価 方 法	毎回の各人の発表の内容、議論における各人の発言内容から、総合的に評価する。出席を重視する。
教 科 書	テキストはとくに定めないが、必要な文献は授業の開始時にリストにして配布する。
履 修 上 の 注 意・備 考	出席を重視する。対面で行います。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-211-08	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	大塚 類				
授 業 科 目	教育臨床学基本研究				
講 義 題 目	臨床現象学 I Seminar in Clinical Phenomenology I				

授 業 の 目 標・概 要	【授業の目標】本ゼミのタイトルも「臨床現象学」であるが、現在日本では、●●現象学、現象学的△△、といった研究領域が多数展開している。しかし、何をもって●●現象学、現象学的△△と称しうるのは明確ではない。狭義には、現象学者の知見を理論的背景にすることが現象学的な研究であるが、広義には、ものごとを捉えるスタンスを現象学に依拠することも現象学的な研究に含まれる、と講義者は考えている。本ゼミでは、日本における現象学的質的研究を紹介すると同時に、エスノグラフィ、質的社会調査などとの相違についても検討することにより、「現場」に基づく質的研究について考えることを目指す。【授業の概略】授業の概略は以下のとおりである。講読する文献を受講者と共に決める。候補となる書籍は以下のとおりである。その他、受講者からの推薦も受け付ける。①村上靖彦の一連の文献②臨床教育現象学の文献(大塚類、遠藤野ゆり、奥井遼など)③マックス・ヴァン マーネン 2011『生きられた経験の探求』(村井尚子訳)ゆみ出版④岸政彦ほか 2016『質的社会調査の方法』有斐閣⑤上間陽子 2017『裸足で逃げる』at 叢書⑥小田博志 2010『エスノグラフィー入門—〈現場〉を質的研究する』春秋社⑦佐藤郁也 2007『フィールドワーク増訂版—書を持って街へ出よう』新曜社⑧西村ユミ・榊原哲也 2017『ケアの実践とは何か:現象学からの質的研究アプローチ』⑨吉川孝他編 2012『生きることに責任はあるのか:現象学的倫理学の試み』
授 業 計 画	第1回 インTRODクシヨン第2回 文献講読①第3回 文献講読②第4回 文献講読③第5回 文献講読④第6回 文献講読⑤第7回 文献講読⑥第8回 文献講読⑦第9回 文献講読⑧第10回 文献講読⑨第11回 中間相談:閑話休題第12回 文献講読⑩第13回 文献講読⑪第14回 文献講読⑫授業計画は受講者との相談により変更される場合があります。1) Introduction 2) Literature reading (1) 3) Literature reading (2) 4) Literature reading (3) 5) Literature reading (4) 6) Literature reading (5) 7) Literature reading (6) 8) Literature reading (7) 9) Literature reading (8)10) Literature reading (9) 11) Mid-term consultation 12) Literature reading (10) 13) Literature reading (11) 14) Literature reading (12)The lesson plan is subject to change in consultation with the students.
授 業 の 方 法	基本的に対面での演習形式で行う。受講人数にもよるが、おそらく各回担当発表制になると思われる。Basically, it will be conducted in the form of face-to-face exercises. Depending on the number of students, there will probably be a presentation system for each session.
成 績 評 価 方 法	【評価方法】発表者は平常点、未発表者はレポート【評価基準】(1)授業への参加状況 ①事前に文献を読み、授業中の議論に積極的に加わって、理解を深めている。②文献に関する固有の解釈にもとづいて、自分なりの見解を発言している。③他者の発言に耳を傾け、自分の見解と関連させて、議論を展開させている。(2)レポート ①本授業で扱う題材について自分なりの関心にもとづいて要点を捉えている。②授業中の議論にもとづいて自分なりの論点を明らかにして議論している。③独創性のある論点が提示されており、説得力のある議論が展開されている。(1) Participation in class ①Students read the literature in advance, actively participate in class discussions and deepen their understanding of the material. ②Students express their own opinions based on their own interpretations of the literature. ③Listen to the comments of others, relate them to their own views and develop the discussion.(2) Reports ①Students are able to grasp the main points based on their own interest in the subject matter covered in this class. ②Students clarify and discuss their own points of view based on the discussions in class. ③It presents original arguments and develops persuasive arguments.
教 科 書	データは授業時に配布する予定です。Data will be distributed in class.
履修上の注意・備考	当事者性をもった積極的な参加を期待します。できれば通年での受講が望ましいです。Active participation is expected. It is preferable to attend the course throughout the year if possible.
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-211-09	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	田中 智志、山名 淳、小国 喜弘、小玉 重夫、片山 勝茂、大塚 類、隠岐 さや香				
授 業 科 目	基礎教育学特殊研究				
講 義 題 目	基礎教育学総合演習 Colloquium in Basic Theories of Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	基礎教育学における研究は、教育諸学・教育実践を基礎づけ方向づける社会的・倫理的な志しをもつ内容でなければならない。この授業は、そうした基礎教育学研究者の社会的・倫理的な志しを鼓舞し、ともに高めあう協同的な研究教育の場である。具体的には、基礎教育学コースに属する教員スタッフ及び大学院生が各自、研究発表を行い、その内容について、検討する。とりわけ学位論文の執筆予定者は、この場で研究構想を発表し、各研究領域から、哲学的な意味で「批判的」である吟味を受けることが望ましい。日程等については、事前にコース内に掲示する。
授 業 計 画	それぞれの回の担当者は早めに決めて、十分な準備をしてもらう。そして当日、それぞれのコース内容に従った特定の研究対象について、系統的なプレゼンテーションをしてもらう。その後、教員全員、ならびに当日の参加者との間で質疑応答をする一年を通して、取り上げるのが特定のコースに集中しないように、適宜バランスをとる事に配慮する
授 業 の 方 法	研究発表者が毎回、自分の研究内容について発表し、参加者から、哲学的な意味で「批判的」である吟味を受け、それらをもとに自分の研究についてふりかえり、よりよい研究展開の契機とする。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	適宜配布する
履修上の注意・備考	基礎教育学コースの院生は必ず履修すること
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-211-10	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	山名 淳、RIEGER-LADICH MARKUS				
授 業 科 目	教育哲学特殊研究				
講 義 題 目	教育哲学演習 II Seminar in Educational Philosophy II				

授 業 の 目 標・概 要	教育哲学および教育思想史の知見を基盤として現代における人間形成と教育の問題を考察することはいかにして可能だろうか。本授業では、教育哲学におけるいくつかの鍵概念をとりあげ、関連するテキストを読解しつつげんだいの人間と社会の問題を検討する。本授業を通じて、受講生は(1)教育哲学・思想史の基礎概念および問題構成を習得することができる。(2)現代社会における教育について批判的に論じる基本的な構えを身につけることができる。(3)以上のことを前提としつつ、各受講生の個人研究を批判的に再検討する一視点を獲得することができる。
授 業 計 画	指定されたテキストの内容をもとにしてディスカッションを行う。またそれに関するテキストを授業担当者もしくは受講生自身が選定し、その内容を検討することによって、議論のさらなる展開の可能性を探究する。上級者においては、個人の研究関心を本授業の問題関心とかかわらせつつ、関連文献を紹介し、議論の発展可能性について考察を行う。今回は「セイフティ・スペース」と「論争能力」にかかわるテキストを読む。
授 業 の 方 法	授業担当者によるイントロダクションの後、各章担当受講生による報告(あるいは授業担当者もしくはゲスト・スピーカーによるレクチャー)を行う。その後、まず受講生はリアクションペーパーに各自の感想を記す。その記述をもとにしてディスカッションを行う。ディスカッションの形式(グループ討議か全体討議か)については受講生数によりあらためて判断する。最後に、もう一度リアクションペーパーに各自のコメントを記す。授業担当者はそれを持ち帰り、次の授業においてそれに対するコメントを行い、次の内容へと向かう。
成 績 評 価 方 法	平常点(毎時授業の出席状況および議論への貢献度)および担当報告の総合評価とする(前者 50 パーセント、後者 50 パーセント)。
教 科 書	教科書は使用しない。授業で用いるテキストは授業初日に配布する。
履 修 上 の 注 意・備 考	「教育哲学演習 I」も合わせて受講することが望ましい。受講生の積極的な参加を求める。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-211-11	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	小 玉 重 夫				
授 業 科 目	教育人間学特殊研究				
講 義 題 目	教育政治学演習 Seminar in Politics of Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	知を生産する者の知を受け取る者に対する支配、作者の読者に対する支配、芸術家の観客の対する支配、そうした「愚鈍化」の構造を解体し、知性の解放を成し遂げることは、高大接続改革を含む公教育体制の変革において緊急の課題となっている。今回のゼミでは、その端緒を開いたランシエールをふまえ、彼が『解放された観客』で提起した政治的主体化の思想を、その師であるアルチュセールとの関係において再検討しつつ、アルチュセール、ランシエールの影響を受けたクレア・ビショップの観客論へと架橋することによって、現代における観客＝主体化の理論構築の可能性を追求する。そして、教育における主体性の議論につなげていきたい。
授 業 計 画	今のところ予定している授業計画(シラバス)は以下の通りであるが、一部変更する可能性もある。ガイダンス(1回) 野見収『断絶としての教育: アルチュセールにおける革命への問い』の検討(3回) 観客と政治的主体化をめぐるランシエールとプリオーの論争の検討(3回) クレア・ビショップ『人工地獄ー現代アートと観客の政治学』の検討(7回)
授 業 の 方 法	講義とグループによる討論を主とし、論文作成支援を兼ねたレポート作成と授業中の学生によるプレゼンを、随時導入する。各人の感心に応じて、論文の準備にも資するようにしたい。
成 績 評 価 方 法	レポート・発表と平壤点によって行う。授業中にプレゼン、発表が求められる。
教 科 書	小玉重夫『教育政治学を拓く』勁草書房
履修上の注意・備考	初回の授業時に発表の分担等を行う予定である。
そ の 他	本授業は感染状況にもよるが、原則、教室での対面で行う予定であるが、一定の条件希望者の希望者のオンラインでの受講も認める。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-211-12	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	片山 勝茂				
授 業 科 目	教育人間学特殊研究				
講 義 題 目	教育人間学特殊研究 Seminar in Educational Anthropology				

授 業 の 目 標・概 要	「教育人間学基本演習」に引き続き、「ケアの倫理と教育」をテーマに、以下の英語文献と日本語文献(教科書)を講読することで、日本語文献と英語文献を精確に読み、理解する能力を向上させるとともに、テーマに関する問題について、(他の人々とコミュニケーションをとりながら)批判的に考える力を身につけることを目標とする。
授 業 計 画	授業の初回にオリエンテーションを行い、説明する。奇数回(オリエンテーションと日本語文献講読と研究報告会)が対面、偶数回(英語文献講読)がオンライン授業の予定。
授 業 の 方 法	文献講読を基本とする。英語文献については、訳読による精読とディスカッションを行う。日本語文献については、報告者が概要と(疑問点や討論の論点を提示する)コメントを発表し、討論を行う。また、各自の研究を発表する研究報告会も行う予定である。対面とオンラインを隔週で組み合わせる予定。授業で使用する教材やレジュメは ITC-LMS やメールを通じて電子的に配布します。
成 績 評 価 方 法	毎回 ITC-LMS の「課題」から提出するコメントとゼミでの報告および討論を合わせて総合的に評価する。
教 科 書	Michael Slote (2009) Caring, empathy, and moral education, in: Harvey Siegel ed. (2009) The Oxford Handbook of Philosophy of Education (Oxford: Oxford University Press). キャロル・ギリガン(2022)『もうひとつの声で—心理学の理論とケアの倫理』川本隆史・山辺恵理子・米典子訳、風行社。
履 修 上 の 注 意・備 考	S1S2 タームの「教育人間学基本演習」を受講していない人でも、受講を歓迎する。また、正当な理由があって欠席する人や通信環境の問題でオンライン授業に参加できなかった人は配慮するので、ITC-LMS の「課題」から欠席連絡を提出すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-211-13	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	小国 喜弘				
授 業 科 目	教育史特殊研究				
講 義 題 目	日本教育史演習Ⅱ Seminar in Japanese Educational History Ⅱ				

授 業 の 目 標・概 要	二つの目的をもって演習を設定する。第一に修論・博士論文執筆に向けて、教育史の研究手法、論文作法について、各自の論文発表を通じて習熟すること。第二に、教育実践に焦点をあて、教育実践からどんな教育史像が浮かび上がるのかについて検討すること。今年度は、前期に引き続き、1960年代高度経済成長期に焦点を当てることとし、前半において共通文献を、後半において個人発表を行うこととする。
授 業 計 画	第一回:オリエンテーション第二回:文献購読1 第三回:文献購読2 第四回:文献購読3 第五回:文献購読4 第六回:文献購読5 第七回:事例検討1 第八回:事例検討2 第九回:事例検討3 第十回:事例検討4 第十一回:事例検討5 第十二回:事例検討6 第十三回:事例検討7
授 業 の 方 法	基本的に対面で行う。オンラインでの参加を希望される場合は、個別にご相談ください。
成 績 評 価 方 法	個別の発表によって評価する。3分の2以上の出席をもって、単位認定の最低要件とする。
教 科 書	適宜指示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	初回に発表の順番を決めるので、初回に欠席する場合は予め連絡をすること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-211-14	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	隠岐 さや香				
授 業 科 目	教育史特殊研究				
講 義 題 目	高等教育・研究の歴史Ⅱ History of Higher Education and Research Ⅱ				

授業の目標・概要	「学問の自由」(academic freedom)概念の形成過程について思想的・制度史的観点からアプローチし、理解を深めるためのゼミである。「学問の自由」は各国で基本法等に記載されており、それはしばしば、特定の教育・研究が国家権力に弾圧されることを阻止するためのものと理解される。だが、同概念の形成史的探究となると散発的にしかなされてこなかった。また、近年では同概念が言及される機会が多様化し、その内実も拡張されている。たとえば、大学経営が研究者コミュニティに与える影響の問題や、ダイバーシティやマイノリティの擁護など現代の社会的な倫理規範と伝統的な「学問の自由」との折り合いといった課題が浮上しているためである。この授業ではそのような背景を踏まえつつ、主には大学やアカデミーの形成に関わる過去の歴史的史料(一次文献)や論文等を読解し「学問の自由」理念とそれを支えた制度の形成過程について分析・考察する。ただし、授業の後半では現代の論争に関わる文献や研究を紹介する回も予定している。このゼミを通じ、受講生は「学問の自由」問題一般への理解を深めると共に、思想史・制度史的視点から一次史料を扱うための手続きを身につけることが出来るであろう。
授 業 計 画	1 イントロダクション2 中世の大学と「学問の自由」3 ルネサンスと「学問の自由」4 啓蒙思想と言論の自由5 17-18 世紀のアカデミーと制度的な「自由」(1)6 17-18 世紀のアカデミーと制度的な「自由」(2)7 19 世紀以降のアカデミーと制度的な「自由」8 近代大学と「学問の自由」(1)9 近代大学と「学問の自由」(2)10 新自由主義的な大学改革と「学問の自由」11 イノベーション政策と「学問の自由」12 責任ある包摂的な高等教育・研究とは(1)13 責任ある包摂的な高等教育・研究とは(2)
授 業 の 方 法	講義の回と発表の回で構成される。発表の回においては、教員から短い説明の時間があつたあと、担当者が教科書および参考文献等の内容を踏まえて発表し、その後全体でディスカッションを行う。詳細は授業の初回に説明する。
成 績 評 価 方 法	平常点(毎時授業の出席状況および議論への貢献度)および担当報告の総合評価とする(前者 50%、後者 50%)。
教 科 書	教員が用意して参加者に配布する。
履修上の注意・備考	授業の初回で担当を決めるため、参加出来ない場合は連絡すること。
そ の 他	重要事項は ITC-LMS で告知する。

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他大学生(特別聴講学生等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-211-15	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	田中 智志				
授 業 科 目	教育臨床学特殊研究				
講 義 題 目	教育臨床学演習 Seminar in Clinical Approach to Education				

授 業 の 目 標・概 要	この演習では、有能性、有用性に大きく傾く現代社会の思潮を踏まえつつも、ヨーロッパの存在論的思考に立ち返り、失われつつある「自然」(フュシス)ないし「存在」(エッセ)の概念を彫塑するという試みである。古典的文献だけでなく、現代の芸術文化のなかにも、これらの存在論的概念を見いだしていく。「人間性」に「人間の自然」を見いだすことで、人間と自然の通底性を示す。それは、社会がますます有能性、有能性を重視していても、人と人・他の生きものとの共生を試みるうえで、礎となると考えられる。
授 業 計 画	第1回 教育臨床学の目的 人間性を問う第2回 教育臨床学の方法 意味形象を語る第3回 教育臨床学の概念第4回 自然と存在第5回 存在と交感第6回 交感と共生第7回 共生と詩作 第8回 詩作と経験第9回 身振りと言第10回 声と言第11回 人間と自然1 人間性とは何か第12回 人間と自然2 人間の自然論 1 第13回 人間と自然3 人間の自然論 2 第14回 人間と自然4 人間性の終焉？第15回 演習のまとめ
授 業 の 方 法	授業は、基本的に毎回、報告者を定めて、報告、討議を行う。とりあげる事例や文献については、参加者(報告者)の意向を最大限に尊重する。基本的に制限をもうけない。たとえば、少年犯罪の生育歴にかんする事例分析も、授業における子どもの発言分析も可能である。デューイについての考察も、デリダについての考察も可能である。内容のうえで報告者に求められることは、その分析ないし考察によって、人(子ども)がよりよく生きるための知恵(思考活動)が暗示ないし示唆されていることである。
成 績 評 価 方 法	毎回の各人の発表の内容、議論における各人の発言内容から、総合的に評価する。出席を重視する。
教 科 書	テキストはとくに定めないが、必要な文献は授業の開始時にリストにして配布する。
履 修 上 の 注 意・備 考	出席を重視する。対面で行います。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-211-16	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	大塚 類				
授 業 科 目	教育臨床学特殊研究				
講 義 題 目	臨床現象学Ⅱ Seminar in Clinical PhenomenologyⅡ				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	【授業の目標】本ゼミのタイトルも「臨床現象学」であるが、現在日本では、●●現象学、現象学的△△、といった研究領域が多数展開している。しかし、何をもって●●現象学、現象学的△△と称しうるのは明確ではない。狭義には、現象学者の知見を理論的背景にすることが現象学的な研究であるが、広義には、ものごとを捉えるスタンスを現象学に依拠することも現象学的な研究に含まれる、と講義者は考えている。本ゼミでは、前期でスタンスとしての現象学が共通理解にもたらされたという前提のもと、現象学のスタンスから、戦争と原爆に関連する具体的な人間の在りようについて考えていく。戦争と原爆に注目するのは、そこにおいて人間の本質的な在りよう(実存、差別、他者関係など)が際立ってくると考えられるからである。【授業の概要】考察に際しては、文学作品(漫画も含む)、映像作品(フィクション、ノンフィクション)を手がかりとする。人間の在りようを描いている作品と、実際の人間の在りようを研究することの相違についても考えてみたい。こうした歩みのなかで、1年間を通じて、「現象学的」とは何なのかという問いや、具体事例に基づく(現象学的な)倫理について触れることになる。何を観るか何を読むかは、受講者と相談の上決定する。【講義者が想定している文献】①矢野智司 2019『歓待と戦争の教育学』東京大学出版会②山名淳・矢野智司 2017『災害と厄災の記憶を伝える』勁草書房③戦争社会学研究研究会 2018『戦争映画の社会学』みずき書林④原民喜 1988『夏の花』岩波文庫⑤様岡かずお 2005『戦闘』『おろち第3巻』小学館⑥この史代 2004『夕風の街、桜の国』アクションコミックス⑦この史代 2008『この世界の片隅に』アクションコミックス⑧水木しげるの戦記もの【講義者が想定している映像】①この世界の片隅に②戦争や原爆にまつわるノンフィクション③野火④ショア—⑤ゆきゆきて神軍 The title of this seminar is also "Clinical Phenomenology", but there are currently a number of research areas in Japan, such as ●● phenomenology and phenomenological △△△, which have developed. However, it is not clear what can be referred to as ●● phenomenology or phenomenological △△△. In a narrow sense, phenomenological research is based on the theoretical background of phenomenologists' findings, but in a broader sense, the lecturers believe that phenomenological research includes relying on phenomenology as the stance from which things are perceived. In this seminar, based on the premise that phenomenology as a stance was brought to common understanding in the first semester, we will consider the specific human condition in relation to war and the atomic bomb from the stance of phenomenology. The reason for focusing on war and the atomic bomb is that the essential nature of human beings (existence, discrimination, relationships with others, etc.) is considered to be highlighted in this context. The course will use literary works (including manga) and visual works (fiction and non-fiction) as clues for its discussion. We will also consider the difference between works depicting the state of human beings and research into the actual state of human beings. In these steps, throughout the year, we will touch on the question of what is 'phenomenological' and on (phenomenological) ethics based on concrete cases. What to watch or read will be decided in consultation with the students.
授 業 計 画	第1回 イントロダクション:スタンスとしての現象学 第2回 文献講読あるいは映像視聴①第3回 文献講読あるいは映像視聴②第4回 文献講読あるいは映像視聴③第5回 文献講読あるいは映像視聴④第6回 文献講読あるいは映像視聴⑤第7回 中間相談タイム第8回 文献講読あるいは映像視聴⑦第9回 文献講読あるいは映像視聴⑧第10回 文献講読あるいは映像視聴⑨第11回 文献講読あるいは映像視聴⑩第12回 文献講読あるいは映像視聴⑪第13回 文献講読あるいは映像視聴⑫第14回 本ゼミのまとめ授業計画は受講者との相談の上変更されることがあります。1) Introduction: phenomenology as a stance 2) Literature reading or video viewing (1) 3) Literature reading or video viewing (2) 4) Literature reading or video viewing (3) 5) Literature reading or video viewing (4) 6) Literature reading or video viewing (5) 7) Mid-term consultation time 8) Literature reading or video viewing (7) 9) Literature reading or video viewing (8) 10) Literature reading or video viewing (9) 11) Literature reading or video

	viewing (10) 12) Literature reading or video viewing (11) 13)Literature reading or video viewing (12) 14)Summary of this seminarThe lesson plan is subject to change in consultation with the students.
授 業 の 方 法	演習形式で行う。受講人数にもよるが、おそらく各回担当発表制になると思われる。受講者からもおすすめ の文献や映像作品を募りたい。The course will be conducted in the form of exercises. Depending on the number of participants, it is likely that each session will be presented in charge. We would also like to solicit recomme
成 績 評 価 方 法	【評価方法】発表者は平常点、未発表者はレポート【評価基準】(1)授業への参加状況 ①事前に文献 を読み、授業中の議論に積極的に加わって、理解を深めている。②文献に関する固有の解釈にもとづ いて、自分なりの見解を発言している。③他者の発言に耳を傾け、自分の見解と関連させて、議論を発 展させている。(2)レポート ①本授業で扱う題材について自分なりの関心にもとづいて要点を捉えてい る。②授業中の議論にもとづいて自分なりの論点を明らかにして議論している。③独創性のある論点 が提示されており、説得力のある議論が展開されている。(1) Participation in class (i) Students read the literature in advance and actively participate in class discussions to deepen their understanding of the material. (2) Students express their own opinions based on their own interpretations of the literature. (3) Listen to the comments of others, relate them to their own views and develop the discussion.(2) Reports (i) Students are able to grasp the main points based on their own interest in the subject matter covered in this class. (2) Students clarify and discuss their own points of view based on the discussions in class. (iii) It presents original arguments and develops persuasive arguments.
教 科 書	特になし。授業中使用する文献は基本的にデータでお渡しします。None in particular. Literature used in class will basically be provided as data.
履修上の注意・備考	当事者性をもった積極的な参加を期待します。前期受講していること(つまり通年での受講)が望ましいで す。Active participation is expected. It is desirable to have attended the course in the previous year (i.e. the whole year).
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-211-17	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	山 名 淳				
授 業 科 目	教育哲学論文指導				
講 義 題 目	教育哲学論文指導 Dissertation Research in Philosophy of Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	基礎学コースの学位論文(修士論文及び博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。 なお、修士学位論文は 400 字詰め原稿用紙に換算して 200 枚以内にまとめること。本授業を通じて、(1)教育哲学に関する専門論文を執筆する上での基礎を身につけることができる、(2)自らの問題関心に基づいて専門家に対して研究成果を発信することができる、(3)さまざまな専門的見解を受容しつつ自らの研究をさらに発展させることができる。
授 業 計 画	1. 研究倫理について 2. 論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』 3. 研究テーマの設定 4. 先行研究の調べ方と検討方法 5. リサーチ・クエッションの立て方 6. アブストラクトに書くべきこと 7. アウトラインの作成 8. 論証の妥当性 9. テキストの読み込み 10. 引用の方法 11. 反対意見の検討 12. まとめの書き方 13. 参考文献の書き方 14. 投稿雑誌の選び方 15. 査読とリライトのプロセス
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	東京大学大学院教育学研究科学務委員会(2012)『信頼される論文を書くために 改訂版』
履修上の注意・備考	「教育哲学概説(教育思想史)」を履修しておくことが望ましい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-211-18	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	山 名 淳				
授 業 科 目	教育哲学論文指導				
講 義 題 目	教育哲学論文指導 Dissertation Research in Philosophy of Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	基礎学コースの学位論文(修士論文及び博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。 なお、修士学位論文は 400 字詰め原稿用紙に換算して 200 枚以内にまとめること。本授業を通じて、(1)教育哲学に関する専門論文を執筆する上での基礎を身につけることができる、(2)自らの問題関心に基づいて専門家に対して研究成果を発信することができる、(3)さまざまな専門的見解を受容しつつ自らの研究をさらに発展させることができる。
授 業 計 画	1. 研究倫理について 2. 論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』 3. 研究テーマの設定 4. 先行研究の調べ方と検討方法 5. リサーチ・クエッションの立て方 6. アブストラクトに書くべきこと 7. アウトラインの作成 8. 論証の妥当性 9. テキストの読み込み 10. 引用の方法 11. 反対意見の検討 12. まとめの書き方 13. 参考文献の書き方 14. 投稿雑誌の選び方 15. 査読とリライトのプロセス
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	東京大学大学院教育学研究科学務委員会(2012)『信頼される論文を書くために 改訂版』
履修上の注意・備考	「教育哲学概説(教育思想史)」を履修しておくことが望ましい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-211-19	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	小 玉 重 夫				
授 業 科 目	教育人間学論文指導				
講 義 題 目	教育思想論文指導 Dissertation Research in Educational Thought				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	基礎教育学コースの学位論文(修士論文及び博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。なお、修士学位論文は400字詰め原稿用紙に換算して200枚以内にまとめること。
授 業 計 画	1. 研究倫理について2. 論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』3. 研究テーマの設定4. 先行研究の調べ方と検討方法5. リサーチ・クエッションの立て方6. アブストラクトに書くべきこと7. アウトラインの作成8. 論証の妥当性9. テキストの読み込み10. 引用の方法11. 反対意見の検討12. まとめの書き方13. 参考文献の書き方14. 投稿雑誌の選び方15. 査読とリライトのプロセス
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	東京大学大学院教育学研究科学務委員会(2017)『信頼される論文を書くために第3版』
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	履修者はあらかじめ担当教員に履修の相談をする。また、入学時には、コースのガイダンスに出席する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-211-20	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	小 玉 重 夫				
授 業 科 目	教育人間学論文指導				
講 義 題 目	教育思想論文指導 Dissertation Research in Educational Thought				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	基礎教育学コースの学位論文(修士論文及び博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。なお、修士学位論文は400字詰め原稿用紙に換算して200枚以内にまとめること。
授 業 計 画	1. 研究倫理について2. 論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』3. 研究テーマの設定4. 先行研究の調べ方と検討方法5. リサーチ・クエッションの立て方6. アブストラクトに書くべきこと7. アウトラインの作成8. 論証の妥当性9. テキストの読み込み10. 引用の方法11. 反対意見の検討12. まとめの書き方13. 参考文献の書き方14. 投稿雑誌の選び方15. 査読とリライトのプロセス
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	東京大学大学院教育学研究科学務委員会(2017)『信頼される論文を書くために第3版』
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	履修者はあらかじめ担当教員に履修の相談をする。また、入学時には、コースのガイダンスに出席する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-211-21	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	片山 勝茂				
授 業 科 目	教育人間学論文指導				
講 義 題 目	教育人間学論文指導 Dissertation Research in Educational Anthropology				

授 業 の 目 標・概 要	基礎教育学コースの学位論文(修士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。なお、修士学位論文は400字詰め原稿用紙に換算して200枚以内にまとめること。
授 業 計 画	1. オリエンテーション2. 研究倫理と論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』3. 研究テーマの設定4. 先行研究の調べ方と検討方法5. リサーチ・クエッションの立て方6. アブストラクトに書くべきこと7. アウトラインの作成8. 論証の妥当性9. テキストの読み込みと引用の方法10. 反対意見の検討11. まとめの書き方12. 参考文献の書き方13. 投稿雑誌の選び方14. 査読とリライトのプロセス15. まとめ
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	東京大学大学院教育学研究科学務委員会(2012)『信頼される論文を書くために 改訂版』
履修上の注意・備考	指導教員の開講するゼミを合わせて履修すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-211-22	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	片山 勝茂				
授 業 科 目	教育人間学論文指導				
講 義 題 目	教育人間学論文指導 Dissertation Research in Educational Anthropology				

授 業 の 目 標・概 要	基礎教育学コースの学位論文(博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。
授 業 計 画	1. オリエンテーション2. 研究倫理と論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』3. 研究テーマの設定4. 先行研究の調べ方と検討方法5. リサーチ・クエッションの立て方6. アブストラクトに書くべきこと7. アウトラインの作成8. 論証の妥当性9. テキストの読み込みと引用の方法10. 反対意見の検討11. まとめの書き方12. 参考文献の書き方13. 投稿雑誌の選び方14. 査読とリライトのプロセス15. まとめ
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	東京大学大学院教育学研究科学務委員会(2012)『信頼される論文を書くために 改訂版』
履修上の注意・備考	指導教員の開講するゼミを合わせて受講すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-211-23	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	小国 喜弘				
授 業 科 目	教育史論文指導				
講 義 題 目	日本教育史論文指導 Dissertation Research in Japanese Educational History				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	基礎教育学コースの学位論文(修士論文及び博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。なお、修士学位論文は400字詰め原稿用紙に換算して200枚以内にまとめること。
授 業 計 画	1. 研究倫理について2. 論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』3. 研究テーマの設定4. 先行研究の調べ方と検討方法5. リサーチ・クエッションの立て方6. アブストラクトに書くべきこと7. アウトラインの作成8. 論証の妥当性9. テキストの読み込み10. 引用の方法11. 反対意見の検討12. まとめの書き方13. 参考文献の書き方14. 投稿雑誌の選び方15. 査読とリライトのプロセス
授 業 の 方 法	学年ごとに月1回程度の指導会を開催する。他学年の指導会にも極力参加するものとする。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	適宜配布する
履修上の注意・備考	研究室に所属する院生は必ず履修すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-211-24	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	小国 喜弘				
授 業 科 目	教育史論文指導				
講 義 題 目	日本教育史論文指導 Dissertation Research in Japanese Educational History				

授 業 の 目 標・概 要	基礎教育学コースの学位論文(修士論文及び博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。
授 業 計 画	1. 研究倫理について2. 論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』3. 研究テーマの設定4. 先行研究の調べ方と検討方法5. リサーチ・クエッションの立て方6. アブストラクトに書くべきこと7. アウトラインの作成8. 論証の妥当性9. テキストの読み込み10. 引用の方法11. 反対意見の検討12. まとめの書き方13. 参考文献の書き方14. 投稿雑誌の選び方15. 査読とリライトのプロセス
授 業 の 方 法	博士課程対象。学年ごとに月 1 回程度の指導会を開催する。他学年の指導会にも極力参加するものとする。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	適宜配布する
履修上の注意・備考	研究室に所属する院生は必ず履修すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-211-25	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	隠岐 さや香				
授 業 科 目	教育史論文指導				
講 義 題 目	西洋教育史論文指導 Dissertation Research in Western Educational History				

授 業 の 目 標・概 要	基礎教育学コースの学位論文(修士論文及び博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。なお、修士学位論文は400字詰め原稿用紙に換算して200枚以内にまとめること。
授 業 計 画	1. 研究倫理について2. 論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』3. 研究テーマの設定4. 先行研究の調べ方と検討方法5. リサーチ・クエッションの立て方6. アブストラクトに書くべきこと7. アウトラインの作成8. 論証の妥当性9. テキストの読み込み10. 引用の方法11. 反対意見の検討12. まとめの書き方13. 参考文献の書き方14. 投稿雑誌の選び方15. 査読とリライトのプロセス
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
教 科 書	東京大学大学院教育学研究科学務委員会(2017)『信頼される論文を書くために第3版』
履修上の注意・備考	履修者はあらかじめ担当教員に履修の相談をする。もしくは、入学時には、コースのガイダンスに出席する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-211-26	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	隠岐 さや香				
授 業 科 目	教育史論文指導				
講 義 題 目	西洋教育史論文指導 Dissertation Research in Western Educational History				

授 業 の 目 標・概 要	基礎教育学コースの学位論文(修士論文及び博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。
授 業 計 画	1. 研究倫理について2. 論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』3. 研究テーマの設定4. 先行研究の調べ方と検討方法5. リサーチ・クエッションの立て方6. アブストラクトに書くべきこと7. アウトラインの作成8. 論証の妥当性9. テキストの読み込み10. 引用の方法11. 反対意見の検討12. まとめの書き方13. 参考文献の書き方14. 投稿雑誌の選び方15. 査読とリライトのプロセス
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
教 科 書	東京大学大学院教育学研究科学務委員会(2017)『信頼される論文を書くために第3版』
履修上の注意・備考	履修者はあらかじめ担当教員に履修の相談をする。もしくは、入学時には、コースのガイダンスに出席する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-211-27	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	田中 智志				
授 業 科 目	教育臨床学論文指導				
講 義 題 目	教育臨床学論文指導 Dissertation Research in Clinical Approach to Education				

授 業 の 目 標・概 要	基礎教育学コース(教育臨床学領域)の学位論文の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。研究テーマは、教育臨床学・教育実践論のなかから選択することが望ましい。論文指導は、個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
授 業 計 画	履修者は複数回にわたり、自分の論文の研究主題についての報告を行う。その報告のために、履修者は事前に教員から資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等についての指導を受け、十分な準備をしなければならない。報告においては、自分の研究内容についての系統的なプレゼンテーションをしなければならない。その報告を受けて、担当教員ならびに当日の参加者との間で質疑応答を行う。第1回 論文指導オリエンテーション 第2回 論文作成における留意点 第3回 論文作成のためのガイドライン 第4回 論文作成のための主題選択(個別指導)1 第5回 論文作成のための主題選択(個別指導)2 第6回 論文作成の方法(個別指導)1 第7回 論文作成の方法(個別指導)2 第8回 個別の報告・全体の指導1 第9回 個別の報告・全体の指導2 第10回 個別の報告・全体の指導3 第11回 個別の報告・全体の指導4 第12回 中間報告 第13回 直前指導1 第14回 直前指導2 第15回 論文指導のまとめ
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	必要な文献については、各自のテーマに即して指示する。
履修上の注意・備考	教育学・教育思想についての基礎的知見を要する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-211-28	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	田中 智志				
授 業 科 目	教育臨床学論文指導				
講 義 題 目	教育臨床学論文指導 Dissertation Research in Clinical Approach to Education				

授 業 の 目 標・概 要	基礎教育学コース(教育臨床学領域)の学位論文の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。研究テーマは、教育臨床学・教育実践論のなかから選択することが望ましい。論文指導は、個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
授 業 計 画	履修者は複数回にわたり、自分の論文の研究主題についての報告を行う。その報告のために、履修者は事前に教員から資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等についての指導を受け、十分な準備をしなければならない。報告においては、自分の研究内容についての系統的なプレゼンテーションをしなければならない。その報告を受けて、担当教員ならびに当日の参加者との間で質疑応答を行う。第1回 論文指導オリエンテーション 第2回 論文作成における留意点 第3回 論文作成のためのガイドライン 第4回 論文作成のための主題選択(個別指導)1 第5回 論文作成のための主題選択(個別指導)2 第6回 論文作成の方法(個別指導)1 第7回 論文作成の方法(個別指導)2 第8回 個別の報告・全体の指導1 第9回 個別の報告・全体の指導2 第10回 個別の報告・全体の指導3 第11回 個別の報告・全体の指導4 第12回 中間報告 第13回 直前指導1 第14回 直前指導2 第15回 論文指導のまとめ
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	必要な文献については、各自のテーマに即して指示する。
履修上の注意・備考	教育学・教育思想についての基礎的知見を要する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-211-29	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	大塚 類				
授 業 科 目	教育臨床学論文指導				
講 義 題 目	臨床現象学論文指導 Dissertation Research in Clinical Phenomenology				

授 業 の 目 標・概 要	基礎教育学コースの学位論文(修士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。With the aim of completing the thesis (master's thesis) of the basic education course, guidance is given as appropriate, starting with the thematisation of each student's problematic interest as an academic research theme, the suitability of material selection, methodological considerations and methods of argumentation.
授 業 計 画	1. オリエンテーション2. 研究倫理と論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』3. 研究テーマの設定4. 先行研究の調べ方と検討方法5. 事例研究の方法①フィールドの策定6. 事例研究の方法②対象者の策定7. 事例研究の方法③研究倫理8. 事例の取り方・描き方9. 理論に基づく事例の考察10. 反対意見の検討11. まとめの書き方12. 参考文献の書き方13. 投稿雑誌の選び方14. 査読とリライトのプロセス15. まとめ 1. orientation2. research ethics and guidelines for writing a thesis 'To write a credible thesis'3. Establishing a research topic4. How to research and review previous research5. Case study methods (1) Field development6. Case study methods (2) Formulation of the subject7. Case study methods (3) Research ethics8. How to take and draw case studies9. Consideration of case studies based on theory10. Consideration of opposing views11. How to write a summary12. How to write references13. How to choose a journal for submission14. Peer review and rewrite process15. Summary
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。The focus is on individual instruction, but there are also opportunities for group instruction where necessary.
成 績 評 価 方 法	個人の達成度によって評価を行う。Evaluation is based on the achievement of each individual's goals and research results.
教 科 書	東京大学大学院教育学研究科学務委員会(2012)『信頼される論文を書くために 改訂版』
履 修 上 の 注 意・備 考	指導教員の開講するゼミを合わせて受講すること。The seminar should be taken in conjunction with the seminar offered by the supervisor.
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-211-30	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	大塚 類				
授 業 科 目	教育臨床学論文指導				
講 義 題 目	臨床現象学論文指導 Dissertation Research in Clinical Phenomenology				

授 業 の 目 標・概 要	基礎教育学コースの学位論文(博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。With the aim of completing a dissertation (doctoral thesis) in the basic education course, guidance is given as appropriate, starting with the thematisation of each student's problematic interest as an academic research theme, the suitability of material selection, methodological considerations and methods of argumentation.
授 業 計 画	1. オリエンテーション2. 研究倫理と論文執筆のガイドライン『信頼される論文を書くために』3. 研究テーマの設定4. 先行研究の調べ方と検討方法5. 事例研究の方法①フィールドの策定6. 事例研究の方法②対象者の策定7. 事例研究の方法③研究倫理8. 事例の取り方・描き方9. 理論に基づく事例の考察10. 反対意見の検討11. まとめの書き方12. 参考文献の書き方13. 投稿雑誌の選び方14. 査読とリライトのプロセス15. まとめ 1. orientation2. research ethics and guidelines for writing a thesis 'To write a credible thesis' 3. setting a research theme 4. how to research and review previous studies 5. case study methods 1. field development 6. case study methods 2. subject development 7. case study methods 3. research ethics 8. how to take and draw a case 9. How to write a summary 12. How to write a bibliography 13. How to choose a journal for submission 14. Peer review and rewrite process 15. Summary
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。The focus is on individual instruction, but there are also opportunities for group instruction where necessary.
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。Evaluation is based on the achievement of each individual's goals and research results.
教 科 書	東京大学大学院教育学研究科学務委員会(2012)『信頼される論文を書くために 改訂版』
履修上の注意・備考	指導教員の開講するゼミを合わせて受講すること。The seminar should be taken in conjunction with the seminar offered by the supervisor.
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-212-01	単 位 数	2	学 期	S2
担 当 教 員	本田 由紀				
授 業 科 目	教育社会学基本研究				
講 義 題 目	現代日本社会における教育・仕事・家族 Education, Work and Family in the Present Japanese Society				

授 業 の 目 標・概 要	日本社会における家族・教育・仕事の関係性の特徴とその変化について、様々な文献やデータを読み取り議論することを通じて、現在の日本社会が抱える諸課題とそれらへの対策について認識を深めるとともに、多様な研究手法について知り適用可能性を考察する。一般的・抽象的なレベルでは、ある社会の構造とその変動を俯瞰的に捉える見方、国際比較により社会間の体制の相違を知り特定の社会状況を相対化する見方、図表を読み取りながらデータが意味している事柄を解釈する力、ある社会で支配的な言説や規範を批判的にとらえ返す力などをつけることを目標とする。
授 業 計 画	授業計画第1回：オリエンテーションおよび概論第2回：日本の社会学第3回：ゲスト回に向けての事前準備第4回：ゲスト回（打越文弥さん）第5回：「居場所」第6回：職業教育とアスピレーション第7回：エリート教育第8回：格差許容意識第9回：未婚化第10回：ジェンダー意識第11回：外国人労働者政策第12回：排外意識第13回：期末レポート構想発表
授 業 の 方 法	各回の購読文献をふまえ、受講者が購読文献を補足する他の文献・統計・事例・報道などを紹介しあいつつ議論を行うことにより、現代日本社会の現実と、目下進行中の様々な変革の動きや取り組みについて知り、その中で個人がいかなる役割を果たしてゆけるか、いかなる研究が可能かについての認識を形成する。授業では出席者全員が購読文献について購読票を記載した上で持参する。授業で得た知識をふまえ、期末レポートでは現代日本の家族・教育・仕事に関わるミニ研究を課す。
成 績 評 価 方 法	授業時に提出する購読票と、期末レポートを7:3の比率で評価する。
教 科 書	購読文献は初回の授業で指示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	現代の親子関係、若年労働市場、教育政策、社会福祉などについて社会的課題と研究上の課題を幅広く押さえる内容の授業であるため、それらに関する実証的研究に取り組もうとする者にとって直接的に役立つことはもちろん、社会学の方法論・理論についての基礎教養を得ることができる。
そ の 他	オンライン

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-212-02	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	仁平 典宏				
授 業 科 目	教育社会学基本研究				
講 義 題 目	市民社会・国家・教育 Civil Society, State, and Education				

授業の目標・概要	近年、社会保障における〈教育〉の役割への関心が高まっている。例えば、現在の「子どもの貧困」対策の主流をなすのは人的資本論を背景とした社会的投資アプローチであり、学習支援などの教育的施策が重視される。予防的な観点からも、就学前の子どもへの保育・教育投資が、長期的貧困リスクの削減につながる事が指摘される。成人に対しても、非正規労働者や生活困窮者に対する職業教育・訓練を通じた「自立支援」が有効とされるだけでなく、人的資本投資を社会保障の中心に据えるアクティベーションが北欧型福祉国家の中核にある仕組みとして「発見」され続けている。以上の議論において強調されているのは、人的資本の形成支援が単なる弱者支援にとどまらず、経済成長や社会発展にとっても機能的であり、社会全体にプラスになるというメカニズムである。社会的投資という側面を強調する論理は中間層の支持も得やすく、近年の教育・社会政策の言説の中心に存在している。教育学領域における教育社会学的／教育経済学的問題設定の隆盛も、上記の文脈と無関係ではない。一方で、このような「教育と福祉・社会保障の連携」は、排除を別の形で再生産・強化するという批判も行われるようになっている。以上の文脈を踏まえて、教育と福祉・社会保障のクロスオーバーにおいて、いかなるリスクがあり、いかなる形が望ましいと言えるのか、理論的／実証的に検討することがこの授業の目的となる。
授 業 計 画	第 1 回: イントロダクション 第 2 回: 論文の検討とディスカッション(山口毅 2020「生存保障への教育社会学的アプローチの失敗」『教育社会学研究』106 巻) 第 3 回～第 14 回: 論文購読に基づくディスカッション
授 業 の 方 法	原則として、毎回指定された文献や論文を購読した上で、各自が簡単な購読メモを準備し、それに基づいてディスカッションを行う。
成 績 評 価 方 法	平常点。具体的には、授業への出席・購読メモの提出・議論への参加を重視する。
教 科 書	初回の授業では、山口毅 2020「生存保障への教育社会学的アプローチの失敗」『教育社会学研究』106 巻の論文を検討する。 https://www.jstage.jst.go.jp/article/eds/106/0/106_99/_article/-char/ja/ もし可能であれば、簡単な感想やコメントをまとめた購読メモを作っておくこと。(形式任意)2 週目以降の授業で用いる論文については、初回に提示する。
履修上の注意・備考	テーマに関心があれば専門領域は問わない。毎回指定された論文を購読した上で、各自が簡単な購読メモを準備し、それに基づいて全体でディスカッションを行う。つまり毎回課題がある形になるので、がんばること。
そ の 他	初回の授業では、山口毅 2020「生存保障への教育社会学的アプローチの失敗」『教育社会学研究』106 巻の論文を検討する。 https://www.jstage.jst.go.jp/article/eds/106/0/106_99/_article/-char/ja/ もし可能であれば、簡単な感想やコメントをまとめた購読メモを作っておくこと。(形式任意)

本 研 究 科 他 コース学生	履修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 可
他大学生(特別聴講学生等)	履修 可

時 間 割 コー ド	23-212-03	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	多喜 弘文				
授 業 科 目	高等教育論基本研究				
講 義 題 目	教育と不平等の社会学 I Sociological Perspectives on Education and Inequality I				

授 業 の 目 標・概 要	学校教育と不平等に関わる文献を読み進めることで、階層研究における当該領域の研究枠組みに対する理解を深める。特に制度に着目した欧米の国際比較研究を中心的に扱うことで、日本を対象にした研究をどのように発信していけるのかを議論していく。
授 業 計 画	第 1 回:オリエンテーションと文献紹介、分担の取り決め第 2 回・第 3 回:当該領域の基本的な枠組みについての文献購読第 4 回～第 11 回:欧米における当該領域についての文献購読第 12 回:日本の対象とした研究の可能性について第 13 回:総括、レポートの構想発表
授 業 の 方 法	毎回担当者が文献の内容紹介と批判的検討をおこない、それをもとに全員でディスカッションをおこなう。文献の候補については初回授業時に示す。
成 績 評 価 方 法	担当文献の報告と毎回の議論への積極的参加(計 60%)および最終レポート(40%)で評価する。
教 科 書	適宜授業内に指示する。
履修上の注意・備考	毎回の出席と積極的な議論への参加を求めます。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-212-04	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	中村 高康				
授 業 科 目	比較教育システム論基本研究				
講 義 題 目	教育社会学の諸概念 Concepts in Sociology of Education				

授 業 の 目 標・概 要	教育社会学において頻繁に用いられる重要概念は多数あるが、そのなかには必ずしも十分な理解がなされずに使用されたり、あるいは原典とは異なる意味で用いられるようになったりした用語もある。この授業では、そうした諸概念を毎週テーマとして取り上げ、原典の講読とその応用事例の講読を対比的に進める中で、当該概念のもつ意味を深く理解することにより、教育社会学的研究の基礎力を高めることを目指す。
授 業 計 画	第1回 イントロダクション第2回 ミニ原典講読+ミニ応用事例検討第3回 教育社会学の概念①原典講読第4回 教育社会学の概念①応用事例検討第5回 教育社会学の概念②原典講読第6回 教育社会学の概念②応用事例検討第7回 教育社会学の概念③原典講読第8回 教育社会学の概念③応用事例検討第9回 教育社会学の概念④原典講読第10回 教育社会学の概念④応用事例検討第11回 教育社会学の概念⑤原典講読第12回 教育社会学の概念⑤応用事例検討第13回 教育社会学の概念⑥原典講読第14回 教育社会学の概念⑥応用事例検討
授 業 の 方 法	指定された文献について、毎回報告者を決めて内容を報告してもらう。そのうえで、内容理解のためのディスカッションを行なう。応用事例の検討についても同様に行ない、同時に原典との対比において何がわかるのかという観点からのディスカッションも行ないたい。
成 績 評 価 方 法	平常点(報告を含む)と最終レポートによる。
教 科 書	初回に説明する。
履 修 上 の 注 意・備 考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-212-05	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	三輪 哲				
授 業 科 目	比較教育システム論基本研究				
講 義 題 目	教育社会学方法論研究 Research Methods in Sociology of Education				

授 業 の 目 標・概 要	この授業では、教育社会学研究において重要性の高い中級レベルの多変量解析の技法について、理論的基礎と統計ソフトウェアを用いた実践的技能を学ぶ。さらには得られた結果から教育社会学的解釈を引き出す考察能力を涵養する。扱う題材は、マクロレベルでは教育政策の効果や地域と学校教育の関係など、ミクロレベルでは学生/生徒の意識・行動・事故リスクとその変化など、多岐にわたる。授業においては、各自が機器を操作しつつ、受講者によるテキスト講読発表、補足的講義、分析実習を併用しながら進行する。
授 業 計 画	今年度は、目的別に多様な手法を学んでいくこととする。1:社会調査・統計解析・計量社会学2:データの記述とハンドリング3:統計的推定と検定の基礎4:二変数の関連5:統計的統制6:線形従属変数のモデリング7:二値従属変数のモデリング8:順序従属変数のモデリング9:名義従属変数のモデリング10:媒介と交互作用の検討11:潜在変数の利活用12:入れ子型/階層的データへのアプローチ13:因果推論の諸方法なお、内容については受講者の状況に応じて柔軟に対応する予定である。
授 業 の 方 法	講義、文献講読、分析演習により構成される。
成 績 評 価 方 法	平常点、課題、最終レポート
教 科 書	石黒格(編), 2014,『改訂 Stata による社会調査データの分析: 入門から応用まで』北大路書房。
履 修 上 の 注 意・備 考	ほぼ毎回、課題が課されることになる。分析法の教育社会学研究への応用に主眼を置くため、推定・検定など詳細な統計学的知識に関心がある者は参考書等により別途自学されたい。
そ の 他	本授業科目は、日本社会学会、日本教育社会学会、日本行動計量学会が共同で設立した一般社団法人社会調査協会の定める「専門社会調査士のための必修科目」のうち、「I. 多変量解析に関する演習(実習)科目」として認定される授業科目である(予定)。社会調査士資格については、 http://jasr.or.jp/ を参照のこと。

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-212-06	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	本田 由紀				
授 業 科 目	教育社会学特殊研究				
講 義 題 目	教育社会学の研究課題 Research Issues in the Sociology of Education				

授 業 の 目 標・概 要	教育を対象とする社会学的研究は、これまで理論的・実証的な知見を蓄積してきた。しかし、社会経済構造の変化の中で、従来の理論枠組みや概念、研究方法では把握しきれない新たな研究課題が出現してきていると考えられる。これまでの教育社会学にとって盲点となってきたそれらの新たな研究課題を探り出し、実証研究に結び付けてゆく方途を検討することをこの授業では目標とする。
授 業 計 画	第1回(10月6日) オリエンテーションと文献・分担等の決定第2回(10月13日)文献① 第3回(10月20日)文献② 第4回(10月27日)文献③第5回(11月10日) 文献④ 第6回(11月17日) 文献⑤ 第7回(11月24日)文献⑥第8回(12月8日)ゲスト回(松岡亮二さん)第9回(12月15日)ワークショップ①第10回(12月22日)ワークショップ②第11回(1月5日) ワークショップ③第12回(1月12日) ワークショップ④第13回(1月19日) 期末レポート発表
授 業 の 方 法	授業の前半の回では、教育社会学の英語論文で国際学術誌に掲載されたものを講読文献とし、(1)どのようなロジックでオリジナリティや重要性を主張し、(2)国際比較の中で日本をどのようなケースとして扱っており、(3)どのようなデータをどのような手法で分析し、(4)どのような理論や分析枠組みを使用しているか、という観点から検討する。講読文献については受講者全員が指定の「講読票」に概要と意見を書いて授業に持参し、その記載内容に基づいて議論する。講読票は授業後に下記の提出先にアップロードする形で提出する。第8回の授業で
成 績 評 価 方 法	授業の内容をふまえ、最終的に参加者各自が、各自の研究テーマに関して英文レポートを執筆する。成績評価は、「講読票」、ワークショップでの発表、期末レポートを、3:4:3 の比重で評価する。「講読票」は出席確認の意味ももつ。原則として、3回欠席で評価が1ランク低下し、5回欠席で単位を認めない。
教 科 書	各回の授業で用いるテキストを初回に提示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	学部において「教育社会学概論」および「教育社会学理論演習」を事前に履修していることが望ましいが、他大学からの大学院進学者でも受講できる。欧米を中心とした教育社会学の先端的イシューと研究方法を知ることができる授業であるため、教育社会学分野で研究を進めようとする者はもちろん、教育学および社会科学全般に従事する者および教育現場・教育行政に関わる者にとって有益な知識を得ることができる。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-212-07	単 位 数	2	学 期	A2
担 当 教 員	仁平 典宏				
授 業 科 目	教育社会学特殊研究				
講 義 題 目	教育言説の社会学 Sociology of Discourse on Education				

授 業 の 目 標・概 要	教育社会学において言説や文字データを用いた研究は多いが、それが依拠する方法論／理論は、構築主義やフーコー的言説分析から、概念分析、自然言語処理を用いたテキストマイニングに至るまで、多岐にわたっている。その中で、知見の新規性はもちろん、分析の手続きの妥当性や、言説／社会の関係に関する存在論・認識論的な前提が厳しく問われることもある。本授業では、言説を対象とする研究にはどのような方法的立場があり、それぞれいかなる前提と課題を有しているのか、基本的な視座を習得することをめざす。基礎的な文献を講読した上で議論し、部分的には KH コーダー等を用いたワークも活用しながら理解を深めていきたい。なお受講者は言説研究の経験者である必要はない。むしろ、初めて言説を用いて修士論文、投稿論文、その他論文等を書く人も含め、本方法論に関する基本的な議論の布置を理解できるようになることが主な目的である。
授 業 計 画	1 回目イントロダクション 2 回目言説データに触れる 3 回事例としてのいじめ言説 4 回目言説と構築主義 5 回目方法論的構築主義の展開と困難 6 回目言説と「実態」——統計の位置づけについて 7 回目権力と言説 8 回目歴史と言説 9 回目概念分析について 10 回目概念分析と構築主義 11 回目概念分析の研究を読む 12 回目計量テキスト分析の基礎 13 回目計量テキスト分析の基礎 214 回目計量テキスト分析の実際
授 業 の 方 法	毎回指定された文献や論文を購読した上で、各自が簡単な購読メモを準備し、それに基づいてディスカッションを行う。テキストマイニング等に関してはワークも併用する。
成 績 評 価 方 法	平常点。具体的には、授業への出席・購読メモの提出・議論への参加を重視する。
教 科 書	授業内で指示する。
履修上の注意・備考	毎回指定された論文を購読した上で、各自が簡単な購読メモを準備し、それに基づいて全体でディスカッションを行う。つまり毎回課題がある形になるので、がんばること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-212-08	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	多喜 弘文				
授 業 科 目	高等教育論特殊研究				
講 義 題 目	教育と不平等の社会学Ⅱ Sociological Perspectives on Education and InequalityⅡ				

授 業 の 目 標・概 要	東アジアを対象にした教育と選抜に関する理論的および実証的な研究を検討することで、日本や東アジア社会を対象にした研究をどのように発信していけるのかについて議論していく。特に、学校外の教育を意味する「影の教育 (shadow education)」現象に着目する。
授 業 計 画	第 1 回:オリエンテーションと文献紹介、分担の取り決め第 2 回～第 5 回:当該領域を扱う上での方法論的アプローチについての文献購読第 6 回～第 12 回:東アジアを対象とする当該領域の文献購読第 13 回:総括、レポートの構想発表
授 業 の 方 法	毎回担当者が文献の内容紹介と批判的検討をおこない、それをもとに全員でディスカッションをおこなう。文献の候補については初回授業時に示す。
成 績 評 価 方 法	担当文献の報告と毎回の議論への積極的参加(計 60%)および最終レポート(40%)で評価する。
教 科 書	適宜授業内に指示する。
履修上の注意・備考	毎回の出席と積極的な議論への参加を求めます。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-212-09	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	星加 良司				
授 業 科 目	教育社会学特殊研究				
講 義 題 目	障害の社会理論を読む Social Theories of Disability				

授 業 の 目 標・概 要	<目的・目標>「障害(disability)」という現象は、「できなさ(disability)」を生み出し、意味づけ、価値づける社会の営みの合わせ鏡である。このように考えるとき、「障害」を解消しようとする試みは、社会変革を志向する企てとなり、その社会の中で既得権を持つ人々からの抵抗を呼び起こすものとなる。この授業では、ここに生じるコンフリクトを解きほぐすための手がかりを探究したい。<授業概要>1980年代に英米で学問分野として成立したディスアビリティ・スタディーズ(障害学)において、従来障害者個人への介入を志向する、医学を中核とした実践科学によって担われてきた障害研究は、ディスアビリティの構築に関与している現行の社会のありようを問うという、すぐれて社会的なテーマと接続することになった。本授業ではこのパラダイムシフトの持つ意味を確認した上で、障害平等に向けた実践の基礎理論についての検討を行う。
授 業 計 画	1. ガイダンス2. 障害概念の探究 13. 障害概念の探究 24. 障害概念の探究 35. 障害概念の探究 46. 「障害平等」をめぐる理念と課題 17. 「障害平等」をめぐる理念と課題 28. 「障害平等」をめぐる理念と課題 39. 「障害平等」をめぐる理念と課題 410. 自由報告 111. 自由報告 212. 自由報告 313. 自由報告 4※受講者の人数や関心等により内容を変更することがある。
授 業 の 方 法	受講生による文献報告をはじめ、ディスカッションを中心に授業を展開する。
成 績 評 価 方 法	授業時の報告内容や討論への参加状況について、的確性・論理性・積極性等を考慮して総合的に評価する。
教 科 書	特に指定しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	障害問題についての予備的な知識は特に必要としない。受講者は、指定文献を予め熟読する等、授業でのディスカッションのための十分な準備を行うことが期待される。
そ の 他	なお、オンラインで参加する場合は、下記の Zoom にアクセスすること。https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/j/85223060680?pwd=QUZVazJXa2FDY0psRm5UbmplY1RVZz09 ミーティング ID: 852 2306 0680 パスコード: 736231

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-212-10	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	佐藤 香				
授 業 科 目	教育社会学特殊研究				
講 義 題 目	教育社会の計量分析 Quantitative Analyses of Educational Society				

授 業 の 目 標・概 要	既存の社会調査データを比較検討したうえで、実際に調査を企画・設計して実施し、データ分析をおこなうことを通じて、社会調査に関する実践的な知識・技術を習得することを目的とする。講義では、各自の興味・関心にもとづいて調査テーマを決め、それと関連した既存調査データを検討して、調査票の設計、母集団やサンプリング、面接調査か郵送調査かといった調査法など、適切な方法を選んで調査を企画する。調査実施後、調査票の点検・ナンバリング等のエディティング、入力・クリーニングをおこない、さらにデータ分析にもとづく論文を執筆することで、知識・技術を身につけていく。
授 業 計 画	1 社会調査の方法: 入手可能な既存の社会調査データを紹介し、そのうちの典型的な調査について、どのような調査方法をもちているかを確認することで、社会調査方法論について実践的に学習する 2 社会調査データの特徴: 社会調査データの構造と変数既存調査の調査票とデータセットを検討し、質問項目の背後にある仮説および変数の種類(名義・順序・間隔・比率)について学習し、属性項目の度数分布からサンプリングの偏りなどを検討する 3 調査の企画(1): 各自の問題関心に合わせて調査テーマを決定し、それにもとづく調査計画を企画する。母集団の選定、サンプリング、調査方法を選定する 4 調査の企画(2): 調査仮説にもとづいて、目的変数・説明変数・統制変数を決定し、それぞれの尺度を選択する 5 調査票の設計: 既存調査の質問項目を参考にしながら、調査仮説を踏まえた質問項目を設計し、質問紙全体の構造化をおこない、ワーディングについて学習し、調査票を確定する 6 調査実施の準備: 調査スケジュールを確定し、関係機関へのサンプリング依頼状、サンプリング方法の検討、調査対象者本人への調査依頼状などを、調査倫理をふまえて作成する 7 調査の実施: 調査の実施各自の分担を決め、調査を実施する 8 回収調査票とエディティング: 回収した調査票の点検・ナンバリング、アフターコーディングをおこない、データ入力の準備をする。9 データ入力とクリーニング: 入力とクリーニング各自で分担して入力をおこない、クリーニングを完了させ、単純集計票およびコードブックを作成する 10 基礎的分析と検定: 単純集計およびクロス集計表による分析と解釈、 χ^2 乗検定について学習し、検定概念を理解する 11 回帰分析のバリエーション: 相関係数から単回帰分析、重回帰分析、ロジスティック回帰分析について学習し、回帰分析の概念と方法を理解する 12 グラフ作成と論文執筆: 分析結果の効果的な図表化、ときにグラフ作成について学習し、それをふまえた論文執筆をおこなう 13 中間発表と講評および最終レポートに向けての指導: 分析にもとづく論文作成の中間発表をおこない、より適切な論文構成や図表の表示、論旨の明確化などを指導する
授 業 の 方 法	講義・演習形式。各回、講義に続いて演習問題に解答する。また、中間発表でのプレゼンテーションをおこなう。
成 績 評 価 方 法	プレゼンテーションおよび論文
教 科 書	配布資料をもちいる。
履 修 上 の 注 意・備 考	かなりの作業量になるので、この点をふまえて履修すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-212-11	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	石田 賢示				
授 業 科 目	教育社会学特殊研究				
講 義 題 目	格差・不平等研究のための社会的埋め込み論 Social Embeddedness for Inequality Studies				

授業の目標・概要	格差・不平等は社会科学研究の主要なトピックの 1 つである。この授業では、なぜ格差・不平等が生じ、維持されるのかを理論的、概念的に説明する枠組みの 1 つとして、「埋め込み」に着目する。この概念は元々経済行為を対象としていたが、教育など社会科学の広い領域にも応用可能である。一方、「埋め込み」が 'umbrella concept' と呼ばれるように、その意味するところが研究者により多様であることから混乱が生じることもある。この授業の第 1 の目標は、「埋め込み」に関する古典的文献やその後の研究論文の輪読を通じてこの概念の理解を深めることである。また、この枠組を自身の研究に応用する可能性や、(埋め込み論とは異なる) 自身の研究枠組みとの差異について説明できるようになることも、この授業のねらいである。Inequality is one of the leading topics in social science research. This course pays attention to 'embeddedness,' which theoretically and conceptually explains why inequality emerges and persists. This concept has initially targeted economic actions but can apply to the broader field in social sciences such as education. In the meantime, as 'embeddedness' is called the 'umbrella concept,' we sometimes have confusion due to various meanings among scholars. Therefore, we primarily aim to get a deeper understanding of this concept by reading classical and subsequent literature about 'embeddedness.' Also, this course intends that participants get to explain how to apply to their research or how different they are from the 'embeddedness' concept.
授 業 計 画	以下の大まかなスケジュールに沿って文献の輪読と議論を進める。参加者が文献の内容を解説するが、担当はイントロダクションの回で割り振る予定である。授業の進行や受講者の関心に応じ、文献を変更する可能性がある。This class will follow the rough schedule below by reading the designated articles and discussing them. Participants are to introduce the literature contents assigned to them at the introduction session. We might change the literature to read as the class progresses and participants' interest. (1) イントロダクション Introduction 授業の目的と概要を講師が説明し、文献の割り振りを決める。The instructor will explain the purpose and overview of this class, and participants will select the literature to be assigned. (2) 「埋め込み」概念とそれに関連する枠組み The 'embeddedness' concept and relevant frameworks Polanyi, Karl, 1957, "The Economy as Instituted Process," Conrad M. Arensberg and Harry W. Pearson (eds) Trade Market in the Early Empires by Karl Polanyi, The Free Press. (from The Sociology of Economic Life (Mark Granovetter and Richard Swedberg (eds)) Zukin, Sharon, and Paul J. DiMaggio (eds), 1990, Structure of Capital: The Social Organization of the Economy, Cambridge University Press. Granovetter, Mark, 1985, "Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness," American Journal of Sociology 91(3): 481-510. Granovetter, Mark, 1992, "Economic Institutions as Social Constructions: A Framework for Analysis," Acta Sociologica 35(1): 3-11. Coleman, James S., 1988, "Social Capital in the Creation of Human Capital," American Journal of Sociology 94: S95-S120. Portes, Alejandro, and Julia Sensenbrenner, 1993, "Embeddedness and Immigration: Notes on the Social Determinants of Economic Action," American Journal of Sociology 98(6): 1320-50. DiMaggio, Paul J., and Walter W. Powell, 1983, "The Iron Cage Revisited: Institutional Isomorphism and Collective Rationality in Organizational Fields," American Sociological Review 48(2): 147-60. Rosenbaum, James E., Takehiko Kariya, Rick Settersten, and Tony Maier, 1990, "Market and Network Theories of the Transition from High School to Work: Their Application to Industrialised Societies," Annual Review of Sociology 16: 263-99. Cerulo, Karen A., Vanina Leschziner, and Hana Shepherd, 2021, "Rethinking Culture and Cognition," Annual Review of Sociology 47: 63-85. (3) 地位達成研究への応用 Applications for Status Attainment Studies Morgan, Stephen L., and Jennifer J. Todd, 2009, "Intergenerational Closure and Academic Achievement in High School: A New Evaluation of Coleman's Conjecture," Sociology of Education 82: 267-86. 荻谷剛彦, 1991, 「教育の経済学から

	「経済の教育社会学」へ——高卒者の就職とその社会的構成の比較社会学——」『教育社会学研究』49: 57-78.Brinton, Mary C., and Takehiko Kariya, 1998, “Institutional Embeddedness in Japanese Labor Markets,” Mary C. Brinton and Victor Nee (eds) The New Institutionalism in Sociology, Stanford University Press. 181-207.竹内洋, 1995[2016], 『日本のメリトクラシー構造と心性』(第四章「就職と選抜」を中心に)東京大学出版会.Podolny, Joel M., 2001, “Networks as the Pipes and Prisms of the Market,” American Journal of Sociology 107: 33-60.Chua, Vincent, 2011, “Social networks and labour market outcomes in a meritocracy,” Social Networks 33: 1-11.
授 業 の 方 法	割り当てられた文献の内容を参加者が紹介し、全員で議論する。必要に応じ、講師が関連する内容を解説する。授業言語は日本語を用いるが、部分的に英語を用いても構わない。The participants will introduce the contents of the assigned literature and discuss them together. The instructor will explain related matters as necessary. We will speak in J
成 績 評 価 方 法	関心のあるトピックについて、埋め込みアプローチを関連付けて論じたタームペーパーの内容。埋め込み概念に批判的な内容でも構わない。また、プレゼンテーションの内容も加味する。The term papers the participants wrote about the topic of interest concerning the embeddedness approach. It is possible to be critical toward the embeddedness concept. Also, the instructor will consider each presentation into account.
教 科 書	なし None
履修上の注意・備考	この授業の肝は参加者相互の議論なので、できる限り毎回出席することが望ましい。The core of this class is the mutual discussion among participants. I hope they should attend every session.
そ の 他	なし None

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-212-12	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	浜田 宏				
授 業 科 目	教育社会学特殊研究				
講 義 題 目	社会科学のためのベイズ統計モデリング Bayesian Statistical Modeling for Social Science				

授 業 の 目 標・概 要	1) 社会現象をどのようにして数理モデルとして表現するのか, そしてデータを使ってそのモデルのフィットをどのように確認するのかを学ぶ. 2) 統計モデルを利用するうえで必要な確率論の基礎を学ぶ. あわせて経験科学的に興味深い問題を構成する力の基礎を涵養する.
授 業 計 画	1. イントロダクション モデルとはなにか 2. 真の分布, 確率モデル, データ 3. 最尤推定 4. ベイズ推定 5. マルコフ連鎖とMCMC 6. よく使う確率分布間の関係 7. 汎化誤差, AIC, WAIC, 予測分布 8. Stan による分析: 回帰等の基本モデルの書き方 9. Stan による分析: 微分方程式モデル 10. Stan による分析: 所得分布分布生成モデル 11. Stan による分析: 収入評価と準拠集団モデル 12. Stan による分析: 時間割引モデル 13. Stan による分析: 教育達成の階層間格差
授 業 の 方 法	教科書にしたがい, 教員が内容を紹介する. 簡単な計算や証明をその場で確認する. 受講者からの質問があればその場で受け付ける.
成 績 評 価 方 法	出席[40%] 質問・コメント[40%] 課題[20%]
教 科 書	教科書: 浜田宏・石田淳・清水裕士, 2019『社会科学のためのベイズ統計モデリング』朝倉書店.
履 修 上 の 注 意・備 考	本演習ではRとStanによる実装例を紹介するので, 実行環境を整えたPCを準備できることが望ましい. 授業内で簡単に確認する予定だが, 高校・大学初年度レベルの微積分を復習しておくことが望ましい.
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-212-13	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	高橋 史子				
授 業 科 目	教育社会学特殊研究				
講 義 題 目	Ethnicity, Nationalism and Education Ethnicity, Nationalism and Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	The aim of this course is to introduce graduate students to some classic and recent sociological studies relevant to ethnicity, nationalism, and education, and to critically discuss their contribution and limitations. In Week 1, we'll have a course guidance and a short workshop about how to unpack the essay question and to prepare the outline. From Week 2, we'll spend four weeks (classes) to consider a question set up for each topic. From the 1st to 3rd class, students are expected to read the assignments before each class and bring questions and tentative ideas to answer the question. During class, we discuss the contribution and limitation of the articles, as well as exchange ideas and thoughts about the question. In the 4th class, students are expected to bring the outlines to answer the question, share them and discuss. After Week 13, you will be required to pick up one question from the three and write an essay by developing your prepared outline. Students will be able to -discuss the significance, contributions, and limitations of each paper, -critically examine the paper from the methodological point of view, and -discuss the essay question, based on the assigned literature.
授 業 計 画	Week 1 Course Guidance and Workshop: How to prepare an outline for an essay question Week 2 to 5 <Topic: Ethnicity> Week 6 to 9 <Topic: Nationalism> Week 10 to 13 <Topic: Whiteness> * We also include topics such as critical race theory, colorblindness etc. The reading list and essay questions will be announced and provided in the guidance and on ICT-LMS.
授 業 の 方 法	Discussion
成 績 評 価 方 法	Participation 20% Essay Outline 30% Final Essay 50%
教 科 書	none
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	The students are expected to be well-prepared and participate in discussion. If you're thinking to take this course and have any questions before the guidance, please contact the instructor via email either in English or Japanese.
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-212-14	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	中村 高康				
授 業 科 目	比較教育システム論特殊研究				
講 義 題 目	教育と選抜の諸問題 Issues in Education and Selection				

授 業 の 目 標・概 要	教育と選抜に関わる諸問題を理解するうえで重要な文献を読み進めていくなかで、現代における教育現象をいかに理解していくかを様々な視点から考察してゆく。特に今年度は、教育と社会階層に関するミクロなアプローチに注目して、文献を読み進めてみたい。
授 業 計 画	第1回 イントロダクション第2回~第13回 教育と社会階層に関するミクロな視点の文献の講読
授 業 の 方 法	毎回担当者を決めて報告してもらい、それをもとにディスカッションする演習方式。文献については初回授業時に示すが、進め方については、参加人数にもよるので初回に協議をして決定したい。
成 績 評 価 方 法	授業参加度+最終レポートで評価する。
教 科 書	適宜授業内において指定する。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-212-15	単 位 数	2	学 期	A1
担 当 教 員	額賀 美紗子				
授 業 科 目	比較教育学特殊研究				
講 義 題 目	質的方法論研究 Qualitative Research Methods				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	この授業では、質的方法論の特長と多様なアプローチについて学び、質的方法を使って研究論文を執筆するための知識とスキル獲得をめざす。具体的には文献購読とデータを使った演習を組み合わせながら以下の 3 点を扱う。1) 質的方法論の基本的知識に関する文献購読 2) 質的方法論を使った文献の批判的考察 3) 学校参与観察の実践およびデータ分析授業では特にリフレキシビティ(再帰性)に自覚的である近年の質的研究法における展開に注目する。調査者と被調査者の関係性や、調査者の属性、立場や権力性がデータ収集や解釈に及ぼす影響について議論しながら、質的研究法がどのように理論生成へとつながり、人々の意味世界の理解に役立つかという点を考える。
授 業 計 画	第1週 1) 質的研究法とはなにか: 特長・リサーチデザイン・発展の経緯、主要系譜(エスノグラフィー、事例研究、ライフヒストリー、ライフストーリー、グラウンデッド・セオリー) 2) 質的研究を読む第2週 1) 参与観察のプロセス: データ収集からエスノグラフィー執筆まで2) 現場で生起する問題: ポジショナリティ、リフレキシビティ、ラポール、倫理的問題第3週 1) エスノグラフィーの意義と有効性2) フィールドワークの技法第4週 1) インタビューの手法: 半構造化インタビュー、ライフ・ストーリー、生活史研究2) インタビューを使った研究デザイン第5週 1) 質的研究における理論とデータの関係 2) 質的研究の「質」と評価第6週 1) コーディングから仮説生成へ: インタビューデータの分析実践2) 質的研究のプレゼンテーション第7週 グループプロジェクトの発表
授 業 の 方 法	演習形式
成 績 評 価 方 法	毎回の課題提出 40%、プロジェクト発表 20%、最終レポート 40%
教 科 書	フリック, U. 2011 『新版 質的研究入門—人間の科学のための方法論』春秋社. エマーソン, R. 1998. 『方法としてのフィールドノート—現地取材から物語作成まで』新曜社
履修上の注意・備考	積極的に議論に参加し、グループプロジェクトを実施することを求める。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-16	単 位 数	2	学 期	A2
担 当 教 員	額賀 美紗子				
授 業 科 目	比較教育学特殊研究				
講 義 題 目	グローバル時代の国際移動と教育 International Migration and Education in the Era of Globalization				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	21 世紀は「移民の時代」といわれる。グローバル化の進展によって人・モノ・情報の国境を越えた移動が加速化し、一国内の多民族化・多文化化が進む中、これまでの国民国家を前提とした教育はさまざまな挑戦をつきつけられている。本講義ではグローバリゼーションやトランスナショナリズムを背景とした移民の増加が、どのように日本の学校教育、家族、地域社会に影響を及ぼしているかという問題について、国際比較の視点から理解を深める。特に、移民の若者や子どもたちがホスト社会において直面する文化的・構造的障壁について、階層、ジェンダー、人種、エスニシティの視点を交えて考察を行う。移民生徒の教育機会と社会的包摂の課題が中心になるが、他のマイノリティ集団が経験する困難との比較視点を組み込みながら、マジョリティ中心の制度や価値観への抵抗と連帯の可能性を探る。多文化主義や批判的多文化教育の展開について学び、制度的差別、マジョリティの不可視化された権力、マイノリティのエンパワーメントと教育の関係性などのトピックについて具体的事例をもとに検討する機会を提供する。教育を通じた社会的公正の可能性と限界について議論し、多様な人々が包摂される社会のありかたを考察する。
授 業 計 画	第1回 イントロダクション:多民族化・多文化化する日本社会第2回 教育を通じた移民の子どもの包摂と排除第3回 学校に埋め込まれたマジョリティの価値観と教師のまなざし第4回 言語教育政策・実践と移民の子どもの教育機会第5回 移民家庭の文化資本と子どもの教育達成第6回 CulturallyCulturally reponsive pedagogy と反差別教育第7回 各自のプレゼンテーション
授 業 の 方 法	演習形式 1 回の授業につき、課題文献(基本的に英語・日本語の論文 1 本づつ)を読み、事前にコメントを作成して授業に参加すること。文献の内容にもとづくディスカッションを中心に授業を進める。
成 績 評 価 方 法	出席 10%、授業内課題 60%、最終レポート 30%
教 科 書	特になし
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	毎回の出席と積極的な議論への参加を求める
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-17	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	本田 由紀				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	教育社会学論文指導 Dissertation Research in Social Systems				

授 業 の 目 標・概 要	博士論文の執筆に向けて、受講学生の進捗状況を年間6回程度発表し、参加者全体からの質疑に応答する形でさらなる進展や改善の方向性および具体策を検討する。
授 業 計 画	年間にわたり毎週1回ペースで開催し、コース内の全体指導会、研究科紀要提出期限、学術雑誌投稿期限などのタイミングと個々の学生の研究の進捗を照らし合わせながら、各学生に年6回程度の報告を求め、研究成果の達成に向けて教員および参加者の全員で議論を行う。
授 業 の 方 法	各学生は事前に報告レジュメを提出し、授業においては要点を 15 分程度で発表し、45 分程度をかけて参加者からの質疑を行う。必要な場合は事前に依頼したコメンテータからのコメントも行う。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特定の教科書は用いず、各学生の研究内容に即して適切な文献を指示する。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-18	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	本田 由紀				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	教育社会学論文指導 Dissertation Research in Social Systems				

授 業 の 目 標・概 要	博士論文の執筆に向けて、受講学生の進捗状況を年間6回程度発表し、参加者全体からの質疑に応答する形でさらなる進展や改善の方向性および具体策を検討する。
授 業 計 画	年間にわたり毎週1回ペースで開催し、コース内の全体指導会、研究科紀要提出期限、学術雑誌投稿期限などのタイミングと個々の学生の研究の進捗を照らし合わせながら、各学生に年6回程度の報告を求め、研究成果の達成に向けて教員および参加者の全員で議論を行う。
授 業 の 方 法	各学生は事前に報告レジュメを提出し、授業においては要点を 15 分程度で発表し、45 分程度をかけて参加者からの質疑を行う。必要な場合は事前に依頼したコメンテータからのコメントも行う。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特定の教科書は用いず、各学生の研究内容に即して適切な文献を指示する。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コ ー ド	23-212-19	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	仁平 典宏				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	教育社会学論文指導 Dissertation Research in Sociology of Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	この授業では、修士論文、博士論文、投稿論文などに向けた研究計画や草稿を発表し、参加者の議論・検討を通して、論文の質を高めていくことを目的とする。
授 業 計 画	初回：イントロダクション各回：参加者の研究・構想発表と議論
授 業 の 方 法	受講生が研究計画や論文構想の発表を行い、参加者がそれぞれの専門性に基づいてコメントをし、議論を通してブラッシュアップを図る。
成 績 評 価 方 法	参加者の研究の進捗状況に基づいて評価を行う。
教 科 書	授業時に指示する。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	特になし。

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コ ー ド	23-212-20	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	仁平 典宏				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	教育社会学論文指導 Dissertation Research in Sociology of Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	この授業では、修士論文、博士論文、投稿論文などに向けた研究計画や草稿を発表し、参加者の議論・検討を通して、論文の質を高めていくことを目的とする。
授 業 計 画	初回：イントロダクション各回：参加者の研究・構想発表と議論
授 業 の 方 法	受講生が研究計画や論文構想の発表を行い、参加者がそれぞれの専門性に基づいてコメントをし、議論を通してブラッシュアップを図る。
成 績 評 価 方 法	参加者の研究の進捗状況に基づいて評価を行う。
教 科 書	授業時に指示する。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	特になし。

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-212-21	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	星加 良司				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	教育社会学論文指導 Dissertation Research in Sociology of Education				

授 業 の 目 標・概 要	受講者それぞれの学問的関心を拡張・深化させ、各自の論文の準備に向けて指導・支援することを目的とする。
授 業 計 画	初回に受講者の研究関心と研究計画を確認し、その後の指導計画を立てることとする。各回の授業は、受講者の研究発表と議論によって構成される。
授 業 の 方 法	受講者の研究関心や研究計画に沿って、教員及び受講者の専門性に基づいた議論により研究をブラッシュアップさせる。
成 績 評 価 方 法	受講者それぞれの研究の進捗を総合的に判断して評価する。
教 科 書	特に無し。
履修上の注意・備考	特に無し。
そ の 他	・初回ガイダンス:4/6(木) 17時-18時(赤門総合研究棟 326号室)

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-212-22	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	星加 良司				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	教育社会学論文指導 Dissertation Research in Sociology of Education				

授 業 の 目 標・概 要	受講者それぞれの学問的関心を拡張・深化させ、各自の論文の準備に向けて指導・支援することを目的とする。
授 業 計 画	初回に受講者の研究関心と研究計画を確認し、その後の指導計画を立てることとする。各回の授業は、受講者の研究発表と議論によって構成される。
授 業 の 方 法	受講者の研究関心や研究計画に沿って、教員及び受講者の専門性に基づいた議論により研究をブラッシュアップさせる。
成 績 評 価 方 法	受講者それぞれの研究の進捗を総合的に判断して評価する。
教 科 書	特に無し。
履 修 上 の 注 意・備 考	特に無し。
そ の 他	・初回ガイダンス:4/6(木) 17 時-18 時(赤門総合研究棟 326 号室)

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-212-23	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	佐藤 香				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	計量教育社会学論文指導 Dissertation Research in Mathematical Sociology of Education				

授 業 の 目 標・概 要	計量的な社会調査データをもちいて学術論文を執筆しようとしており、投稿論文の執筆や学会発表などを予定するなど、強いインセンティブをもつ学生を対象とする。教育社会学の分野で研究が蓄積されてきたテーマであれば、テーマはとくに問わないが、使用しようとしているデータが特定されているほうが望ましい。統計手法の習熟度にかかわらず履修可能であるが、SPSS等の分析パッケージに容易にアクセスできる学習環境をもっていることを条件とする。
授 業 計 画	修士1年の場合は、まず卒業論文のリライトを通して論文の書き方について指導をおこない、修士論文の研究計画について検討する。修士2年の場合は、修士論文の指導をおこない、可能であれば学会誌への投稿をおこなう。博士課程の場合は、学会発表や投稿論文など、計画的に研究をおこない、博士論文の執筆を進めるよう指導する。いずれの場合でも、それぞれが年度当初に1年間の課題を設定した研究計画を報告し、その計画に沿って研究を進めていく。
授 業 の 方 法	指導のポイントは次の5点である。1)研究テーマと分析データの整合性、2)参照すべき先行研究と知見の整理、3)分析手法の理解、4)分析結果の読み取りかた、5)問題設定に即した結論の導出。本講義ではゼミ形式を中心とする。他の学生の研究テーマに対しても興味・関心をもち、さまざまな分析手法にふれながらディスカッションをおこなうことで、各学生の研究・論文の質を向上させていく。
成 績 評 価 方 法	出席については、60%以上の出席率が望ましい。年度当初に報告した計画に沿って研究を進め、課題が達成され、さらには、その課題の質が高い場合には、高く評価される。また、他の学生の課題についてのディスカッションにおける貢献度も加味して評価する。
教 科 書	とくに指定しない。テーマや必要な分析手法に合わせて指示する。
履修上の注意・備考	規則正しく出席して、分析作業や論文執筆のリズムを作っていくことに積極的に取り組むこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-24	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	佐藤 香				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	計量教育社会学論文指導 Dissertation Research in Mathematical Sociology of Education				

授 業 の 目 標・概 要	計量的な社会調査データをもちいて学術論文を執筆しようとしており、投稿論文の執筆や学会発表などを予定するなど、強いインセンティブをもつ学生を対象とする。教育社会学の分野で研究が蓄積されてきたテーマであれば、テーマはとくに問わないが、使用しようとしているデータが特定されているほうが望ましい。統計手法の習熟度にかかわらず履修可能であるが、SPSS等の分析パッケージに容易にアクセスできる学習環境をもっていることを条件とする。
授 業 計 画	修士1年の場合は、まず卒業論文のリライトを通して論文の書き方について指導をおこない、修士論文の研究計画について検討する。修士2年の場合は、修士論文の指導をおこない、可能であれば学会誌への投稿をおこなう。博士課程の場合は、学会発表や投稿論文など、計画的に研究をおこない、博士論文の執筆を進めるよう指導する。いずれの場合でも、それぞれが年度当初に1年間の課題を設定した研究計画を報告し、その計画に沿って研究を進めていく。
授 業 の 方 法	指導のポイントは次の5点である。1)研究テーマと分析データの整合性、2)参照すべき先行研究と知見の整理、3)分析手法の理解、4)分析結果の読み取りかた、5)問題設定に即した結論の導出。本講義ではゼミ形式を中心とする。他の学生の研究テーマに対しても興味・関心をもち、さまざまな分析手法にふれながらディスカッションをおこなうことで、各学生の研究・論文の質を向上させていく。
成 績 評 価 方 法	出席については、60%以上の出席率が望ましい。年度当初に報告した計画に沿って研究を進め、課題が達成され、さらには、その課題の質が高い場合には、高く評価される。また、他の学生の課題についてのディスカッションにおける貢献度も加味して評価する。
教 科 書	とくに指定しない。テーマや必要な分析手法に合わせて指示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	規則正しく出席して、分析作業や論文執筆のリズムを作っていくことに積極的に取り組むこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-25	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	三 輪 哲				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	計量教育社会学論文指導 Dissertation Research in Quantitative Sociology of Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	この授業は、計量的なアプローチに基づく社会学研究をおこない、論文執筆をしようとしている者を指導・支援することを目的とする。受講者の関心・レベル・進捗に応じ、必要な指導をおこなうことで、各々の論文執筆の技量向上と、研究成果の創出をめざす。
授 業 計 画	初回授業時に、受講者ごとに目標設定をし、それを達成するように計画を組むことになる。受講者の人数と関心、要望に応じ、柔軟に対応しつつ進行する。
授 業 の 方 法	受講者の発表と、討論・議論による。必要に応じ、ミニ講義をしたり、個別指導をおこなうこともある。
成 績 評 価 方 法	発表の質、議論への貢献、目標達成の度合いを総合的に評価する。
教 科 書	特に使用しない。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	原則として、担当教員を指導教員とした大学院生を対象とする。それ以外で受講意向がある者は、事前に担当教員までメール(miwa@iss.u-tokyo.ac.jp)で連絡すること。
そ の 他	受講者は、他者の研究にも関心をもつこと。学年、テーマ、データ、使用統計ソフトウェアなどは、特に問わない。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-26	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	三 輪 哲				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	計量教育社会学論文指導 Dissertation Research in Quantitative Sociology of Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	この授業は、計量的なアプローチに基づく社会学研究をおこない、論文執筆をしようとしている者を指導・支援することを目的とする。受講者の関心・レベル・進捗に応じ、必要な指導をおこなうことで、各々の論文執筆の技量向上と、研究成果の創出をめざす。
授 業 計 画	初回授業時に、受講者ごとに目標設定をし、それを達成するように計画を組むことになる。受講者の人数と関心、要望に応じ、柔軟に対応しつつ進行する。
授 業 の 方 法	受講者の発表と、討論・議論による。必要に応じ、ミニ講義をしたり、個別指導をおこなうこともある。
成 績 評 価 方 法	発表の質、議論への貢献、目標達成の度合いを総合的に評価する。
教 科 書	特に使用しない。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	原則として、担当教員を指導教員とした大学院生を対象とする。それ以外で受講意向がある者は、事前に担当教員までメール(miwa@iss.u-tokyo.ac.jp)で連絡すること。
そ の 他	受講者は、他者の研究にも関心をもつこと。学年、テーマ、データ、使用統計ソフトウェアなどは、特に問わない。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-27	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	石田 賢示				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	計量教育社会学論文指導 Dissertation Research in Quantitative Sociology of Education				

授 業 の 目 標・概 要	教育社会学あるいは関連する社会科学分野において、独自に計量分析に関する研究論文を執筆できるようになることが主たる目的である。1年間で、受講者各自が目標を定め、研究内容について参加者のあいだで議論する。目標として、学会報告、ディスカッションペーパー、学位論文のチャプター、投稿論文など幅広いアウトプットを許容するが、履修者にはフルペーパーの提出を要件とする。社会科学の問題関心は多様化している。近年は複数のタイプの方法論を組み合わせる問題にアプローチする混合研究法への関心も高まっており、専門的な学術誌も社会科学のトップジャーナルのなかに存在する。本授業では、計量分析を中心とする者だけでなく、自身の研究に何らかの形で計量分析を活用しようと試みる者も歓迎する。授業を通じ、必要に応じて重要文献の解題や分析手法の解説の時間を設ける可能性もある。具体的な内容は、受講者の関心とスケジュールを加味して決定する。
授 業 計 画	初回授業時に受講者の目標、意向を確認し、その内容に沿ってスケジュールを立てる。
授 業 の 方 法	受講者の発表と、その内容に対する議論を基本とする。必要に応じ、研究に関する個別相談もおこなう。
成 績 評 価 方 法	発表内容、議論への貢献、提出したフルペーパーの内容をもとに評価する。発表やフルペーパーの評価については、1年間で複数回報告を求めるため、内容の改善度合いを特に注視する。議論への貢献については、他の参加者に対する建設的なコメントを高く評価する。
教 科 書	特に使用しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	第1回授業開始までに、ishidak@iss.u-tokyo.ac.jp(講師の社会科学研究所のメールアドレス)まで受講希望の旨をメールで連絡すること。受講希望者の意見もふまえて、受講形式に関する詳細を連絡する。一般的な計量分析手法やその考え方、ソフトウェアの使用法に関する授業ではないので、必要な者は適宜対応する授業科目を履修、または自学自習すること。教育学研究科以外の大学院生、学部生の参加も歓迎するが、単位取得にはならないことに留意されたい。
そ の 他	発表資料やフルペーパーの言語は日本語、英語いずれでもかまわないが、参加者相互の議論をスムーズにおこなうため、プレゼンテーションや議論は日本語でおこなう。ただし、英語での発表と議論を除外するわけではないので、希望する場合は積極的に臨んでほしい。多様な研究関心を歓迎するが、特に研究トピックの具体的・実質的内容についての詳細なコメント、相談を希望している場合は、講師の研究分野を考慮したうえで受講の可否を自身で判断すること。講師の researchmap などを参照してほしい(https://researchmap).

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-28	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	石田 賢示				
授 業 科 目	教育社会学論文指導				
講 義 題 目	計量教育社会学論文指導 Dissertation Research in Quantitative Sociology of Education				

授 業 の 目 標・概 要	教育社会学あるいは関連する社会科学分野において、独自に計量分析に関する研究論文を執筆できるようになることが主たる目的である。1年間で、受講者各自が目標を定め、研究内容について参加者のあいだで議論する。目標として、学会報告、ディスカッションペーパー、学位論文のチャプター、投稿論文など幅広いアウトプットを許容するが、履修者にはフルペーパーの提出を要件とする。社会科学の問題関心は多様化している。近年は複数のタイプの方法論を組み合わせる問題にアプローチする混合研究法への関心も高まっており、専門的な学術誌も社会科学のトップジャーナルのなかに存在する。本授業では、計量分析を中心とする者だけでなく、自身の研究に何らかの形で計量分析を活用しようと試みる者も歓迎する。授業を通じ、必要に応じて重要文献の解題や分析手法の解説の時間を設ける可能性もある。具体的な内容は、受講者の関心とスケジュールを加味して決定する。
授 業 計 画	初回授業時に受講者の目標、意向を確認し、その内容に沿ってスケジュールを立てる。
授 業 の 方 法	受講者の発表と、その内容に対する議論を基本とする。必要に応じ、研究に関する個別相談もおこなう。
成 績 評 価 方 法	発表内容、議論への貢献、提出したフルペーパーの内容をもとに評価する。発表やフルペーパーの評価については、1年間で複数回報告を求めるため、内容の改善度合いを特に注視する。議論への貢献については、他の参加者に対する建設的なコメントを高く評価する。
教 科 書	特に使用しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	第1回授業開始までに、ishidak@iss.u-tokyo.ac.jp(講師の社会科学研究所のメールアドレス)まで受講希望の旨をメールで連絡すること。受講希望者の意見もふまえて、受講形式に関する詳細を連絡する。一般的な計量分析手法やその考え方、ソフトウェアの使用法に関する授業ではないので、必要な者は適宜対応する授業科目を履修、または自学自習すること。教育学研究科以外の大学院生、学部生の参加も歓迎するが、単位取得にはならないことに留意されたい。
そ の 他	発表資料やフルペーパーの言語は日本語、英語いずれでもかまわないが、参加者相互の議論をスムーズにおこなうため、プレゼンテーションや議論は日本語でおこなう。ただし、英語での発表と議論を除外するわけではないので、希望する場合は積極的に臨んでほしい。多様な研究関心を歓迎するが、特に研究トピックの具体的・実質的内容についての詳細なコメント、相談を希望している場合は、講師の研究分野を考慮したうえで受講の可否を自身で判断すること。講師の researchmap などを参照してほしい(https://researchmap).

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-29	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	多喜 弘文				
授 業 科 目	高等教育論論文指導				
講 義 題 目	高等教育論論文指導 Dissertation Research in Higher Education				

授 業 の 目 標・概 要	教育社会学・機会の不平等・高等教育に関わる様々なテーマにおいて、学位論文や研究論文の執筆を予定している大学院生を対象に論文指導を行う。
授 業 計 画	初回授業時に、受講者の研究テーマや問題関心を確認し、受講人数なども考慮に入れて授業計画を組む。研究発表とそれについての教員および受講者全員による議論を通じ、受講者がそれぞれの目標に向けて研究の質を高めていくことを目指す。
授 業 の 方 法	受講者による発表とそれについての議論を主体とする。必要に応じて実習形式のデータ分析や個別指導を行う。
成 績 評 価 方 法	発表の質、討論への積極的な参加・貢献を総合的に評価する。
教 科 書	指定しない。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-212-30	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	多喜 弘文				
授 業 科 目	高等教育論論文指導				
講 義 題 目	高等教育論論文指導 Dissertation Research in Higher Education				

授 業 の 目 標・概 要	教育社会学・機会の不平等・高等教育に関わる様々なテーマにおいて、学位論文や研究論文の執筆を予定している大学院生を対象に論文指導を行う。
授 業 計 画	初回授業時に、受講者の研究テーマや問題関心を確認し、受講人数なども考慮に入れて授業計画を組む。研究発表とそれについての教員および受講者全員による議論を通じ、受講者がそれぞれの目標に向けて研究の質を高めていくことを目指す。
授 業 の 方 法	受講者による発表とそれについての議論を主体とする。必要に応じて実習形式のデータ分析や個別指導を行う。
成 績 評 価 方 法	発表の質、討論への積極的な参加・貢献を総合的に評価する。
教 科 書	指定しない。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-31	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	橋本 鉦市				
授 業 科 目	高等教育論論文指導				
講 義 題 目	高等教育論論文指導 Dissertation Research in Higher Education				

授 業 の 目 標・概 要	(歴史)社会学的なアプローチに関する高等教育(政策)研究について、受講生各自の研究テーマにそって、史資料や各種データの収集・分析、実証的な学術論文の計画・執筆・評価ができるように指導を行う。
授 業 計 画	大学を中心とする高等教育制度の下で、その制度、組織、政策、法制、学問、文化、思想、構成員(学生・教員など)に関して、歴史社会学的なアプローチを中心とした方法論を学修しつつ、各種学術誌への投稿論文、修士論文等について、受講生の問題関心と選好するアプローチに即して、論文の準備・計画・執筆ができるように指導を行なう。
授 業 の 方 法	受講生個人の進捗状況に合わせた個人指導と、受講生全員が参加する橋本研究室全体での集団指導を平行して行う。
成 績 評 価 方 法	受講者各自の論文投稿のスケジュール、締め切りなどを考慮しつつ、それぞれの論文執筆の達成度合いに応じて、研究状況と研究成果によって評価を行う。
教 科 書	指定なし
履 修 上 の 注 意・備 考	本演習は、基本的に橋本を指導教員とする受講生に対して開講するものである。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-32	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	橋本 鉦市				
授 業 科 目	高等教育論論文指導				
講 義 題 目	高等教育論論文指導 Dissertation Research in Higher Education				

授 業 の 目 標・概 要	(歴史)社会学的なアプローチに関する高等教育(政策)研究について、受講生各自の研究テーマにそって、史資料や各種データの収集・分析、実証的な学術論文の計画・執筆・評価ができるように指導を行う。
授 業 計 画	大学を中心とする高等教育制度の下で、その制度、組織、政策、法制、学問、文化、思想、構成員(学生・教員など)に関して、歴史社会学的なアプローチを中心とした方法論を学修しつつ、各種学術誌への投稿論文、博士論文等について、受講生の問題関心と選好するアプローチに即して、論文の準備・計画・執筆ができるように指導を行なう。
授 業 の 方 法	受講生個人の進捗状況に合わせた個人指導と、受講生全員が参加する橋本研究室全体での集団指導を平行して行う。
成 績 評 価 方 法	受講者各自の論文投稿のスケジュール、締め切りなどを考慮しつつ、それぞれの論文執筆の達成度合いに応じて、研究状況と研究成果によって評価を行う。
教 科 書	指定なし
履 修 上 の 注 意・備 考	本演習は、基本的に橋本を指導教員とする受講生に対して開講するものである。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-33	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	中村 高康				
授 業 科 目	比較教育システム論論文指導				
講 義 題 目	比較教育システム論論文指導 Dissertation Research in Educational Systems				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育社会学・比較教育システム論に関わる様々なテーマにおいて研究論文の執筆を予定している大学院生を対象として論文指導を行う。
授 業 計 画	参加者の人数および問題関心に応じて、臨機応変に受講者と相談しながら進める。
授 業 の 方 法	発表・討論形式を主体とする。時に応じて個別指導を行う。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特に指定しない。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-212-34	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	中村 高康				
授 業 科 目	比較教育システム論論文指導				
講 義 題 目	比較教育システム論論文指導 Dissertation Research in Educational Systems				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育社会学・比較教育システム論に関わる様々なテーマにおいて研究論文の執筆を予定している大学院生を対象として論文指導を行う。
授 業 計 画	参加者の人数および問題関心に応じて、臨機応変に受講者と相談しながら進める。
授 業 の 方 法	発表・討論形式を主体とする。時に応じて個別指導を行う。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特に指定しない。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-212-35	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	額賀 美紗子				
授 業 科 目	比較教育学論文指導				
講 義 題 目	比較教育学論文指導 Dissertation Research in Comparative Education				

授 業 の 目 標・概 要	比較教育学、異文化間教育学、国際社会学の領域で研究を行うことを検討している修士課程の学生に対して指導を行う。上記研究領域の主テーマに関する知識を深めるとともに、リサーチデザインの設計、先行研究レビュー、フィールドワークとインタビューを中心とする質的方法論、データ分析、論文の執筆など研究に必要な基本的スキルを履修者が獲得することを目標とする。
授 業 計 画	スケジュールは履修者の学年や人数によって調整するため、第一回目のオリエンテーションで指示する。
授 業 の 方 法	毎週開催のゼミでの個人発表と議論に加えて、適宜個別指導を組み合わせる。
成 績 評 価 方 法	各自の研究の進捗状況に応じてゼミ出席、個人発表、論文執筆などから総合的に評価する。
教 科 書	特に指定しない
履修上の注意・備考	毎回のゼミ出席と数回の研究報告を求める
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-212-36	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	額賀 美紗子				
授 業 科 目	比較教育学論文指導				
講 義 題 目	比較教育学論文指導 Dissertation Research in Comparative Education				

授 業 の 目 標・概 要	比較教育学、異文化間教育学、国際社会学の領域で研究を行うことを検討している博士課程の学生に対して指導を行う。上記研究領域の主テーマに関する知識を深めるとともに、リサーチデザインの設計、先行研究レビュー、フィールドワークとインタビューを中心とする質的方法論、データ分析、論文の執筆など研究に必要な基本的スキルを履修者が獲得することを目標とする。
授 業 計 画	スケジュールは履修者の学年や人数によって調整するため、第一回目のオリエンテーションで指示する。
授 業 の 方 法	毎週開催のゼミでの個人発表と議論に加えて、適宜個別指導を組み合わせる。
成 績 評 価 方 法	各自の研究の進捗状況に応じてゼミ出席、個人発表、論文執筆などから総合的に評価する。
教 科 書	特に指定しない
履修上の注意・備考	毎回のゼミ出席と数回の研究報告を求める
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-212-37	単 位 数	2	学 期	通年
担 当 教 員	恒吉 僚子				
授 業 科 目	比較教育学論文指導				
講 義 題 目	比較教育学論文指導 Dissertation Research in Comparative Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	論文の完成に向けた指導
授 業 計 画	毎回各自の論文を発表し、議論、コメントし、改善する
授 業 の 方 法	発表、議論。
成 績 評 価 方 法	額賀ゼミと合同。
教 科 書	なし。
履修上の注意・備考	額賀ゼミと合同。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他大学生(特別聴講学生等)	履修 不可

時 間 割 コ ー ド	23-212-38	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	恒吉 僚子				
授 業 科 目	比較教育学論文指導				
講 義 題 目	比較教育学論文指導 Dissertation Research in Comparative Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	論文の完成に向けた指導
授 業 計 画	毎回各自の論文を発表し、議論、コメントし、改善する
授 業 の 方 法	発表、議論。
成 績 評 価 方 法	額賀ゼミと合同。
教 科 書	なし。
履修上の注意・備考	額賀ゼミと合同。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-213-01	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	牧野 篤				
授 業 科 目	生涯学習論基本研究				
講 義 題 目	生涯学習論基本研究 I Theory of Lifelong Learning I				

授 業 の 目 標・概 要	社会教育学・生涯学習論を学び、研究するための、院生各自の基本的な視点・研究の枠組み・方法論を形成するための基礎的な訓練とその発展を、文献の講読と検討およびフィールド調査によって、集団的に進める。ただし、コロナ禍の影響もあり、フィールド調査ができない可能性も高いため、基本的には文献講読とする。今年度は昨年度に引き続き「社会基盤としての社会教育再考」を大きなテーマにとりあげる。文献研究の中心テーマは「社会教育のとらえ返し」とし、戦後に構想され、急速に社会に普及した社会教育・生涯学習の理念や機能に対して、どのような議論がなされ、それがどのような社会的な要請を背景にしていたのか、その結果、社会教育や生涯学習の概念はどのように変容したのか、そしてそれはどう実践されてきていて、それを今度どう実践していくべきなのかをとらえ、社会教育・生涯学習の実践のあり方への理解を通して、教育・学習という営みと社会とのかかわりを理解する。臨時教育審議会の資料なども活用する。
授 業 計 画	社会教育学・生涯学習論を学び、研究するための基本的な「構え」の形成とその展開を促すために、社会教育学・生涯学習論とくに公民館に関する古典的な文献とともに、最新の研究成果をレビューする。さらに、フィールド調査を重ねることで、その応用を学ぶとともに、院生各自の基本的な研究の視点と枠組みを発展させることを支援する。調査報告書を作成することで、研究論文の書き方などを習得する。フィールド調査などを行いたい、コロナ禍の状況下でもあるので、基本的に文献講読を中心に進める。基本的に対面開講とするが、コロナ禍の状況によっては対面・オンラインの併用、またはオンライン開講へと切り換える。リンクは、UTAS および ITC-LMS 上に記載する。また、対面参加に不安を感じる受講者には、オンラインでの参加を認めるので、事前に連絡すること。
授 業 の 方 法	基本的に演習形式をとり、グループ討議を通して、各自の研究の視点と枠組みを発展させる。また、研究論文の書き方などを習得するとともに、研究成果の地域社会への還元のあるあり方を体得する。対面での開講が困難だと判断した場合は、基本的にオンライン開講とする。リンクは、後ほど、UTAS および ITC-LMS 上で連絡する。
成 績 評 価 方 法	授業への参加と討議にもとづいて評価する。
教 科 書	牧野篤『発達する自己の虚構—教育を可能とする概念をとらえ返し』(東京大学出版会、2021 年)を基本的テキストとして使用する。各自準備しておくこと。
履 修 上 の 注 意・備 考	社会教育学・生涯学習論の研究と地域社会への調査に対する強い関心、とくに人と触れ合うことで学ぶ自分をとらえようとする「構え」をもって、授業に臨んで欲しい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-213-02	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	影浦 峯				
授 業 科 目	図書館情報学基本研究				
講 義 題 目	図書館情報学研究方法論 Research Methods of Library and Information Science				

授 業 の 目 標・概 要	図書館情報学研究に関連する具体的な方法論を身につける。対人調査方法論、文献研究方法論、計量研究方法論等、方法論の観点から、および、翻訳研究、図書館研究、知識基盤研究といったテーマの観点から、学生の関心を考慮し、参加者の状況に応じて重点的な学習対象を決める。
授 業 計 画	第1回：概要紹介と参加者のグループ化第2回：研究テーマ提案・議論・研究テーマのとりまとめと分担者配分第3回～第12回：課題に対応した方法論の検討と議論第13回：課題の取りまとめと研究方法論の総合的なまとめ
授 業 の 方 法	授業初回に参加者を3つのグループにわけ、研究テーマを提出する。それぞれに対して、重要性、実現可能性、アプローチ、スケジュールなどを議論しながら、取り上げるテーマを確定し、そのテーマにそって毎週持ち帰りの課題を実行し、実行した課題に基づいて理論的枠組み、方法論、解釈、論文執筆法の各層にわたる議論を行なう。
成 績 評 価 方 法	授業への参加度と貢献度に基づき評価する。
教 科 書	特に指定しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	特になし。
そ の 他	対面・オンラインは感染状況を踏まえ、通勤通学、検査体制といった社会的対応の状況を考慮した安全性評価に基づき授業開始までに判断する。安全性評価は定期的に行い、途中での切り替えも考える。ただし、いずれの場合でも個別事情に応じた学生のオンライン参加を許容する。グループ単位で持ち帰り課題を課すので、個人的な準備だけでなく、グループでのディスカッション力も重要となる。また、データ処理や統計の基礎を知らない学生は、学部の授業夏学期の情報・資料分析論演習を履修しておくことが望ましい。ただし、履修学生の関心等に応じて、内

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-213-03	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	影浦 峯				
授 業 科 目	図書館情報学基本研究				
講 義 題 目	図書館情報学総合研究 Topics in Library and Information Science				

授 業 の 目 標・概 要	大学院生の修士論文・博士論文のテーマを中心に、図書館情報学の重要課題について、全員で議論し、研究方法や内容について相互理解を深める。
授 業 計 画	第 1 回 全体の調整とスケジュールリング第 2 回 研究計画・テーマ発表(2名)第3回 研究計画・テーマ発表(2名)第 4 回 研究計画・テーマ発表(2名)第 5 回 研究計画・テーマ発表(2名)第 6 回 研究計画・テーマ発表(2名)第 7 回 研究計画・テーマ発表(2名)第 8 回 研究計画・テーマ発表(2名)第 9 回 研究計画・テーマ発表(2名)第 10 回 研究計画・テーマ発表(2名)第 11 回 研究計画・テーマ発表(2名)第 12 回 修士論文検討会第 13 回 研究計画・テーマ発表(2名)第 14 回 研究計画・テーマ発表(2名)
授 業 の 方 法	参加者の発表と討論を中心とする。
成 績 評 価 方 法	平常点。
教 科 書	使わない。
履 修 上 の 注 意・備 考	図書館情報学研究室の大学院生は全員必修とする。
そ の 他	対面・オンラインは感染状況を踏まえ、通勤通学、検査体制といった社会的対応の状況を考慮した安全性評価に基づき授業開始までに判断する。安全性評価は定期的に行い、途中での切り替えも考える。ただし、いずれの場合でも個別事情に応じた学生のオンライン参加を許容する。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-213-04	単 位 数	2	学 期	A1
担 当 教 員	李 正 連				
授 業 科 目	生涯学習論特殊研究				
講 義 題 目	生涯学習論特殊研究 I Seminar in Lifelong Learning I				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	社会教育学・生涯学習論を学び、研究するための、院生各自の基本的な視点・研究の枠組み・方法論を形成するための基礎的な訓練とその発展を、文献の講読と検討およびフィールド調査によって、集団的に進める。
授 業 計 画	社会教育学・生涯学習論を学び、研究するための基本的な「構え」の形成とその展開を促すために、社会教育学・生涯学習論に関する古典的な文献とともに、最新の研究成果をレビューする。
授 業 の 方 法	基本的に演習形式をとる。各自の研究の視点と枠組みを、集団的な討議と検討を通して、発展させる。
成 績 評 価 方 法	授業への参加と討議にもとづいて評価する。
教 科 書	各テーマに応じて指定する。
履修上の注意・備考	社会教育学・生涯学習論の研究と地域社会への調査に対する強い関心、とくに人と触れ合うことで学ぶ自分をとらえようとする「構え」をもって、授業に臨んで欲しい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コ ー ド	23-213-05	単 位 数	2	学 期	A2
担 当 教 員	新藤 浩伸				
授 業 科 目	生涯学習論特殊研究				
講 義 題 目	生涯学習論特殊研究Ⅱ Seminar in Lifelong LearningⅡ				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	文献講読を通じて、文化の変革・創造と生涯学習の関係について考える。
授 業 計 画	文献講読を中心に進める。
授 業 の 方 法	演習形式による。初回オリエンテーションに参加すること。対面を予定するが、感染症の動向などによりオンラインとする場合がある。
成 績 評 価 方 法	出席、報告、討議への参加から総合的に判断する。
教 科 書	後日指示する。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-213-06	単 位 数	2	学 期	S2
担 当 教 員	大高 研道				
授 業 科 目	社会教育学特殊研究				
講 義 題 目	排除型社会におけるコミュニティ、労働、学習 Community, Work, and Learning in the Exclusive Society				

授 業 の 目 標・概 要	本講義では、現代社会の基本的特質を「排除型社会」として捉え、それらに対処するキー概念として注目されている「コミュニティ」の姿および再編の方向性の検討を通して、学ぶことの意味について考えたい。人間生活は他者との関係性なしでは成り立たない。災害時や高齢化社会における助け合いを想起するまでもなく、そもそも「生きる」とこと自体がさまざまな営みの連関の中で成立している。反面、生活の個別化とともに人間関係が希薄化し、地域社会の衰退・崩壊は加速度的に進行している。講義では、今日の競争社会によって失われつつある他者との関係性や人間性を回復させる砦としてあらためて注目されている「コミュニティ」の現代的な形およびそれらと密接な関連をもつ労働や学習のあり方について、労働者協同組合（ワーカーズコープ）の実践紹介などを交えながら検討したい。
授 業 計 画	本講義は「第Ⅰ部 社会的排除（第2回～6回）」「第Ⅱ部 排除型社会への対抗戦略（第7回～10回）」「第Ⅲ部 地域学習を基盤とした知の創造過程（第11～14回）」からなる。第1回：イントロダクション第2回：コロナ禍と社会一命と暮らしを守る社会を取り戻す第3回：社会的排除とは何か第4回：社会的排除と格差社会論争第5回：社会的排除とリスク社会第6回：社会的排除と貧困概念第7回：排除型社会とコミュニティ第8回：排除型社会における共同・協同・協働第9回：社会的排除と闘う社会的企業－ワーカーズコープと協同労働第10回：協同労働が切り拓く未来第11回目 地域学習を基盤とした知の創造過程第12回目 協同労働の社会化と学び合うコミュニティ第13回目 学びの主体から当事者へ第14回目 総括討論とまとめ
授 業 の 方 法	基礎知識に関する座学、文献講読に基づいたディスカッションおよび個別論題報告からなる。具体的な文献および進め方は初回授業時に履修者と相談の上、決定する。
成 績 評 価 方 法	平常点（授業への参加度、報告・発表内容等）70%、レポート 30%
教 科 書	履修者の研究テーマ・関心が共有できた段階で、履修者と相談のうえテキストを決定する。
履 修 上 の 注 意・備 考	対面実施
そ の 他	本講義は、近代社会の矛盾をベースとした現代社会構造への批判的・創造的検討と、そこで求められる実践コミュニティへの学習論的アプローチの模索が主題となる。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-213-07	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	安田 節之				
授 業 科 目	社会教育学特殊研究				
講 義 題 目	プログラム評価論 Theory and Methods of Evaluating Programs				

授 業 の 目 標・概 要	教育機関や企業組織そして地域コミュニティには、対人援助・人材育成・組織開発・地域活性化などを目的とした多種多様な実践活動が存在する。これらの実践・介入活動に対して説明責任や科学的根拠(エビデンス)が求められる時代となっている。本授業では、様々な実践・介入活動をプログラムとして客観的に捉え、その結果や効果を評価し、活動の質向上につなげるための方法論を学ぶ。プログラムの価値は、経済的指標などで捉えることが困難な個人や集団に対する教育的・心理的効果として現れることが多いため、社会調査・実験心理学・心理測定といった方法論との親和性が高い。この授業では、プログラムを客観化・可視化する手順をまず習得したうえで、具体例を通してプログラムを実証的に評価するための方法を学ぶ。
授 業 計 画	1. イントロダクション2. プログラム評価の目的と評価者・ステークホルダー3. プログラムニーズの種類とアセスメントの方法4. ゴールの明確化5. インパクト理論6. ロジックモデル7. 個人・グループ発表8. 評価可能性アセスメントと評価クエスチョン9. アウトカム評価の概要と評価指標の作成10. 実験・準実験デザインによるアウトカム評価11. プログラムの導入(インプリメンテーション)評価とプロセス評価12. 評価アプローチ①(社会科学・理論主導、他)13. 評価アプローチ②(実用重視・エンパワメント、他)14. 評価報告書・技術報告書(テクニカルレポート)の内容と作成方法 15. 総 括
授 業 の 方 法	講義、ディスカッション、演習(個人・グループワーク)を中心に行う。
成 績 評 価 方 法	レポート30%、評価計画書(グループまたは個人)40%、授業参加状況(発言・発表)30%
教 科 書	安田節之『プログラム評価:対人・コミュニティ援助の質を高めるために(ワードマップ)』新曜社, 2011 年
履修上の注意・備考	■授業は夏季休業中の集中講義期間に実施します。■すでに携わっている実践・介入活動やプログラムがあることが望ましいです。■教科書『プログラム評価:対人・コミュニティ援助の質を高めるために(ワードマップ)』(安田節之, 新曜社, 2011 年)は事前の一読しておいてください。授業時に本の内容を踏まえたディスカッションを行います。※新型コロナウィルスの状況に応じて授業方法(オンライン/対面)の調整をします。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-213-08	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	宮田 玲				
授 業 科 目	図書館情報学特殊研究				
講 義 題 目	情報媒体構造論 Study of the Structure of Information Media				

授 業 の 目 標・概 要	知識媒体の構造について、言語表現から図書の構成までのいずれかのレベルに着目し、知識の展開・記録・伝達・流通を可能にしてきた基盤をめぐる問いの領域を理解するとともに、それに対する研究の広がり理解する。今年度は特に言語表現と文書のテクノロジーを中心に扱う予定である。
授 業 計 画	初回に全体の領域を概説する。第 2 回以降は、『数学書の読みかた』（竹山美宏著、森北出版）をテキストに、適宜、人文社会系から数理系までの文章を観察し、記述し、診断し、「読む」ことを通して、そもそも「読む」というときに人が行っているのはどのようなことか、それらはおおよそ「読む」と呼ばれるべき基準を満たしているのか、満たしていないとするとどうすればよいのかといったことを検討しつつ、媒体に接することを対象化する。
授 業 の 方 法	講義 1 割、発表 4 割、ディスカッション 5 割で行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加度、作業の達成度と、小テストを考慮した総合評価。
教 科 書	教科書及び参照資料は授業時に紹介する。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-213-09	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	河村 俊太郎				
授 業 科 目	図書館情報学特殊研究				
講 義 題 目	図書館情報学理論研究 Theory of Library and Information Studies				

授 業 の 目 標・概 要	図書館、図書館情報学に関わる英語または日本語の文献を輪読する。輪読を通じて、文献の読み方、そして基本的な概念や歴史などについても学んで行く。
授 業 計 画	1 オリエンテーション2-12 テクストの輪読13 まとめ
授 業 の 方 法	テキストの訳読担当者を毎回事前に指定し、輪読を行う。担当者が担当部分を発表した後、参加者による討議や講評を行う。
成 績 評 価 方 法	発表内容及び授業への参加の度合いによって評価する。
教 科 書	デービス・ベアード『物のかたちをした知識 -実験機器の哲学-』（青土社，2005）[Davis Baird "Thing Knowledge -A Philosophy of Scientific Instruments-" (University of California Press, 2004)], Geoffrey C. Bowker, Susan Leigh Star "Sorting Things Out -Classification and its Consequence-" (MIT Press, 1999)や図書館情報学関連分野の博士論文を元に書籍化した図書などの中から受講者と購読するものを選択する。
履 修 上 の 注 意・備 考	とくになし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-213-10	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	池内 淳				
授 業 科 目	図書館情報学特殊研究				
講 義 題 目	図書館情報学特別講義 Library and information Science Special Lecture				

授 業 の 目 標・概 要	現代の図書館に関する諸問題を取り上げディスカッションを行う。
授 業 計 画	第 1 回:ガイダンス第 2 回:現代における図書館の諸問題(1)第 3 回:現代における図書館の諸問題(2)第 4 回:現代における図書館の諸問題(3)第 5 回:現代における図書館の諸問題(4)第 6 回:現代における図書館の諸問題(5)第 7 回:現代における図書館の諸問題(6)第 8 回:現代における図書館の諸問題(7)第 9 回:プレゼンテーションとディスカッション(1)第 10 回:プレゼンテーションとディスカッション(2)第 11 回:プレゼンテーションとディスカッション(3)第 12 回:プレゼンテーションとディスカッション(4)第 13 回:プレゼンテーションとディスカッション(5)第 14 回:プレゼンテーションとディスカッション(6)第 15 回:プレゼンテーションとディスカッション(7)
授 業 の 方 法	担当教員による講義のほか、受講生によるプレゼンテーションとディスカッションを行う。
成 績 評 価 方 法	プレゼンテーションと課題によって評価する。
教 科 書	教科書はとくに用いない。
履修上の注意・備考	とくになし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他大学生(特別聴講学生等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-213-11	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	未定				
授 業 科 目	図書館情報学特殊研究				
講 義 題 目	分類科学特論 Philosophy and Practice of Classification in Science				

授 業 の 目 標・概 要	図書館情報学の大きな課題の一つは、図書やトピックを分類する方法を確立・整備することである。そのためには「分類すること」一般についての理解が役に立つときがある。本科目では、科学における分類、特に生物分類学をめぐって交わされてきた科学的・哲学的議論を概観し、受講者に「分類すること」についてもう一つの視点を提供することを目指す。One of the important goals of Library and Information Science is to develop the methodology of book and subject classification. An understanding of classification in general could help us to achieve this goal. This course provides a general overview of the philosophical and scientific discussion on classification in various scientific fields. After taking this course, students will be able to understand the nature of classification and apply it to the development of their own research project. (Note: This course is delivered in Japanese)
授 業 計 画	1 イントロダクション・生物分類学の実践(1)2 生物分類学の実践(2)3 分類の人類学 4 分類の心理学 5 生物分類学の歴史(1): アリストテレスからリンネへ 6 生物分類学の歴史(2): ダーウィンから第二次大戦後へ 7 分類と図像的表現 8 種問題(1): 概観 9 種問題(2): 生物分類の形而上学 10 種問題(3): 定義の役割 11 分類における理論と観察の役割 12 科学における分類の役割 13 分類の目的
授 業 の 方 法	講義およびディスカッション
成 績 評 価 方 法	授業参加(20%)、レポート(80%)
教 科 書	指定しない
履修上の注意・備考	-この科目では科学における分類について紹介し議論しますが、図書館情報学における分類そのものについての知識は提供しません。従って受講者に当たっては、自らの図書館情報学の知識・関心と授業内容を交差させる姿勢が望ましい。-授業内容を変更する際は授業内で告知します。This course is delivered in Japanese.
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-213-12	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	牧野 篤				
授 業 科 目	生涯学習論論文指導				
講 義 題 目	生涯学習論論文指導 Dissertation Research in Lifelong Learning				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	博士論文・修士論文をはじめとして、社会教育・生涯学習関連の研究論文を作成するための、研究方法論検討及び執筆の指導を行う。受講者による研究発表と相互の議論を通して、また先行研究の検討を通して、オリジナリティある論文執筆のあり方について考える。必要に応じて、個人指導・ゲストを囲む合評会などを考えたい。
授 業 計 画	院生諸君の必要に応じることを基本として、論文作成支援・論文作成指導を行う。個別指導と集団的な検討・討議を通して、各自が研究方法論を鍛えるとともに、論文作成へのモチベーションを高め、維持しつつ、質の高い論文とはどういうものであるのかというイメージを作り上げる支援を行う。とくに社会教育学・生涯学習論は、研究対象が広く、特定の研究方法に依拠して研究を進めることができないため、研究の課題意識や対象によって研究方法をつくり、また組み換える必要がある。特に近年、研究の設計において、起点となるべき「なぜ」が問われず、「何を」から着手する傾向が強くなっているが、研究を深めるためにも「なぜ」という問いを設定することの重要性を認識して欲しい。院生それぞれの研究に即して、検討を進める。
授 業 の 方 法	個別指導と集団での議論・討論を組み合わせ、必要に応じて学外の専門家を招いてのトークセッションなどを行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加と討議にもとづいて評価する。
教 科 書	必要に応じて適宜紹介する。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	博士院生として、自らの研究課題を大事にしながら、自分の研究の方向性をつくるよう、努力して欲しい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-213-13	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	牧野 篤				
授 業 科 目	生涯学習論論文指導				
講 義 題 目	生涯学習論論文指導 Dissertation Research in Lifelong Learning				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	博士論文・修士論文をはじめとして、社会教育・生涯学習関連の研究論文を作成するための、研究方法論検討及び執筆の指導を行う。受講者による研究発表と相互の議論を通して、また先行研究の検討を通して、オリジナリティある論文執筆のあり方について考える。必要に応じて、個人指導・ゲストを囲む合評会などを考えたい。
授 業 計 画	院生諸君の必要に応じることを基本として、論文作成支援・論文作成指導を行う。個別指導と集団的な検討・討議を通して、各自が研究方法論を鍛えるとともに、論文作成へのモチベーションを高め、維持しつつ、質の高い論文とはどういうものであるのかというイメージを作り上げる支援を行う。とくに社会教育学・生涯学習論は、研究対象が広く、特定の研究方法に依拠して研究を進めることができないため、研究の課題意識や対象によって研究方法をつくり、また組み換える必要がある。特に近年、研究の設計において、起点となるべき「なぜ」が問われず、「何を」から着手する傾向が強くなっているが、研究を深めるためにも「なぜ」という問いを設定することの重要性を認識して欲しい。院生それぞれの研究に即して、検討を進める。
授 業 の 方 法	個別指導と集団での議論・討論を組み合わせ、必要に応じて学外の専門家を招いてのトークセッションなどを行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加と討議にもとづいて評価する。
教 科 書	必要に応じて適宜紹介する。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	博士院生として、自らの研究課題を大事にしながら、自分の研究の方向性をつくるよう、努力して欲しい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-213-14	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	李 正 連				
授 業 科 目	生涯学習論論文指導				
講 義 題 目	生涯学習論論文指導 Dissertation Research in Lifelong Learning				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	博士論文・修士論文をはじめとして、社会教育・生涯学習関連の研究論文を作成するための、研究方法論検討及び執筆の指導を行う。受講者による研究発表と相互の議論を通して、また先行研究の検討を通して、オリジナリティある論文執筆のあり方について考える。必要に応じて、個人指導・ゲストを囲む合評会などを考えたい。
授 業 計 画	院生諸君の必要に応じることを基本として、論文作成支援・論文作成指導を行う。個別指導と終端的な検討・討議を通して、各自が研究方法論を鍛えるとともに、論文作成へのモチベーションを高め、維持するとともに、質の高い論文とはどういうものであるのかというイメージを作り上げる支援を行う。
授 業 の 方 法	個別指導と集団での議論・討論を組み合わせ、必要に応じて学外の専門化を招いてのトークセッションなどを行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加と討議にもとづいて評価する。
教 科 書	なし
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-213-15	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	李 正 連				
授 業 科 目	生涯学習論論文指導				
講 義 題 目	生涯学習論論文指導 Dissertation Research in Lifelong Learning				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	博士論文・修士論文をはじめとして、社会教育・生涯学習関連の研究論文を作成するための、研究方法論検討及び執筆の指導を行う。受講者による研究発表と相互の議論を通して、また先行研究の検討を通して、オリジナリティある論文執筆のあり方について考える。必要に応じて、個人指導・ゲストを囲む合評会などを考えたい。
授 業 計 画	院生諸君の必要に応じることを基本として、論文作成支援・論文作成指導を行う。個別指導と終端的な検討・討議を通して、各自が研究方法論を鍛えるとともに、論文作成へのモチベーションを高め、維持するとともに、質の高い論文とはどういうものであるのかというイメージを作り上げる支援を行う。
授 業 の 方 法	個別指導と集団での議論・討論を組み合わせ、必要に応じて学外の専門化を招いてのトークセッションなどを行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加と討議にもとづいて評価する。
教 科 書	なし
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-213-16	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	新藤 浩伸				
授 業 科 目	生涯学習論論文指導				
講 義 題 目	生涯学習論論文指導 Dissertation Research in Lifelong Learning				

授 業 の 目 標・概 要	修士論文、博士論文をはじめとして、社会教育・生涯学習関連の研究論文を作成するための、研究方法論検討及び執筆の指導を行う。受講者による研究発表と相互の議論を通して、また先行研究の検討を通して、オリジナリティある論文執筆のあり方について考える。必要に応じて、ゲストを囲む合評会などを考えたい。
授 業 計 画	院生の必要に応じることを基本として、論文作成支援・論文作成指導を行う。個別指導と集団的な検討・討議を通して、各自が研究方法論を鍛えるとともに、論文作成へのモチベーションを高め、維持するとともに、質の高い論文執筆に向けた支援を行う。
授 業 の 方 法	オンラインでの開講となる場合、別途示す Zoom アドレスにて行う。個別指導と集団での議論・討議を組み合わせ、必要に応じて学外の専門家を招いてのトークセッションなどを行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加と討議にもとづいて評価する。
教 科 書	使用しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	年度内の発表機会、執筆論文を各自設定し、それに向けて計画的に取り組むこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-213-17	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	新藤 浩伸				
授 業 科 目	生涯学習論論文指導				
講 義 題 目	生涯学習論論文指導 Dissertation Research in Lifelong Learning				

授 業 の 目 標・概 要	修士論文、博士論文をはじめとして、社会教育・生涯学習関連の研究論文を作成するための、研究方法論検討及び執筆の指導を行う。受講者による研究発表と相互の議論を通して、また先行研究の検討を通して、オリジナリティある論文執筆のあり方について考える。必要に応じて、ゲストを囲む合評会などを考えたい。
授 業 計 画	院生の必要に応じることを基本として、論文作成支援・論文作成指導を行う。個別指導と集団的な検討・討議を通して、各自が研究方法論を鍛えるとともに、論文作成へのモチベーションを高め、維持するとともに、質の高い論文執筆に向けた支援を行う。
授 業 の 方 法	オンラインでの開講となる場合、別途示す Zoom アドレスにて行う。個別指導と集団での議論・討議を組み合わせ、必要に応じて学外の専門家を招いてのトークセッションなどを行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加と討議にもとづいて評価する。
教 科 書	使用しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	年度内の発表機会、執筆論文を各自設定し、それに向けて計画的に取り組むこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-213-18	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	影浦 峯				
授 業 科 目	図書館情報学論文指導				
講 義 題 目	図書館情報学論文指導 Dissertation Research in Library and Information Studies				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	図書館情報学・言語情報処理・計量語彙論・情報メディア論分野で修士・博士論文の執筆をめざす大学院生のために、個別およびグループで論文指導を行う。修士課程2年および博士課程3年以上の場合は修士論文および博士論文の執筆および提出を、それ以外の年次の学生には、修士論文、博士論文につながる学会発表、論文執筆を交えながら各段階で必要なノウハウおよび蓄積を蓄えることを目標とする。
授 業 計 画	初回に、各自、自分の研究テーマと年度の目標を提出してもらい、それに応じて、各自の目標を設定するとともに、個別指導および全体指導のスケジュールを決める。
授 業 の 方 法	第1回：研究テーマ、年度目標の提出とそれに基づく議論第2回－第4回：個別指導第5回：グループ指導および相互の情報交換第6回－第9回：個別指導第10回：グループ指導および相互の情報交換第11回－第14回：個別指導第15回：グループ指導および相互の情報交換
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度に応じて行なう。
教 科 書	用いない。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	対面・オンラインは感染状況を踏まえ、通勤通学、検査体制といった社会的対応の状況を考慮した安全性評価に基づき授業開始までに判断する。安全性評価は定期的に行い、途中での切り替えも考える。ただし、いずれの場合でも個別事情に応じた学生のオンライン参加を許容する。

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-213-19	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	影浦 峯				
授 業 科 目	図書館情報学論文指導				
講 義 題 目	図書館情報学論文指導 Dissertation Research in Library and Information Studies				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	図書館情報学・言語情報処理・計量語彙論・情報メディア論分野で修士・博士論文の執筆をめざす大学院生のために、個別およびグループで論文指導を行う。修士課程2年および博士課程3年以上の場合は修士論文および博士論文の執筆および提出を、それ以外の年次の学生には、修士論文、博士論文につながる学会発表、論文執筆を交えながら各段階で必要なノウハウおよび蓄積を蓄えることを目標とする。
授 業 計 画	初回に、各自、自分の研究テーマと年度の目標を提出してもらい、それに応じて、各自の目標を設定するとともに、個別指導および全体指導のスケジュールを決める。
授 業 の 方 法	第1回：研究テーマ、年度目標の提出とそれに基づく議論第2回－第4回：個別指導第5回：グループ指導および相互の情報交換第6回－第9回：個別指導第10回：グループ指導および相互の情報交換第11回－第14回：個別指導第15回：グループ指導および相互の情報交換
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度に応じて行なう。
教 科 書	用いない。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	対面・オンラインは感染状況を踏まえ、通勤通学、検査体制といった社会的対応の状況を考慮した安全性評価に基づき授業開始までに判断する。安全性評価は定期的に行い、途中での切り替えも考える。ただし、いずれの場合でも個別事情に応じた学生のオンライン参加を許容する。

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-213-20	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	河村 俊太郎				
授 業 科 目	図書館情報学論文指導				
講 義 題 目	図書館情報学論文指導 Dissertation Research in Library and Information Studies				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	図書館情報学・言語情報処理・計量語彙論・情報メディア論分野で修士・博士論文の執筆をめざす大学院生のために、個別およびグループで論文指導を行う。修士課程2年および博士課程3年以上の場合は修士論文および博士論文の執筆および提出を、それ以外の年次の学生には、修士論文、博士論文につながる学会発表、論文執筆を交えながら各段階で必要なノウハウおよび蓄積を蓄えることを目標とする。
授 業 計 画	初回に、各自、自分の研究テーマと年度の目標を提出してもらい、それに応じて、各自の目標を設定するとともに、個別指導および全体指導のスケジュールを決める。
授 業 の 方 法	第1回：研究テーマ、年度目標の提出とそれに基づく議論第2回－第4回：個別指導第5回：グループ指導および相互の情報交換第6回－第9回：個別指導第10回：グループ指導および相互の情報交換第11回－第14回：個別指導第15回：グループ指導および相互の情報交換
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度に応じて行なう。
教 科 書	用いない。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-213-21	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	河村 俊太郎				
授 業 科 目	図書館情報学論文指導				
講 義 題 目	図書館情報学論文指導 Dissertation Research in Library and Information Studies				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	図書館情報学・言語情報処理・計量語彙論・情報メディア論分野で修士・博士論文の執筆をめざす大学院生のために、個別およびグループで論文指導を行う。修士課程2年および博士課程3年以上の場合は修士論文および博士論文の執筆および提出を、それ以外の年次の学生には、修士論文、博士論文につながる学会発表、論文執筆を交えながら各段階で必要なノウハウおよび蓄積を蓄えることを目標とする。
授 業 計 画	初回に、各自、自分の研究テーマと年度の目標を提出してもらい、それに応じて、各自の目標を設定するとともに、個別指導および全体指導のスケジュールを決める。
授 業 の 方 法	第1回：研究テーマ、年度目標の提出とそれに基づく議論第2回－第4回：個別指導第5回：グループ指導および相互の情報交換第6回－第9回：個別指導第10回：グループ指導および相互の情報交換第11回－第14回：個別指導第15回：グループ指導および相互の情報交換
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度に応じて行なう。
教 科 書	用いない。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-213-22	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	池内 淳				
授 業 科 目	図書館情報学論文指導				
講 義 題 目	図書館情報学論文指導 Dissertation Research in Library and Information Studies				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	図書館情報学・情報メディア論分野で修士・博士論文の執筆をめざす大学院生のために、個別およびグループで論文指導を行う。修士課程2年および博士課程3年以上の場合は修士論文および博士論文の執筆および提出を、それ以外の年次の学生には、修士論文、博士論文につながる学会発表、論文執筆を交えながら各段階で必要なノウハウおよび蓄積を蓄えることを目標とする。
授 業 計 画	初回に、各自、自分の研究テーマと年度の目標を提出してもらい、それに応じて、各自の目標を設定するとともに、個別指導および全体指導のスケジュールを決める。
授 業 の 方 法	第1回：研究テーマ、年度目標の提出とそれに基づく議論第2回－第4回：個別指導第5回：グループ指導および相互の情報交換第6回－第9回：個別指導第10回：グループ指導および相互の情報交換第11回－第14回：個別指導第15回：グループ指導および相互の情報交換
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度に応じて行なう。
教 科 書	用いない。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-213-23	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	池内 淳				
授 業 科 目	図書館情報学論文指導				
講 義 題 目	図書館情報学論文指導 Dissertation Research in Library and Information Studies				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	図書館情報学・情報メディア論分野で修士・博士論文の執筆をめざす大学院生のために、個別およびグループで論文指導を行う。修士課程2年および博士課程3年以上の場合は修士論文および博士論文の執筆および提出を、それ以外の年次の学生には、修士論文、博士論文につながる学会発表、論文執筆を交えながら各段階で必要なノウハウおよび蓄積を蓄えることを目標とする。
授 業 計 画	初回に、各自、自分の研究テーマと年度の目標を提出してもらい、それに応じて、各自の目標を設定するとともに、個別指導および全体指導のスケジュールを決める。
授 業 の 方 法	第1回:研究テーマ、年度目標の提出とそれに基づく議論第2回-第4回:個別指導第5回:グループ指導および相互の情報交換第6回-第9回:個別指導第10回:グループ指導および相互の情報交換第11回-第14回:個別指導第15回:グループ指導および相互の情報交換
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度に応じて行なう。
教 科 書	用いない。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-213-24	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	宮田 玲				
授 業 科 目	図書館情報学論文指導				
講 義 題 目	図書館情報学論文指導 Dissertation Research in Library and Information Studies				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	図書館情報学・言語情報処理・計量語彙論・情報メディア論分野で修士・博士論文の執筆をめざす大学院生のために、個別およびグループで論文指導を行う。修士課程2年および博士課程3年以上の場合は修士論文および博士論文の執筆および提出を、それ以外の年次の学生には、修士論文、博士論文につながる学会発表、論文執筆を交えながら各段階で必要なノウハウおよび蓄積を蓄えることを目標とする。
授 業 計 画	初回に、各自、自分の研究テーマと年度の目標を提出してもらい、それに応じて、各自の目標を設定するとともに、個別指導および全体指導のスケジュールを決める。
授 業 の 方 法	第1回：研究テーマ、年度目標の提出とそれに基づく議論第2回－第4回：個別指導第5回：グループ指導および相互の情報交換第6回－第9回：個別指導第10回：グループ指導および相互の情報交換第11回－第14回：個別指導第15回：グループ指導および相互の情報交換
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度に応じて行なう。
教 科 書	用いない。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-213-25	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	宮田 玲				
授 業 科 目	図書館情報学論文指導				
講 義 題 目	図書館情報学論文指導 Dissertation Research in Library and Information Studies				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	図書館情報学・言語情報処理・計量語彙論・情報メディア論分野で修士・博士論文の執筆をめざす大学院生のために、個別およびグループで論文指導を行う。修士課程2年および博士課程3年以上の場合は修士論文および博士論文の執筆および提出を、それ以外の年次の学生には、修士論文、博士論文につながる学会発表、論文執筆を交えながら各段階で必要なノウハウおよび蓄積を蓄えることを目標とする。
授 業 計 画	初回に、各自、自分の研究テーマと年度の目標を提出してもらい、それに応じて、各自の目標を設定するとともに、個別指導および全体指導のスケジュールを決める。
授 業 の 方 法	第1回：研究テーマ、年度目標の提出とそれに基づく議論第2回－第4回：個別指導第5回：グループ指導および相互の情報交換第6回－第9回：個別指導第10回：グループ指導および相互の情報交換第11回－第14回：個別指導第15回：グループ指導および相互の情報交換
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度に応じて行なう。
教 科 書	用いない。
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-214-01	単 位 数	2	学 期	S2
担 当 教 員	阿曾沼 明裕				
授 業 科 目	大学経営政策基本研究				
講 義 題 目	高等教育論 Introduction to Higher Education				

授 業 の 目 標・概 要	この授業では、大学・高等教育論を学ぶための基礎的な知識を得ることを目的とする。高等教育の制度的な概念、中世以来の大学の歴史、高等教育の多様性とその系譜、アメリカ・ヨーロッパの高等教育、学位、入学システムについて学ぶとともに、大学・高等教育機関の基本的な機能である教育機能に焦点を当て、その構造と機能について学ぶ。そうした学びを経て、日本の高等教育の構造的な特徴についても理解を深める。
授 業 計 画	まず前半で、高等教育の制度的な概念、中世以来の大学の歴史、高等教育の多様性とその系譜、19 世紀以降のヨーロッパの高等教育、学位、入学システムについて講義を行い、高等教育論の基礎を学ぶ。後半では、重要文献を受講生が報告する形式で授業を進める。第1回 高等教育の制度的概念 第2回 大学の起源と発展(1) 第3回 大学の起源と発展(2) 第4回 高等教育の多様性とその系譜 第5回 19 世紀以降の欧米の高等教育 第6回 大学と学位 第7回 教育と職業との関係に関する理論 第8回 入学システムと大学教育 第9回 文献報告(大学の入り口) 第10回 文献報告(専門教育と一般教育) 第11回 文献報告(アメリカの学士教育) 第12回 文献報告(日本の学士教育) 第13回 文献報告(カレッジ・インパクト) 第14回 文献報告(職業レリバンズ、教育力)
授 業 の 方 法	前半は講義形式で行い、後半は受講生が高等教育に関する重要な文献を報告し、ディスカッションを行う。また、今年度はオンラインでの授業を予定している。
成 績 評 価 方 法	授業における報告、最後の課題レポートまたは試験(試験といってもレポート的な論述式)による。毎回(2時限に一回)リフレクション・ペーパーを提出、ただし原則これは成績には含めない。
教 科 書	教科書橋本鉦市・阿曾沼明裕編『よくわかる高等教育論』ミネルヴァ書房(2021)中村康高編『リーディングス 日本の高等教育1 大学への進学一選抜と接続』玉川大学出版部(橋本鉦市・阿曾沼明裕企画編集、2011)杉谷祐美子編『リーディングス 日本の高等教育2 大学の学びー教育の内容と方法』玉川大学出版部(橋本鉦市・阿曾沼明裕企画編集、2011)小方直幸編『リーディングス 日本の高等教育4 大学から社会へー人材育成と知の還元』玉川大学出版部(橋本鉦市・阿曾沼明裕企画編集、2011)
履 修 上 の 注 意・備 考	大学経営政策コース以外の所属の方でこの授業を受講される予定の方は、予めメールで連絡をください。このコースでは、LMS として Google classroom を使用しますので、参加のためのクラスコードをお知らせします。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-02	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	阿曾沼 明裕				
授 業 科 目	大学経営政策基本研究				
講 義 題 目	高等教育政策論 Higher Education Policy				

授 業 の 目 標・概 要	この授業では日本の高等教育政策・制度の構造と機能について理解を深めることを目的とする。高等教育政策は大学・高等教育の問題に取り組む際に政策に関する知識は欠かせない。だが、必ずしも高等教育政策研究者(政策評価研究、政策過程分析)になるわけではない。高等教育政策に資するための研究(政策のための研究)の訓練の場でもない。高等教育の問題に取り組む際に必要な、あるいは知っておくといわれる、政策の在り方、政策の構造や機能、メカニズムを理解するための枠組みや知識を得るための授業である。
授 業 計 画	まず授業の前半では、高等教育政策を考える際に必要ないくつかの基本的な理屈(理論、現実を捉える枠組み)を学ぶ。その後大雑把に日本の高等教育の流れを、戦前と戦後に渡って概観したうえで、後半では、主要な高等教育政策について取り上げる。その際、政府の役割を、①制度的枠組みの構築、②「規制」と「補助」を通じた量と質のコントロールと考え、そのいくつかの政策事例を取り上げ、戦後日本の高等教育政策に対する理解を深める。Ⅰ. 教育と社会の理論 1. 教育と社会・経済発展 2. 投資としての高等教育 3. 高等教育における市場 4. 政府の存在する根拠Ⅱ. 日本の高等教育のマクロな流れ 5. 戦前日本の高等教育制度・政策の概略 6. 戦後日本の高等教育制度・政策の概略 Ⅲ. 主要な高等教育政策 7. 制度・枠組みの構築①—学制改革 8. 制度・枠組みの構築②—教育課程・質保証の枠組み作り 9. 制度・枠組みの構築③—ガバナンスの枠組み作り 10. 政府の規制と補助①—高等教育計画 11. 政府の規制と補助②—財政補助 12. 高等教育政策の構造変化① 13. 高等教育政策の構造変化②
授 業 の 方 法	授業の前半では、主に講義を行い、後半は、毎回3～4種類の文献を取り上げ、3～4人がひとり20分程度で文献の内容を報告し、疑問点や問題点を議論する。なお、ディスカッション重視の授業もあるが(大経の授業にはそのタイプが多いのでそれは他に任せ)、この授業はコースでの基本的な知識の習得を目指すものである(質問や発言は大歓迎)。加えて、授業はあくまでも道案内にすぎず、受講生は、授業での話を聞くだけでなく、授業で取り上げる教科書・文献を予習・復習で自ら読むこと。
成 績 評 価 方 法	報告の参加状況、レポートあるいは試験(レポートに近い記述式)による。
教 科 書	金子元久・小林雅之『教育の政治経済学』放送大学教育振興会(2000)橋本鉦市・阿曾沼明裕編『よくわかる高等教育論』ミネルヴァ書房(2021)大崎仁『大学改革 1945～1999』有斐閣選書(1999)村澤昌崇『リーディングス日本の高等教育6 大学と国家—制度と政策』玉川大学出版部(2010)黒羽亮一『新版 戦後大学政策の展開』玉川大学出版部(2001)このほか授業で取り上げる文献は別途そのつど提示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	大学経営政策コース以外の所属の方でこの授業を受講される予定の方は、予めメールで連絡をください。このコースでは、LMSとして Google classroom を使用しますので、参加のためのクラスコードをお知らせします。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-03	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	阿曾沼 明裕、両角 亜希子、福留 東土				
授 業 科 目	大学経営政策基本研究				
講 義 題 目	大学経営政策演習(2) Seminar on Higher Education Policy and Management (2)				

授 業 の 目 標・概 要	高等教育研究に関わる課題設定、方法論、論文執筆に関わる基礎的な作法や考え方を修得することを目的とする。受講者による論文の協同執筆による投稿論文の執筆を主とした取組を考えている。
授 業 計 画	予め授業のテーマ設定は行わず、受講者の関心と高等教育研究の動向を踏まえて、年間の取り組み課題を決定する。個々の受講者の課題関心も考慮するが、高等教育研究に対する視野を拡げるため、例えば他の受講者が設定した課題であっても、その共有や取り組みを前提とする。アプローチ方法も、量的、質的、そして資料分析など、設定された課題に応じて選択する。なお、受講者数によって、取り上げる課題の数等が変更となる場合がある。①導入②第 1 クール:テーマの設定③第 1 クール:課題設定・先行研究の検討・枠組の決定④第 1 クール:論文執筆(導入と方法)⑤第 1 クール:論文執筆(考察Ⅰ)⑥第 1 クール:論文執筆(考察Ⅱ)⑦第 1 クール:論文執筆(結論と全体の見直し)⑧第 2 クール:テーマの設定⑨第 2 クール:課題考察・先行研究の検討・枠組の決定⑩第 2 クール:論文執筆(導入と方法)⑪第 2 クール:論文執筆(考察Ⅰ)⑫第 2 クール:論文執筆(考察Ⅱ)⑬第 2 クール:論文執筆(結論と全体の見直し)
授 業 の 方 法	受講者は毎回の授業の狙いと成果を理解し、担当箇所について予め準備・執筆を行い、授業時に持ちよって、改善・改訂を行う。
成 績 評 価 方 法	授業時と授業前後の実質的な取組状況によって判断する。
教 科 書	どのテーマ・方法論を採用するかは、授業時に受講者の関心も踏まえながら、受講者間での調整を含めて決定する。
履 修 上 の 注 意・備 考	この授業は通年で隔週に実施される予定。博士課程の学生を対象とした授業。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-04	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	阿曾沼 明裕、両角 亜希子、福留 東土				
授 業 科 目	大学経営政策基本研究				
講 義 題 目	大学経営政策研究 Research Methods for Higher Education Policy and Management				

授 業 の 目 標・概 要	論文作成に必要な知識、技能、考え方等を講義・演習形式を組み合わせで修得する
授 業 計 画	1:導入(高等教育研究とは)2:論文講読(大学経営①)3:論文講読(大学経営②)4:論文講読(比較大学①)5:論文講読(比較大学②)6:論文講読(大学政策①)7:論文講読(大学政策②)8:協同学習①9:協同学習②10:個人発表前半(関心と課題)11:個人発表後半(関心と課題)12:個人発表前半(先行研究と方法)13:個人発表後半(先行研究と方法)
授 業 の 方 法	受講者全員に同様に取り組んでもらうものと、個々の学生の関心に応じて取り組んでもらうものを組合せ、共同で学び発表するスタイルと、個人で学び発表するスタイルの双方を用いる。
成 績 評 価 方 法	授業への出席と発表。
教 科 書	講義時に指示します。
履修上の注意・備考	大学経営・政策コースの学生が対象
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-214-05	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	福留 東土				
授 業 科 目	大学経営政策基本研究				
講 義 題 目	比較大学論 Comparative Study in Universities				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	大学とは本来、普遍的な知の拠点として、国や地域の枠組みにとらわれずに世界的に知的活動を展開させる性格を潜在的に有している。一方、近代社会の成立以降、大学が本質的な機能として担ってきた高等教育は各国の教育制度において人材養成・配分機能の重要な一角を担い、ゆえに、教育内容の特性、中等教育制度との関係、労働市場との関係などの点において、その構造と機能は国ごとの独自性を持っている。また、大学の活動のもうひとつの主軸である研究活動は、それ自体は普遍性を志向する活動であるが、その具体的な態様は、研究資金と研究の場の提供を通じて社会における諸勢力(とりわけ政府)との関係に規定されており、その実態は国によって異なっている。すなわち、大学は本来の性向として普遍性を追求しつつも、その教育機能をとっても研究機能をとっても、あるいは社会貢献機能をとっても、現実的には各国の政治・経済・文化等、広い意味での社会の諸条件の中でそれら機能を果たしている社会的組織である。またそこでは、それら諸条件の時代的变化の中で歴史的に形成されてきた大学の外的・内的構造が紐帯として現実の大学のあり方を大きく規定している。大学・高等教育について包括的な理解を持つ上では、普遍的・一般的な大学のあり方を各国の特殊性を捨象して捉えることが必要である。しかし、大学・高等教育は歴史的な社会変動や各国独自の社会的諸条件から独立して真空の中に存在しているわけではない。それゆえ、大学・高等教育をその実態を伴ったかたちで把握する上では、歴史的にみた大学・高等教育の変容、各国の諸条件の違いを反映した大学・高等教育の特殊性を視野に入れなければならない。さらには、そのことと関係しつつ、大学という存在の定義自体が国によって異なり、またとりわけ現代では一国の内部でも多様化しているという実態を踏まえるとき、そもそも大学をどう定義付けろのかという問題自体、一義的な解答を与えられる問ではない。本講義では、アメリカの大学を対象に検討を行うが、それは、アメリカの大学が戦後日本の大学改革のモデルとなり、あるいは現在世界で大学改革のモデルと位置付けられていることが直接の理由ではない。アメリカの大学システムは高度な多様性を備えており、その多様性の検討を通して、大学・高等教育のあり方を多角的に検討し、我々の持つ大学像を拡張することが主な目的となる。さらには、教育や学術、社会との連携など、多方面でこれまで様々な取組が行われてきた歴史を振り返る中で、現代の問題にも通じる、大学・高等教育の本質的な使命や課題にアプローチする視座を、本授業を通して培ってもらいたい。
授 業 計 画	1. 比較・歴史研究の射程と方法 2. アメリカ大学の構造的特質(1) 3. アメリカ大学の構造的特質(2) 4. 大学の多様性—カーネギー大学分類の分析 5. 現代アメリカの大学 6. ヨーロッパの大学と植民地カレッジ 7. 独立後の大学と大学ガバナンス—ダートマスカレッジ・ケース 8. カレッジの教育—「イエールレポート」の分析 9. 実務的教育と大学—ランドグラント・カレッジの成立と展開 10. 研究大学と大学院教育 11. 大学のシステム化：拡大と多様化・階層化と標準化—19世紀末から20世紀前半の大学 12. 研究大学モデルに関するケーススタディ 13. 大衆化・民主化・統制—戦後の大学
授 業 の 方 法	講義はできるだけ事前講義または補足講義とし、授業中は受講生の発表、およびディスカッションを重視する。講義と資料の配信に Google Classroom を用いるので定期的に確認すること。授業の課題は以下の4つとする。1.事前課題：授業に先立ち、指定の課題論文を読み、事前講義、または補足講義を視聴してくる。授業では、グループディスカッションなど討論形式を多く取り入れるので、必ず事前課題を行ってくる。2.授業での発表：以下①～③のいずれかの方法により、個別大学の歴史、または自分で設定したテーマについて調
成 績 評 価 方 法	期末レポート、および授業へのリフレクションによる。毎回の授業でリフレクションシートを配布するので、授業を通して考えたこと、質問などを記入して授業の最後に提出すること。・授業での発表 25%・期末レポート 50%・事前課題・ディスカッションを含めた授業への貢献、コメントシート 25%
教 科 書	主に講師作成の資料による。以下は授業前半で用いる論文の一部。詳細は開講時に指示する。ロジャー・ガイガー(福留東土・張燕訳)「アメリカ高等教育史」。福留東土「大学の理念・制度・歴史」大学経営・

	政策コース編『大学経営・政策入門』東信堂、2018 年、20-38 頁。Robert Birnbaum, "Governance and Management: US Experiences and Implication for Japan's Higher Education."William Tierney, "Globalization, International Rankings, and the American Model: A Reassessment."
履修上の注意・備考	できる限り毎回ハイフレックス方式(受講生が対面とオンラインを選択可能)で授業を行う。オンラインのみでの開講となる場合には事前に連絡する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-06	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	両角 亜希子				
授 業 科 目	大学経営政策基本研究				
講 義 題 目	大学経営論 Management of University				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	大学の経営について、基礎的な知識を身につけるとともに、その現代的な問題点について各自の問題意識を発展させる。
授 業 計 画	下記の内容を扱う予定だが、受講生の関心を見つつ修正する予定である。主に日本の大学を念頭に進めるが、適宜、国際比較をしながら理解を深めてもらう。(1)ガイダンス、日本の大学の制度的特徴(2)大学のガバナンス①(国公立)(3)大学のガバナンス②(私立)(4)大学の組織モデル(5)大学の組織文化とリーダーシップ(6)大学の組織編制原理(7)大学の施設マネジメント①(国公立)(8)大学の施設マネジメント②(私立)(9)大学の人事マネジメント①(教職員)(10)大学の人事マネジメント②(管理職・経営者)(11)大学の財務①(制度的特徴、財務構造、補助金制度)(12)大学の財務マネジメント②(財務指標による分析)(13)大学の戦略・計画・IR、合併と連携
授 業 の 方 法	講義のほかに、グループ学習や履修者による発表、ケースメソッドを用いた授業などを行う予定。特に今回は、3・4限の連続授業となるため、1日に1つのテーマを扱い、それに関する事前学習、グループ・クラス討議(あるいはゲスト講師による講演と質疑)、そのうえでの講義といった組み合わせで理解を深める予定である。積極的に参加してもらいたい。
成 績 評 価 方 法	試験、課題、授業への参加状況などを総合的に評価する。
教 科 書	特に用いない。授業中に必要に応じて参考資料を配布する予定。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	履修予定で初回の授業に出られない場合は、前日までにメールにて連絡すること。初回授業までにグループクラスルームに登録を済ませておくこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-07	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	福留 東土、両角 亜希子				
授 業 科 目	大学経営政策特殊研究				
講 義 題 目	大学経営政策各論(1) Topics in Higher Education Policy and Management(1)				

授 業 の 目 標・概 要	多様性と包摂性は近年、大学経営の中で重視されるようになった概念であり、特に日本の大学において急速に普及しつつある。しかし、大学におけるその意義やどのようなインパクトを大学にもたらしているのかについては、まだ議論が十分ではなく、さらなる理解の促進を図ることが必要な段階にある。この授業では多様性と包摂性について、理論と実践の両面から捉え、受講生による理解を深める。教育学研究を志す大学院生、大学職員、経営・政策担当者などの実務者らが、多様性と包摂性に関する理念的・実践的な理解を深め、それぞれの立場を活かして、多様な観点に立って知見を学び合うことを目的とする。
授 業 計 画	学期全体を大きく 3 つのパートに分ける。〈1〉講師、およびゲスト講師による講義主に学期前半に、講師およびゲスト講師による講義を行い、多様性と包摂性に関する理解を深める。理論的理解を図ると同時に、日本および諸外国における取組の解説を行う。並行して文献・論文購読を進める。〈2〉グループ内のディスカッション講義をもとに、少人数でのグループディスカッションを行う。相互の率直な意見交換を通して、多様性に対する認識と相互理解を深める。〈3〉受講生グループによる発表多様性というテーマ自体が多様であるため、具体的な議論を促進する上で、受講生は特定の対象を選択する。テーマとしては、現在のところ、障害者、留学生、社会経済階層と第一世代、社会人学生を想定している。グループでの調査をもとに学期の最後にプレゼンテーションをまとめる。
授 業 の 方 法	講義、グループディスカッション、ゲスト講義と質疑応答を併用する。通常授業はハイフレックス方式(オンラインと対面での受講を選択可能)で実施する。数回分の授業はオンデマンド方式とする。
成 績 評 価 方 法	授業への貢献度、プレゼンテーションの内容と貢献、期末レポートによって評価する。
教 科 書	授業中に指示する。
履修上の注意・備考	この授業では多様な背景を持った学生たちが集まるものと想定される。多様性を理解する上では、自身と他者の背景を認識・理解するとともに、それを尊重する姿勢を持つことが重要である。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-08	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	両角 亜希子、齋藤 芳子、林 隆之				
授 業 科 目	大学経営政策特殊研究				
講 義 題 目	大学経営政策各論(2) Topics in Higher Education Policy and Management(2)				

授 業 の 目 標・概 要	大学に期待される役割には教育、研究、社会貢献などがありますが、今回の授業では、研究活動を中心に扱います。科学技術・イノベーション政策、科学技術に関わる人材、研究マネジメント、教員にとっての教員活動などについての基礎的な知識を得たうえで、それぞれの問題関心をさらに深めてもらうことを目標とします。
授 業 計 画	この授業では、3名の教員が順番に講義を担当します。内容と日程の案は以下の通り。変更の可能性もあり得るので、初回の授業で確認すること。10/7 ガイダンス(両角)10/14、10/21、11/4、11/11 林 11/18、11/25、12/2 齋藤 12/9、12/16、12/23、1/6 両角それぞれの担当分で扱う内容は以下の通り。 (林担当分)●趣旨 科学技術・イノベーション政策は、科学技術や研究開発といった高度に専門的な活動を対象にしつつも、学術的価値のみならず社会・経済的価値が総体として実現されるように、国や組織レベルでのマネジメントを要求するものである。大学は政策の中で主たるアクターであり、科学技術・イノベーション政策が変化する中で大学に求められる機能も大きく変わる。本講義では、国内外の科学技術・イノベーション政策の歴史的変遷と現状、ならびにその理論フレームワークについて講義を行う。また、それらを基礎に、政策評価や研究評価を対象に政策の効果や科学技術・イノベーションの価値をどのように測るのかを説明する。●各回の内容 1. 日本の科学技術・イノベーション政策 2. 諸外国の科学技術・イノベーション政策 3. 科学技術・イノベーション政策の理論フレームワーク 4. 科学技術・イノベーション政策における政策評価・研究評価●教科書 参考とすべき論文等については授業で説明する。(齋藤担当分)●ねらい科学技術に関わる人材について取り上げます。この4半世紀ほどを中心に、研究者像の変容や、それに伴う人材育成のあり方の改革、そして、研究活動を支える人材の登場など、科学技術関連人材には大きな変化がありました。これらを確認しながら、現代における科学技術研究を担う人々と、その人々を通じてなされる科学技術活動への理解を深めていきます。●各回の内容博士のキャリアパス: OD・PD 問題を脱却して研究支援人材の登場: URAを中心に現代の研究者像: 市民との関係のなかで●教科書等・教科書等の指定はありません。適宜資料を配付します。・事前のリーディングが課されることがあります。予習して授業に臨んでください。(両角担当分)●ねらい科学技術・イノベーション政策、科学技術にかかわる人材についての知識を得たうえで、各大学における研究マネジメントの課題について考えます。大学教員にとっての研究活動の特徴や意義などについても解説したうえで、議論します。担当講師以外に、大学で研究マネジメントや研究支援を担当している方にゲスト講師として登壇いただく予定です。事前に下調べをしたうえで、ゲストの話を聞いて討議をして、それぞれの知識や問題意識をさらに発展できるように考えています。●教科書等・教科書等の指定はありません。適宜資料を配付します。・事前の課題やリーディングが課されることがあります。予習して授業に臨んでください。
授 業 の 方 法	講義形式、グループディスカッション等を取り入れる。それぞれの担当講師の指示に従うこと。
成 績 評 価 方 法	平常点とレポートによる。3名の各講師がそれぞれ成績を付けて、それらを合わせて総合的な成績とする。それぞれの担当講師が成績評価方法を説明する。
教 科 書	特に指定しない。
履修上の注意・備考	授業日程をよく確認の上、毎回の講義に出席し、課題をすべて提出すること。授業開始までにグーグルクラスルームに登録すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-09	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	大多和 直樹				
授 業 科 目	大学経営政策特殊研究				
講 義 題 目	高等教育調査の方法と解析(1) Methods and Analyses of Surveys in Higher Education (1)				

授 業 の 目 標・概 要	・高等教育を対象とした社会調査の基礎を身につけることを目標とする。修士論文等の際に自ら調査を企画・実施し、データ分析まで行えるよう、一通り調査の各プロセスについて把握する。調査を身につけるにあたっては、技術的、知識的な側面にとどまらず、思考のあり方や調査に臨む際の態度などの側面もまた重要となる。授業では、実際に既存数量的データの二次分析(エクセル統計等を利用)を演習的に行う中で、そうした部分をも体得することを目指す。
授 業 計 画	1. ガイダンス～社会調査:知的創造のためのデータ収集法2. 問いの重要性:研究は問いから始まる3. 問いから仮説へ4. 仮説検証を行う:クロス分析とは5. 検定の考え方:カイニ乗検定6. アウトプット=論文に触れる7. 質問紙の作成法:ワーディングと構成8. サンプリング9. 質的方法に触れる 10. 統計の基礎 11. 回帰分析の考え方<ミニ演習>12.ミニ演習 1 13.ミニ演習 2 14.ミニ演習 315.まとめ
授 業 の 方 法	社会調査・統計分析の基礎を理論的に学んだ後、ミニ演習(既存調査データの二次分析)を行う。
成 績 評 価 方 法	平常点: ミニ演習など 40%レポート: 60%
教 科 書	耳塚寛明・中西啓喜 2021『教育を読み解くデータサイエンス:データ収集と分析の論理』ミネルヴァ書房
履修上の注意・備考	最初から最後まで通して参加できる学生に限る。
そ の 他	授業では統計解析を実際に行うが、その際、各自解析ソフトを用意することが求められる(SPSS が好ましい)。これについては最初の授業の際に説明する(まだ持っていない受講生は、それまでは購入等はしないほうが望ましい)。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-214-10	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	濱中 義隆				
授 業 科 目	大学経営政策特殊研究				
講 義 題 目	高等教育調査の方法と解析(2) Methods and Analyses of Surveys in Higher Education (2)				

授 業 の 目 標・概 要	高等教育政策のみならず様々な社会的事象を分析する際の基礎となるデータ解析の手法について、統計学的な理論的知識を修得するとともに、実際に既存のデータを分析してみることを通して、幅広く自らの研究や実務に応用することができるようになることを目標とする。最も基本的な手法から順に多変量解析の初歩的な手法まで対象とするが、データ分析に用いるソフトウェア(表計算ソフトや統計パッケージ)の使い方については講義時間中に十分説明することは困難なため、各自で別途学習することが求められる。
授 業 計 画	1 イントロダクション 調査統計の思想と技法(量的調査と質的調査) 2 量的調査の基礎(操作化、測定、変数) 3 度数分布表と記述統計量 42つの変数間の関係の記述(クロス集計表、散布図、相関係数) 5 推測統計学の基礎(確率、期待値、確率分布) 6 統計的推測と統計的仮説検定の考え方 72つの平均値の差の検定(独立サンプルの t 検定) 8 複数の平均値の差の検定(分散分析) 9 多変量解析の考え方(擬似関係、媒介関係、交互作用とは) 10 三重クロス表の分析 11 重回帰分析とパス解析(1) 12 重回帰分析とパス解析(2) 13 ロジスティック回帰分析
授 業 の 方 法	講義と演習(課題発表)(上記授業計画参照)
成 績 評 価 方 法	課題レポート2回(50%), 発表(20%), 試験(30%)とする。
教 科 書	指定しない
履修上の注意・備考	受講生は夏学期の「高等教育調査と解析(1)」を受講している者に限る。統計学や社会調査法の基礎を学習していることが望ましい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-11	単 位 数	2	学 期	S2
担 当 教 員	福留 東土				
授 業 科 目	大学経営政策特殊研究				
講 義 題 目	比較大学経営論(1) Comparative Study in University Management (1)				

授 業 の 目 標・概 要	本授業は、大学の比較研究に対する視野を醸成することを目的とする。米国の大学人とディスカッションすることを通して、米国の研究大学の制度と実態を学ぶ。それを通して、大学に関する比較考察の視点を獲得し、日本の大学のあり方について考察する上での示唆を得る。アメリカの大学は世界の大学改革のモデルと位置付けられているが、その実態は実は十分に理解されていない。まずは予断を入れずにアメリカの大学の実態を理解しようとするのが重要である。すべての受講生が関心あるテーマを見出せるよう、幅広いテーマで講師を依頼するので、各自の関心のあるテーマや研究テーマに関する理解を深める機会としてもらいたい。また、受講生各自の関心に即して事前調査やレポート執筆を行うことを通して、比較の視点から日本の大学像を相対化し、大学に対する幅広い知見を獲得することを目指す。受講に当たって英語力は問わない。英語力そのものよりも、言語は異なっても積極的に対話し、学ぼうとする姿勢を持って参加することが重要である。本授業は、大学の比較研究に対する視野を醸成することを目的とする。米国の大学を訪問して現地で講義を受け、米国の大学人とディスカッションすることを通して、米国の研究大学の制度と実態について学ぶ。それを通して、大学に関する比較考察の視点を獲得し、日本の大学のあり方について考察する上での示唆を得る。アメリカの大学は世界の大学改革のモデルと位置付けられているが、その実態は日本において十分に理解されていない。文化や制度的伝統の異なる海外の実態を、その背後にある文脈を含めて理解することは簡単な作業ではない。この授業では、まず予断を入れずにアメリカの大学の実態を理解しようとするのが重要である。その上で、受講生各自の関心に即して事前調査やレポート執筆を行うことを通して、比較の視点から日本の大学像を相対化し、大学に対する幅広い見識を獲得することを目指す。今年度は、大学ガバナンスと学士課程教育に関わるテーマを幅広く取り上げる。それを通して、アメリカの大学経営・教育の概要を把握してもらいたい。また、すべての受講生が関心あるテーマを見出せるよう、希望に応じてそれ以外のテーマを取り上げることも可能である。各自の関心あるテーマに関する理解を深める機会としてもらいたい。なお、福留による他の授業と関連する内容もあるが、他授業の履修を前提とはしない。必要に応じて、他授業の資料を共有する。
授 業 計 画	現地での講義は5日間(月～金)行う。その他、渡航前に事前学習会、渡航後に事後報告会を行う。詳細なスケジュールは決まり次第連絡する。
授 業 の 方 法	海外で5日間の集中講義を行う。また、事前学習会、現地での検討会、事後報告会を行う。事前学習として、講師による講義を配信するので、指定の期日までに必ず視聴しておくこと。
成 績 評 価 方 法	授業への参加・貢献度、および最終レポートによる。期末レポート 80%授業への参加・貢献、コメントシート 20%・期末レポートは原則として講義テーマの中から各自の興味関心に合わせてテーマ設定を行うこと。・レポートはタイトルを付し、A4・5枚程度を目安とする。
教 科 書	適宜指示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	・詳細なスケジュールは決まり次第、連絡する。履修希望者は授業ガイダンスに参加すること。・原則としてすべての事前学習会、講義に参加すること。・事前に期末レポートの執筆テーマを決め、事前学習会での報告と期末レポートの提出を期日を守って行うこと。・十分な準備を行った上で講義に臨み、現地のセッションでは講義を聴くだけでなく、積極的に質問・コメントをすること。・集中講義が全受講生にとって有意義な経験となるよう、受講生間で情報交換を図り、十分に協力し合うこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-12	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	両角 亜希子				
授 業 科 目	大学経営政策特殊研究				
講 義 題 目	大学経営事例研究(2) Case Study in University Management (2)				

授 業 の 目 標・概 要	大学経営に関する特定のテーマにをとり上げて、ケーススタディの方法や質的分析の方法を学び、実践することで身につけることを目指す。
授 業 計 画	大学経営事例研究の授業では、質的なデータを収集し、それを分析する方法について、実践をしながら学ぶことを目的としています。量的な分析と質的な分析はそれぞれに強みと弱みがあり、それらを組み合わせることで、問いに対してより深い理解が得られることも多く、様々な分析手法を身につけることはとても重要です。大学経営・政策コースでも、インタビュー等の質的なデータを用いて、修士論文・博士論文を執筆する方は少なくないですが、収集したデータをどのように整理・分析して、論文にしていくなのか、というところで悩みを抱える方が少なくありません。量的な方法と異なり、研究枠組みや仮説が最初からあるわけではなく、流動的であるため、その探索的な過程を楽しむというよりも不安に感じる方も多い印象を受けています。質的なデータの方法論については、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)、エスノグラフィ、ナラティブ分析などの様々な手法が開発されてその解説本も多く出ていますが、一部ではやや技術的な工夫に片寄りすぎて、かえって使い勝手が悪い方法論もあるように感じています。質的な分析の基礎は、インタビューで得た発話を文字にして、それらをうまく言い表す名称や文句を抽象化してラベルを貼ることを通して、何らかのパターンを見出すコードをふり、類似したコードでカテゴリーを作り、それらの関係性などについて、カテゴリー/テーマをつなげ、データを説明するストーリーを構築するということにあると考えます。また、この手の手法は実践してみても、獲得していくことがとても重要だと考えます。そこで、本授業では、古典的な手法ともいえる KJ 法(言葉の組み立て工学)に着目して、それを実践してみること、質的な方法論についての理解を深め、実際に使えるようになることを目指します。詳細は、第1回の授業で説明するので、履修を希望する者は必ず出席のこと。
授 業 の 方 法	発表、討議形式で行う。共通のテーマでの質的分析の実践・発表・文章化、各自の研究テーマでの質的分析の実践・発表・文章化。
成 績 評 価 方 法	授業への出席と討論等への貢献、研究内容(レポート課題等)によって総合的に評価を行う。
教 科 書	川喜多二郎『発想法』、上野千鶴子『情報生産者になる』
履 修 上 の 注 意・備 考	日程は現時点では下記を考えているが、変更もありうる。変更の場合は学内掲示で知らせるため、履修を希望する者は掲示を確認すること。7月17日(月、祝)、8月5日(土)、9月2日(土)、9月18日(月、祝)の2-5限。なお、実習を行う日程については、対面参加を強く推奨する。第1回の授業に出られない場合は、必ず、担当講師に事前にメールで連絡すること。履修登録したものに事前ガイダンス(第1回授業までの課題等)について連絡する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-13	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	阿曾沼 明裕、深堀 聡子、栗田 佳代子、両角 亜希子、林 隆之、福留 東土				
授 業 科 目	大学経営政策論文指導				
講 義 題 目	大学経営政策論文指導 Individual Tutorial in University Management and Higher Education Policy				

授 業 の 目 標・概 要	博士論文、修士論文の作成のための論文指導を行う。
授 業 計 画	個々の学生の進捗状況に合わせて指導を行う。具体的なスケジュールは 4 月に決定する。
授 業 の 方 法	個々の学生の内容に応じて論文指導を行う。
成 績 評 価 方 法	授業への出席と発表。
教 科 書	講義時に指示します。
履修上の注意・備考	大学経営・政策コースの学生が対象
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-214-14	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	阿曾沼 明裕、深堀 聡子、栗田 佳代子、両角 亜希子、林 隆之、福留 東土				
授 業 科 目	大学経営政策論文指導				
講 義 題 目	大学経営政策論文指導 Individual Tutorial in University Management and Higher Education Policy				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	博士論文、修士論文の作成のための論文指導を行う。
授 業 計 画	個々の学生の進捗状況に合わせて指導を行う。具体的なスケジュールは 4 月に決定する。
授 業 の 方 法	個々の学生の内容に応じて論文指導を行う。
成 績 評 価 方 法	授業への出席と発表。
教 科 書	講義時に指示します。
履修上の注意・備考	大学経営・政策コースの学生が対象
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-214-15	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	栗田 佳代子				
授 業 科 目	共通科目				
講 義 題 目	大学教育開発論 Teaching Development in Higher Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	授業の概要 現在、大学教員としてのキャリアを進むにあたっては、研究者としてだけでなく、教育者としての資質も問われています。本授業は、東京大学フューチャーファカルティプログラムとして、学生が主体的に学ぶために必要な学生のモチベーションの高め方、授業デザインやシラバス、評価方法などを学びます。また、アクティブラーニングの手法を取り入れたグループワークを多く経験し、模擬授業の実践も行います。多様な研究領域から集う受講者相互の学び合いは、新しい視点の獲得につながり、また、プログラムの修了後も継続するネットワークを培います。本授業で学んだことは「目的・目標を明確にし、達成するためのデザイン」や「伝えたいことが確かに相手に伝わるコミュニケーション」を学ぶという点で研究活動の向上にも活きることでしょう。また、新型コロナウイルス感染症への対応のためすべての授業回をオンラインでの開催となりますが、オンライン授業の特性を生かした授業を体験し、自らも実施できることを目指します。目的と目標（目的）本授業では、未来の大学教員として、責務としての「教育」の重要性を認識し、学生の立場にたった教育の設計と実行を可能にすることを目的とします。そのために、授業実施に向けた実践的な知識やスキルを多様な専門領域の受講生とともに実際に体験し、互いに学び合いながら獲得し、さらに、研究だけでなく教育についても探究し続ける姿勢を身につけます。（目標）-高等教育の現状の概要について説明できる-効果的なデリバリースキルの観点を知り、自分のスキルの向上につなげる-グループワークに積極的に参加し、当事者およびファシリテーターとしてのコミュニケーション力をつける-学生が主体的に学べる 1 回の授業および授業全体のデザインができる-基礎知識をふまえた評価をデザインできる-学んだ知識を模擬授業として活用し実施できる-キャリアパスについて考え、日頃の活動や今後の展望について整理できる
授 業 計 画	大学教育開発論は木曜クラス、金曜クラスの 2 つ開講していますが、どちらも同じ内容です。授業は原則的に隔週で 2 コマ続きで行います。下記の日程の予定ですが、万が一変更がある場合には予めお知らせします。DAY1 4/13 研究紹介演習・高等教育の現在、東大 FFP の概要と意義「教員としての 1 分間研究紹介」の実践を行います。また、その参観と相互評価を通して、受講者相互の連携を高め、学ぶ環境を整えます。高等教育の変化について学び大学のおかれている状況を理解し、東京大学フューチャーファカルティプログラムの概要と意義を確認します。演習：1 分間研究紹介と相互評価 DAY2 4/27 クラスデザイン 授業設計の基礎を学びつつ、構成の指針や観点も踏まえて、自身が設定した授業科目の 1 コマを設計について学びます。学生の主体的な学習が『実る』ために不可欠なモチベーションについて理解します。学習者主体の授業方法として注目を集めているアクティブラーニングの複数の手法について体験を通して学びます。演習：アクティブラーニングの方法体験、6 分間クラスデザインシートの作成 DAY3 5/18 評価 授業における評価の方法や意義について理解します。学生の学びを促し、レポート課題等の評価に役立つルーブリックを作成します。演習：ルーブリックによる採点とルーブリックの作成 DAY4 5/25 コースデザイン（シラバス）シラバスの基本的構成を知り、作成の目的と役割の重要性について理解します。自身の専門についての初年次教育を担当すると仮定したシラバスを作成します。また、特に授業の構造化に役立つグラフィックシラバスに取り組みます。演習：シラバス改善、グラフィックシラバス作成 DAY5 6/8 授業改善とふりかえり 模擬授業の事例の授業改善を中心しつつ学生参加をうながすようなファシリテーションについて学びます。これまでの授業全体を通した振り返りを行い、学んだこと等についてポスターツアーを経験しながら共有します。演習：模擬授業検討会、ポスターツアー DAY6 6/22 模擬授業 ～実施(1)と改善～ 4 グループにわかれ、模擬授業の演習を行います。メンバー同士で議論を重ねつつ、授業デザインや教授方法について学びを深めながら、模擬授業の改善をはかります。演習：模擬授業実施と相互評価 DAY7 7/6 模擬授業 ～実施(2)～ 2 グループにわかれ、2 回目の模擬授業を実施し相互評価を行います。演習：模擬授業実施と相互評価 DAY8 7/20 SAP チャート作成によるキャリアパス展望 自分の教育・研究、その他の活動についてふりかえって俯瞰し、その活動の核を見出します。大学教員としてのキャリアパスを展望します。演習：SAP チャート作成

授 業 の 方 法	全てオンラインで受講できます。基本はフルオンラインの授業ですが、DAY8 のみハイブリッドで実施予定です。本授業では、アクティブラーニングの実際の方法を体験的に学ぶことを目的として、グループワークやペアワークをはじめとする相互学習形式を多く取り入れますので、ただ聴くだけではなく積極的な授業参加が求められる授業です。これらは、全てオンライン形式で実施します。携帯電話やタブレットのみでは受講できません。PC での受講が必須となります。また、本授業は基本的に日本語でのコミュニケーションを前提としています。英語で本内
成 績 評 価 方 法	授業への参加状況 25%課題の提出状況および質的評価 75%(内訳)100 点満点とした場合の各配点授業の参加状況 25 個人ワークへの取り組み 10 グループワークへの貢献 15 * 授業の参加状況については、基本的な受講態度を考慮します。授業に集中し、真摯に取り組むグループワークや全体に貢献する姿勢を評価します。授業中に他用を行う、グループワークの進行を妨げる、加わらない、などの態度が見られる場合に減点とします。* ただし、模擬授業の回については、原則出席してください。2 回(DAY6, DAY7)とも欠席の場合は、修了条件である「欠席回数が 2 回以下」を満たしていても、修了とは認められません。課題の提出状況および質的評価 75 研究紹介の実施 6 シラバス・グラフィックシラバス 15 クラスデザイン 10 模擬授業 20 各回の振り返り 24(3*8 回)
教 科 書	教科書は特に定めません。配布資料によって授業を進めます。
履修上の注意・備考	3 月下旬になるとエントリーフォームがオープンします。定員(25 名)がありますので選考を行います。単なる授業登録のみでは受講は認められませんのでご注意ください。前提知識は特に必要としません。本学の正規大学院生は「大学教育開発論」として 2 単位が認められます。単位取得を希望する者は、各研究科にて受講登録を行ってください(単位取得を希望しない場合には受講登録は不要です)。
そ の 他	(受講ルール) -本授業は一日で 2 コマ連続の実施です。基本的に全ての回に出席してください。授業における学習者間の学びが重要と考えますので、4 コマ分(2 日間)を越えて休んだ場合はいかなる理由でも不可とし、修了とはみなしませんが(原則登録曜日の受講としますが、やむを得ない場合異なる曜日開講の授業の振替受講が可能です)。なお、この例外として、DAY6, DAY7 いずれも欠席となる場合には、4 コマ分以内であっても修了とはみなしませんが(模擬授業の実施が大変重要であるためです)。-欠席の場合には授業日午前 10 時までに欠席

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-214-16	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	栗田 佳代子				
授 業 科 目	共通科目				
講 義 題 目	大学教育開発論 Teaching Development in Higher Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	授業の概要 現在、大学教員としてのキャリアを進むにあたっては、研究者としてだけでなく、教育者としての資質も問われています。本授業は、東京大学フューチャーファカルティプログラムとして、学生が主体的に学ぶために必要な学生のモチベーションの高め方、授業デザインやシラバス、評価方法などを学びます。また、アクティブラーニングの手法を取り入れたグループワークを多く経験し、模擬授業の実践も行います。多様な研究領域から集う受講者相互の学び合いは、新しい視点の獲得につながり、また、プログラムの修了後も継続するネットワークを培います。本授業で学んだことは「目的・目標を明確にし、達成するためのデザイン」や「伝えたいことが確かに相手に伝わるコミュニケーション」を学ぶという点で研究活動の向上にも活かせることでしょう。また、新型コロナウイルス感染症への対応のためすべての授業回をオンラインでの開催となりますが、オンライン授業の特性を生かした授業を体験し、自らも実施できることを目指します。目的と目標（目的）本授業では、未来の大学教員として、責務としての「教育」の重要性を認識し、学生の立場にたった教育の設計と実行を可能にすることを目的とします。そのために、授業実施に向けた実践的な知識やスキルを多様な専門領域の受講生とともに実際に体験し、互いに学び合いながら獲得し、さらに、研究だけでなく教育についても探究し続ける姿勢を身につけます。（目標）-高等教育の現状の概要について説明できる-効果的なデリバリースキルの観点を知り、自分のスキルの向上につなげる-グループワークに積極的に参加し、当事者およびファシリテーターとしてのコミュニケーション力をつける-学生が主体的に学べる 1 回の授業および授業全体のデザインができる-基礎知識をふまえた評価をデザインできる-学んだ知識を模擬授業として活用し実施できる-キャリアパスについて考え、日頃の活動や今後の展望について整理できる
授 業 計 画	大学教育開発論は木曜クラス、金曜クラスの 2 つ開講していますが、どちらも同じ内容です。授業は原則的に隔週で 2 コマ続きで行います。下記の日程の予定ですが、万が一変更がある場合には予めお知らせします。DAY1 4/14 研究紹介演習・高等教育の現在、東大 FFP の概要と意義「教員としての 1 分間研究紹介」の実践を行います。また、その参観と相互評価を通して、受講者相互の連携を高め、学ぶ環境を整えます。 高等教育の変化について学び大学のおかれている状況を理解し、東京大学フューチャーファカルティプログラムの概要と意義を確認します。 演習：1 分間研究紹介と相互評価 DAY2 4/28 クラスデザイン 授業設計の基礎を学びつつ、構成の指針や観点も踏まえて、自身が設定した授業科目の 1 コマを設計について学びます。 学生の主体的な学習が『実る』ために不可欠なモチベーションについて理解します。学習者主体の授業方法として注目を集めているアクティブラーニングの複数の手法について体験を通して学びます。 演習：アクティブラーニングの方法体験、6 分間クラスデザインシートの作成 DAY3 5/19 評価 授業における評価の方法や意義について理解します。学生の学びを促し、レポート課題等の評価に役立つルーブリックを作成します。 演習：ルーブリックによる採点とルーブリックの作成 DAY4 5/26 コースデザイン（シラバス）シラバスの基本的構成を知り、作成の目的と役割の重要性について理解します。自身の専門についての初年次教育を担当すると仮定したシラバスを作成します。また、特に授業の構造化に役立つグラフィックシラバスに取り組みます。演習：シラバス改善、グラフィックシラバス作成 DAY5 6/9 授業改善とふりかえり 模擬授業の事例の授業改善を中心しつつ学生参加をうながすようなファシリテーションについて学びます。 これまでの授業全体を通した振り返りを行い、学んだこと等についてポスターツアーを経験しながら共有します。 演習：模擬授業検討会、ポスターツアー DAY6 6/23 模擬授業 ～実施(1)と改善～ 4 グループにわかれ、模擬授業の演習を行います。メンバー同士で議論を重ねつつ、授業デザインや教授方法について学びを深めながら、模擬授業の改善をはかります。 演習：模擬授業実施と相互評価 DAY7 7/7 模擬授業 ～実施(2)～ 2 グループにわかれ、2 回目の模擬授業を実施し相互評価を行います。 演習：模擬授業実施と相互評価 DAY8 7/21 SAP チャート作成によるキャリアパス展望 自分の教育・研究、その他の活動についてふりかえって俯瞰し、その活動の核を見出します。大学教員としてのキャリアパスを展望します。 演習：SAP チャート作成

授 業 の 方 法	全てオンラインで受講できます。基本はフルオンラインの授業ですが、DAY8 のみハイブリッドで実施予定です。本授業では、アクティブラーニングの実際の方法を体験的に学ぶことを目的として、グループワークやペアワークをはじめとする相互学習形式を多く取り入れますので、ただ聴くだけではなく積極的な授業参加が求められる授業です。これらは、全てオンライン形式で実施します。携帯電話やタブレットのみでは受講できません。PC での受講が必須となります。また、本授業は基本的に日本語でのコミュニケーションを前提としています。英語で本内
成 績 評 価 方 法	授業への参加状況 25%課題の提出状況および質的評価 75%(内訳)100 点満点とした場合の各配点授業の参加状況 25 個人ワークへの取り組み 10 グループワークへの貢献 15 * 授業の参加状況については、基本的な受講態度を考慮します。授業に集中し、真摯に取り組むグループワークや全体に貢献する姿勢を評価します。授業中に他用を行う、グループワークの進行を妨げる、加わらない、などの態度が見られる場合に減点とします。* ただし、模擬授業の回については、原則出席してください。2 回(DAY6, DAY7)とも欠席の場合は、修了条件である「欠席回数が 2 回以下」を満たしていても、修了とは認められません。課題の提出状況および質的評価 75 研究紹介の実施 6 シラバス・グラフィックシラバス 15 クラスデザイン 10 模擬授業 20 各回の振り返り 24(3*8 回)
教 科 書	教科書は特に定めません。配布資料によって授業を進めます。
履修上の注意・備考	3 月下旬になるとエントリーフォームがオープンします。定員(25 名)がありますので選考を行います。単なる授業登録のみでは受講は認められませんのでご注意ください。前提知識は特に必要としません。本学の正規大学院生は「大学教育開発論」として 2 単位が認められます。単位取得を希望する者は、各研究科にて受講登録を行ってください(単位取得を希望しない場合には受講登録は不要です)。
そ の 他	(受講ルール) -本授業は一日で 2 コマ連続の実施です。基本的に全ての回に出席してください。授業における学習者間の学びが重要と考えますので、4 コマ分(2 日間)を越えて休んだ場合はいかなる理由でも不可とし、修了とはみなしませんが(原則登録曜日の受講としますが、やむを得ない場合異なる曜日開講の授業の振替受講が可能です)。なお、この例外として、DAY6, DAY7 いずれも欠席となる場合には、4 コマ分以内であっても修了とはみなしませんが(模擬授業の実施が大変重要であるためです)。-欠席の場合には授業日午前 10 時までに欠席

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-214-17	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	栗田 佳代子				
授 業 科 目	共通科目				
講 義 題 目	大学教育開発論 Teaching Development in Higher Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	授業の概要 現在、大学教員としてのキャリアを進むにあたっては、研究者としてだけでなく、教育者としての資質も問われています。本授業は、東京大学フューチャーファカルティプログラムとして、学生が主体的に学ぶために必要な学生のモチベーションの高め方、授業デザインやシラバス、評価方法などを学びます。また、アクティブラーニングの手法を取り入れたグループワークを多く経験し、模擬授業の実践も行います。多様な研究領域から集う受講者相互の学び合いは、新しい視点の獲得につながり、また、プログラムの修了後も継続するネットワークを培います。本授業で学んだことは「目的・目標を明確にし、達成するためのデザイン」や「伝えたいことが確かに相手に伝わるコミュニケーション」を学ぶという点で研究活動の向上にも活きることでしょう。また、新型コロナウイルス感染症への対応のためすべての授業回をオンラインでの開催となりますが、オンライン授業の特性を生かした授業を体験し、自らも実施できることを目指します。目的と目標（目的）本授業では、未来の大学教員として、責務としての「教育」の重要性を認識し、学生の立場にたった教育の設計と実行を可能にすることを目的とします。そのために、授業実施に向けた実践的な知識やスキルを多様な専門領域の受講生とともに実際に体験し、互いに学び合いながら獲得し、さらに、研究だけでなく教育についても探究し続ける姿勢を身につけます。（目標）-高等教育の現状の概要について説明できる-効果的なデリバリースキルの観点を知り、自分のスキルの向上につなげる-グループワークに積極的に参加し、当事者およびファシリテーターとしてのコミュニケーション力をつける-学生が主体的に学べる 1 回の授業および授業全体のデザインができる-基礎知識をふまえた評価をデザインできる-学んだ知識を模擬授業として活用し実施できる-キャリアパスについて考え、日頃の活動や今後の展望について整理できる
授 業 計 画	大学教育開発論は木曜クラス、金曜クラスの 2 つ開講していますが、どちらも同じ内容です。授業は原則的に隔週で 2 コマ続きで行います。下記の日程の予定ですが、万が一変更がある場合には予めお知らせします。DAY1 10/12 研究紹介演習・高等教育の現在、東大 FFP の概要と意義「教員としての 1 分間研究紹介」の実践を行います。また、その参観と相互評価を通して、受講者相互の連携を高め、学ぶ環境を整えます。高等教育の変化について学び大学のおかれている状況を理解し、東京大学フューチャーファカルティプログラムの概要と意義を確認します。演習：1 分間研究紹介と相互評価 DAY2 10/26 クラスデザイン 授業設計の基礎を学びつつ、構成の指針や観点も踏まえて、自身が設定した授業科目の 1 コマを設計について学びます。学生の主体的な学習が『実る』ために不可欠なモチベーションについて理解します。学習者主体の授業方法として注目を集めているアクティブラーニングの複数の手法について体験を通して学びます。演習：アクティブラーニングの方法体験、6 分間クラスデザインシートの作成 DAY3 11/9 評価 授業における評価の方法や意義について理解します。学生の学びを促し、レポート課題等の評価に役立つルーブリックを作成します。演習：ルーブリックによる採点とルーブリックの作成 DAY4 11/16 コースデザイン（シラバス）シラバスの基本的構成を知り、作成の目的と役割の重要性について理解します。自身の専門についての初年次教育を担当すると仮定したシラバスを作成します。また、特に授業の構造化に役立つグラフィックシラバスに取り組みます。演習：シラバス改善、グラフィックシラバス作成 DAY5 11/30 授業改善とふりかえり 模擬授業の事例の授業改善を中心しつつ学生参加をうながすようなファシリテーションについて学びます。これまでの授業全体を通じた振り返りを行い、学んだこと等についてポスターツアーを経験しながら共有します。演習：模擬授業検討会、ポスターツアー DAY6 12/14 模擬授業 ～実施(1)と改善～ 4 グループにわかれ、模擬授業の演習を行います。メンバー同士で議論を重ねつつ、授業デザインや教授方法について学びを深めながら、模擬授業の改善をはかります。演習：模擬授業実施と相互評価 DAY7 1/11 模擬授業 ～実施(2)～ 2 グループにわかれ、2 回目の模擬授業を実施し相互評価を行います。演習：模擬授業実施と相互評価 DAY8 1/18 SAP チャート作成によるキャリアパス展望 自分の教育・研究、その他の活動についてふりかえって俯瞰し、その活動の核を見出します。大学教員としてのキャリアパスを展望します。演習：SAP チャート作成

授 業 の 方 法	全てオンラインで受講できます。基本はフルオンラインの授業ですが、DAY8 のみハイブリッドで実施予定です。本授業では、アクティブラーニングの実際の方法を体験的に学ぶことを目的として、グループワークやペアワークをはじめとする相互学習形式を多く取り入れますので、ただ聴くだけではなく積極的な授業参加が求められる授業です。これらは、全てオンライン形式で実施します。携帯電話やタブレットのみでは受講できません。PC での受講が必須となります。また、本授業は基本的に日本語でのコミュニケーションを前提としています。英語で本内
成 績 評 価 方 法	授業への参加状況 25%課題の提出状況および質的評価 75%(内訳)100 点満点とした場合の各配点授業の参加状況 25 個人ワークへの取り組み 10 グループワークへの貢献 15 * 授業の参加状況については、基本的な受講態度を考慮します。授業に集中し、真摯に取り組むグループワークや全体に貢献する姿勢を評価します。授業中に他用を行う、グループワークの進行を妨げる、加わらない、などの態度が見られる場合に減点とします。 * ただし、模擬授業の回については、原則出席してください。2 回(DAY6, DAY7)とも欠席の場合は、修了条件である「欠席回数が 2 回以下」を満たしていても、特別な場合を除き修了とは認められません。課題の提出状況および質的評価 75 研究紹介の実施 6 シラバス・グラフィックシラバス 15 クラスデザイン 10 模擬授業 20 各回の振り返り 24(3*8 回)
教 科 書	教科書は特に定めません。配布資料によって授業を進めます。
履修上の注意・備考	9 月になるとエントリーフォームがオープンします。定員(25 名)がありますので選考を行います。単なる授業登録のみでは受講は認められませんのでご注意ください。前提知識は特に必要としません。本学の正規大学院生は「大学教育開発論」として 2 単位が認められます。単位取得を希望する者は、各研究科にて受講登録を行ってください(単位取得を希望しない場合には受講登録は不要です)。
そ の 他	(受講ルール) -本授業は一日で 2 コマ連続の実施です。基本的に全ての回に出席してください。授業における学習者間の学びが重要と考えますので、4 コマ分(2 日間)を越えて休んだ場合はいかなる理由でも不可とし、修了とはみなしませんが(原則登録曜日の受講としますが、やむを得ない場合異なる曜日開講の授業の振替受講が可能です)。なお、この例外として、DAY6, DAY7 いずれも欠席となる場合には、4 コマ分以内であっても修了とはみなしませんが(模擬授業の実施が大変重要であるためです)。-欠席の場合には授業日午前 10 時までに欠席

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-214-18	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	栗田 佳代子				
授 業 科 目	共通科目				
講 義 題 目	大学教育開発論 Teaching Development in Higher Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	授業の概要 現在、大学教員としてのキャリアを進むにあたっては、研究者としてだけでなく、教育者としての資質も問われています。本授業は、東京大学フューチャーファカルティプログラムとして、学生が主体的に学ぶために必要な学生のモチベーションの高め方、授業デザインやシラバス、評価方法などを学びます。また、アクティブラーニングの手法を取り入れたグループワークを多く経験し、模擬授業の実践も行います。多様な研究領域から集う受講者相互の学び合いは、新しい視点の獲得につながり、また、プログラムの修了後も継続するネットワークを培います。本授業で学んだことは「目的・目標を明確にし、達成するためのデザイン」や「伝えたいことが確かに相手に伝わるコミュニケーション」を学ぶという点で研究活動の向上にも活きることでしょう。また、新型コロナウイルス感染症への対応のためすべての授業回をオンラインでの開催となりますが、オンライン授業の特性を生かした授業を体験し、自らも実施できることを目指します。目的と目標（目的）本授業では、未来の大学教員として、責務としての「教育」の重要性を認識し、学生の立場にたった教育の設計と実行を可能にすることを目的とします。そのために、授業実施に向けた実践的な知識やスキルを多様な専門領域の受講生とともに実際に体験し、互いに学び合いながら獲得し、さらに、研究だけでなく教育についても探究し続ける姿勢を身につけます。（目標）-高等教育の現状の概要について説明できる-効果的なデリバリースキルの観点を知り、自分のスキルの向上につなげる-グループワークに積極的に参加し、当事者およびファシリテーターとしてのコミュニケーション力をつける-学生が主体的に学べる 1 回の授業および授業全体のデザインができる-基礎知識をふまえた評価をデザインできる-学んだ知識を模擬授業として活用し実施できる-キャリアパスについて考え、日頃の活動や今後の展望について整理できる
授 業 計 画	大学教育開発論は木曜クラス、金曜クラスの 2 つ開講していますが、どちらも同じ内容です。授業は原則的に隔週で 2 コマ続きで行います。下記の日程の予定ですが、万が一変更がある場合には予めお知らせします。DAY1 10/13 研究紹介演習・高等教育の現在、東大 FFP の概要と意義「教員としての 1 分間研究紹介」の実践を行います。また、その参観と相互評価を通して、受講者相互の連携を高め、学ぶ環境を整えます。 高等教育の変化について学び大学のおかれている状況を理解し、東京大学フューチャーファカルティプログラムの概要と意義を確認します。 演習：1 分間研究紹介と相互評価 DAY2 10/27 クラスデザイン 授業設計の基礎を学びつつ、構成の指針や観点も踏まえて、自身が設定した授業科目の 1 コマを設計について学びます。 学生の主体的な学習が『実る』ために不可欠なモチベーションについて理解します。学習者主体の授業方法として注目を集めているアクティブラーニングの複数の手法について体験を通して学びます。 演習：アクティブラーニングの方法体験、6 分間クラスデザインシートの作成 DAY3 11/10 評価 授業における評価の方法や意義について理解します。学生の学びを促し、レポート課題等の評価に役立つルーブリックを作成します。 演習：ルーブリックによる採点とルーブリックの作成 DAY4 11/17 コースデザイン（シラバス）シラバスの基本的構成を知り、作成の目的と役割の重要性について理解します。自身の専門についての初年次教育を担当すると仮定したシラバスを作成します。また、特に授業の構造化に役立つグラフィックシラバスに取り組みます。演習：シラバス改善、グラフィックシラバス作成 DAY5 12/1 授業改善とふりかえり 模擬授業の事例の授業改善を中心しつつ学生参加をうながすようなファシリテーションについて学びます。 これまでの授業全体を通じた振り返りを行い、学んだこと等についてポスターツアーを経験しながら共有します。 演習：模擬授業検討会、ポスターツアー DAY6 12/15 模擬授業 ～実施(1)と改善～ 4 グループにわかれ、模擬授業の演習を行います。メンバー同士で議論を重ねつつ、授業デザインや教授方法について学びを深めながら、模擬授業の改善をはかります。 演習：模擬授業実施と相互評価 DAY7 1/12 模擬授業 ～実施(2)～ 2 グループにわかれ、2 回目の模擬授業を実施し相互評価を行います。 演習：模擬授業実施と相互評価 DAY8 1/19 SAP チャート作成によるキャリアパス展望 自分の教育・研究、その他の活動についてふりかえって俯瞰し、その活動の核を見出します。大学教員としてのキャリアパスを展望します。 演習：SAP チャート作成

授 業 の 方 法	全てオンラインで受講できます。基本はフルオンラインの授業ですが、DAY8 のみハイブリッドで実施予定です。本授業では、アクティブラーニングの実際の方法を体験的に学ぶことを目的として、グループワークやペアワークをはじめとする相互学習形式を多く取り入れますので、ただ聴くだけではなく積極的な授業参加が求められる授業です。これらは、全てオンライン形式で実施します。携帯電話やタブレットのみでは受講できません。PC での受講が必須となります。また、本授業は基本的に日本語でのコミュニケーションを前提としています。英語で本内
成 績 評 価 方 法	授業への参加状況 25%課題の提出状況および質的評価 75%(内訳)100 点満点とした場合の各配点授業の参加状況 25 個人ワークへの取り組み 10 グループワークへの貢献 15 * 授業の参加状況については、基本的な受講態度を考慮します。授業に集中し、真摯に取り組むグループワークや全体に貢献する姿勢を評価します。授業中に他用を行う、グループワークの進行を妨げる、加わらない、などの態度が見られる場合に減点とします。* ただし、模擬授業の回については、原則出席してください。2 回(DAY6, DAY7)とも欠席の場合は、修了条件である「欠席回数が 2 回以下」を満たしていても、特別な場合を除き修了とは認められません。課題の提出状況および質的評価 75 研究紹介の実施 6 シラバス・グラフィックシラバス 15 クラスデザイン 10 模擬授業 20 各回の振り返り 24(3*8 回)
教 科 書	教科書は特に定めません。配布資料によって授業を進めます。
履修上の注意・備考	9 月になるとエントリーフォームがオープンします。定員(25 名)がありますので選考を行います。単なる授業登録のみでは受講は認められませんのでご注意ください。前提知識は特に必要としません。本学の正規大学院生は「大学教育開発論」として 2 単位が認められます。単位取得を希望する者は、各研究科にて受講登録を行ってください(単位取得を希望しない場合には受講登録は不要です)。
そ の 他	(受講ルール) -本授業は一日で 2 コマ連続の実施です。基本的に全ての回に出席してください。授業における学習者間の学びが重要と考えますので、4 コマ分(2 日間)を越えて休んだ場合はいかなる理由でも不可とし、修了とはみなしませんが(原則登録曜日の受講としますが、やむを得ない場合異なる曜日開講の授業の振替受講が可能です)。なお、この例外として、DAY6, DAY7 いずれも欠席となる場合には、4 コマ分以内であっても修了とはみなしませんが(模擬授業の実施が大変重要であるためです)。-欠席の場合には授業日午前 10 時までに欠席

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-214-19	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	栗田 佳代子、HERVAS NICOLAS GABRI				
授 業 科 目	共通科目				
講 義 題 目	Teaching Development in Higher Education in English Teaching Development in Higher Education in English				

授業の目標・概要	This course (also called "The University of Tokyo Global Future Faculty Development Program" and represented with the acronym "UTokyo Global FFDP") aims to contribute to the educational development of future university teachers. Participants learn about teaching & learning methods and assessment strategies, how to enhance students' active learning, how to design a syllabus and lessons with a learner-directed approach, and how to engage into the teaching profession maintaining an inclusive stance. The course emphasizes the development of a critical and scholarly approach to the teaching profession, inviting the participants to learn through reflection, discussion, and learning by doing. The course is based on flipped classroom; participants watch short videos before the class and in class discuss, reflect, and practice with their peers. UTokyo Global FFDP seeks to contribute to the training of future faculty members. To do so, it aims to: ▪ Promote professional & educational reflection, discussion, and critical pedagogical thinking. ▪ Contribute to the development of key educational & transversal competences to support learner-directed teaching-learning processes. ▪ Nurture a scholarly, evidence-based, inclusive & ethical approach to teaching to educational research. ▪ Provide learning by doing opportunities for a congruent educational development. ▪ Support a cross-cultural & global approach to the academic profession and to teaching and learning. ▪ Cultivate continuous development, lifelong learning, and community-building attitudes and opportunities.
授 業 計 画	0. Briefing We introduce ourselves, present the course, explore the learning environment, and solve doubts before beginning. 1. The science of learning. How do students learn? We explore and discuss what the science of learning tells us about how people learn and its practical implications over the design of our courses and lessons. Many of these ideas involve an inclusive approach to education. 2. Teaching-learning methods, strategies, & techniques. How can we contribute to the students' learning? We build on Day 1 to discuss active learning and learn and practice in relation with different methods, strategies and techniques that promote it. Among others, we address flipped classroom, peer-instruction, TBL, jigsaw, fishbowl, etc. 3. Assessment, feedback, and rubrics. How can we obtain information on how/what students learn? We learn and practice in relation with the different purposes of assessment, when/how/who can be involved, and its connections with formative feedback. Also, we practice the creation of questions for multiple-choice tests and rubrics. 4. Course and syllabus design. How can we design and improve our courses and syllabi? We learn and practice in relation with course and syllabus design, exploring their different components (with special emphasis on learning outcomes), and the integration of what we learnt on Day 2 and Day 3. 5. Class design. How can we design, deliver, and improve our classes? Building on the previous sessions, we learn and practice in relation with how to structure a class and its components/sequence. Participants design a brief class that they will teach in the following days. 6. Class design & instruction I. How can we design, deliver, and improve our classes? We teach the brief class designed during Day 5 and receive constructive feedback from our peers to improve it. 7. Class design & instruction II. How can we design, deliver, and improve our classes? We teach the same class (modified after receiving feedback) and we receive feedback to continue improving it. 8. Deconstructing knowledge and career paths. Is what we learnt unquestionable? And, from now on, which is my path as a university teacher? We problematize some contents addressed during the course, generating reflection and critical thinking. Also, we address our career paths as academics in higher education and reflect about our future career paths.
授 業 の 方 法	The following are the key features of this course in terms of its methods and format: ▪ Flipped classroom. Different sessions require to, beforehand, watch a video to make class participation fruitful. ▪ Hybrid.

	Days 0 and day 5 to 8 are in person. Days 1 to
成績評価方法	Assessment in this course is a continuous process with two goals: (1) offering qualitative feedback to guide learning, and (2) gathering information to adjust the course to the participants' learning moment. Grading involves a 100-point allotment system and includes two segments. These two segments incorporate activities that make possible to demonstrate the achievement of the learning outcomes. To complete the course, participants need to get a pass in both segments (assessment criteria are shared at the beginning of the course): a)Engagement and contribution during the classes: 25 points. Quality and quantity of the participants' contributions during the classes/groupwork (to assess by the participants through peer-/self-assessment and by the lecturer). b)Assignments: 75 points. Mainly assessed by the lecturer with sporadic peer-assessment.▪ Syllabus design: 25 points.▪ Class design & instruction: 25 points.▪ Other class assignments: 25 points.
教科書	None. Video materials, handouts and references for the different topics will be provided.
履修上の注意・備考	These are basic policies to follow the course satisfactorily. They are open to the participants' insights, and we will make our best to accommodate personal circumstances, so please let us know when these emerge.▪ Attendance. The course relies on cooperati
その他	Personal message to the participantsThis is Gabriel, lecturer of the course! If you read the whole syllabus to this point, congratulations and thank you! If not (…), try to do it; I know you have little time, but it can solve some doubts that might emerge

本研究科他コース学生	履修可
本学他研究科学生	履修可
他大学生(特別聴講学生等)	履修可

時 間 割 コー ド	23-215-01	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	清河 幸子				
授 業 科 目	教授・学習心理学基本研究				
講 義 題 目	教授・学習過程の心理学 I Psychology of Learning and Instruction I				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	様々な心理学的現象がなぜ生じるのかについて、妥当かつシンプルな説明を示すことは研究を進めていく上で必須である。本科目では、各自の関心に合った英語論文を選定し、そこで示されている現象について、各自が説明を提示し、よりよい説明となるよう議論する。なお、現象は教授・学習もしくは認知心理学領域のものを歓迎するが、これに限定しない。
授 業 計 画	心理学的現象に関する説明を考え、よりよい説明となるよう、参加者全員で討論を行う。
授 業 の 方 法	出題者は英語論文を選定し、説明の対象となる現象について簡単にまとめ、報告する。それを受けて、「その現象がどのようにして生じたのか」についての説明を参加者全員が考え、課題として提出する。授業時には「たたき台」となる説明を中心に、どのような説明が望ましいかを全員で議論する。なお、より具体的な進め方については、初回授業時に詳しく説明する。
成 績 評 価 方 法	出題者としての発表、課題の提出、授業時の議論への参加によって総合的に評価する。
教 科 書	使用しない。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	担当回数は受講者数に応じて決定する。課題は毎回出される。積極的な参加を期待する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-215-02	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	遠藤 利彦				
授 業 科 目	発達心理学基本研究				
講 義 題 目	感情と進化・文化 Evolutionary and Cultural Psychology of Human Emotions				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	私たちが日々、経験した表出する種々の感情は、私たち個々人の内的生活や心理・生理的適応において、また私たち個人と他者との関係性の構築や維持において、あるいはまた私たちを取り巻く社会・文化的風土(climate)の形成において、きわめて多様かつ不可欠の役割を果たしていると考えられる。この演習では、主に進化に由来する感情の基本的性質と、それと人間関係、集団、文化との関わりなどについて広く概観・整理したテキストを批判的に精読することを通して、私たちの日常の社会的な生活全般における感情の機能と意味について、進化論と文化論、両方の視座から深く統合的に考究することにした。
授 業 計 画	初回に各回の担当者を定め、全体のスケジュールを組む。
授 業 の 方 法	各回の担当者が、テキストにおける担当箇所の概要とそれに対する自身のコメントを発表し、それに基づいて全員参加型の議論を行う。また、必要に応じて、教員が補足的あるいは発展的な内容の講義を行うものとする。
成 績 評 価 方 法	授業への出席状況と発表内容および毎回の議論への参加度などに基づいて、総合的に評価を行う。
教 科 書	教員が複数のテキストの候補を挙げ、参加者と相談の上、その内の1～2冊を選択・決定する。
履修上の注意・備考	授業時に指示する参考文献等に、授業後、可能な限り、目を通すこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-215-03	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	針 生 悦 子				
授 業 科 目	発達心理学基本研究				
講 義 題 目	ことばと認知の発達 I Language and Cognitive Development I				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	言語を獲得するとはどのようなことで、そのためには何が必要なのか。また、言語を獲得することで、思考や認知、人とのかかわり方などはどのような影響を受けるのか。このような問題意識のもと、基本的な文献の購読を行う。
授 業 計 画	この領域の基本文献をとりあげ、輪読する。
授 業 の 方 法	演習
成 績 評 価 方 法	授業における発表、討論への参加、レポートによる。
教 科 書	初回授業時に指示する。
履修上の注意・備考	初回授業時において、発表の割り当てやスケジュールなどを決定するので、履修希望者は必ず初回授業に出席すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-215-04	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	岡田 猛				
授 業 科 目	教育認知科学基本研究				
講 義 題 目	創造的認知の心理学 I Psychology of Creative Cognition I				

授 業 の 目 標・概 要	創造性、特に芸術表現活動についての心理学的・認知科学的な研究に関する文献講読により、この領域の基礎的な知見を獲得することを目指す。
授 業 計 画	文献の講読今年度は、広い意味で創造性に関連する論文を読んで議論する。論文のリストは初回の授業で配布。
授 業 の 方 法	広い意味での創造性や芸術創作活動に関する文献を通年で講読する。参加者には、毎回の授業に出席し議論に参加することと、担当論文の発表が求められる。COVID-19 の問題のため、オンラインで授業を実施する。
成 績 評 価 方 法	授業への出席と議論への参加、及び担当論文の発表。
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	毎回の出席
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-215-05	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	岡田 謙介				
授 業 科 目	教育情報科学基本研究				
講 義 題 目	心理統計学演習 Seminar on Psychological Statistics				

授 業 の 目 標・概 要	本科目は、(必ずしも統計学を専門としない)心理学を専攻する大学院生を主たる対象として、心理学研究を行う上で遭遇する課題に対して自ら取り組み、解決する力を養うことを大きな目的として開講する。本年度は、とくに心理学研究における再現性と事前登録関連の話題を主題とし、これらに関わる先行研究の文献を探し、読み、共有しあった上で、方法的な観点を含めた議論を行う。参加者には、心理学の方法論に関連する英語論文・文献を読み、発表し、議論することが求められる。
授 業 計 画	初回において、心理学研究の再現性と事前登録に関するイントロダクションを行い、文献の例を提示する。第2回以降は、各発表者が自ら担当する論文を探し、それに関する発表をもらった上で議論を行う。授業計画は以下のとおりだが、受講者数に応じて適宜変更を行う。1. 心理学研究の再現性と事前登録に関するイントロダクション2. 先行研究の調査・文献収集3. 研究例の検討・議論(1)4. 研究例の検討・議論(2)5. 研究例の検討・議論(3)6. 研究例の検討・議論(4)7. 研究例の検討・議論(5)8. 研究例の検討・議論(6)9. 研究例の検討・議論(7)10. 研究例の検討・議論(8)11. 研究例の検討・議論(9)12. 研究例の検討・議論(10)13. 研究例の検討・議論(11)14. 研究例の検討・議論(12)15. まとめと考察、議論
授 業 の 方 法	演習形式による
成 績 評 価 方 法	発表内容と議論への参加などを総合的に評価する
教 科 書	関連文献を適宜指示する。参考文献は以下のとおり。大久保街亜・岡田謙介(2012). 伝えるための心理統計: 効果量・信頼区間・検定力. 勁草書房. 南風原朝和(2014). 続・心理統計学の基礎――統合的理解を広げ深める. 有斐閣.
履 修 上 の 注 意・備 考	履修を考えている学生は必ず初回に参加すること(事情により参加できない場合には連絡すること)。発表者は自身のノート PC 等を持参して発表を行うことを原則とする。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-215-06	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	岡田 謙介				
授 業 科 目	教育情報科学基本研究				
講 義 題 目	心理統計学特論 Advanced Psychological Statistics				

授 業 の 目 標・概 要	本科目では、Psychological Review, Journal of Mathematical Psychology, Computational Brain & Behavior といった専門誌の論文購読を通して数理心理学の現在を学び、その内容と方法について考察することにより、最新の研究成果や方法を自身の研究に活用できるようになることを目標とする。授業では各回の担当者が自ら選択した論文について発表し、全員で討論を行う。
授 業 計 画	授業計画は以下のとおりだが、受講者数に応じて適宜変更を行う。1. 数理心理学と認知診断モデルに関するイントロダクション2. 先行研究の調査・文献収集3. 研究例の検討・議論(1)4. 研究例の検討・議論(2)5. 研究例の検討・議論(3)6. 研究例の検討・議論(4)7. 研究例の検討・議論(5)8. 研究例の検討・議論(6)9. 研究例の検討・議論(7)10. 研究例の検討・議論(8)11. 研究例の検討・議論(9)12. 研究例の検討・議論(10)13. 研究例の検討・議論(11)14. 研究例の検討・議論(12)15. まとめと考察、議論
授 業 の 方 法	演習(文献講読・議論)による
成 績 評 価 方 法	発表内容および議論への参加などに基づいて総合的に評価する。
教 科 書	Psychological Review, Journal of Mathematical Psychology, Computational Brain & Behavior 等の専門誌に掲載された論文を扱う
履修上の注意・備考	発表には各自の PC を利用してもらう予定である。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-215-07	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	清河 幸子				
授 業 科 目	教授・学習心理学特殊研究				
講 義 題 目	教授・学習過程の心理学Ⅱ Psychology of Learning and InstructionⅡ				

授 業 の 目 標・概 要	学習・問題解決を中心とした認知活動において、言語化が果たす役割について検討した心理学的知見や、実験を主とした研究方法について理解することを目標とする。
授 業 計 画	学習・問題解決を中心とした認知活動において、言語化が果たす役割について検討した実証研究を毎回発表者が紹介し、そこで明らかになったこと、今後検討すべき課題は何か等について受講者全員で討論する。初回授業時により具体的な進め方について指示を行うので、履修予定の人は必ず出席すること。
授 業 の 方 法	毎回2名が発表者となって、テーマに合致した実証研究を紹介する。その後、全員で討論を行う。
成 績 評 価 方 法	発表および討論への参加により評価する。
教 科 書	指定しない。
履修上の注意・備考	積極的な参加を期待する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-215-08	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	遠藤 利彦				
授 業 科 目	発達心理学特殊研究				
講 義 題 目	関係性と子どもの社会情緒的発達 Relationships and Children's Socio-Emotional Development				

授 業 の 目 標・概 要	近年の発達心理学およびその周辺諸科学の成果を広く概観・整理したテキストを精読しながら、特に子どもの社会情緒的発達の様相、および、それらに養育環境、とりわけ種々の関係性(親子関係や家族関係など)や社会文化の特質がいかなる影響を及ぼし得るかについて基本的知見を得る。また、早期段階における個人差が何に起因して生じ、また、それがその後の生涯発達過程においてどのような連続性あるいは不連続性を呈するかなどについても、遺伝と環境に関する最新の諸議論を踏まえつつ考究することとしたい。
授 業 計 画	初回に各回の担当者を定め、全体のスケジュールを組む。
授 業 の 方 法	各回の担当者が、テキストにおける担当箇所の概要とそれに対する自身のコメントを発表し、それに基づいて全員参加型の議論を行う。また、教員が必要に応じて、補足的あるいは発展的な内容の講義を行うものとする。
成 績 評 価 方 法	授業への出席状況と発表内容および毎回の議論への参加度などに基づき、総合的に評価を行う。
教 科 書	教員が複数のテキストの候補を挙げ、参加者と相談の上、その内の1～2冊を選択・決定する。
履修上の注意・備考	授業時に指示する参考文献等に、授業後、可能な限り、目を通すこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-215-09	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	針生 悦子				
授 業 科 目	発達心理学特殊研究				
講 義 題 目	ことばと認知の発達Ⅱ Language and Cognitive Development Ⅱ				

授 業 の 目 標・概 要	言語や認知、社会性、またそれらの発達をアツカフ研究論文の購読を通じて、最新の研究動向、研究手法などについて学ぶ。
授 業 計 画	参加者が、論文を担当し、順次発表を行っていく。
授 業 の 方 法	演習形式
成 績 評 価 方 法	授業における発表や、討論への貢献、レポート
教 科 書	適宜指示する。
履修上の注意・備考	初回授業時に、担当の割り当てをするので、履修希望者は必ず初回の授業に参加すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他大学生(特別聴講学生等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-215-10	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	岡田 猛				
授 業 科 目	教育認知科学特殊研究				
講 義 題 目	創造的認知の心理学Ⅱ Psychology of Creative Cognition Ⅱ				

授 業 の 目 標・概 要	創造性、特に芸術表現活動についての心理学的・認知科学的な研究に関する文献講読により、この領域の基礎的な知見を獲得することを目指す。
授 業 計 画	文献の講読今年度は、広い意味で創造性に関連する論文を読んで議論する。論文のリストは初回の授業で配布。
授 業 の 方 法	広い意味での創造性や芸術創作活動に関する文献を通年で講読する。参加者には、毎回の授業に出席し議論に参加することと、担当論文の発表が求められる。オンラインで授業をする。
成 績 評 価 方 法	授業への出席と議論への参加、及び担当論文の発表。
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	毎回の出席
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コ ー ド	23-215-11	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	宇佐美 慧				
授 業 科 目	教育情報科学特殊研究				
講 義 題 目	量的研究法 Quantitative Research Methods				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	心理統計学に関する基礎的事項と統計ソフト R を用いた分析の実際について幅広く学ぶ。
授 業 計 画	指定された教科書の輪読を中心に進める。
授 業 の 方 法	教科書の輪読。
成 績 評 価 方 法	出席状況, 発表内容, また必要に応じて実施する試験の成績等を通して総合的に判断する。
教 科 書	南風原朝和(2014)続・心理統計学の基礎 有斐閣南風原朝和(2002)心理統計学の基礎 有斐閣ただし、初回講義時に、その他参考文献を紹介する。
履修上の注意・備考	他学部履修を希望する者は事前に教員に連絡すること。
そ の 他	特になし。

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コ ー ド	23-215-12	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	宇佐美 慧				
授 業 科 目	教育情報科学特殊研究				
講 義 題 目	心理統計学の近年の展開 Recent Developments in Psychometrics				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	構造方程式モデリングに基づく縦断データ分析の基礎的事項と近年の研究動向について学び、統計ソフト R による分析演習を行う。
授 業 計 画	担当教員による講義と統計ソフト R による分析演習、および指定された英語論文の輪読を中心に進める。
授 業 の 方 法	講義と論文輪読
成 績 評 価 方 法	出席状況, 発表内容, また必要に応じて実施する試験の成績等を通して総合的に判断する。
教 科 書	初回講義時に紹介する。
履修上の注意・備考	他学部履修を希望する者は事前に教員に連絡すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コ ー ド	23-215-13	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	前川 眞一				
授 業 科 目	教育情報科学特殊研究				
講 義 題 目	心理測定のための数学的道具 Mathematical Tools for Psychometrics				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	心理測定学 (psychometrics) で必要となる数学的方法の基礎を取得する。
授 業 計 画	総和記号演算や行列演算の復習から初めて、確率変数の性質を学び、心理測定で使われる統計モデルの母数の推定方法を R を利用しながら学ぶ。また、機械学習に関しても少しだけ触れる。
授 業 の 方 法	対面ならびのオンラインの両方を利用し、主に講義形式で行う。
成 績 評 価 方 法	中間課題と最終レポート
教 科 書	なし
履修上の注意・備考	授業では R を利用するので、使えることが望ましい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-215-14	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	山本 倫生				
授 業 科 目	教育情報科学特殊研究				
講 義 題 目	心理統計学概論 Statistics in Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	統計的因果推論の基礎を学ぶことで、観察されたデータに基づいて因果を議論し、適切にデータ分析を行えるようになる。特に、人文・社会科学および医学・疫学研究における因果推論の基礎的事項から因果推論の各トピックについて学ぶ。受講後には、この分野の専門書および論文を読めるだけでなく、実際に因果推論を行うための基礎能力を身につけることが目標である。
授 業 計 画	以下の順序で講義を行う。1. 統計的因果推論とは 2. 潜在反応モデル 3. 交絡と交絡調整 4. 傾向スコア 5. マッチング、層別解析 6. セミパラメトリック推定の基礎 7. 二重にロバストな推定 8. 操作変数法 9. DAG と構造的因果モデルの基礎 10. 介入効果とその識別可能条件 11. 調整因子の同定方法 12. 効果の分解 13. 効果の一般化なお、進捗状況などにより授業内容や順序を変更することがある。
授 業 の 方 法	講義形式で行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加(50%)とレポート(50%)を基本として総合的に評価する。
教 科 書	教科書は特に指定しない。講義資料を適宜配布する。
履修上の注意・備考	学部教養程度の確率・統計、線形代数および解析学の知識を前提とする。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他大学生(特別聴講学生等)	履 修 可

時 間 割 コ ー ド	23-215-15	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	清河 幸子				
授 業 科 目	教授・学習心理学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育心理学, 特に教授・学習, 認知の分野で修士論文を執筆する学生に対して, 研究指導を行う。
授 業 計 画	修士論文の作成を念頭において, 大学院における研究について受講生が報告し, 参加者全員で討論を行う。
授 業 の 方 法	演習形式で行う。受講者は担当回に自らの研究の進捗状況について報告する。その報告に対して, 参加者全員で討論を行う。
成 績 評 価 方 法	各自の研究の進捗状況および, 討論への参加状況を踏まえて, 総合的に評価する。
教 科 書	使用しない。
履修上の注意・備考	開講日時は, 受講者と相談の上, 決定する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-215-16	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	清河 幸子				
授 業 科 目	教授・学習心理学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	教育心理学, 特に教授・学習, 認知の分野で博士論文を執筆する学生に対して, 研究指導を行う。
授 業 計 画	博士論文の作成を念頭において, 大学院における研究について受講生が報告し, 参加者全員で討論を行う。
授 業 の 方 法	演習形式で行う。受講者は担当回に自らの研究の進捗状況について報告する。その報告に対して, 参加者全員で討論を行う。
成 績 評 価 方 法	各自の研究の進捗状況および, 討論への参加状況を踏まえて, 総合的に評価する。
教 科 書	使用しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	開講日時は, 受講者と相談の上, 決定する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-215-17	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	植 阪 友 理				
授 業 科 目	教育認知科学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育心理学、特に、教育認知科学分野において、学び手の学習過程の研究や、教師に関する研究、効果的な指導法検討などの研究を行い、修士論文を書こうとしている学生に対し、指導を行う。
授 業 計 画	受講者との個別面談により指導を行う。
授 業 の 方 法	演習形式による。
成 績 評 価 方 法	研究や発表等により、総合的に判断する。
教 科 書	適宜、指示する。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	Slack で情報をやり取りするため、メールにて連絡し、登録のための手続きをとること(yuri-uesaka@p.u-tokyo.ac.jp/yuri.uesaka@ct.u-tokyo.ac.jp)。
そ の 他	植阪研究室は教育学部棟 250 号室に加えて、薬学部607も研究室として利用している。薬学部 607 で面談を行う場合には、以下の道案内に従って訪問されたい。薬学部正面玄関をはいり、目の前右手に見える渡り廊下を渡り、十字路で右に曲がること。十字路右手裏にあるエレベーターで6階に上がり、エレベーターをおりたら、渡り廊下をわたり、扉をあける。扉からみて、左側の部屋607が研究室。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-215-18	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	植 阪 友 理				
授 業 科 目	教育認知科学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育心理学、特に、教育認知科学分野において、学び手の学習過程の研究や、教師に関する研究、効果的な指導法検討などの研究を行い、博士論文を書こうとしている学生に対し、指導を行う。
授 業 計 画	受講者との個別面談により指導を行う。
授 業 の 方 法	演習形式による。
成 績 評 価 方 法	研究や発表等により、総合的に判断する。
教 科 書	適宜、指示する。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	Slack で情報をやり取りするため、メールにて連絡し、登録のための手続きをとること(yuri-uesaka@p.u-tokyo.ac.jp/yuri.uesaka@ct.u-tokyo.ac.jp)。
そ の 他	植阪研究室は教育学部棟 250 号室に加えて、薬学部607も研究室として利用している。薬学部 607 で面談を行う場合には、以下の道案内に従って訪問されたい。薬学部正面玄関をはいり、目の前右手に見える渡り廊下を渡り、十字路で右に曲がること。十字路右手裏にあるエレベーターで6階に上がり、エレベーターをおりたら、渡り廊下をわたり、扉をあける。扉からみて、左側の部屋607が研究室。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コ ー ド	23-215-19	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	遠藤 利彦				
授 業 科 目	発達心理学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	修士論文または博士論文の執筆に向けた研究指導を行う。
授 業 計 画	修士論文および博士論文に関わる研究指導を履修者と相談の上、順次、進めていく。
授 業 の 方 法	基本的に演習形式で行う。
成 績 評 価 方 法	平常点。
教 科 書	特に用いない。
履修上の注意・備考	基本的に、履修は指導学生に限る。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コ ー ド	23-215-20	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	遠藤 利彦				
授 業 科 目	発達心理学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	修士論文または博士論文の執筆に向けた研究指導を行う。
授 業 計 画	修士論文および博士論文に関わる研究指導を履修者と相談の上、順次、進めていく。
授 業 の 方 法	基本的に演習形式で行う。
成 績 評 価 方 法	平常点。
教 科 書	特に用いない。
履修上の注意・備考	基本的に、履修は指導学生に限る。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-215-21	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	針 生 悦 子				
授 業 科 目	発達心理学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	心理学, 特に, 認知, 言語, および発達分野で修士論文を書こうとしている学生に対して, 研究指導, 論文指導をおこなう。
授 業 計 画	履修者各自の研究関心に合わせて, 関連文献の講読を行い, ディスカッションを通じて, 研究テーマの絞り込みを行う。具体的な研究計画を立てたあとは, データの収集, 収集したデータの検討を行い, 修士論文の作成をめざす。
授 業 の 方 法	演習形式。参加者は, 各自の研究の経過や見通しについて発表をおこない, それに対して, 討論・助言をおこなっていく。
成 績 評 価 方 法	演習における発言や発表を総合的に評価する。
教 科 書	適宜指示する。
履修上の注意・備考	参加者はできるだけ, 自分は現在何に取り組んでいるか(問題の絞り込みか, 研究計画の立案か, データ収集か, データの解析か, 論文執筆か)を自覚し, その段階における自身の問題を明確にしなが, 授業にのぞむこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-215-22	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	針 生 悦 子				
授 業 科 目	発達心理学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	心理学, 特に, 認知, 言語, および発達の分野で博士論文を書こうとしている学生に対して, 研究指導, 論文指導をおこなう。
授 業 計 画	履修者各自の研究関心に合わせて, 関連文献の講読を行い, ディスカッションを通じて, 研究テーマの絞り込みを行う。具体的な研究計画を立てたあとは, データの収集, 収集したデータの検討を行い, 報告書(論文)を作成する。このようなプロセスの積み重ねにより, 博士論文の作成をめざす。
授 業 の 方 法	演習形式と個別指導。参加者各自の研究の経過や見通しにもとづき, 議論・助言をおこなっていく。
成 績 評 価 方 法	研究の進め方やその成果を総合的に評価する。
教 科 書	適宜指示する。
履修上の注意・備考	参加者はできるだけ, 自分は現在何に取り組んでいるか(問題の絞り込みか, 研究計画の立案か, データ収集か, データの解析か, 論文執筆か)を自覚し, その段階における自身の問題を明確にしなが, 討論・指導にのぞむこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-215-23	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	野澤 祥子				
授 業 科 目	発達心理学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	保育、社会性の発達に関わるテーマについて、教育心理学的なアプローチによる論文執筆に向けた指導を行う。
授 業 計 画	下記のような研究の進捗状況に応じて、必要な指導・助言を行う。準備期：各自の研究のアイディアを共有し、関連文献をレビューするとともに研究計画を明確化する。実施期：研究計画に基づき研究を実施する。研究の進捗状況を共有する。分析期：得られたデータを分析する。分析結果を共有する。まとめ期：分析結果に基づき、論文化を行う。
授 業 の 方 法	各自の研究計画や進捗状況、論文執筆について指導・助言を行う。
成 績 評 価 方 法	総合的に判断する。
教 科 書	授業時に指定する。
履修上の注意・備考	自ら主体的に研究に取り組み、疑問点を明確にして授業に臨むこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-215-24	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	野澤 祥子				
授 業 科 目	発達心理学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	保育、社会性の発達に関わるテーマについて、教育心理学的なアプローチによる論文執筆に向けた指導を行う。
授 業 計 画	下記のような研究の進捗状況に応じて、必要な指導・助言を行う。準備期：各自の研究のアイディアを共有し、関連文献をレビューするとともに研究計画を明確化する。実施期：研究計画に基づき研究を実施する。研究の進捗状況を共有する。分析期：得られたデータを分析する。分析結果を共有する。まとめ期：分析結果に基づき、論文化を行う。
授 業 の 方 法	各自の研究計画や進捗状況、論文執筆について指導・助言を行う。
成 績 評 価 方 法	総合的に判断する。
教 科 書	授業時に指定する。
履修上の注意・備考	自ら主体的に研究に取り組み、疑問点を明確にして授業に臨むこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-215-25	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	岡田 猛				
授 業 科 目	教育認知科学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	教育心理学の論文指導を通して、院生の研究論文を執筆能力を高める。
授 業 計 画	院生の研究論文を執筆能力を高めるために、教育心理学の論文指導を行う。
授 業 の 方 法	個別指導
成 績 評 価 方 法	総合的に判断する。
教 科 書	特になし
履 修 上 の 注 意・備 考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-215-26	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	岡田 猛				
授 業 科 目	教育認知科学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	教育心理学の論文指導を通して、院生の研究論文を執筆能力を高める。
授 業 計 画	院生の研究論文を執筆能力を高めるために、教育心理学の論文指導を行う。
授 業 の 方 法	個別指導
成 績 評 価 方 法	総合的に判断する。
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-215-27	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	岡田 謙介				
授 業 科 目	教育情報科学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	心理統計学を中心とする分野で修士論文・博士論文等を執筆する学生に対し、各自の研究と発表、議論を通して本質的な研究力を涵養することを目的とした研究指導および論文指導を行う。
授 業 計 画	大学院における研究の計画および進行状況について、受講生からの報告に基づいて討論を行う。原則的に毎週開講し1日につき2名が発表を行う。扱う内容の例は以下のとおり。1. 研究のプロセス2. 先行研究の調査3. リサーチ・クエスションの設定4. 研究デザインの立案5. 研究倫理6. データの収集7. データの分析8. 仮説の検証9. 統計モデリング10. モデルの評価11. モデル比較12. 結論の導出13. 研究結果の統合14. オープンサイエンス15. 査読とリライトのプロセス
授 業 の 方 法	ディスカッションを伴う演習形式による。
成 績 評 価 方 法	各個人の論文執筆過程における研究計画・進行状況、およびその成果を総合的に評価する。
教 科 書	使用しない
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-215-28	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	岡田 謙介				
授 業 科 目	教育情報科学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	心理統計学を中心とする分野で修士論文・博士論文等を執筆する学生に対し、各自の研究と発表、議論を通して本質的な研究力を涵養することを目的とした研究指導および論文指導を行う。
授 業 計 画	大学院における研究の計画および進行状況について、受講生からの報告に基づいて討論を行う。原則的に毎週開講し1日につき2名が発表を行う。扱う内容の例は以下のとおり。1. 研究のプロセス2. 先行研究の調査3. リサーチ・クエスションの設定4. 研究デザインの立案5. 研究倫理6. データの収集7. データの分析8. 仮説の検証9. 統計モデリング10. モデルの評価11. モデル比較12. 結論の導出13. 研究結果の統合14. オープンサイエンス15. 査読とリライトのプロセス
授 業 の 方 法	ディスカッションを伴う演習形式による。
成 績 評 価 方 法	各個人の論文執筆過程における研究計画・進行状況、およびその成果を総合的に評価する。
教 科 書	使用しない
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-215-29	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	宇佐美 慧				
授 業 科 目	教育情報科学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育心理学、とくに、心理統計・教育測定の分野で修士論文・博士論文を書こうとしている学生に対し、研究指導、発表指導、論文指導等を行う。
授 業 計 画	年間にわたり、随時行う。
授 業 の 方 法	研究指導、発表指導
成 績 評 価 方 法	総合的に判断する
教 科 書	指導時に適宜紹介する
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-215-30	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	宇佐美 慧				
授 業 科 目	教育情報科学論文指導				
講 義 題 目	教育心理学論文指導 Dissertation Research in Educational Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育心理学、とくに、心理統計・教育測定の分野で修士論文・博士論文を書こうとしている学生に対し、研究指導、発表指導、論文指導等を行う。
授 業 計 画	年間にわたり、随時行う。
授 業 の 方 法	研究指導、発表指導
成 績 評 価 方 法	総合的に判断する
教 科 書	指導時に適宜紹介する
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-215-31	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	植 阪 友 理				
授 業 科 目	教育認知科学基本研究				
講 義 題 目	教育認知科学特論 Seminar in Educational Cognitive Science				

授 業 の 目 標・概 要	心理学的研究を行う上では、心理学的論文を批判的かつ建設的に見ることは重要なスキルである。そこで、この授業では、リサーチャー・ライク・アクティビティ(RLA)の一貫として「査読者になったつもりでコメントを書く」活動を行う。さらにそのコメントをめぐって、授業の中で議論を行う。最終的には、自分が研究を計画したり、論文を書いていく上での視点などを身につけることを目指す。参加者は、自分の興味関心がある領域の心理学系論文を1本選び、査読コメントを書く。1回目のコメントの際には、良いコメントとはどのようなものかについても共有する。論文は基本的に日本語の論文を用いる。単位を取ることを希望するものについては、欠席した場合には、その授業で扱われた論文に対するコメントを流すことを必須とする。
授 業 計 画	初回(4月10日)にガイダンスを行う。受講を希望する可能性のある学生は、必ず出席すること。初回のみ、「コメントとは？」を共有する。それ以降は毎回、学生がそれぞれの関心で選んだ論文を取り上げ、査読コメントを書いて共有し、議論する。授業の最後には、簡単なレポートを求める。その中で、コメント対象、論文大賞についても投票してもらうので、授業中に使用したレジュメや論文については廃棄しないこと。
授 業 の 方 法	担当者が発表したのち、グループおよび全体で議論する。
成 績 評 価 方 法	選んだ論文に対するコメント、授業中の議論への参加態度、授業後の振り返りシートへの記入状況、最終レポートへの回答から総合的に判断する。
教 科 書	適宜、指示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	授業に関する連絡は全て Slack を通じて行う。このため、受講する可能性があるものは、必ず初回に参加して登録すること。また、単位を取ることを希望する場合で、やむを得ず欠席する場合には、授業の前もしくは後にコメントをスラック上に流すことで、授業に参加したと同等であるとみなす。欠席後、コメントを流していない場合には、単位の取得にかかわることがあるため、留意すること。
そ の 他	心理学系論文に慣れていない学生については、追加で学ぶ必要がある可能性がある。その場合には、他のゼミ受講者や講師に相談すること。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-215-32	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	植阪 友理				
授 業 科 目	教育認知科学特殊研究				
講 義 題 目	教育認知科学演習 Advanced in Educational Cognitive Science				

授 業 の 目 標・概 要	前期には、1本の論文を精読する技術を身につけた。後期(本授業)では、一定数の心理学的論文を読み込み、その中からいかに自分のオリジナリティのある主張を作っていく、人に伝えるのかを学ぶ。本授業では、リサーチャー・ライク・アクティビティ(RLA)の一貫として「学会の講演者になったつもりでレビューを紹介する」という活動を行う。学生は、自分の関心ある領域の国内外の論文を50本から100本読み、オリジナリティの視点からまとめ、最終的に30分ほどの講演を行うことが求められる。修士論文をこれから書く学生については、自分の具体的な実証研究を始める前の準備としても捉えることができるが、学会の講演者のように、幅広い視野とオリジナルの視点を求めたい。授業では、テーマ決め、良いレビューとは何か？、実際のレビュー論文の購読、中間発表などを行う。
授 業 計 画	初回にガイダンスを行う。受講を希望する可能性のある学生は、必ず出席すること。最初の何回かでこれまでの発表のビデオなどをみて、最終的な発表のイメージを持ってもらう。その後、テーマ決めを行い、各自が自分の作業を進める。中間発表までに、いくつかのレビュー論文を読むとともに、「良いレビューとは」について知る機会を設ける。中間発表を行ったあとには、「良いプレゼントとは」について知る機会を設ける。最後は、ゼミ以外のメンバーも招いた会において発表を行う。
授 業 の 方 法	演習形式で行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加態度および最終発表、その後の簡単なレポートを使って総合的に判断する。
教 科 書	適宜、指示する。
履修上の注意・備考	授業に関する連絡は全てSlackを通じて行う。このため、受講する可能性があるものは、必ず初回に参加して登録すること。
そ の 他	なし

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-216-01	単 位 数	1	学 期	S1S2
担 当 教 員	能智 正博、野中 舞子、稲吉 玲美				
授 業 科 目	臨床心理システム論基本研究				
講 義 題 目	臨床心理実習 I (心理実践実習) Practicum in Clinical Psychology I (Advanced Practical Training in Psychology)				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	学内研究機関である心理教育相談室および学外の連携研修機関(精神科病院、クリニック、学校、産業組織など)において臨床業務に参加し、現場実習を行う。その経験の見直しを兼ねてカンファレンスにおいて事例検討を行う。形態として、受付事例を検討する初期カンファレンス、各ゼミで個別にカンファレンスを行う個別カンファレンス、各ゼミが合同して行う合同カンファレンスに分かれる。
授 業 計 画	1.オリエンテーション 2.初期・実習カンファレンス(1)3.合同カンファレンス(1)4.臨床検討会(1)5.初期・実習カンファレンス(2)6.合同カンファレンス(2)7.臨床検討会(2)8.初期・実習カンファレンス(3)9.合同カンファレンス(3)10.臨床検討会(3)11.初期・実習カンファレンス(4)12.合同カンファレンス(4)13.臨床検討会(4)
授 業 の 方 法	受講生は、S1、S2 タームを通じて、学内の心理教育相談室での実習を行う。これに加えて保健医療分野、福祉分野、教育分野それぞれより、少なくとも1施設を選択して心理に関する支援の実習を総計 225 時間以上(心理教育相談室での実習は 150 時間以上、学外施設での実習は 75 時間以上)行う。なお、このうち 153 時間以上は、担当ケースに関する実習とする。毎回、小グループに分かれたケース検討という形で授業を進める。受講生による担当ケースの発表とグループ討議、教員からのコメントによって授業を構成する
成 績 評 価 方 法	実習に対する取組み、出席状況と授業における発表とアクティブな参加状況、必要に応じて課題として出すレポートにより総合的に判断する
教 科 書	特になし
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	受講者の積極的なコミットメントを期待したい
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-02	単 位 数	1	学 期	A1A2
担 当 教 員	能智 正博、野中 舞子、稲吉 玲美				
授 業 科 目	臨床心理システム論基本研究				
講 義 題 目	臨床心理実習Ⅱ Practicum in Clinical PsychologyⅡ				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理実習Ⅰに引き続いて内部実習および外部実習を継続する。テーマ:臨床心理実習Ⅱでは、特に修士課程終了の活動への移行に向けての準備を行う。複数の臨床心理スーパーバイザーからスーパービジョンを受けることを通じて、臨床現場で臨床心理士として活動するための社会性、倫理、他職種との協働などの知識と技能の獲得を主要な教育訓練の目標とする。
授 業 計 画	1.オリエンテーション 2.初期・実習カンファレンス(1)3.合同カンファレンス(1)4.臨床検討会(1)5.初期・実習カンファレンス(2)6.合同カンファレンス(2)7.臨床検討会(2)8.初期・実習カンファレンス(3)9.合同カンファレンス(3)10.臨床検討会(3)11.初期・実習カンファレンス(4)12.合同カンファレンス(4)13.臨床検討会(4)
授 業 の 方 法	学内臨床実習＋外部施設研修＋事例検討会受講生は、A1、A2 タームを通じて、学内の心理教育相談室での実習を行う。これに加えて保健医療分野、福祉分野、教育分野それぞれより、少なくとも1施設を選択して心理に関する支援の実習を総計 225 時間以上(心理教育相談室での実習は 150 時間以上、学外施設での実習は 75 時間以上)行う。なお、このうち 153 時間以上は、担当ケースに関する実習とする。毎回、小グループに分かれたケース検討という形で授業を進める。受講生による担当ケースの発表とグループ討議、教員からのコメントによって授
成 績 評 価 方 法	実習に対する取り組み、出席状況における発表とアクティブな参加状況、必要に応じて課題として出すレポートにより総合的に判断する
教 科 書	特になし
履 修 上 の 注 意・備 考	受講者の積極的なコミットメントを期待したい
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-03	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	野中 舞子				
授 業 科 目	臨床心理カリキュラム論基本研究				
講 義 題 目	臨床心理学特論 I Clinical Psychology I				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理学の初学者を対象に、臨床心理学の全体像と学習にあたっての心構えについて講義する。特に心理援助職を目指すための心構え、教育訓練過程で必要とされる最低限の知識と技能とは何か、倫理について、講義とディスカッションを通して学ぶことがねらいである In this course, students will learn the basic attitude to proceed the learning process to become clinical psychologists. They will acquire the knowledge about ethics and basic competency through lecture and discussion.
授 業 計 画	§ 1-2: 心理援助専門職になることの意味／動機を探る § 3-5: 臨床心理学の教育訓練の過程や初学者の体験 § 6-7: 現場実習の基本(学内実習を中心に) § 8-10: 倫理について § 11-12: 専門性の見直しと発展 § 13: まとめ
授 業 の 方 法	レポーターによる発表と、グループディスカッションを中心に授業を進める。グループダイナミクスを取り入れることによって、グループワークのファシリテートについても体験的に学ぶことが出来る構成とする。
成 績 評 価 方 法	平常点(レポーターを努めること、ディスカッションへの参加姿勢)(50%)、授業の最後に提出する課題レポート(50%)によって評価する。
教 科 書	コーリー & コーリー(下山監訳)『心理援助の専門職になるために』金剛出版金沢吉展著、臨床心理学の倫理を学ぶ、東京大学出版会
履 修 上 の 注 意・備 考	自らについて考える内容を含むため、講義内容に不安がある場合は事前に担当教員に相談すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-216-04	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	高橋 美保				
授 業 科 目	臨床心理システム論基本研究				
講 義 題 目	臨床心理学特論Ⅱ Clinical Psychology Ⅱ				

授 業 の 目 標・概 要	特論Ⅰにおける臨床心理学の専門性についての基本的な理解を前提に、特論Ⅱでは実際の臨床現場で様々な社会システムと関わっていく際に求められる実践的な態度、知識、技能について講義する。社会的場面で働く際に必要な専門性や集団をマネジメントする技法について、講義とワーク、ディスカッションを通して実践的に学ぶことをねらいとする。
授 業 計 画	1. オリエンテーション 2. コミュニティにおける心理援助(1) 3. コミュニティにおける心理援助(2) 4. コミュニティにおける心理援助の実際(1) 5. コミュニティにおける心理援助の実際(2) 6. グループを通しての心理援助(1) 7. グループを通しての心理援助(2) 8. 家族を通しての心理援助(1) 9. 家族を通しての心理援助(2) 10. 人生の移行について理解する(1) 11. 人生の移行について理解する(2) 12. ストレスとバーンアウト(1) 13. ストレスとバーンアウト(2) 14. ストレスとバーンアウト(3) 15. 振り返り
授 業 の 方 法	テーマを選択し、テーマごとにグループで発表を担当する。毎回、発表とワーク、グループシェアリングを組みこむ。
成 績 評 価 方 法	発表、毎回のレポートにより総合的に評価する。
教 科 書	「心理援助の専門職として働くために」 金剛出版 下山晴彦(監訳)
履修上の注意・備考	発表をグループで担当することからも、グループ単位でのチームワークや集団力動を直に体験して頂きたい。全体シェアリングにおいても積極的な参加を求めます。
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他大学生(特別聴講学生等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-05	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	能智 正博				
授 業 科 目	臨床心理システム論基本研究				
講 義 題 目	臨床心理面接特論Ⅱ Interview Methods for Clinical Psychology Ⅱ				

授 業 の 目 標・概 要	近年、臨床心理学的な研究において質的研究の技法に近年ますます注目が集まっている。心理療法やカウンセリングなどの実践においても、面接結果をていねいに読み解いていくための手続きや技法は、質的な調査インタビューから学ぶところが大きい。この授業では、基本的なテキストの輪読をして質的なインタビュー調査の全体像を理解した後、各自が収集した語りデータを素材として分析法の実習を行う。手法としては比較的オーソドックスなカテゴリー分析を基本としながら他の方法にも目配りを行い、幅広く質的データの分析法を理解することを目標とする。
授 業 計 画	以下のようなトピックを扱う。・インタビューの手順・ナラティブの分析の諸技法・初期コーディングの手続き・発展的コーディングの手続き
授 業 の 方 法	質的データの分析をいくつかのステップに分けて学んでいく。受講生がインタビューで得られたテキストを提供し、それをエクササイズのマテリアルとして用いながら分析手続きの実際を体験する。ストラウス版のグラウンデッドセオリーの分析法を基本とするが、M-GTA, S-CAT, TEA 等にも触れる。収集したテキストの分析は各自進めていき、最終的に、分析結果をもとにしたレポートを執筆する。
成 績 評 価 方 法	出席と授業への参加:50% レポート:50%
教 科 書	使用しない。
履修上の注意・備考	臨床心理学コース限定の授業なので、他コースの学生は受講できません。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-06	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	滝沢 龍				
授 業 科 目	臨床心理カリキュラム論基本研究				
講 義 題 目	臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践） Seminar on Assessment of Clinical PsychologyⅠ（Theory and Practice of Psychological Assessment）				

授 業 の 目 標・概 要	<全体テーマ>公認心理師の実践における心理的アセスメント、および精神医学的症候・症状の理論と実践への応用の意義、およびその方法を解説し、実践場面における相談、助言、指導にどう応用していくかを、実例も交えながら検討していく。テーマ：アセスメントおよび症候・症状学の基礎知識と方法の解説 * 臨床活動におけるアセスメントの役割 * 精神症状・症候の分類 * 異常心理学及び精神医学 * 生物-心理-社会モデルの中での活用法 * 見立ての形成：ケースフォーミュレーション * 初回面接
授 業 計 画	1. 臨床心理学と精神医学：アセスメント・症候と診断のガイダンス2. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表①：ビデオ13. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表②：ビデオ24. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表③：ビデオ35. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表④：ビデオ46. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表⑤：ビデオ57. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表⑥：ビデオ68. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表⑦：ビデオ79. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表⑧：ビデオ810. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表⑨：ビデオ911. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表⑩：ビデオ1012. アセスメント・症候・症状学に関する文献購読と発表⑪：ビデオ1113. 総括と議論
授 業 の 方 法	1)臨床心理アセスメント及び精神症候・症状学に関する文献購読と発表2)ビデオ等を活用した精神障害やそのアセスメントの解説3)アセスメントと症候・症状学についての研究成果の発表
成 績 評 価 方 法	平常点(80%)：リアクションペーパー（主に出席点）と授業への参加状況などによって評価する。発表(20%)：担当発表
教 科 書	『第2巻・臨床心理アセスメント』松田修・滝沢龍（編著）東京大学出版会（2022年発刊予定）
履 修 上 の 注 意・備 考	臨床心理学コースの学生のみ受講可能。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-07	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	滝沢 龍、高橋 美保				
授 業 科 目	発達臨床心理学基本研究				
講 義 題 目	臨床心理査定演習Ⅱ Seminar on Assessment of Clinical Psychology Ⅱ				

授 業 の 目 標・概 要	目標: 心理アセスメント—見立てをたてるということ—は、心理的な問題を理解するために不可欠である。アセスメントには、臨床心理面接におけるクライエントの話をもとに行う場合と、心理検査をもとに行う場合がある。本演習では後者の心理検査を用いたアセスメントに焦点化し、心理援助実践において使われる心理検査の概要を把握するとともに、それらを適切に実施し、アセスメントする能力を獲得することを目標とする。概要: はじめにアセスメント全体の概説を行い、次に、様々な心理検査についての概要の説明をした上で、受講者全員が互いに検査を実施しあい、検査結果を書きあげるという一連のワークを行う。本演習では、検査者としての検査スキル、アセスメント能力の向上を図るとともに、検査をされる側の体験をすることも重視している。
授 業 計 画	1. ガイダンス・医療領域における検査(滝沢)2. 様々な面接・質問紙検査1(滝沢)3. 様々な面接・質問紙検査2(滝沢)4. 神経心理検査(滝沢)5. 投映法(高橋)6. 質問紙法(高橋)7. 知能検査(高橋)8. 総合所見(高橋)9. ロールシャッハ・テスト1(中村)10. ロールシャッハ・テスト2(中村)11. ロールシャッハ・テスト3(中村)12. ロールシャッハ・テスト4(中村)13. 治療的アセスメント(高橋)
授 業 の 方 法	講義と実習をおこなう。
成 績 評 価 方 法	授業への参加状況(出席と課題発表)などによって評価する。
教 科 書	適宜指示する。
履修上の注意・備考	臨床心理学コースの学生のみ受講可能。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-08	単 位 数	1	学 期	S1S2
担 当 教 員	高橋 美保、野中 舞子				
授 業 科 目	臨床心理カリキュラム論基本研究				
講 義 題 目	臨床心理基礎実習 I Basic Practicum in Clinical Psychology I				

授 業 の 目 標・概 要	<全体テーマ>臨床心理活動の基礎となる実践技能を解説し、その上でシミュレーション学習を通して技能を習得する。現場で実践活動を行うための最低限の技能を習得することが目的となる。テーマ:臨床面接法の基礎理論と技能実習 * 臨床面接法とは * 臨床面接法の基礎理論と技能 * 共感的面接技能の基礎訓練 * ロールプレイ実習1とグループ討議 * 査定の面接技能の基礎理論と技能 * ロールプレイ実習2とグループ討議 テキスト:「心理臨床の基礎1:心理臨床の発想と実践」岩波書店 下山晴彦(著)
授 業 計 画	§ 1～2:レクチャー「臨床面接法とは」§ 3～9:共感を用いた臨床面接のロールプレイとその振り返り § 10～14:アセスメント面接のロールプレイとその振り返り § 15:質疑応答
授 業 の 方 法	講義とロールプレイの実施及びテープ起こしデータを用いた小グループでの話し合いという形態で授業を進める
成 績 評 価 方 法	出席状況と授業へのアクティブな参加状況、学期末およびセッションの区切りで課すレポートとで総合的に判断する
教 科 書	「臨床心理学をまなぶ1 これからの臨床心理学」東京大学出版会 下山晴彦(著)「臨床心理学をまなぶ2 実践の基本」東京大学出版会 下山晴彦(著)
履 修 上 の 注 意・備 考	ロールプレイとその振り返りを用いての体験学習であるので、積極的なコミットメントを期待したい
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-216-09	単 位 数	1	学 期	S1S2
担 当 教 員	高橋 美保、能智 正博				
授 業 科 目	発達臨床心理学基本研究				
講 義 題 目	臨床心理基礎実習Ⅱ Basic Practicum in Clinical Psychology Ⅱ				

授 業 の 目 標・概 要	対人援助の基礎を理解した上で、心理的支援が社会的活動であることを理解するために、心理職である前に組織人としての自覚を持ち組織や協働できる心理職の素養を身に付ける。また、実践で用いるプレイセラピーの理論を理解した上で、児童臨床現場で必要となる臨床心理アセスメントまで心理療法の基礎を学ぶ。さらに、実践に向けて、インテーク面接から心理的支援の流れまでを、事例や体験を通して包括的に学ぶ。
授 業 計 画	第1回：対人援助の基礎第2回：対人援助の基礎第3回：組織としての相談機関第4回：プレイセラピーとは何か第5回：プレイセラピーの基本第6回：プレイセラピーの基本第7回：プレイセラピーのケース検討第8回：臨床心理学的アセスメント第9回：臨床心理学的アセスメント第10回：インテーク面接第11回：ケースフォーミュレーション第12回：心理支援とは第13回：心理支援の流れ
授 業 の 方 法	概説とディスカッションを中心とする。ただし、内容によっては、ロールプレイやワークなども交える。
成 績 評 価 方 法	授業への参加状況、学期末レポートにより総合的に評価する
教 科 書	心理職の学びとライフキャリアー働くことと生きること 高橋美保 東大出版会, 2022
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他大学生(特別聴講学生等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-10	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	高橋 美保				
授 業 科 目	発達臨床心理学基本研究				
講 義 題 目	臨床心理面接特論Ⅰ（心理支援に関する理論と実践） Interview Methods for Clinical PsychologyⅠ (Theory and Practice of Psychological Support)				

授 業 の 目 標・概 要	目標: 心理面接の基礎と、ケース運営の一連の流れを理解するとともに、様々な心理療法や臨床実践における多様な関わりを学び、臨床実践力を高めることを目的とする。概要: 実際のケース運営と心理実践の様々な技法のポイントについて理解を深める。具体的には心理相談が、どのように始まりどのような経過を経て終わって行くのかについて、一連の流れを理解する。さらに、様々な心理療法の理論や技法を習得することに加え、臨床実践における多様な関わりを理解し、臨床実践を行うための基礎を習得する。
授 業 計 画	第1回: 試行カウンセリング振り返り第2回: ケースフォーミュレーション第3回: ケースマネジメント第4回: 適切な支援方法の選択・調整第5回: 来談者中心療法第6回: 力動的な心理療法第7回: 行動論、認知論に基づく心理療法第8回: 家族療法第9回: 保護者面接・並行面接第10回: 多文化間カウンセリング第11回: チームワークとリーダーシップ第12回: 地域支援と協働第13回: コンサルテーション
授 業 の 方 法	各テーマについての概説とディスカッションを行う。テーマによってはワーク、ロールプレイを行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加状況、学期末レポートにより総合的に評価する
教 科 書	特になし
履 修 上 の 注 意・備 考	特になし
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-216-11	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	能智 正博、滝沢 龍				
授 業 科 目	臨床心理カリキュラム論特殊研究				
講 義 題 目	臨床心理学研究法 Research Methods in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理学的な対人援助技法には、効果がありそれが持続すること、副作用や害がないことについて、良質なエビデンスが存在することが望ましい。場合によってはどのような形でエビデンスを取り出せばよいのか、新たな仮説を生成していくことも必要になる。本授業では、臨床心理学的な研究を行うための知識と技能を身につけるため、量的研究・質的研究両者の基礎を学ぶ。
授 業 計 画	1. ガイダンス(能智・滝沢)2. 質的研究と心理学(能智)3. どの質的研究を選ぶか(能智)4. ナラティブと質的研究(能智)5. 質的研究の質(能智)6. ディスコース心理学(能智)7. 状況分析(能智)8. 量的研究のデザイン(滝沢)9. 記述研究／偶然・バイアス・交絡(滝沢)10. ケースコントロール研究(滝沢)11. コホート研究(滝沢)12. ランダム化比較試験(滝沢)13. スクリーニング／メタアナリシス(滝沢)
授 業 の 方 法	ゼミ形式で行う。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	Hennekens, C.H. & Buring, J.F. (1987) Epidemiology n Medicine. LW&W.Hulley ら (2014). 医学的研究のデザイン 第 4 版 メディカル・サイエンス・インターナショナル Camic, P. M. (ed.) (2021) Qualiative research in psychology (2nd ed.) American Psychological Association.
履修上の注意・備考	積極的に発言してほしい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-216-12	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	能智 正博				
授 業 科 目	発達臨床心理学特殊研究				
講 義 題 目	メンタルヘルスマネジメント基礎(福祉分野に関する理論と支援の展開) Mental Health Management Basic (Support Theory and Applications in Social Welfare Area)				

授 業 の 目 標・概 要	本授業では、福祉分野の支援で求められる知識やスキルの習得を目指す。具体的には、学期の前半で、児童福祉、障害児／者福祉、高齢者福祉の実際とそこでの心理職の職務について、具体例に則して学ぶ。また、学期の後半では、福祉領域における問題発見のための研究を読み、現在現場で課題となっていることをいかに発見し対応を検討していけるか、研究事例の検討を行う。
授 業 計 画	1.イントロダクション 2.児童福祉の諸問題(1)3.児童福祉の諸問題(2)4.障害児／者福祉の諸問題(1)5.障害児／者福祉の諸問題(2)6.高齢者福祉の諸問題(1)7.高齢者福祉の諸問題(2)8.福祉心理学研究(1)9.福祉心理学研究(2)10.福祉心理学研究(3)11.福祉心理学研究(4)12.福祉心理学研究(5)13.まとめ
授 業 の 方 法	学期の前半では、福祉分野の現場で研究や実践を行っているゲストスピーカーの講義を聴く機会を設ける。学期の後半はゼミ形式で、グループになって指定された論文の内容について発表し、そのテーマにおける現場の特徴の理解を深めるだけではなく、問題発見の技法についても習得していく。
成 績 評 価 方 法	授業参加とレポートによる総合評価
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可(GCL は可)
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可(GCL は可)
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-216-13	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	野中 舞子				
授 業 科 目	発達臨床心理学特殊研究				
講 義 題 目	メンタルヘルスマネジメント応用(教育分野に関する理論と支援の展開) Mental Health Management Applied (Support Theory and Applications in Educational Area)				

授 業 の 目 標・概 要	本講義は教育分野に関する理論について、エビデンス・ベースド・プラクティスの観点から体系的に学ぶことを目的とする。具体的には、教育分野でしばしば遭遇する臨床心理学的問題について、最新の研究について学ぶだけでなく、そうした問題についての事例検討を通して実践場面での対応について学んでいく。受講者にはただ講義を聴くだけでなく、自らが教育分野で生じた問題を解決することに寄与できるように主体的な参加が求められる。
授 業 計 画	第 1 回目: イントロダクション 第 2 回目: 教育分野と関係した法律や仕組み 第 3 回目～第 5 回目: 発達障害 第 6 回目～第 8 回目: 不登校 第 9 回目～第 10 回目: いじめ 第 11 回目: 非行 第 12 回目: 具体的な実践に向けて 第 13 回目: まとめ
授 業 の 方 法	履修者は指定された論文または著書を読み、その内容について発表することが求められる。講師による講義を通じたディスカッションも行う。
成 績 評 価 方 法	出席・講義への参加態度(20%)・講義での発表(40%)・最終レポート(40%)
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	原則臨床心理学コースの学生の履修を想定している。他コースの学生は要相談。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履修 不可 (GCL は可)
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可 (GCL は可)
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-14	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	高橋 美保、AN TINGTING				
授 業 科 目	臨床心理システム論特殊研究				
講 義 題 目	コミュニティアプローチ特論(家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践) Community Approach (Support Theory and Practice for Family, Group, and Community)				

授 業 の 目 標・概 要	家族関係・集団・コミュニティなどグループや集団など個人を取り巻く環境を対象とするアプローチに共通する考え方を習得するとともに、その独自性と有効性を李記することができるようになることを目的とする。さらに、本授業では、コミュニティ心理学にフォーカスし、その基本的な理念、理論、援助技法、アプローチを理解することを目指す。授業内でいくつかの重要なトピックスを取り扱うことによって、コミュニティ心理学を研究や実践に適切に活用できるようになることが期待される。
授 業 計 画	第1回 オリエンテーション:授業内容と進め方、成績評価方法、教科書や参考文献の紹介第2回 家族への心理支援:家族形態の多様化と家族機能の変化、家族における介入第3回 集団への心理支援:集団の多様性、集団における介入第4回 コミュニティ心理学の歴史的背景:コミュニティ心理学の歴史、日本への導入第5回 コミュニティ心理学の基本概念:コミュニティ心理学の定義、基本的発想や考え方について紹介第6回 コミュニティ心理学における理論:コミュニティ心理学の背景になる理論を紹介第7回 コミュニティ心理学的アプローチ及び実践:コミュニティ心理学的アプローチの方法及び実践の実践について紹介第8回 グループ発表 1:グループメンバーで選んだトピックスについて発表を行い、その後全体でディスカッション第9回 グループ発表 2:グループメンバーで選んだトピックについて発表を行い、その後全体でディスカッション第10回 グループ発表 3:グループメンバーで選んだトピックについて発表を行い、その後全体でディスカッション第11回 グループ発表 4:グループメンバーで選んだトピックについて発表を行い、その後全体でディスカッション第12回 グループ発表 5:グループメンバーで選んだトピックについて発表を行い、その後全体でディスカッション第13回 まとめ
授 業 の 方 法	前半は講義形式、後半は発表形式となる
成 績 評 価 方 法	授業への出席、受講態度、レポートにより総合的に評価する
教 科 書	授業内で指示する
履修上の注意・備考	積極的な参加を期待します
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-15	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	滝沢 龍				
授 業 科 目	発達臨床心理学特殊研究				
講 義 題 目	精神医学特論(保健医療分野に関する理論と支援の展開) Psychiatry (Support Theory and Applications in Medical and Health Area)				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理学の分野に役立つ精神医学・メンタルヘルスの診断・治療・対処法について講義する。DSM 診断に沿って精神医学各論を実践的な診断・治療・予防に役立つ知識を身につけることを目標とする。
授 業 計 画	授業計画(初回ガイダンスで詳細の日程を配布する)1. ガイダンス／治療の要点(第20章)2. 神経発達症群(第1章)3. 統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群(第2章)4. 双極性障害および関連障害群(第3章)5. 抑うつ障害群(第4章)6. 不安症群(第5章)／身体症状症および関連症群(第9章)7. 心的外傷およびストレス因関連障害群(第7章)／解離症群(第8章)8. 強迫症および関連症群(第6章)／食行動障害および摂食障害群(第10章)9. 睡眠-覚醒障害群(第12章)10. 秩序破壊的・衝動制御・素行症群(第15章)11. パーソナリティ障害群(第18章)12. 神経認知障害群(第17章)／身体疾患に伴う精神障害(症状精神病)13. 薬物療法・小テスト
授 業 の 方 法	毎回おおむね、・発表・講義(60分)、・質疑応答(30分:講義開始時に前回分15分、講義終了後に今回分15分)、・リアクションペーパー記入(15分)、で構成される。初回ガイダンス参加者の希望にて、講義の各論の内容・順番を調整することがある。
成 績 評 価 方 法	平常点(60%):リアクションペーパー(主に出席点)と授業への参加状況などによって評価する。発表(20%):担当が各章の要点を発表最終講義時に小テスト(20%)を行い、理解度を評価する。
教 科 書	「精神疾患・メンタルヘルスガイドブック —DSM-5 から生活指針まで—」(著)American Psychiatric Association、(訳)滝沢龍。(2016) 医学書院その他、適宜プリントを配布する。
履 修 上 の 注 意・備 考	授業内容は、各論や事例が中心となるので、精神医学・異常心理学・臨床心理学の分野での基本的な知識(症状学[精神症状の種類など]・診断学[面接法・査定法など])を学んだことがあることが望ましい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-216-16	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	田中 究				
授 業 科 目	発達臨床心理学特殊研究				
講 義 題 目	心理療法特論:スーパービジョン I Clinical Supervision I				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理学コースで担当しているケースのスーパーヴィジョンを行う。知識を得ることとそれを用いることの間には隔たりがある。スーパーヴィジョンはその間隙を埋める営為である。スーパーヴィジョンでは、来談者やその関係者についての理解を深めることだけでなく、支援者自身の思考や感情、あるいはパーソナリティや行動様式を把握することが求められる。どのような意図のもと、どのような関わりによって何が引き起こされ、その結果どのような流れが形成されているのか、支援の実際を言語化し秩序立てることで、実践は臨床経験となり積み上げが可能になる。本授業ではスーパーヴィジョンの実際を通じて、支援者としての主体を形成する上での基礎を学ぶ。
授 業 計 画	1. イントロダクション 2. 支援者の志向性を保留すること 3. 意味の語用論的理解 4. 支援者と来談者の相互作用 5. 支援者の非言語メッセージ 6. 来談者の期待 7. 来談者の動機づけ 8. 来談者の未来イメージ 9. 支援者の理解と支援の実際の相互連関 10. 援助構造による規定 11. 個別事例理解の深化、抽象化、一般化 12. 現在的未来のシミュレート、過去の未来の探索 13. まとめ
授 業 の 方 法	基本的に履修者と個別に行う。
成 績 評 価 方 法	スーパーヴィジョンの準備(50%)と参加態度(50%)によって総合的に評価する。
教 科 書	なし。
履 修 上 の 注 意・備 考	スーパーヴィジョンの具体的な進め方については、ケースの個別状況によって履修者と協議の上決定する。履修にあたっては指導教員の承認を得ること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-17	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	田 中 究				
授 業 科 目	発達臨床心理学特殊研究				
講 義 題 目	心理療法特論:スーパービジョンⅡ Clinical Supervision Ⅱ				

授 業 の 目 標・概 要	家族療法の「家族」とは、家族そのものを意味するのと同時に、コンテキストの象徴でもある。家族に限らず関係者とのコミュニケーションをセットでとらえる、すなわちシステムの一部としてとらえる視点を携える支援が、家族療法である。臨床実践における支援者は外部観察者に留まることはできない。そのため、支援者自身もシステムの一部として把握する視点が不可欠となる。さらに、支援者は支援システムを形成し来談者や家族と協力関係を結ばなければ、支援を始めることすらままならないのは言うまでもない。本科目では、システムという視点を活用した心理臨床実践に向けて、その基礎を学ぶ。
授 業 計 画	1. 授業概要、分担、システムズアプローチの概要 2. 実践準備:フレームとパターン 3. ロールプレイ-14. ロールプレイ-25. ロールプレイ-36. ロールプレイ-47. ロールプレイ-58. ロールプレイ-69. ロールプレイ-710. ロールプレイ-811. ロールプレイ-912. ロールプレイ-1013. まとめ
授 業 の 方 法	主に同席面接のロールプレイを行う(受講者数によって内容を調整する)。あわせて、フレーム、ジョイニング、リフレーミング、円環性、コミュニケーション公理、コミュニケーション・パターンといった家族療法における重要概念について説明する。
成 績 評 価 方 法	授業への参加の程度(50%)とレポート(50%)によって総合的に評価する。
教 科 書	田中究著『臨床コラボレーション入門ーシステムズアプローチ、ナラティブ・セラピー、ブリーフセラピーの基礎』(遠見書房)
履 修 上 の 注 意・備 考	履修上の注意点等について伝えるので、初回時には必ず出席すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-18	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	林 潤一郎				
授 業 科 目	発達臨床心理学特殊研究				
講 義 題 目	心理療法特論:スーパービジョンⅢ Clinical Supervision Ⅲ				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理学コースの学生が担当しているケースについて、スーパービジョンを行う。スーパービジョンを通して、これまで学んできた心理療法や支援にまつわる様々な知識や代表的スキルを、個々のクライアントの個別性に則した形で実践的に活用できるようになることを目的とする。具体的には、クライアントの個別状況や特徴(有する困難や障がい含む)やニーズを把握しながら支援を展開するスキルを一層高めていくとともに、支援者としての自分自身の効果的な活かし方を模索できる場ともなるよう、各自が担当している事例(面接経過)を題材に指導(検討・質疑・作戦会議)をすすめる予定である。
授 業 計 画	1. イントロダクション2. コミュニケーションについて(1)3. コミュニケーションについて(2)4. コミュニケーションについて(3)5. クライアントとの関係について(1)6. クライアントとの関係について(2)7. クライアントとの関係について(3)8. アセスメントについて(1)9. アセスメントについて(2)10. アセスメントについて(3)11. ケース・マネジメントについて(1)12. ケース・マネジメントについて(2)13. 振り返りとまとめ
授 業 の 方 法	ケースの担当者ごとに個別に行う形式を基本とする。
成 績 評 価 方 法	スーパービジョンを受けるための準備(70%)と、受けた後のケースでの展開およびそこから学んだこと(30%)をもとに総合的に評価する。
教 科 書	特に指定しない。必要に応じて適宜紹介する。
履 修 上 の 注 意・備 考	事例検討のすすめ方は履修者一人ひとりと相談して決定する。また、指導教員の承諾を得た上で受講することが望ましい。なお、ケースの展開を考え、計画的に発表を行うこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-19	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	林 潤一郎				
授 業 科 目	発達臨床心理学特殊研究				
講 義 題 目	心理療法特論:スーパービジョンⅣ Clinical Supervision Ⅳ				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理学コースの学生が担当しているケースについて、スーパービジョンを行う。スーパービジョンを通して、これまで学んできた心理療法や支援にまつわる様々な知識や代表的スキルを、個々のクライアントの個別性に則した形で実践的に活用できるようになることを目的とする。具体的には、クライアントの個別の状況や特徴(有する困難や障がい含む)やニーズを把握しながら支援を展開するスキルを一層高めていくとともに、支援者としての自分自身の効果的な活かし方を模索できる場ともなるよう、各自が担当している事例(面接経過)を題材に指導(検討・質疑・作戦会議)をすすめる予定である。
授 業 計 画	1. イントロダクション2. 技法について(1)3. 技法について(2)4. 介入について(1)5. 介入について(2)6. 効果の検証について(1)7. 効果の検証について(2)8. 各種心理障害への対応について(1)9. 各種心理障害への対応について(2)10. 心理療法の統合的実践について(1)11. 心理療法の統合的実践について(2)12. 心理療法の統合的実践について(3)13. 振り返りとまとめ
授 業 の 方 法	ケースの担当者ごとに個別に行う形式を基本とする。
成 績 評 価 方 法	スーパービジョンを受けるための準備(70%)と、受けた後のケースでの展開およびそこから学んだこと(30%)をもとに総合的に評価する。
教 科 書	特に指定しない。必要に応じて適宜紹介する。
履 修 上 の 注 意・備 考	事例検討のすすめ方は履修者一人ひとりと相談して決定する。また、指導教員の承諾を得た上で受講することが望ましい。なお、ケースの展開を考え、計画的に発表を行うこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-20	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	福島 智				
授 業 科 目	発達臨床心理学特殊研究				
講 義 題 目	障害学演習 Seminar in Disability Studies				

授 業 の 目 標・概 要	「障害学」は、障害児・者を単に医療や福祉、特殊教育の対象としてのみとらえるのではなく、「障害」という切り口をとおして、人間の営みや社会のあり方を問い直すことをめざす学問・研究領域である。
授 業 計 画	1: 障害＝障害者、障害の定義2: 障害学＝ディスアビリティ・スタディーズ、障害学の国内外の研究・実践動向3: バリアフリーとユニバーサル・デザイン＝ バリアフリーとユニバーサル・デザインの概念と実践、両概念の関係と実践をめぐる状況4: 平等(論)＝障害をめぐる平等、現代政治・経済と平等論の関係5: 能力主義(メリトクラシー)＝「能力」をどう把握するか、「能力」と価値の序列6: 障害者権利条約(差別禁止法)＝障害者権利条約、(障害者)差別禁止7: 盲ろう者(視覚・聴覚重複障害者)＝「盲ろう」(deafblindness)、盲ろう者の実状8: ヘレン・ケラー＝盲ろう者としてのヘレン・ケラーの障害と生涯、アーニー・サリヴァン9: 「盲ろう」という障害がもたらす困難＝コミュニケーションと情報の入手、移動10: 「盲ろう」の状態を通して考えるコミュニケーション＝「感覚」遮断と人間への影響、コミュニケーションは人にとってどういう意味を持つか11: 人間にとっての言語・コミュニケーション＝人にとってのコミュニケーションの意味、知的発達と感情的成長との関係12: コミュニケーションを支える感覚情報＝コミュニケーションを支える非言語的情報、非言語的情報はどれほどコミュニケーションに貢献しているか? 13: コミュニケーションにおける感覚・言語的・文脈＝「文脈」とは何か、「感覚・言語的文脈」とコミュニケーション14: 「苦悩」の意味と「生」の意味＝「苦悩」とは何か、我々の「生」を支えるものは何か。
授 業 の 方 法	本演習では、障害学関連の参考文献を参照しつつ、参加メンバー相互のディスカッションをとおして、「障害」をとりまく現代日本の状況について考察を深める。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	* 以下、いずれも必須ではない。可能なら事前に入手、通読すると望ましいもの。『盲ろう者として生きて』福島智、明石書店(2011)『ぼくの命は言葉とともにある』福島智、致知出版社(2015)
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-216-21	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	高橋 美保				
授 業 科 目	臨床心理システム論論文指導				
講 義 題 目	臨床心理学論文指導 Dissertation Research in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理システム論の分野で修士論文を書こうとしている院生のために研究指導・論文指導を行う。
授 業 計 画	受講者の研究計画の発表とその後の進捗状況の報告を行う。また、ある程度研究が進んだ段階では研究論文の投稿計画、投稿論文の検討などを随時行う。いずれも、受講者の進捗に合わせた発表を行い、その内容についてディスカッションを行う。
授 業 の 方 法	研究の進捗状況と研究内容の報告およびそれについての議論を行う。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-22	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	高橋 美保				
授 業 科 目	臨床心理システム論論文指導				
講 義 題 目	臨床心理学論文指導 Dissertation Research in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理システム論の分野で博士論文を書こうとしている院生のために研究指導・論文指導を行う。
授 業 計 画	受講者の研究計画の発表とその後の進捗状況の報告を行う。また、ある程度研究が進んだ段階では研究論文の投稿計画、投稿論文の検討などを随時行う。いずれも、受講者の進捗に合わせた発表を行い、その内容についてディスカッションを行う。
授 業 の 方 法	研究の進捗状況と研究内容の報告およびそれについての議論を行う。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-23	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	大橋 靖史				
授 業 科 目	臨床心理システム論論文指導				
講 義 題 目	臨床心理学論文指導 Dissertation Research in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	司法・犯罪領域における臨床心理学研究指導
授 業 計 画	司法・犯罪領域における臨床心理学に関する研究課題を設定し、研究・討議する。
授 業 の 方 法	研究・論文指導
成 績 評 価 方 法	達成評価
教 科 書	指定なし
履修上の注意・備考	履修にあたっては事前に相談のこと
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-24	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	大橋 靖史				
授 業 科 目	臨床心理システム論論文指導				
講 義 題 目	臨床心理学論文指導 Dissertation Research in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	司法・犯罪領域における臨床心理学研究指導
授 業 計 画	司法・犯罪領域における臨床心理学に関する研究課題を設定し、研究・討議する。
授 業 の 方 法	研究・論文指導
成 績 評 価 方 法	達成評価
教 科 書	指定なし
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	履修にあたっては事前に相談のこと
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-25	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	能智 正博				
授 業 科 目	臨床心理カリキュラム論論文指導				
講 義 題 目	臨床心理学論文指導 Dissertation Research in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理学の分野で質的なアプローチに基づいて修士論文を書こうとしている院生のために、研究指導、および論文指導を行う。
授 業 計 画	受講生は原則としてそれぞれのセメスターに1回発表の機会が与えられ、研究計画、データ、分析過程の報告、論文草稿等を提示して指導を受けることができる。発表とディスカッションの結果を受けて、次のセメスターでは研究をさらに進めた段階の発表を行う。発表者以外の受講生は、発表に対するディスカッションに積極的に参加し、建設的な批判やアイデアの交換等を行う。
授 業 の 方 法	発表担当者の研究計画、データ、分析過程の報告、論文草稿等の提示を受けて、それについて受講生全員でディスカッションを行う。
成 績 評 価 方 法	平常点。
教 科 書	特になし。
履修上の注意・備考	臨床心理学コース限定の授業なので、他コースの学生は受講することはできない。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-216-26	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	能智 正博				
授 業 科 目	臨床心理カリキュラム論論文指導				
講 義 題 目	臨床心理学論文指導 Dissertation Research in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理学の分野で質的なアプローチに基づいて修士論文を書こうとしている院生のために、研究指導、および論文指導を行う。
授 業 計 画	受講生はそれぞれのセメスターに1回発表の機会が与えられ、研究計画、データ、分析過程の報告、論文草稿等を提示して指導を受けることができる。発表とディスカッションの結果を受けて、次のセメスターでは研究をさらに進めた段階の発表を行う。発表者以外の受講生は、発表に対するディスカッションに積極的に参加し、建設的な批判やアイデアの交換等を行う。
授 業 の 方 法	発表担当者の研究計画、データ、分析過程の報告、論文草稿等の提示を受けて、それについて受講生全員でディスカッションを行う。
成 績 評 価 方 法	平常点。
教 科 書	特になし。
履修上の注意・備考	臨床心理学コース限定の授業なので、他コースの学生は受講することはできない。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-216-27	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	滝沢 龍				
授 業 科 目	臨床心理カリキュラム論論文指導				
講 義 題 目	臨床心理学論文指導 Dissertation Research in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	臨床心理学・健康心理学・メンタルヘルスの分野、特にストレス、脆弱性、レジリエンス、ソーシャル・サポート、逆境体験（貧困・虐待・いじめ等）、心理的苦痛（抑うつ／不安）、精神疾患、心身の健康、ウェルビーイング、生活の質（QOL）、知能、パーソナリティ、生涯発達、脳・神経科学、バイオマーカー（生物学的指標）、双生児法、治療法や予防・対処法の効果研究、ランダム化比較試験、メタ分析などに関する分野で、量的なアプローチ（もしくは質的なアプローチとの組み合わせ）に基づいて修士論文を書こうとしている大学院生のために、研究指導および論文指導を行う。国内外での学会発表を推奨し、最終的に、英文雑誌で公表につなげることも目標のひとつとする。
授 業 計 画	1. オリエンテーション2～5. 先行研究レビュー6～8. Concept paper 作成／研究計画発表9～12. データ収集・解析過程の報告・発表13～15. 論文中間発表
授 業 の 方 法	研究の進捗状況を発表し、グループディスカッションをおこなう。適宜、個別指導をおこなう。参加者の関心領域に合わせて小グループを作ることもある。
成 績 評 価 方 法	平常点（100％）：授業への参加状況（出席と課題）やリーダーシップなどによって評価する。
教 科 書	特になし。
履修上の注意・備考	臨床心理学コースの修士課程学生のみ受講可能。量的研究法・心理統計学の基本的知識を学んだことがあることが望ましい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生（特別聴講学生等）	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-216-28	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	滝沢 龍				
授 業 科 目	臨床心理カリキュラム論論文指導				
講 義 題 目	臨床心理学論文指導 Dissertation Research in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理学・健康心理学・メンタルヘルスの分野、特にストレス、脆弱性、レジリエンス、ソーシャル・サポート、逆境体験（貧困・虐待・いじめ等）、心理的苦痛（抑うつ／不安）、精神疾患、心身の健康、ウェルビーイング、生活の質（QOL）、知能、パーソナリティ、生涯発達、脳・神経科学、バイオマーカー（生物学的指標）、双生児法、治療法や予防・対処法の効果研究、ランダム化比較試験、メタ分析などに関する分野で、量的なアプローチ（もしくは質的なアプローチとの組み合わせ）に基づいて修士論文を書こうとしている大学院生のために、研究指導および論文指導を行う。国内外での学会発表を推奨し、最終的に、英文雑誌で公表につなげることも目標のひとつとする。
授 業 計 画	1. オリエンテーション2～5. 先行研究レビュー6～8. Concept paper 作成／研究計画発表9～12. データ収集・解析過程の報告・発表13～15. 論文中間発表
授 業 の 方 法	研究の進捗状況を発表し、グループディスカッションをおこなう。適宜、個別指導をおこなう。参加者の関心領域に合わせて小グループを作ることもある。
成 績 評 価 方 法	平常点（100％）：授業への参加状況（出席と課題）やリーダーシップなどによって評価する。
教 科 書	特になし。
履修上の注意・備考	臨床心理学コースの博士課程学生のみ受講可能。量的研究法・心理統計学の基本的知識を学んだことがあることが望ましい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生（特別聴講学生等）	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-29	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	野中 舞子				
授 業 科 目	発達臨床心理学論文指導				
講 義 題 目	臨床心理学論文指導 Dissertation Research in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	発達臨床心理学分野で修士論文を書こうとしている学生のための研究指導及び論文指導を行う。文献検討、研究計画の検討などを通して、自ら研究計画を立て、研究を実施し、論文を執筆するという一連の手続きができるようになる。
授 業 計 画	受講者は年に 2 回設定された研究発表の機会において、研究の構想や進捗状況について発表をする。発表者は他の受講者や教員を交えてディスカッションを行う。その発表機会と合わせて、以下の指導を行う。①先行研究のレビュー、②研究計画の立案、③データの収集、④データの分析、⑤論文執筆指導、⑥プレゼンテーションの練習。
授 業 の 方 法	個別指導及び集団指導
成 績 評 価 方 法	平常点(出席状況、ディスカッションへの参加の姿勢、研究計画の内容、執筆された論文の内容を含む)
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	臨床心理学コースの学生のみ履修可能
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-30	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	野中 舞子				
授 業 科 目	発達臨床心理学論文指導				
講 義 題 目	臨床心理学論文指導 Dissertation Research in Clinical Psychology				

授 業 の 目 標・概 要	発達臨床心理学分野で博士論文を書こうとしている学生のための研究指導及び論文指導を通して、自ら独創性のある研究計画を立て、実施し、論文にまとめる一連のプロセスをできるようになる。
授 業 計 画	受講者は年に 2 回設定された研究発表の機会において、研究の構想や進捗状況について発表をする。発表者は他の受講者や教員を交えてディスカッションを行う。その発表機会と合わせて、以下の指導を行う。①先行研究のレビュー、②研究計画の立案、③データの収集、④データの分析、⑤論文執筆指導、⑥プレゼンテーションの練習。
授 業 の 方 法	個別指導及び集団指導
成 績 評 価 方 法	平常点(出席状況、ディスカッションへの参加、プレゼンテーションの内容、論文の内容を含む)
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	臨床心理学コースの学生のみ履修可能です
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-31	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	福島 智				
授 業 科 目	発達臨床心理学論文指導				
講 義 題 目	障害学論文指導 Dissertation Research in Disability Studies				

授 業 の 目 標・概 要	臨床心理学コースの学位論文(修士論文及び博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。なお、修士学位論文は 400 字詰め原稿用紙に換算して 200 枚以内にまとめること。
授 業 計 画	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	* 以下、いずれも必須ではない。可能なら事前に入手、通読すると望ましいもの。・『ぼくの命は言葉とともにある』福島智、致知出版社(2015)・『盲ろう者として生きて』福島智、明石書店(2011)
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-216-32	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	福島 智				
授 業 科 目	発達臨床心理学論文指導				
講 義 題 目	障害学論文指導 Dissertation Research in Disability Studies				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	臨床心理学コースの学位論文(修士論文及び博士論文)の完成を目標に、各人の問題関心を学術研究としてテーマ化することからはじめ、資料選択の適否、方法論の検討、論述方法等について、適宜指導を行う。なお、修士学位論文は 400 字詰め原稿用紙に換算して 200 枚以内にまとめること。
授 業 計 画	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
授 業 の 方 法	個別指導を中心とするが、必要に応じてグループでの指導の機会も設ける。
成 績 評 価 方 法	各自の目標達成度、研究成果によって評価を行う。
教 科 書	* 以下、いずれも必須ではない。可能なら事前に入手、通読すると望ましいもの。・『ぼくの命は言葉とともにある』福島智、致知出版社(2015)・『盲ろう者として生きて』福島智、明石書店(2011)
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-217-01	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	野崎 大地				
授 業 科 目	身体教育科学基本研究				
講 義 題 目	身体教育科学の諸問題 I Topics in Physical Education I				

授 業 の 目 標・概 要	身体教育科学分野にはどのような解明すべき重要問題があり、それらの問題がどのようなアプローチによって研究されているのか、最新研究論文の精読を通して理解することを目的とする。
授 業 計 画	初回のガイダンス:教員の選定した論文リストを元に各回の担当者を決める。二回目以降:担当者による論文紹介およびそれに基づいて出席者全員で議論を行う。
授 業 の 方 法	担当者はパワーポイント等を用いて論文の詳細を説明する。担当者の論文説明に基づき、出席者全員で論文の新奇性、重要性、問題点などについて議論する。出席者にはあらかじめ論文を精読しておくことが求められる。
成 績 評 価 方 法	出席および担当回のプレゼンテーションを元に評価する。
教 科 書	講義中に指定する。
履修上の注意・備考	本学他研究科学生 履修可(5名まで)特別聴講学生(お茶の水女子大学大学院学生) 履修可(5名まで)
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-217-02	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	山本 義春、森田 賢治				
授 業 科 目	教育生理学基本研究				
講 義 題 目	身体システム論 I System Analysis of Human Activity I				

授 業 の 目 標・概 要	人間の活動あるいは行動に関する探究に際しては、自然科学から人文・社会科学にわたる幅広い分野の知見に基づく、微視的・巨視的両視点からの総合的なアプローチが必要である。本講義では、主として数理モデルおよび解析手法の立場から、このような総合的アプローチの方法論を身につける。Inquiry into human activities and behavior requires a comprehensive approach from both microscopic and macroscopic perspectives, based on knowledge from a wide range of fields from the natural sciences to the humanities and social sciences. In this course, students will learn the methodology of such an integrated approach mainly from the standpoint of mathematical modeling and analytical methods.
授 業 計 画	過去本講義で取り上げた論文については http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~yamamoto/kogi_g/kogi_g.html を参照のこと。新たな論文情報は適宜掲載する。
授 業 の 方 法	論文・テーマの選択は、原則として担当教員が行う。一回に一名の受講者が内容を紹介し、その後参加者全員で討論を行う。担当教員もなるべく平易な解説を心掛けるので、参加者も「理論的に考える」ことを心掛けて欲しい。
成 績 評 価 方 法	平常点(出席・発表)による評価。
教 科 書	授業内で提示する。
履修上の注意・備考	生理学一般に馴染みのない人は夏学期に開講される学部講義「教育の生理学」を、数理解析一般について馴染みのない人は冬学期に開講される学部講義「バイオダイナミクス」を、それぞれ受講しておくことが望ましい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-217-03	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	多賀 厳太郎				
授 業 科 目	発達脳科学基本研究				
講 義 題 目	発達脳科学特論 I Developmental Brain Sciences I				

授 業 の 目 標・概 要	ヒトという複雑な系が生成・発展する「発達」の法則性を理解することを目標とする。脳科学、生理学、発達心理学、認知科学、発生生物学、行動学、非線形物理学、システム工学などの分野の境界を乗り越えながら、オリジナルな研究を行うための実践的な力を養うことを目標とする。主として、履修者による文献講読を行う。
授 業 計 画	初回は教員による発達脳科学についての概説を行い、次回以降受講者の演習・発表を行う。
授 業 の 方 法	演習、発表、参加者全員によるディスカッション
成 績 評 価 方 法	発表および平常点で評価する。
教 科 書	特に指定しない
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-217-04	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	佐々木 司、東郷 史治				
授 業 科 目	健康教育学基本研究				
講 義 題 目	健康教育学の諸問題 I Topics in Health Education I				

授 業 の 目 標・概 要	精神保健や発達の問題を中心に、健康問題に関連する諸要因の解析と、それに基づく介入・心理教育などについて学習する。また国際誌への論文投稿・採択に必要な、英文文献の読解力、特に方法論などに関する批判的読解力、英文論文の記述力を養うことも本授業の重要な目標の1つである。This is a journal-club style course. Students are required to select and present a recent paper in areas of mental health, sleep, school health and related ones. An aim of this course is to develop the ability of critical reading of scientific papers.
授 業 計 画	毎回担当学生が、精神保健とその疫学等に関連する英文論文を選び、その紹介を行う。興味あるテーマについて複数の論文を紹介し、仮説立案を行っても良い。最終的には、自ら英文論文を書くことが出来る力を養うことが目的である。文献の選び方は初回の授業で説明する。なお基本的に英語で授業を行うので、スライド(PPT)も基本的に英語で作成のこと(つまり英文文献の内容の日本語翻訳は不要、ということである)。口頭での説明は、英語で説明しきれない場合には、日本語で補っても良いが、なるべく英語で行うこと(ただし、英語での presentation の練習と思って気楽に参加して欲しい)。
授 業 の 方 法	各学生の発表に対して、質疑応答を教員・学生が行う。Students are recommended to actively make comments and/or questions to the presentation.
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	指定なし
履修上の注意・備考	The course may be in English when foreign students participate. 留学生が参加する場合には、英語での授業とすることもある
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-217-05	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	野崎 大地				
授 業 科 目	身体教育科学特殊研究				
講 義 題 目	身体教育科学の諸問題Ⅱ Topics in Physical Education Ⅱ				

授 業 の 目 標・概 要	身体教育科学分野にはどのような解明すべき重要問題があり、それらの問題がどのようなアプローチによって研究されているのか、最新研究論文の精読を通して理解することを目的とする。
授 業 計 画	初回のガイダンス:各回の担当者を決定する。二回目以降:担当者による書籍内容の解説および参加者全員での討論。
授 業 の 方 法	担当者はパワーポイント等を用いて書籍の内容を説明する。担当者の説明に基づき、出席者全員で内容の新奇性、重要性、問題点などについて議論する。出席者にはあらかじめ書籍を精読しておくことが求められる。
成 績 評 価 方 法	出席および担当回のプレゼンテーションを元に評価する。
教 科 書	講義中に指定する。
履修上の注意・備考	本学他研究科学生 履修可(5名まで)特別聴講学生(お茶の水女子大学大学院学生) 履修可(5名まで)
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-217-06	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	柏野 牧夫、野崎 大地				
授 業 科 目	身体教育科学特殊研究				
講 義 題 目	スポーツ脳科学特論 Sports Brain Science				

授 業 の 目 標・概 要	スポーツにおいては、知覚、運動制御、予測、意思決定、心身状態の最適化など、各種認知機能が決定的な役割を果たしている。この授業では、トップアスリートの認知機能や脳情報処理に関する研究の具体例の検討と、パフォーマンスや生体信号の計測実習を通じて、基礎知識や研究の方法論を学ぶ。また、スポーツの研究や現場における情報技術の利用の現状についても理解を深め、トレーニングやコーチングの将来像を探る。
授 業 計 画	講義：野球やソフトボール、e スポーツなどのトップアスリートの研究例を取り上げつつ、以下の項目について概説する。・スポーツにおける主観と客観の乖離・潜在脳機能・視覚運動系、眼球運動、注意、錯覚・意思決定・心身相互作用・プレイヤー間相互作用・情報技術を利用した技能向上（可視化・可聴化、VR・AR、感覚フィードバック、非侵襲脳刺激、他）・スポーツアナリティクス 他体験実習：ウェアラブルセンサ、コンピュータビジョン、VR等の情報技術を用いた各種計測の体験
授 業 の 方 法	集中講義形式で、スポーツ脳科学に関する基礎知識や研究の具体例に関する講義と、実地での計測等の体験実習とを行う。体験実習は、NTT 厚木研究開発センタ（神奈川県厚木市）で実施する（新型コロナウイルスの状況による）。
成 績 評 価 方 法	平常点（出席・レポート）による評価。
教 科 書	授業内で提示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	なし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生（特別聴講学生等）	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-217-07	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	山本 義春、森田 賢治				
授 業 科 目	教育生理学特殊研究				
講 義 題 目	身体システム論Ⅱ System Analysis of Human Activity Ⅱ				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	引き続き身体システム論Ⅰに準じて行う。
授 業 計 画	引き続き身体システム論Ⅰに準じて行う。
授 業 の 方 法	引き続き身体システム論Ⅰに準じて行う。
成 績 評 価 方 法	平常点(出席・発表)による評価。
教 科 書	授業内で提示する。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	引き続き身体システム論Ⅰに準じて行う。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-217-08	単 位 数	2	学 期	A1
担 当 教 員	多賀 厳太郎				
授 業 科 目	発達脳科学特殊研究				
講 義 題 目	発達脳科学特論Ⅱ Developmental Brain SciencesⅡ				

授 業 の 目 標・概 要	S1 に引き続き行う。ヒトという複雑な系が生成・発展する「発達」の法則性を理解することを目標とする。脳科学、生理学、発達心理学、認知科学、行動学、発生生物学、非線形物理学、システム工学などの分野の境界を乗り越えながら、オリジナルな研究を行うための実践的な力を養うことを目標とする。主として、文献購読を行う。
授 業 計 画	初回は教員による発達脳科学についての概説を行い、次回以降受講者の演習・発表を行う。
授 業 の 方 法	演習と発表。参加者全員によるディスカッション。
成 績 評 価 方 法	発表および平常点で評価する。
教 科 書	特に指定しない
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-217-09	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	佐々木 司、東郷 史治				
授 業 科 目	健康教育学特殊研究				
講 義 題 目	健康教育学の諸問題Ⅱ Topics in Health Education Ⅱ				

授 業 の 目 標・概 要	健康教育学の諸問題Ⅰで学習した知識を元に、研究計画の立案を含めたさらに専門的な学習を進める。かつ英語での presentation の練習も行う。方法論や結果と考察との一貫性に関する批判的論文読解の力を養うことも大きな目標である。This course will be given in a journal-club style. Students are required to select a recent paper on mental health (especially adolescents' mental health) or related issues and give a presentation, once or twice. The presentation and discussion are recommended to be made in English in principle, which may help you practice presentations in international meetings. Development of ability for critical reading of scientific papers is also a major aim of this course.
授 業 計 画	健康教育に関連する英文論文を各自選択し、それについての説明を行う。あるいはあるテーマについての英文文献検索を行い、テーマに関する複数の論文について review し、新たな研究遂行に役立つ仮説構築を行っても良い(ある程度習熟レベルが進んだ学生には後者をむしろ勧める)。
授 業 の 方 法	健康教育学の諸問題Ⅰと同様であるが、学習の進んだ学生で健康教育学に関する研究を志す学生については、自分の研究計画を立案・発表し、それについての意見を求める機会としても良い。なお発表および質疑応答は原則として英語で行う。ただし英語でのやりとりに慣れていない学生も多いと思われるので、どうしても分からない時は日本語の使用もOKとする。将来の英語での学会発表や論文書きの練習と思って、気楽に考えて参加してほしい。
成 績 評 価 方 法	平常点(英文論文の紹介を1回以上行うことが単位取得には必須)
教 科 書	特に指定なし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-217-10	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	野崎 大地				
授 業 科 目	身体教育科学論文指導				
講 義 題 目	身体教育科学論文指導 Dissertation Research in Physical Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	各履修者が行っている研究の内容(目的、結果)を随時発表し、参加者が議論を重ねることで、国際的に通用する論文の執筆、出版を目指す。
授 業 計 画	履修者は毎週研究の進捗状況についてパワーポイント等を用いて報告する。それを題材に参加者全員で議論する。
授 業 の 方 法	履修者は毎週研究の進捗状況についてパワーポイント等を用いて報告する。それを題材に参加者全員で議論する。
成 績 評 価 方 法	平常点(出席・発表)による評価。
教 科 書	講義中に指定する。
履修上の注意・備考	特に無し。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-217-11	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	野崎 大地				
授 業 科 目	身体教育科学論文指導				
講 義 題 目	身体教育科学論文指導 Dissertation Research in Physical Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	各履修者が行っている研究の内容(目的、結果)を随時発表し、参加者が議論を重ねることで、国際的に通用する論文の執筆、出版を目指す。
授 業 計 画	履修者は毎週研究の進捗状況についてパワーポイント等を用いて報告する。それを題材に参加者全員で議論する。
授 業 の 方 法	履修者は毎週研究の進捗状況についてパワーポイント等を用いて報告する。それを題材に参加者全員で議論する。
成 績 評 価 方 法	平常点(出席・発表)による評価。
教 科 書	講義中に指定する。
履修上の注意・備考	特に無し。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コ ー ド	23-217-12	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	森田 賢治				
授 業 科 目	身体教育科学論文指導				
講 義 題 目	身体教育科学論文指導 Dissertation Research in Physical Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	身体教育科学に関する研究・論文執筆のための指導・討論
授 業 計 画	学習や情動の脳神経・身体機構などを中心とした身体教育科学に関する研究・論文執筆のための指導・討論を行う
授 業 の 方 法	履修者全員での討論などを行う
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特に指定しない
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コ ー ド	23-217-13	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	森田 賢治				
授 業 科 目	身体教育科学論文指導				
講 義 題 目	身体教育科学論文指導 Dissertation Research in Physical Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	身体教育科学に関する研究・論文執筆のための指導・討論
授 業 計 画	学習や情動の脳神経・身体機構などを中心とした身体教育科学に関する研究・論文執筆のための指導・討論を行う
授 業 の 方 法	履修者全員での討論などを行う
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特に指定しない
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-217-14	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	柏野 牧夫、野崎 大地				
授 業 科 目	身体教育科学論文指導				
講 義 題 目	身体教育科学論文指導 Dissertation Research in Physical Education				

授 業 の 目 標・概 要	各履修者が行っている研究の内容を発表し、参加者が議論を重ねることで、国際的に通用する論文の執筆、出版を目指す。
授 業 計 画	毎回、各履修者が研究の進捗状況について報告し、参加者全員で議論する。
授 業 の 方 法	各履修者が研究の内容(目的、方法、結果、進捗上の問題点等)についてスライド等を用いて報告する。それを題材として参加者全員で議論し、内容の補強や問題点の解決を図る。必要に応じて個別指導を行う。
成 績 評 価 方 法	平常点(出席・発表)による評価。
教 科 書	講義中に指定する。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-217-15	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	柏野 牧夫、野崎 大地				
授 業 科 目	身体教育科学論文指導				
講 義 題 目	身体教育科学論文指導 Dissertation Research in Physical Education				

授 業 の 目 標・概 要	各履修者が行っている研究の内容を発表し、参加者が議論を重ねることで、国際的に通用する論文の執筆、出版を目指す。
授 業 計 画	毎回、各履修者が研究の進捗状況について報告し、参加者全員で議論する。
授 業 の 方 法	各履修者が研究の内容(目的、方法、結果、進捗上の問題点等)についてスライド等を用いて報告する。それを題材として参加者全員で議論し、内容の補強や問題点の解決を図る。必要に応じて個別指導を行う。
成 績 評 価 方 法	平常点(出席・発表)による評価。
教 科 書	講義中に指定する。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-217-16	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	山本 義春				
授 業 科 目	教育生理学論文指導				
講 義 題 目	教育生理学論文指導 Dissertation Research in Educational Physiology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育生理学に関する博士論文・修士論文の執筆のための討論会を履修者全員で行う。Discussions for writing doctoral and master's theses on educational physiology will be held for all students enrolled in the course.
授 業 計 画	随時討論会を行う。
授 業 の 方 法	学生の発表に基づき討議を行う。
成 績 評 価 方 法	平常点(出席)による評価。
教 科 書	授業内で提示する。
履修上の注意・備考	授業内で提示する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-217-17	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	山本 義春				
授 業 科 目	教育生理学論文指導				
講 義 題 目	教育生理学論文指導 Dissertation Research in Educational Physiology				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育生理学に関する博士論文・修士論文の執筆のための討論会を履修者全員で行う。Discussions for writing doctoral and master's theses on educational physiology will be held for all students enrolled in the course.
授 業 計 画	随時討論会を行う。
授 業 の 方 法	学生の発表に基づき討議を行う。
成 績 評 価 方 法	平常点(出席)による評価。
教 科 書	授業内で提示する。
履修上の注意・備考	授業内で提示する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-217-18	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	東郷 史治				
授 業 科 目	教育生理学論文指導				
講 義 題 目	教育生理学論文指導 Dissertation Research in Educational Physiology				

授 業 の 目 標・概 要	教育生理学に関する修士論文執筆のための研究指導、論文指導をする。
授 業 計 画	あらかじめ発表の担当スケジュールを決め、それに従い、毎回 1、2 名が発表等をする。
授 業 の 方 法	研究の進捗状況の発表、あるいは関連研究論文の紹介をし、履修者全員で討論する。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	なし
履修上の注意・備考	疫学統計の基本的事項について学習しておくこと。また各自の研究テーマに関する先行研究について適宜、確認すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-217-19	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	東郷 史治				
授 業 科 目	教育生理学論文指導				
講 義 題 目	教育生理学論文指導 Dissertation Research in Educational Physiology				

授 業 の 目 標・概 要	教育生理学に関する博士論文執筆のための研究指導、論文指導をする。
授 業 計 画	あらかじめ発表の担当スケジュールを決め、それに従い、毎回 1、2 名が発表等をする。
授 業 の 方 法	研究の進捗状況の発表、あるいは関連研究論文の紹介をし、履修者全員で討論する。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	なし
履修上の注意・備考	疫学統計の基本的事項について学習しておくこと。また各自の研究テーマに関する先行研究について適宜、確認すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-217-20	単 位 数	2	学 期	通年
担 当 教 員	多賀 厳太郎				
授 業 科 目	発達脳科学論文指導				
講 義 題 目	発達脳科学論文指導 Dissertation Research in Developmental Brain Sciences				

授 業 の 目 標・概 要	発達脳科学に関する修士論文の執筆のための討論会を履修者全員で行う。
授 業 計 画	受講者は必ず研究発表を行い、総合討論を行う。また、必要に応じて個別の研究指導を設ける。
授 業 の 方 法	討論を中心とする。
成 績 評 価 方 法	総合的に評価する。
教 科 書	特に指定なし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他大学生(特別聴講学生等)	履修 不可

時 間 割 コード	23-217-21	単 位 数	2	学 期	通年
担 当 教 員	多賀 徹太郎				
授 業 科 目	発達脳科学論文指導				
講 義 題 目	発達脳科学論文指導 Dissertation Research in Developmental Brain Sciences				

授 業 の 目 標・概 要	発達脳科学に関する博士論文の執筆のための討論会を履修者全員で行う。
授 業 計 画	受講者は必ず研究発表を行い、総合討論を行う。また、必要に応じて個別の研究指導を設ける。
授 業 の 方 法	討論を中心とする。
成 績 評 価 方 法	総合的に評価する。
教 科 書	特に指定なし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他大学生(特別聴講学生等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-217-22	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	佐々木 司				
授 業 科 目	健康教育学論文指導				
講 義 題 目	健康教育学論文指導 Dissertation Research in Health Education				

授 業 の 目 標・概 要	健康教育学の研究課題の進行状況について各学生が発表・議論し、その中で研究ならびに論文執筆の基本的な方法について学習することを目標とする。
授 業 計 画	各学生の研究の進行に応じて指導するが、できるだけ早い時期から研究室の meeting に参加すること。学部の授業である「教育の疫学」で学ぶ知識が基礎となるので、そちらも出来るだけ履修すること。
授 業 の 方 法	各回とも、担当学生が自分の研究の進行状況について発表する
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特になし
履 修 上 の 注 意・備 考	年間の指導の中で、疫学と統計の基本的知識を習得していくことも必須なので、そのもりで参加のこと。分からないこと、理解できないことは、例え基本的なことであっても遠慮せずに質問のこと。ただ座っているだけの参加は無意味と心得てほしい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-217-23	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	佐々木 司				
授 業 科 目	健康教育学論文指導				
講 義 題 目	健康教育学論文指導 Dissertation Research in Health Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	授業の目標、概要／Course Objectives/ Overview 健康教育学の研究課題の進行状況について各学生が発表・議論し、その中で研究ならびに論文執筆の基本的な方法について学習することを目標とする
授 業 計 画	各学生の研究の進行に応じて指導するが、できるだけ早い時期から研究室の meeting に参加すること。学部の授業である「教育の疫学」で学ぶ知識が基礎となるので、そちらも出来るだけ履修すること。
授 業 の 方 法	各回とも、担当学生が自分の研究の進行状況について発表する
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	指定なし
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	年間の指導の中で、疫学と統計の基本的知識を習得していくことは必須であるので、そのもりで参加のこと。分からないこと、理解できないことは、例え基本的なことであっても遠慮せずに質問のこと。
そ の 他	特になし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-301-01	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	野澤 祥子				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (授業研究・基礎研究)				
講 義 題 目	保育学研究 Studies on Early Childhood Education				

授 業 の 目 標・概 要	保育者の専門性と保育・幼児教育の実践に関して、国内外の動画及び文献等での議論・検討を行う。
授 業 計 画	上記テーマに関する近年の研究文献(日本語・英語)を読みあう。最近の研究動向と受講者の関心を踏まえて文献を選定する。保育・幼児教育の国内外の実践に関する動画を視聴する。議論を通して、理解を深める。
授 業 の 方 法	文献の講読と議論を中心に行う。
成 績 評 価 方 法	演習への参加、報告・議論、期末レポート
教 科 書	学期当初に講読文献を指定
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	原則として隔週で3、4時間目2コマ連続で実施予定日程は初回時に教示する

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-301-02	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	浅井 幸子				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (カリキュラム研究・基礎研究)				
講 義 題 目	教育実践の歴史的研究 Historical Research on Educational Practice				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	この授業では、日本の新教育(進歩主義教育)の歴史に関する近年の研究動向を概観する。(1)新教育は、日本の教育が個別化・個性化へ、活動的な教育へと向かう状況の中で、その源泉として語られることが多い。その理解を多様性に即して理解する。(2)研究とあわせて実践の記録を読むことによって、教育実践史の方法を探究する。
授 業 計 画	1・2回 オリエンテーションとテーマ設定3・4回 文献購読5・6回 文献購読7・8回 文献購読9・10回 文献購読11・12・13回 個人またはグループ発表
授 業 の 方 法	文献購読個人またはグループ発表
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特になし。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-301-03	単 位 数	2	学 期	A1
担 当 教 員	一柳 智紀				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (授業研究・発展研究)				
講 義 題 目	学習デザインの理論と方法 The Theory and Method of learning design				

授 業 の 目 標・概 要	学校における学習のあり方として、探究的な学習に関する基本文献と最近の動向を英語で当該分野の文献を読んで議論ができるようにする。
授 業 計 画	探究的な学習に関する基本文献と関連文献を読み、議論する
授 業 の 方 法	グループで特定文献の論文を担当しその論文について発表するとともに協働で議論をしながら理解を深める。
成 績 評 価 方 法	本演習への参加、報告や議論ならびに期末レポートによって評価
教 科 書	Duncan & Chinn (2021) International Handbook of Inquiry and Learning. Routledge を扱う予定です。
履 修 上 の 注 意・備 考	原則として2コマ連続で実施する予定である。評価は平常点とレポート等の報告、最終小レポートを総括して行う
そ の 他	初回授業時に課題や次回以降の詳細をアナウンスします。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-301-04	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	藤江 康彦				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (カリキュラム研究・発展研究)				
講 義 題 目	学校教育研究と談話分析 Research on School Education and Discourse Analysis				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	学校教育における授業、カリキュラムをめぐる、子どもや教師の間接的直接的経験とその解釈をどのように記述、表現し、学術の俎上に載せるのかを探究する。学校教育は言語的实践をその中核としている。そして、学校教育研究は言語的实践を言語化することで学術的探究を遂行する。二重の言語化ともいえる学校教育実践に関する研究において、当事者の営為をどのようにとらえ表現するか、研究者の解釈をどのように共有し、経験をどのように反省するかを問うことは学校教育研究においては重要である。その営為はこれまで談話分析やナラティブ分析等によって進められてきた。しかし近年、状況的学習論、ニューマテリアリズムの興隆のなかで、授業における子どもや教師の学習やカリキュラムの経験を言語に依らず多様な媒介物を用いてとらえ、表現する試みもなされつつある。そこで本授業では、そういった試みについて検討するための理論的基盤となる内外の文献を購読する。
授 業 計 画	第1回 ガイダンス第2回 文献①-1 第3回 文献①-2 第4回 文献①-3 第5回 文献②-1 第6回 文献②-2 第7回 文献②-3
授 業 の 方 法	文献を購読のうえ、講義のテーマに関する議論を行う。
成 績 評 価 方 法	報告や議論への参加状況による平常点ならびに期末レポートによる。
教 科 書	Truman, Sarah E. , Zaliwska, Zofia, Snaza, Nathan (Eds.). 2016 Pedagogical Matters: New Materialisms and Curriculum Studies. Peter Lang Pub Inc. Cathrine Hasse, 2014 An Anthropology of Learning: On Nested Frictions in Cultural Ecologies. Springer.
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	毎回編成を変えてグループワークを行います。授業時間外にもグループでの活動を行っていただくようになります。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-301-05	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	高井良 健一				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)				
講 義 題 目	教師のライフヒストリー研究 Exploring life history research focused upon teachers' experience				

授 業 の 目 標・概 要	教師のライフヒストリー研究は 1980 年代に欧米で広がり、オーラルヒストリーやナラティブ研究への注目とともに、2000 年代以降、日本でも事例研究の蓄積が生み出されました。その一方で、各々の事例研究が依拠する方法論についての省察は、ライフヒストリー研究者のこれからの課題として残されています。この授業では、教師のライフヒストリー研究の歴史を共有するとともに、事例研究の作品の検討を通して、各々の方法論のもつ特徴と課題を学ぶことを目標とします。
授 業 計 画	第1回 オリエンテーション第2回 個人史と教師のライフヒストリー研究第3回 草創期の事例研究 第4回 草創期の方法論第5回 時代を教師の経験から探究する第6回 カリキュラムを教師の経験から探究する第7回 教師の人生に協働での語りを通してアプローチする 第8回 教師の人生に協働での語り直しを通してアプローチする第9回 ナラティブに対する批判第 10 回 教師のライフヒストリー研究に対する批判的考察第 11 回 教師の語りの様式を読み解く第 12 回 教師のライフヒストリー研究の省察と解釈学的アプローチ第 13 回 ジェンダーによる不平等、トップダウンの教育改革の実態を照射する第 14 回 教師のライフヒストリー研究を行うということ ― 物語の規範化ではなく、エンパワメントされるスペースをつくる
授 業 の 方 法	授業はゼミナールの形式で行います。受講生は、あらかじめ指定された論文やテキストを読んだ上で、授業に出席することが求められます。初回の授業を除いて、各回の授業では、コメンテーターを担当する受講生は、レジュメを作成します。レジュメには、論文やテキストの簡潔な概要とコメンテーターの観点からのコメントを記載します。具体的には、毎回の授業は、次のような形式で行われる予定です。まずは、受講生による「教育研究と私」のコーナーから始まります。これは、スターターを担当する受講生が「教育研究に至ったストーリー」を語るものです。
成 績 評 価 方 法	成績評価は、毎回の授業におけるコメントの交流、ディスカッション、学びあいへの参加ならびにコメンテーター、スタータとしての発表等によって、総合的にを行います。
教 科 書	課題論文やテキストを準備します。
履 修 上 の 注 意・備 考	ライフヒストリーの鍵は「聴く」という営みにあります。受講を希望する人には、自分の経験の外に踏み出して「聴く」構えを共有することを求めます。また、この授業は、担当教員が受講生に対して即効性のある研究方法論を伝えるものではありません。そもそも担当教員はそのようなものを持ち合わせていないのです。この授業は、多様な教師のライフヒストリー研究から学びつつ、教師研究の難しさの可能性について学びあうものです。教師の人生と経験世界に深い関心を持ち、先人のテキストを媒介として、ほかの受講生とともに学びあうことを求める方々の
そ の 他	* 原則として、全回対面での授業を予定していますが、新型コロナウイルスの感染状況や担当教員のスケジュールの関係でオンラインでの授業が行われる可能性もあります。その場合は、Zoom によるリアルタイムのオンライン授業を行う予定です。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-301-06	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	河野 哲也				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)				
講 義 題 目	対話的教育の理論と実践 Theory and Practice of Dialogical Education				

授 業 の 目 標・概 要	昨年 2022 年、子どもの哲学国際学会が東京で開かれました。”P4C (Philosophy for Children)”、”P4/wC (Philosophy for/with children)”と呼ばれる、子どもとともに大人が一緒になって哲学的なテーマについて対話する教育的活動は、日本でもこの 10 年間でかなり知られるようになりました。この活動は、教育実践として大きな意味を持つだけでなく、教育の意味や目的、子どもの社会参加・シティズンシップについて問い直す機会を与え、さらに、対話と思考の関係、「子ども」の存在の意義、発達・成長という概念、大人と子どもの関係について根源的な再検討を迫るものです。本授業では、「子どもの哲学」について理論・実践の両面で紹介すると同時に、哲学あるいは教育哲学の観点から、「子どもの哲学」の哲学のもつ教育学的意義、さらにそれが突きつける教育学・哲学・倫理学・心理学の問い直しについて、みなさんと考えていきたいと思います。
授 業 計 画	1 ガイダンス、序論：子どもの哲学とはどういう活動か？歴史と現在2 子どもの哲学の意義と効果、世界での活動現状3 子どもの哲学の方法と実践上の課題4 哲学的テーマとしての子ども：哲学と子ども性、遊戯と存在5 教育哲学的テーマとしての子ども：子どもと大人の関係、発達とは何か、教育の新しい目的6 政治哲学的テーマとしての子ども：真理と民主主義、子どもの自由、探究の共同体としての民主社会7 対話の哲学：対話とは何か、ケアと思考との関係、何が思考を命じるのか、対話と二人称の根源性8 対話的教育：対話と教育、何が対話を可能にするか、対話と暴力、沈黙と間合い9 教育的タクト：タクトの概念、わざ・パフォーマンス・即興の関係について、教育におけるタクト 10 哲学対話の実践(1)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 11 哲学対話の実践(2)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 12 哲学対話の実践(3)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 13 哲学対話の実践(4)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 14 全体の振り返りとまとめ
授 業 の 方 法	1回～8回は、講義形態を取り、レクチャーの後に質疑応答の時間を十分に取ります。9回～14 回は、哲学対話を実際に実践して、場づくり、対話参加の仕方、ファシリテーションの仕方を実践的に学んでもらい、実践の振り返りを行います。
成 績 評 価 方 法	平常点(授業での質疑応答の参加度、実践部分への貢献度など)と最終レポートで判断いたします。
教 科 書	河野哲也『自分で考え 自分で話せる：こどもを育てる哲学レッスン』(増補版)、河出書房新社、2021 年
履修上の注意・備考	子どもの哲学に関心のある方のみならず、哲学カフェや対話的な活動に関心のある方に向いています。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-301-07	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	SarkarArani MohammadReza				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)				
講 義 題 目	比較授業分析と教師教育学研究 Cross-cultural Analysis of Pedagogy and Teacher Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	受講者は、教師教育学に関する基礎概念や知識・技能について理論的・実践的な視点から習得する。また、国際と国内文献・先行研究のレビューをもとに、受講者は、教師教育研究の方法論の理解を以下の視点から深める。①専門職としての教師の発達とそれを支える現職教育の基礎概念・知識および具体的な取り組みを習得する。②高度専門職としての教師、およびその育成にあたる教師教育者 (teacher educator) に必要とされる資質能力の内実を考察する。③学術的研究による教師教育に資する基礎的知見・研究方法論を創出する。
授 業 計 画	第 1 回 オリエンテーション・本授業の目的・方針・進め方第 2 回～5 回 「改善の科学」としての「日本型授業研究」というモデルと「比較授業分析」という学術研究方法を通しての教師教育学研究の発展についての検討・考察(授業観察・授業研究・授業分析・比較授業分析を通してより有力な事実を見つける)6 回～9 回 教師教育学に関する基礎研究・方法論の創出(国内のアカデミックカルチャー・海外のアカデミックカルチャー・国内と海外の対話の可能性と対策・手法等)第 10 回～13 回 教師のリーダーシップの発達のモデルの検討・考察(教師教育者の備えるべき資質能力・教員養成教育カリキュラムの評価と実証的研究方法論・教育大学、研究総合大学と私立大学の教員養成カリキュラムの特徴等)第 14 回 授業の総括、反省会と意見交換等
授 業 の 方 法	授業方法の特徴としては、具体的な実践の事例(エビデンス)を基に個人の考察、ペア学習・グループ学習を行い、全体討論や個人の発表の機会を通してさまざまな考え・アイデア・対策(国内・国際)の特徴・特色を交換し、教師教育学研究について理解を深める。
成 績 評 価 方 法	授業で課すレポート(30%)習得、②授業中のペア学習・グループ学習の活動、探究学習報告、発表など(30%)獲得、③最終レポート(40%)考察 で評価する。合計 100 点満点で 60 点以上を合格とする。
教 科 書	特になし。
履修上の注意・備考	(1) 配布した資料を読んで自分なりの考え・意見・感想などをもち、それらを基に授業中で話し合いの活性化なるための努力・協力すること。(2)これまで学んできたこと・体験してきたことを基に、教師教育学についての知識を再構築してほしい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-301-08	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	濱田 秀行				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)				
講 義 題 目	国語科教育の理論と実践 The Theory and Practice of Japanese Language Education				

授 業 の 目 標・概 要	今日の学校教育における国語科の授業実践とその理論について学ぶ。教科「国語」の公式の枠組みである「学習指導要領」の学力観・指導観や実際の授業事例、教科書教材について検討することを通して、国語科教育の理論を踏まえながら実践について議論ができるようになる。／Learn about Japanese language class practice and its theory in school education.
授 業 計 画	1. オリエンテーション 2. 国語科授業実践の基本的な枠組 3. 国語科学習指導の実際 4. 国語科の教科内容(「読むこと」を例に)5. 「読むこと」をとらえ直す(教科書教材の構成)6. 「読むこと」をとらえ直す(教材分析)7. 指導と評価の一体化 8-9. 授業事例1の検討 10. 言語活動を通じた学習指導 11. 国語科学習指導の在り方を方向付ける諸テキスト 12-13. 授業事例2の検討
授 業 の 方 法	グループワーク, グループディスカッションを中心とする。
成 績 評 価 方 法	授業中の議論への参加状況とレポートから評価を行う。
教 科 書	文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 国語編』東洋館出版社
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	テキストは、文部科学省の Web ページから PDF ファイルをダウンロードし授業中に参照できるよう準備すれば購入しなくても良い。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-301-09	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	永田 佳之				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)				
講 義 題 目	地球規模課題と ESD Global Issues and ESD				

授 業 の 目 標・概 要	教育が普及すればするほど環境はなぜ悪化するのか。もしそうであればそのような教育にどんな価値があるのであろうー環境教育や ESD の論客である David Orr が私たちにこう問いかけたのは 30 年ほど前である('Earth in Mind')。この授業では、この問いを基層に据え、履修者が各々の答えを探究していく。上記の問いの他にも幾つかの(正答のない問い)を共有し、それぞれの思索を深める契機とする。講義内容のテキスタイルとして、縦糸として「教育開発」を、横糸として「環境」や「持続可能性(サステナビリティ)」などのグローバルな課題を設け、人類にとって喫緊の問題である気候変動(気候危機)などのサブトピックも織り込んでいく。また、ポスト・コロナ時代における教育の在り方を幼児教育から高等教育に至るまで国内外の理論や原理、実践も紹介しながら考察を深める。
授 業 計 画	1 基本的な問いの共有 2 持続可能な社会と教育 3 環境教育・ESD・EfS4 エコフォビアを超えて 5 プラネタリー・バウンダリーと未来世代 6 気候変動の本質的な課題 7 不確実性の時代と学校教育 8 ESD の来し方行く末① 9 ESD の来し方行く末② 10 ESD for 2030 - SDGs と教育 - 11 世界の優良実践① 12 世界の優良実践② 13 日本の教育を捉え直す 14 人新世時代の教育学の課題 15 ポスト・コロナ時代の学校をデザインする
授 業 の 方 法	〈正答のない問い〉を中心に進め、グループ討議も適宜、取り入れていく。
成 績 評 価 方 法	授業への参加状況(発表・発言など)60%、レポート 40%を目安に総合的に判断する。
教 科 書	リチャード・ダン『ハーモニーの教育: ポスト・コロナ時代における世界の新たな見方と学び方』山川出版社、2020 年
履 修 上 の 注 意・備 考	事前に文献をよく読んで授業に臨むこと。
そ の 他	以下の URL も参照: ・気候変動教育プラットフォーム https://climate-empowerment.nagatalab.jp ・BE*hive (暮らしから捉え直す SDGs) http://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp/event/201207/ ・Operation Green. https://operationgreen.info/ecoshift_school/

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-301-10	単 位 数	2	学 期	S2
担 当 教 員	杉浦 幸子				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)				
講 義 題 目	生涯学習時代の美術教育における鑑賞のデザイン Designing Appreciation in Art Education in the Age of Lifelong Learning				

授 業 の 目 標・概 要	生涯学習時代において、美術作品の「鑑賞」は、学校教育においてのみならず、社会教育機関である美術館、芸術祭といったアウトリーチの場、さらには福祉、医療、多文化交流、ビジネスの現場といった、広い意味での教育的な、多分野にまたがる専門領域においても、その重要性が認識されている。「鑑賞」という形のない体験のデザインに、さまざまな可能性が見出されている現状を踏まえ、この授業では、鑑賞の定義や歴史を概観し、国内外の事例を取り上げ、ディスカッションを行った後、実際のアート作品や展覧会を鑑賞するプログラムをデザイン・実施し、さらにそれを検証し評価することを通して、多角的に鑑賞のデザインについて学ぶ。鑑賞のデザインの対象者は、学校教育に限らず、乳幼児から高齢者、障がいの有無、国籍など、生涯学習の観点から広く設定していく。
授 業 計 画	以下の 13 回の授業内容を予定している。1.美術作品の鑑賞の定義と歴史 2、3、4、5.鑑賞に関連する文献講読 6、7、8.鑑賞プログラムのデザイン 9.鑑賞プログラムの実施① 10. 鑑賞プログラムの分析とブラッシュアップ 11.鑑賞プログラムの実施② 12.鑑賞プログラムの評価 13.まとめ
授 業 の 方 法	講義とディスカッションの後、個別またはグループで(受講者人数による)美術作品もしくは美術展の鑑賞プログラムをデザインし、プレゼンテーションを行う実践的な授業となる。関連文献、関連作品/展覧会は受講生と相談の上、選定する。鑑賞プログラムのデザインのために、授業時間外で、グループでのディスカッションを行う可能性がある。また、鑑賞デザインの現場で活動を行う専門家(美術館学芸員、アーティスト)が授業に参加する可能性がある。履修人数やコロナ感染状況、オンラインの通信状況によって調整や変更が生じる可能性がある。
成 績 評 価 方 法	議論への貢献とプレゼンテーション(50%)、最終レポート(50%)で評価する。
教 科 書	なし。
履修上の注意・備考	コロナ感染状況次第となるが、学外の美術館の見学(授業内で/各自)を行う可能性がある。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-301-11	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	小泉 広子				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)				
講 義 題 目	教育法の現代的課題 Contemporary Issues in Education Law				

授 業 の 目 標・概 要	「教育法」とは、教育ないし教育制度に固有な法的しくみをいい、「教育法学」とは、教育にとって望ましいそうした法のあり方を研究する学問である。また、近年では、子どもにかかわる法体系やそのあり方を包括的に検討することを志向した「子ども法」という概念も広がりつつある。本講義では、学校教育や福祉領域における子どもの権利保障の現状と課題を、裁判事例や法制度を素材に、検討し、あるべき法解釈や立法論を考えていく。また、演習として、子どもの人権裁判を中心に、判例評釈の方法を修得する。
授 業 計 画	1. 子どもの権利条約からみた日本の子ども 2. 教育法の機能的3種別 3. 子どもの人権裁判概論 4. 体罰と子どもの権利 5. いじめと子どもの権利 6. 校則と子どもの権利 7. 障害をもつ子ども・青年の学ぶ権利 8. 子どもの宗教的自由と学校教育 9. 学校事故と子どもの権利 10. 児童虐待と子どもの権利 11. 貧困と子どもの権利 12. 乳幼児期の子どもの権利 13. 保育と子どもの権利
授 業 の 方 法	講義と演習
成 績 評 価 方 法	レポートによる
教 科 書	特に指定しない
履 修 上 の 注 意・備 考	受講者の指定文献や判例の報告を中心に講義を進めます。子どもの権利条約に関する国連子どもの権利委員会による、日本政府への第4・5 回最終所見に目を通しておくとうよいと思います。外務省のホームページから政府訳を入手できます。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-301-12	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	宗前 清貞				
授 業 科 目	教職開発・理論研究 (教職開発・発展研究)				
講 義 題 目	教育制度の公共政策分析 Public Policy Studies of Education Systems				

授 業 の 目 標・概 要	この授業は、公共政策学の基礎的知識を習得し、それを教育政策や制度の分析・評価に応用できることを目的とする。具体的な政策領域において、従来は固有の知識体系を前提として分析が行われる事例が多いが、制度や政策は「広義の政治」の出力なので、政治学に由来する政策分析の考え方を習得することは重要である。本講義を通じて、政策過程に対する基礎的かつ主要なアプローチを理解し、学術論文執筆に活用できるようになることが目標である。
授 業 計 画	1.序説: 公共政策学という考え方(対面講義)「利益アプローチ」2.キューバミサイル危機の事例研究(調査発表)3.アリソンによる3モデルの理解(講義、討論)4.アクターアプローチ論文読解(討論)「アイディアアプローチ」5.行政改革とは何か(調査発表)6.アイディアアプローチ萌芽期論文読解(討論)7.アイディアアプローチ論文読解(討論)「制度アプローチ」8.制度論の背景と概要(学説史・講義)9.制度アプローチ論文読解1(討論)「行政学と政策研究」10.自殺研究読解(討論)11.児童虐待研究読解(討論)12.医療制度研究読解(討論)13.まとめ(対面講義)
授 業 の 方 法	講義セッションと演習を併用する。講義セッションでは事前指定された課題(予習を含む)を行って講義に臨み、教員からの質疑や受講生同士の討論も行う。演習の場合は、事前に指定された学術論文(研究書の抜粋を含む)を読み、要旨メモの作成や論点整理を行い、討論によって論文のエッセンスを把握する。なお、初回と最終回は対面で実施するほか、適宜ゲストセッション(授業で扱った論文著者によるオーサートークなど)を設ける予定。
成 績 評 価 方 法	平常点(授業への参加度、要旨メモの完成度、欠席回数)および課題リポート(書評または政策過程分析)による
教 科 書	秋吉貴雄・伊藤修一郎・北山俊哉(2020)『公共政策学の基礎[第3版]』有斐閣
履 修 上 の 注 意・備 考	この講義では政治学的知識の習熟を前提としていないが、時間の制約がある大学院講義であることを考慮すると、講師による個別フォローには限界がある。そのため、もしも政治学・行政学の知識に不安がある場合には、上述の参考書を必要に応じて入手し、適宜参照されたい。そのうえで質問がある場合にはできる限り対応する予定である。また授業で用いる論文等は(レポジトリ等で電子的に入手できる場合を除き)教員側で準備し配布する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-301-13	単 位 数	2	学 期	S2
担 当 教 員	藤江 康彦				
授 業 科 目	教職開発・実践研究 (授業研究・事例研究)				
講 義 題 目	カリキュラムの事例研究 Case Studies of Curriculum				

授 業 の 目 標・概 要	カリキュラム研究や授業研究をはじめとする教育実践研究に関する内外の文献を講読しながら、授業研究や教育実践研究の、教育学研究、教師の学習環境、教師の学習を支える研究的実践、などの多様な在り方について理解し、研究者、実践者としてどのように取り組んでいくかを考察することを目指す。研究者として、あるいは実践者としてどのように教育実践研究を進めていくのか、について研究手法も含めて検討する。教育実践研究において多くとられる事例研究や質的研究について、その進めかたや留意点、認識論について理解することを通して、質の高い教育実践研究のあり方についても検討する。また、さまざまな校種や教科の授業における映像記録、逐語記録、授業記録、実践記録などの視聴や読み取りを通して、授業、子ども、教師、教材の多様性と固有性、相互関係のあり方の複雑性や相補性などについて、検討し考察する。実際にフィールドワークを行うことも予定している。自分や他者が記録をどう切り出してきたか、どう読み取ったかを交流することを通して、授業、子ども、教師教材などをとらえる視点をメタ的にとらえ事例への視点の多様性や固有性について気づくとともに、授業を対象として分析研究を行う際の方法を学ぶ。
授 業 計 画	第1回：教育実践研究、事例研究の基本的な考え方第2回：文献購読①第3回：文献購読②第4回：フィールドワーク第5回：事例分析①第6回：事例分析②第7回：事例分析③
授 業 の 方 法	文献購読については一回の授業ごとに国内外の授業研究や事例研究、質的研究に関する文献を複数選び、分担者を決めて購読する。購読ののちグループ協議、全体協議をおこなう。事例分析については、フィールドワークによって得られたデータを素材として行う予定である。詳細は授業の初回時に説明する。
成 績 評 価 方 法	演習への参加状況、課題レポート、学期末のレポートをもとに総合的に評価する。
教 科 書	使用しない
履 修 上 の 注 意・備 考	文献購読や授業映像の文字起こしや分析作業は、授業時間外での作業やグループワークが発生する場合がある。このことを了承のうえで参加されたい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コ ー ド	23-301-14	単 位 数	2	学 期	A2
担 当 教 員	一柳 智紀				
授 業 科 目	教職開発・実践研究 (授業研究・事例研究)				
講 義 題 目	授業の事例研究 Case Studies of Classroom Lessons				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	子どもの学習を中心とした探究的で協働的な授業デザインについて理論的、実践的に学ぶとともに、授業における子どもの学習過程を捉える視点を獲得する。
授 業 計 画	第1回:受講者のこれまでの実践の省察と課題の認識第2回:事例分析①第3回:事例分析②第4回:事例分析③第5回:事例分析④第6回:事例分析⑤第7回:全体のまとめと省察
授 業 の 方 法	さまざまな校種や教科の授業における映像記録、文字記録などの視聴や読み取りを行う。読み取り学んだことを交流しながら、授業実践を授業で生起する事実に基づき検討する。
成 績 評 価 方 法	演習への参加状況、課題レポート、学期末のレポートをもとに総合的に評価する。
教 科 書	使用しない。
履修上の注意・備考	授業の形態がオンラインか対面かによって記録の共有や検討する協議などの方法が異なるので、授業の初回時に説明します。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-301-15	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	北村 友人				
授 業 科 目	教職開発・実践研究 (教職開発・事例研究)				
講 義 題 目	教科学習の事例研究 Case studies on Learning in Subject Areas				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	教育観や学力観が大きく変化している今日、学校教育の現場でもさまざまな取り組みが積み重ねられている。主にオンラインで視聴できる講義を観察し、どのような視点から授業を見ていくことが重要であるか、受講者たちの間で議論する。そうした議論を通して、授業を観察する視点を獲得していくことが、本講義の目標である。
授 業 計 画	第 1 回：導入(講義の説明)[この第 1 回の講義の課題を、第 2 回の講義時に提出してもらうので、注意すること。]第 2 回：教科学習の事例研究(1) 第 3 回：教科学習の事例研究(2) 第 4 回：教科学習の事例研究(3) 第 5 回：教科学習の事例研究(4) 第 6 回：新しい概念にもとづく授業の事例研究／その他の教科の事例研究 第 7 回：まとめ＊履修者の関心を踏まえて、研究する授業の事例については修正を行うことがある。
授 業 の 方 法	毎回一つの事例を取り上げ、発表担当者がそれについて概説し、問題点や注目すべき点を指摘したのち、履修者全員でその事例についての討論を行う。【第1回の講義の課題】下記の2つの論考を読み、それぞれについて重要だと感じた論点を挙げると共に、読んで感じたり考えたりしたことを何でも良いので自由に書くこと。(1)石井英真「授業の構想力を高める教師の実践研究の方法論」(https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/226084/1/hte_019)
成 績 評 価 方 法	出席状況、発表、授業への取り組み、最終レポートを総合的に評価する。
教 科 書	講義のなかで指示する。
履修上の注意・備考	発表を担当する時でなくても事例を細かく分析し、問題意識を持って授業に臨むこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-301-16	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	浅井 幸子				
授 業 科 目	教職開発・実践研究 (教職開発・実地研究)				
講 義 題 目	授業の実地研究 Fieldwork on Classroom Lessons				

授 業 の 目 標・概 要	各自研究テーマを設定し、学校において観察、記録、実習、調査等のフィールドワークを実施し、その報告を作成し提出する。
授 業 計 画	最初2時間程度、ガイダンスを行い、この授業の趣旨や実施計画、評価方法の概要を説明したのち、参加者はそれぞれ研究テーマ、対象とする学校の選択を行い、履修計画を作成する。その履修計画に基づき、依頼する学校や教師との協議ののち、フィールドワークを実施する。
授 業 の 方 法	各自のフィールドワークを中心とするゼミナールであり、個人研究が基本となる。この実地研究の履修に関しては、修士課程における履修において特段の事情や要望がない限り、最低2単位は東京大学附属中等教育学校において実施することを基本とする。なお、専任、非常勤を問わず勤務校におけるフィールドワークは認められない。中間報告会、最終報告会、附属中等教育学校の公開研究会(2月)への参加がもとめられる。
成 績 評 価 方 法	フィールドワークの実施状況および研究レポートによって評価する。
教 科 書	必要に応じて授業中に指示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	時間割上の開講時間以外の活動が多くなることに留意されたい。受講希望者は必ず初回の授業に出席すること。出席のない場合は履修を認めないので、特別な事情がある時は事前に連絡すること。教職開発コースまたは教育内容開発コースの「事例研究」を事前に履修することを強く求める。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-301-17	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	藤村 宣之				
授 業 科 目	教職開発・実践研究 (教職開発・実地研究)				
講 義 題 目	教科学習の実地研究 Fieldwork on Learning in Subject Areas				

授 業 の 目 標・概 要	学校におけるフィールドワーク(授業観察・調査など)の方法を学ぶとともに、それを研究としてまとめる方法について学ぶ。また、現場の教育に対する理解を深めることも目的とする。履修者は、自ら設定した研究テーマにもとづいてフィールドワークを行い、その研究レポートを作成して提出する。
授 業 計 画	初回にガイダンスを行って、授業の趣旨や実施計画、評価方法の概要を説明する。その後、履修者はそれぞれの研究テーマを定め、学校の選択を行って、履修計画を作成する。その計画に基づいて学校や教師と調整を行い、フィールドワークを実施する。
授 業 の 方 法	各自のフィールドワークを中心とするゼミナールであり、個人研究が基本となる。この実地研究の履修に関しては、修士課程の履修において特段の事情や要望がないかぎり、最低2単位は東京大学教育学部附属中等教育学校において実施することを基本とする。なお、専任、非常勤を問わず、勤務校におけるフィールドワークは認められない。
成 績 評 価 方 法	フィールドワークの実施状況および研究レポートによって評価する。
教 科 書	使用しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	フィールドワークを実施する際には、10時間以上実施することが必要である。修士1年の院生、および初めてフィールドワークを履修する博士1年の院生は、秋学期以降の履修を原則とする。初回の授業時にガイダンスを行うので、履修希望者は必ずそれに参加すること。本科目の受講は、教職開発コース所属の大学院生のうち、本科目の履修を指示された者に限る。また、本科目を履修する際には、前学期(セメスター)までに、①基本研究または発展研究、②事例研究の、①および②を履修済みであることが必要である。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-301-18	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	一柳 智紀				
授 業 科 目	教職開発・論文指導 (授業研究・論文指導)				
講 義 題 目	授業研究論文指導 Mentoring Seminar of Research on Classroom Lessons				

授 業 の 目 標・概 要	授業研究について、教育心理学的なアプローチによって、各自の研究テーマにそって実証的な論文執筆ができるように指導を行う。
授 業 計 画	学校における子どもと教師の学習・発達過程や、それを支える社会文化的環境に関して、修士論文、博士論文等の執筆を希望する者に対して具体的に、それぞれの問題意識に即して論文執筆が当該年にできるように指導を行なう。
授 業 の 方 法	個人指導および集団での論文指導を行う。個人指導：研究の進行に応じて、適宜教員による個別指導を行う。集団指導：自らの研究テーマについてのプレゼンテーションを行い、参加者で検討する。それによって、研究主題の立て方、研究方法、論文の読み方、コメントの仕方、書き方などを学んでいく。
成 績 評 価 方 法	本授業におけるプレゼンテーションの内容、授業への貢献度、論文の執筆状況にもとづいて評価する。
教 科 書	指定しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	参加者の都合に応じて時間を柔軟に設定します。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-301-19	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	一柳 智紀				
授 業 科 目	教職開発・論文指導 (授業研究・論文指導)				
講 義 題 目	授業研究論文指導 Mentoring Seminar of Research on Classroom Lessons				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	授業研究について、教育心理学的なアプローチによって、各自の研究テーマにそって実証的な論文執筆ができるように指導を行う。
授 業 計 画	学校における子どもと教師の学習・発達過程や、それを支える社会文化的環境に関して、修士論文、博士論文等の執筆を希望する者に対して具体的に、それぞれの問題意識に即して論文執筆が当該年にできるように指導を行なう。
授 業 の 方 法	個人指導および集団での論文指導を行う。個人指導：研究の進行に応じて、適宜教員による個別指導を行う。集団指導：自らの研究テーマについてのプレゼンテーションを行い、参加者で検討する。それによって、研究主題の立て方、研究方法、論文の読み方、コメントの仕方、書き方などを学んでいく。
成 績 評 価 方 法	本授業におけるプレゼンテーションの内容、授業への貢献度、論文の執筆状況にもとづいて評価する。
教 科 書	指定しない。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	参加者の都合に応じて時間を柔軟に設定します。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-301-20	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	藤江 康彦				
授 業 科 目	教職開発・論文指導 (カリキュラム研究・論文指導)				
講 義 題 目	カリキュラム研究論文指導 Mentoring Seminar of Research on Curriculum				

授 業 の 目 標・概 要	授業やカリキュラム、そしてそれらを構成する諸事象を対象にして研究論文を執筆するために必要な知識や技能を身につけ、学位論文を作成することを目指す。
授 業 計 画	1. 「授業」、「教師や子どもの学習」、「カリキュラム」などに関する理論や実践についての研究をレビューし、自らのリサーチエスチョンを明確にする。2. 「観察法」、「面接法」などの調査方法やデータの質的分析法といった研究方法、機材の取扱方などを習得し、効果的に用いることができるようにする。3. リサーチエスチョンから研究を立ち上げ、文献探索やフィールドワークを行う。その過程で、研究方法や研究倫理について学ぶ。4. 研究のアイデアを他者と交流させ、研究を展開する。5. 研究を学位論文や学術論文の体裁に執筆しまとめる。
授 業 の 方 法	1. 集団指導：参加者は、自らの研究テーマについてのプレゼンテーションを行う。その発表内容について、参加者全員で集団的に検討を行う。2. 個別指導：研究の進行に応じて、適宜教員による個別指導を行う。
成 績 評 価 方 法	授業におけるプレゼンテーションの内容、授業への貢献度、論文の執筆状況にもとづいて評価する。
教 科 書	指定しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	履修者は藤江の指導学生に限定する。修士課程の学生向けの論文指導ゼミである。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-301-21	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	藤江 康彦				
授 業 科 目	教職開発・論文指導 (カリキュラム研究・論文指導)				
講 義 題 目	カリキュラム研究論文指導 Mentoring Seminar of Research on Curriculum				

授 業 の 目 標・概 要	授業やカリキュラム、そしてそれらを構成する諸事象を対象にして研究論文を執筆するために必要な知識や技能を身につけ、学位論文を作成することを目指す。
授 業 計 画	1. 「授業」、「教師や子どもの学習」、「カリキュラム」などに関する理論や実践についての研究をレビューし、自らのリサーチエスチョンを明確にする。2. 「観察法」、「面接法」などの調査方法やデータの質的分析法といった研究方法、機材の取扱方などを習得し、効果的に用いることができるようにする。3. リサーチエスチョンから研究を立ち上げ、文献探索やフィールドワークを行う。その過程で、研究方法や研究倫理について学ぶ。4. 研究のアイデアを他者と交流させ、研究を展開する。5. 研究を学位論文や学術論文の体裁に執筆しまとめる。
授 業 の 方 法	1. 集団指導：参加者は、自らの研究テーマについてのプレゼンテーションを行う。その発表内容について、参加者全員で集団的に検討を行う。2. 個別指導：研究の進行に応じて、適宜教員による個別指導を行う。
成 績 評 価 方 法	授業におけるプレゼンテーションの内容、授業への貢献度、論文の執筆状況にもとづいて評価する。
教 科 書	指定しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	履修者は藤江の指導学生に限定する。博士課程の学生向けの論文指導ゼミである。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-301-22	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	浅井 幸子				
授 業 科 目	教職開発・論文指導 (カリキュラム研究・論文指導)				
講 義 題 目	カリキュラム研究論文指導 Mentoring Seminar of Research on Curriculum				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	研究論文を執筆するための指導を行う。
授 業 計 画	具体的な論文の執筆過程に即して、テーマの立て方、資史料調査、分析の方法、記述の方法等を学ぶ。
授 業 の 方 法	個別指導とグループ指導を予定している。
成 績 評 価 方 法	研究の成果によって評価を行う。
教 科 書	特になし。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-301-23	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	浅井 幸子				
授 業 科 目	教職開発・論文指導 (カリキュラム研究・論文指導)				
講 義 題 目	カリキュラム研究論文指導 Mentoring Seminar of Research on Curriculum				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	研究論文を執筆するための指導を行う。
授 業 計 画	具体的な論文の執筆過程に即して、テーマの立て方、資史料調査、分析の方法、記述の方法等を学ぶ。
授 業 の 方 法	個別指導とグループ指導を予定している。
成 績 評 価 方 法	研究の成果によって評価を行う。
教 科 書	特になし。
履修上の注意・備考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-302-01	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	濱田 秀行				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (言語教育・基礎研究)				
講 義 題 目	国語科教育の理論と実践 The Theory and Practice of Japanese Language Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	今日の学校教育における国語科の授業実践とその理論について学ぶ。教科「国語」の公式の枠組みである「学習指導要領」の学力観・指導観や実際の授業事例、教科書教材について検討することを通して、国語科教育の理論を踏まえながら実践について議論ができるようになる。／Learn about Japanese language class practice and its theory in school education.
授 業 計 画	1. オリエンテーション 2. 国語科授業実践の基本的な枠組 3. 国語科学習指導の実際 4. 国語科の教科内容(「読むこと」を例に)5. 「読むこと」をとらえ直す(教科書教材の構成)6. 「読むこと」をとらえ直す(教材分析)7. 指導と評価の一体化 8-9. 授業事例1の検討 10. 言語活動を通じた学習指導 11. 国語科学習指導の在り方を方向付ける諸テキスト 12-13. 授業事例2の検討
授 業 の 方 法	グループワーク, グループディスカッションを中心とする。
成 績 評 価 方 法	授業中の議論への参加状況とレポートから評価を行う。
教 科 書	文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 国語編』東洋館出版社
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	テキストは、文部科学省の Web ページから PDF ファイルをダウンロードし授業中に参照できるよう準備すれば購入しなくても良い。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-02	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	永田 佳之				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (人文社会教育・基礎研究)				
講 義 題 目	地球規模課題と ESD Global Issues and ESD				

授 業 の 目 標・概 要	教育が普及すればするほど環境はなぜ悪化するのか。もしそうであればそのような教育にどんな価値があるのであろうー環境教育や ESD の論客である David Orr が私たちにこう問いかけたのは 30 年ほど前である('Earth in Mind')。この授業では、この問いを基層に据え、履修者が各々の答えを探究していく。上記の問いの他にも幾つかの(正答のない問い)を共有し、それぞれの思索を深める契機とする。講義内容のテキスタイルとして、縦糸として「教育開発」を、横糸として「環境」や「持続可能性(サステナビリティ)」などのグローバルな課題を設け、人類にとって喫緊の問題である気候変動(気候危機)などのサブトピックも織り込んでいく。また、ポスト・コロナ時代における教育の在り方を幼児教育から高等教育に至るまで国内外の理論や原理、実践も紹介しながら考察を深める。
授 業 計 画	1 基本的な問いの共有2 持続可能な社会と教育3 環境教育・ESD・EfS4 エコフォビアを超えて5 プラネタリー・バウンダリーと未来世代6 気候変動の本質的な課題7 不確実性の時代と学校教育8 ESD の来し方行く末①9 ESD の来し方行く末②10 ESD for 2030 - SDGs と教育 - 11 世界の優良実践①12 世界の優良実践②13 日本の教育を捉え直す 14 人新世時代の教育学の課題 15 ポスト・コロナ時代の学校をデザインする
授 業 の 方 法	〈正答のない問い〉を中心に進め、グループ討議も適宜、取り入れていく。
成 績 評 価 方 法	授業への参加状況(発表・発言など)60%、レポート 40%を目安に総合的に判断する。
教 科 書	リチャード・ダン『ハーモニーの教育: ポスト・コロナ時代における世界の新たな見方と学び方』山川出版社、2020 年
履 修 上 の 注 意・備 考	事前に文献をよく読んで授業に臨むこと。
そ の 他	以下の URL も参照: ・気候変動教育プラットフォーム https://climate-empowerment.nagatalab.jp ・BE*hive (暮らしから捉え直す SDGs) http://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp/event/201207/ ・Operation Green. https://operationgreen.info/ecoshift_school/

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-302-03	単 位 数	2	学 期	S2
担 当 教 員	杉浦 幸子				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (芸術教育・基礎研究)				
講 義 題 目	生涯学習時代の美術教育における鑑賞のデザイン Designing Appreciation in Art Education in the Age of Lifelong Learning				

授 業 の 目 標・概 要	生涯学習時代において、美術作品の「鑑賞」は、学校教育においてのみならず、社会教育機関である美術館、芸術祭といったアウトリーチの場、さらには福祉、医療、多文化交流、ビジネスの現場といった、広い意味での教育的な、多分野にまたがる専門領域においても、その重要性が認識されている。「鑑賞」という形のない体験のデザインに、さまざまな可能性が見出されている現状を踏まえ、この授業では、鑑賞の定義や歴史を概観し、国内外の事例を取り上げ、ディスカッションを行った後、実際のアート作品や展覧会を鑑賞するプログラムをデザイン・実施し、さらにそれを検証し評価することを通して、多角的に鑑賞のデザインについて学ぶ。鑑賞のデザインの対象者は、学校教育に限らず、乳幼児から高齢者、障がいの有無、国籍など、生涯学習の観点から広く設定していく。
授 業 計 画	以下の 13 回の授業内容を予定している。1.美術作品の鑑賞の定義と歴史 2、3、4、5.鑑賞に関連する文献講読 6、7、8.鑑賞プログラムのデザイン 9.鑑賞プログラムの実施① 10. 鑑賞プログラムの分析とブラッシュアップ 11.鑑賞プログラムの実施② 12.鑑賞プログラムの評価 13.まとめ
授 業 の 方 法	講義とディスカッションの後、個別またはグループで(受講者人数による)美術作品もしくは美術展の鑑賞プログラムをデザインし、プレゼンテーションを行う実践的な授業となる。関連文献、関連作品/展覧会は受講生と相談の上、選定する。鑑賞プログラムのデザインのために、授業時間外で、グループでのディスカッションを行う可能性がある。また、鑑賞デザインの現場で活動を行う専門家(美術館学芸員、アーティスト)が授業に参加する可能性がある。履修人数やコロナ感染状況、オンラインの通信状況によって調整や変更が生じる可能性がある。
成 績 評 価 方 法	議論への貢献とプレゼンテーション(50%)、最終レポート(50%)で評価する。
教 科 書	なし。
履修上の注意・備考	コロナ感染状況次第となるが、学外の美術館の見学(授業内で/各自)を行う可能性がある。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-04	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	荒木 啓史				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・基礎研究)				
講 義 題 目	Research Methods in Education Research Methods in Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	Are you a quantitative researcher or a qualitative researcher (or a mixed methodologist)? This is a frequently asked question in academia. However, what do “quantitative” and “qualitative” mean in educational research? Aren’t there any risks by adopting this dichotomous perspective when you investigate your research question? Understanding the advantage and the limitation of various research methods, ranging from classical approaches to state-of-the-art ones, is essential for students to conduct high-quality independent research whilst critically assessing prior academic work. This course aims to develop students’ knowledge and skills concerning research methods in education via lectures, discussions, presentations, and other assignments. Having successfully completed the course, students will be able to:– understand and explain the basic concept, advantages, and limitations of research methods in education;– critically assess previous educational research in terms of research methods;– design and use appropriate research methods in accordance with their own research interests/questions.
授 業 計 画	[The schedule below is subject to change.]■Day 1 (1 August 2022, 8:30–14:45)1. Introduction to research methods in education2. Research questions3. Literature review■Day 2 (2 August 2022, 8:30–16:40)4. Qualitative research 1: Scope and basic concepts5. Qualitative research 2: Application and further development6. Quantitative research 1: Scope and basic concepts7. Quantitative research 2: Application and further development■Day 3 (3 August 2022, 8:30–14:45)8. Mixed methods 1: Scope and basic concepts9. Mixed methods 2: Application and further development10. Research writing■Day 4 (4 August 2022, 8:30–14:45)11. Presentation by students 112. Presentation by students 213. Summary and feedback
授 業 の 方 法	I will give an introductory lecture at the beginning of each class, followed by discussions around the advantage and the limitation of existing research methods in education. Students are encouraged to read the relevant literature (see “Reference” below)
成 績 評 価 方 法	Term paper (30%); Presentation (20%); Minute papers (30%); Contribution to discussions in classes (20%).
教 科 書	There is no textbook for this course. I will prepare materials for each class and share them with students. In the meantime, students are encouraged to read the literature as indicated below.
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	Although the primary language of instruction will be English, all students regardless of English proficiency are welcome to take this course. If you are interested in this course but foresee a clash with other courses and/or assignments, feel free to reac
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-05	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	藤村 宣之				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (数学・科学教育・発展研究)				
講 義 題 目	数学的・科学的思考の発達と授業過程 Development of Mathematical and Scientific Thinking and Classroom Learning				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	子どもの数学的思考・科学的思考の発達と授業過程について、教育心理学や発達心理学の領域で、どのような知見が得られているか、またどのような心理学的方法論を用いて研究を行うことが可能かについて、教科書や国内外の学術誌掲載論文、書籍等の実証的研究をもとに理解を深めることを目標とする。数学的思考、科学的思考の発達については、概念変化 (conceptual change)、問題解決 (problem solving)、概念的理解 (conceptual understanding) と手続き的知識 (procedural knowledge) の関係性、他者との社会的相互作用 (social interaction) などに焦点をあて、認知発達研究や個別・協同介入研究の知見やそれを導く心理学的方法論について、解説と検討を行う。数学、科学に関する授業過程については、探究や協同を含む教科学習の認知プロセスに焦点をあて、その知見と方法論について解説と検討を行う。
授 業 計 画	1: 数学的思考・科学的思考をめぐる状況と教育心理学・発達心理学研究2: 数学的思考・科学的思考をとらえる視点①手続き的知識3: 数学的思考・科学的思考をとらえる視点②概念的理解4: 数学的思考・科学的思考をとらえる視点③定型の問題解決5: 数学的思考・科学的思考をとらえる視点④非定型の問題解決6: 数学的思考・科学的思考の発達をとらえる視点①概念変化7: 数学的思考・科学的思考の発達をとらえる視点②探究過程8: 数学的思考・科学的思考の発達をとらえる視点③社会的相互作用9: 教科学習の認知プロセス①授業を通じた言語的思考の高まり10: 教科学習の認知プロセス②授業を通じた数学的思考の高まり11: 教科学習の認知プロセス③授業を通じた科学的思考の高まり12: 教科学習の認知プロセス④思考・理解の時間的・空間的広がりや深まり13: 教科教育の心理学の展開: 発達と学習の相互関係を探る
授 業 の 方 法	授業の内容について、教科書や参考書を用いて教員が解説を行い、参加者全体で質疑を行う。また授業内で指定した文献(学術誌掲載論文等)について、各参加者はレポートとコメントを行い、参加者全体で討論を行う。
成 績 評 価 方 法	最終レポート、授業時のレポート、および授業への参加状況を総合して評価する。
教 科 書	『協同的探究学習で育む「わかる学力」—豊かな学びと育ちを支えるために』(藤村宣之・橘春菜・名古屋大学教育学部附属中・高等学校編著、ミネルヴァ書房、2018年)
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	授業におけるレポートに加えて、他の参加者のレポートや教員による解説に関する討論への積極的な参加が望まれる。毎週の授業に先立ち、当日の授業に対応する教科書の章、および当日に発表・検討予定の論文について熟読しておくこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-06	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	斎藤 兆史				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (言語教育・発展研究)				
講 義 題 目	英語教授法 English Language Teaching Methodologies				

授 業 の 目 標・概 要	外国語教授法、特に英語教授法に関する諸理論を細かく検討し、それらが日本の学校英語教育に応用可能なものかどうかを議論する。
授 業 計 画	第1回: Grammar-Translation Method 第2回: 訳読第3回: Oral Method 第4回: Audio-Lingual Method 第5回: Total Physical Response 第6回: Suggestopedia 第7回: Silent Method 第8回: Oral Introduction 第9回: Communicative Approach 第10回: Task-Based Language Teaching 第11回: Focus on Form 第12回: Content and Language Integrated Learning 第13回: 多読第14回: その他の教授法第15回: まとめ
授 業 の 方 法	毎回の発表担当者がそれぞれの教授法の歴史、理論、実践などについて調査し、それを授業で発表する。その発表に基づいて議論をし、それぞれの教授法についての理解を深めるとともに、それらが現在の日本の英語教育の現場に応用可能なものかを検討する。
成 績 評 価 方 法	授業への貢献度、発表、授業への取り組み、最終レポートを総合的に評価する。
教 科 書	使用しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	発表を担当する時でなくても授業で扱う教授法を勉強し、問題意識を持って授業に臨むこと。第二回(4月19日)の授業では、SAITO Yoshifumi, 'Translation in English Language Teaching in Japan' (KJEE, Vol. 3, 2012)を扱うので、インターネット上に上がっている PDF を読んでおくこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-07	単 位 数	2	学 期	A1
担 当 教 員	北村 友人				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (人文社会教育・発展研究)				
講 義 題 目	Education in the Era of Globalization: Asian Contexts Education in the Era of Globalization: Asian Contexts				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	This course aims at helping students better understand current situations of education in Asia, particularly under the influence of globalization. We will discuss theoretical, institutional and practical dimensions of education, with particular interests of how education could contribute to the promotion and realization of more sustainable society.
授 業 計 画	1. Introduction to the course 2. Globalization and education 3. Global education networks and discourses 4. Global model of education and international agencies 5. Education for Sustainable Development (ESD) 6. Local contexts of education and global mobility of the people 7. Concluding session
授 業 の 方 法	Each student will assign one of the reading materials and make presentation on it in the class. Based on the presentation, we will discuss various issues raised in the reading material. Also, students will write a short essay for each reading material to
成 績 評 価 方 法	Final term paper (30%), In-class presentation (30%), Short essays for reading materials (20%), Participation and contribution to discussion in classes (20%)
教 科 書	Joel Spring (2015) Globalization of Education: An Introduction (2nd Edition). New York and London: Routledge.
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	Active participation in the discussion is expected.
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-08	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	高井良 健一				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・発展研究)				
講 義 題 目	教師のライフヒストリー研究 Exploring life history research focused upon teachers' experience				

授 業 の 目 標・概 要	教師のライフヒストリー研究は 1980 年代に欧米で広がり、オーラルヒストリーやナラティブ研究への注目とともに、2000 年代以降、日本でも事例研究の蓄積が生み出されました。その一方で、各々の事例研究が依拠する方法論についての省察は、ライフヒストリー研究者のこれからの課題として残されています。この授業では、教師のライフヒストリー研究の歴史を共有するとともに、事例研究の作品の検討を通して、各々の方法論のもつ特徴と課題を学ぶことを目標とします。
授 業 計 画	第1回 オリエンテーション第2回 個人史と教師のライフヒストリー研究第3回 草創期の事例研究 第4回 草創期の方法論第5回 時代を教師の経験から探究する第6回 カリキュラムを教師の経験から探究する第7回 教師の人生に協働での語りを通してアプローチする 第8回 教師の人生に協働での語り直しを通してアプローチする第9回 ナラティブに対する批判第 10 回 教師のライフヒストリー研究に対する批判的考察第 11 回 教師の語りの様式を読み解く第 12 回 教師のライフヒストリー研究の省察と解釈学的アプローチ第 13 回 ジェンダーによる不平等、トップダウンの教育改革の実態を照射する第 14 回 教師のライフヒストリー研究を行うということ ― 物語の規範化ではなく、エンパワメントされるスペースをつくる
授 業 の 方 法	授業はゼミナールの形式で行います。受講生は、あらかじめ指定された論文やテキストを読んだ上で、授業に出席することが求められます。初回の授業を除いて、各回の授業では、コメンテーターを担当する受講生は、レジュメを作成します。レジュメには、論文やテキストの簡潔な概要とコメンテーターの観点からのコメントを記載します。具体的には、毎回の授業は、次のような形式で行われる予定です。まずは、受講生による「教育研究と私」のコーナーから始まります。これは、スターターを担当する受講生が「教育研究に至ったストーリー」を語るものです。
成 績 評 価 方 法	成績評価は、毎回の授業におけるコメントの交流、ディスカッション、学びあいへの参加ならびにコメンテーター、スタータとしての発表等によって、総合的に行います。
教 科 書	課題論文やテキストを準備します。
履 修 上 の 注 意・備 考	ライフヒストリーの鍵は「聴く」という営みにあります。受講を希望する人には、自分の経験の外に踏み出して「聴く」構えを共有することを求めます。また、この授業は、担当教員が受講生に対して即効性のある研究方法論を伝えるものではありません。そもそも担当教員はそのようなものを持ち合わせていないのです。この授業は、多様な教師のライフヒストリー研究から学びつつ、教師研究の難しさの可能性について学びあうものです。教師の人生と経験世界に深い関心を持ち、先人のテキストを媒介として、ほかの受講生とともに学びあうことを求める方々の
そ の 他	* 原則として、全回対面での授業を予定していますが、新型コロナウイルスの感染状況や担当教員のスケジュールの関係でオンラインでの授業が行われる可能性もあります。その場合は、Zoom によるリアルタイムのオンライン授業を行う予定です。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-09	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	河野 哲也				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・発展研究)				
講 義 題 目	対話的教育の理論と実践 Theory and Practice of Dialogical Education				

授 業 の 目 標・概 要	昨年 2022 年、子どもの哲学国際学会が東京で開かれました。”P4C (Philosophy for Children)”、”P4/wC (Philosophy for/with children)”と呼ばれる、子どもとともに大人が一緒になって哲学的なテーマについて対話する教育的活動は、日本でもこの 10 年間でかなり知られるようになりました。この活動は、教育実践として大きな意味を持つだけでなく、教育の意味や目的、子どもの社会参加・シティズンシップについて問い直す機会を与え、さらに、対話と思考の関係、「子ども」の存在の意義、発達・成長という概念、大人と子どもの関係について根源的な再検討を迫るものです。本授業では、「子どもの哲学」について理論・実践の両面で紹介すると同時に、哲学あるいは教育哲学の観点から、「子どもの哲学」の哲学のもつ教育学的意義、さらにそれが突きつける教育学・哲学・倫理学・心理学の問い直しについて、みなさんと考えていきたいと思います。
授 業 計 画	1 ガイダンス、序論：子どもの哲学とはどういう活動か？歴史と現在2 子どもの哲学の意義と効果、世界での活動現状3 子どもの哲学の方法と実践上の課題4 哲学的テーマとしての子ども：哲学と子ども性、遊戯と存在5 教育哲学的テーマとしての子ども：子どもと大人の関係、発達とは何か、教育の新しい目的6 政治哲学的テーマとしての子ども：真理と民主主義、子どもの自由、探究の共同体としての民主社会7 対話の哲学：対話とは何か、ケアと思考との関係、何が思考を命じるのか、対話と二人称の根源性8 対話的教育：対話と教育、何が対話を可能にするか、対話と暴力、沈黙と間合い9 教育的タクト：タクトの概念、わざ・パフォーマンス・即興の関係について、教育におけるタクト 10 哲学対話の実践(1)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 11 哲学対話の実践(2)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 12 哲学対話の実践(3)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 13 哲学対話の実践(4)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 14 全体の振り返りとまとめ
授 業 の 方 法	1回～8回は、講義形態を取り、レクチャーの後に質疑応答の時間を十分に取ります。9回～14 回は、哲学対話を実際に実践して、場づくり、対話参加の仕方、ファシリテーションの仕方を実践的に学んでもらい、実践の振り返りを行います。
成 績 評 価 方 法	平常点(授業での質疑応答の参加度、実践部分への貢献度など)と最終レポートで判断いたします。
教 科 書	河野哲也『自分で考え 自分で話せる：こどもを育てる哲学レッスン』(増補版)、河出書房新社、2021 年
履修上の注意・備考	子どもの哲学に関心のある方のみならず、哲学カフェや対話的な活動に関心のある方に向いています。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-302-10	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	SarkarArani MohammadReza				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・発展研究)				
講 義 題 目	比較授業分析と教師教育学研究 Cross-cultural Analysis of Pedagogy and Teacher Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	受講者は、教師教育学に関する基礎概念や知識・技能について理論的・実践的な視点から習得する。また、国際と国内文献・先行研究のレビューをもとに、受講者は、教師教育研究の方法論の理解を以下の視点から深める。①専門職としての教師の発達とそれを支える現職教育の基礎概念・知識および具体的な取り組みを習得する。②高度専門職としての教師、およびその育成にあたる教師教育者 (teacher educator) に必要とされる資質能力の内実を考察する。③学術的研究による教師教育に資する基礎的知見・研究方法論を創出する。
授 業 計 画	第 1 回 オリエンテーション・本授業の目的・方針・進め方第 2 回～5 回 「改善の科学」としての「日本型授業研究」というモデルと「比較授業分析」という学術研究方法を通しての教師教育学研究の発展についての検討・考察(授業観察・授業研究・授業分析・比較授業分析を通してより有力な事実を見つける)6 回～9 回 教師教育学に関する基礎研究・方法論の創出(国内のアカデミックカルチャー・海外のアカデミックカルチャー・国内と海外の対話の可能性と対策・手法等)第 10 回～13 回 教師のリーダーシップの発達のモデルの検討・考察(教師教育者の備えるべき資質能力・教員養成教育カリキュラムの評価と実証的研究方法論・教育大学、研究総合大学と私立大学の教員養成カリキュラムの特徴等)第 14 回 授業の総括、反省会と意見交換等
授 業 の 方 法	授業方法の特徴としては、具体的な実践の事例(エビデンス)を基に個人の考察、ペア学習・グループ学習を行い、全体討論や個人の発表の機会を通してさまざまな考え・アイデア・対策(国内・国際)の特徴・特色を交換し、教師教育学研究について理解を深める。
成 績 評 価 方 法	授業で課すレポート(30%)習得、②授業中のペア学習・グループ学習の活動、探究学習報告、発表など(30%)獲得、③最終レポート(40%)考察 で評価する。合計 100 点満点で 60 点以上を合格とする。
教 科 書	特になし。
履修上の注意・備考	(1) 配布した資料を読んで自分なりの考え・意見・感想などをもち、それらを基に授業中で話し合いの活性化するための努力・協力すること。(2)これまで学んできたこと・体験してきたことを基に、教師教育学についての知識を再構築してほしい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-11	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	小泉 広子				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・発展研究)				
講 義 題 目	教育法の現代的課題 Contemporary Issues in Education Law				

授 業 の 目 標・概 要	「教育法」とは、教育ないし教育制度に固有な法的しくみをいい、「教育法学」とは、教育にとって望ましいそうした法のあり方を研究する学問である。また、近年では、子どもにかかわる法体系やそのあり方を包括的に検討することを志向した「子ども法」という概念も広がりつつある。本講義では、学校教育や福祉領域における子どもの権利保障の現状と課題を、裁判事例や法制度を素材に、検討し、あるべき法解釈や立法論を考えていく。また、演習として、子どもの人権裁判を中心に、判例評釈の方法を修得する。
授 業 計 画	1. 子どもの権利条約からみた日本の子ども 2. 教育法の機能的3種別 3. 子どもの人権裁判概論 4. 体罰と子どもの権利 5. いじめと子どもの権利 6. 校則と子どもの権利 7. 障害をもつ子ども・青年の学ぶ権利 8. 子どもの宗教的自由と学校教育 9. 学校事故と子どもの権利 10. 児童虐待と子どもの権利 11. 貧困と子どもの権利 12. 乳幼児期の子どもの権利 13. 保育と子どもの権利
授 業 の 方 法	講義と演習
成 績 評 価 方 法	レポートによる
教 科 書	特に指定しない
履 修 上 の 注 意・備 考	受講者の指定文献や判例の報告を中心に講義を進めます。子どもの権利条約に関する国連子どもの権利委員会による、日本政府への第4・5 回最終所見に目を通しておくとうよいと思います。外務省のホームページから政府訳を入手できます。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-12	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	宗前 清貞				
授 業 科 目	教育内容開発・理論研究 (教育内容開発・発展研究)				
講 義 題 目	教育制度の公共政策分析 Public Policy Studies of Education Systems				

授 業 の 目 標・概 要	この授業は、公共政策学の基礎的知識を習得し、それを教育政策や制度の分析・評価に応用できることを目的とする。具体的な政策領域において、従来は固有の知識体系を前提として分析が行われる事例が多いが、制度や政策は「広義の政治」の出力なので、政治学に由来する政策分析の考え方を習得することは重要である。本講義を通じて、政策過程に対する基礎的かつ主要なアプローチを理解し、学術論文執筆に活用できるようになることが目標である。
授 業 計 画	1.序説: 公共政策学という考え方(対面講義)「利益アプローチ」2.キューバミサイル危機の事例研究(調査発表)3.アリソンによる3モデルの理解(講義、討論)4.アクターアプローチ論文読解(討論)「アイディアアプローチ」5.行政改革とは何か(調査発表)6.アイディアアプローチ萌芽期論文読解(討論)7.アイディアアプローチ論文読解(討論)「制度アプローチ」8.制度論の背景と概要(学説史・講義)9.制度アプローチ論文読解1(討論)「行政学と政策研究」10.自殺研究読解(討論)11.児童虐待研究読解(討論)12.医療制度研究読解(討論)13.まとめ(対面講義)
授 業 の 方 法	講義セッションと演習を併用する。講義セッションでは事前指定された課題(予習を含む)を行って講義に臨み、教員からの質疑や受講生同士の討論も行う。演習の場合は、事前に指定された学術論文(研究書の抜粋を含む)を読み、要旨メモの作成や論点整理を行い、討論によって論文のエッセンスを把握する。なお、初回と最終回は対面で実施するほか、適宜ゲストセッション(授業で扱った論文著者によるオースタークなど)を設ける予定。
成 績 評 価 方 法	平常点(授業への参加度、要旨メモの完成度、欠席回数)および課題リポート(書評または政策過程分析)による
教 科 書	秋吉貴雄・伊藤修一郎・北山俊哉(2020)『公共政策学の基礎[第3版]』有斐閣
履 修 上 の 注 意・備 考	この講義では政治学的知識の習熟を前提としていないが、時間の制約がある大学院講義であることを考慮すると、講師による個別フォローには限界がある。そのため、もしも政治学・行政学の知識に不安がある場合には、上述の参考書を必要に応じて入手し、適宜参照されたい。そのうえで質問がある場合にはできる限り対応する予定である。また授業で用いる論文等は(レポジトリ等で電子的に入手できる場合を除き)教員側で準備し配布する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-13	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	北村 友人				
授 業 科 目	教育内容開発・実践研究 (教育内容開発・事例研究)				
講 義 題 目	教科学習の事例研究 Case studies on Learning in Subject Areas				

授 業 の 目 標・概 要	教育観や学力観が大きく変化している今日、学校教育の現場でもさまざまな取り組みが積み重ねられている。主にオンラインで視聴できる講義を観察し、どのような視点から授業を見ていくことが重要であるか、受講者たちの間で議論する。そうした議論を通して、授業を観察する視点を獲得していくことが、本講義の目標である。
授 業 計 画	第 1 回：導入(講義の説明)[この第 1 回の講義の課題を、第 2 回の講義時に提出してもらうので、注意すること。]第 2 回：教科学習の事例研究(1) 第 3 回：教科学習の事例研究(2) 第 4 回：教科学習の事例研究(3) 第 5 回：教科学習の事例研究(4) 第 6 回：新しい概念にもとづく授業の事例研究／その他の教科の事例研究 第 7 回：まとめ＊履修者の関心を踏まえて、研究する授業の事例については修正を行うことがある。
授 業 の 方 法	毎回一つの事例を取り上げ、発表担当者がそれについて概説し、問題点や注目すべき点を指摘したのち、履修者全員でその事例についての討論を行う。【第1回の講義の課題】下記の2つの論考を読み、それぞれについて重要だと感じた論点を挙げると共に、読んで感じたり考えたりしたことを何でも良いので自由に書くこと。(1)石井英真「授業の構想力を高める教師の実践研究の方法論」(https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/226084/1/hte_019)
成 績 評 価 方 法	出席状況、発表、授業への取り組み、最終レポートを総合的に評価する。
教 科 書	講義のなかで指示する。
履修上の注意・備考	発表を担当する時でなくても事例を細かく分析し、問題意識を持って授業に臨むこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-302-14	単 位 数	2	学 期	S2
担 当 教 員	藤江 康彦				
授 業 科 目	教育内容開発・実践研究 (教育内容開発・事例研究)				
講 義 題 目	カリキュラムの事例研究 Case Studies of Curriculum				

授 業 の 目 標・概 要	カリキュラム研究や授業研究をはじめとする教育実践研究に関する内外の文献を講読しながら、授業研究や教育実践研究の、教育学研究、教師の学習環境、教師の学習を支える研究的実践、などの多様な在り方について理解し、研究者、実践者としてどのように取り組んでいくかを考察することを目指す。研究者として、あるいは実践者としてどのように教育実践研究を進めていくのか、について研究手法も含めて検討する。教育実践研究において多くとられる事例研究や質的研究について、その進めかたや留意点、認識論について理解することを通して、質の高い教育実践研究のあり方についても検討する。また、さまざまな校種や教科の授業における映像記録、逐語記録、授業記録、実践記録などの視聴や読み取りを通して、授業、子ども、教師、教材の多様性と固有性、相互関係のあり方の複雑性や相補性などについて、検討し考察する。実際にフィールドワークを行うことも予定している。自分や他者が記録をどう切り出してきたか、どう読み取ったかを交流することを通して、授業、子ども、教師教材などをとらえる視点をメタ的にとらえ事例への視点の多様性や固有性について気づくとともに、授業を対象として分析研究を行う際の方法を学ぶ。
授 業 計 画	第1回：教育実践研究、事例研究の基本的な考え方第2回：文献購読①第3回：文献購読②第4回：フィールドワーク第5回：事例分析①第6回：事例分析②第7回：事例分析③
授 業 の 方 法	文献購読については一回の授業ごとに国内外の授業研究や事例研究、質的研究に関する文献を複数選び、分担者を決めて購読する。購読ののちグループ協議、全体協議をおこなう。事例分析については、フィールドワークによって得られたデータを素材として行う予定である。詳細は授業の初回時に説明する。
成 績 評 価 方 法	演習への参加状況、課題レポート、学期末のレポートをもとに総合的に評価する。
教 科 書	使用しない
履 修 上 の 注 意・備 考	文献購読や授業映像の文字起こしや分析作業は、授業時間外での作業やグループワークが発生する場合がある。このことを了承のうえで参加されたい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-302-15	単 位 数	2	学 期	A2
担 当 教 員	一柳 智紀				
授 業 科 目	教育内容開発・実践研究 (教育内容開発・事例研究)				
講 義 題 目	授業の事例研究 Case Studies of Classroom Lessons				

授 業 の 目 標・概 要	子どもの学習を中心とした探究的で協働的な授業デザインについて理論的、実践的に学ぶとともに、授業における子どもの学習過程を捉える視点を獲得する。
授 業 計 画	第1回:受講者のこれまでの実践の省察と課題の認識第2回:事例分析①第3回:事例分析②第4回:事例分析③第5回:事例分析④第6回:事例分析⑤第7回:全体のまとめと省察
授 業 の 方 法	さまざまな校種や教科の授業における映像記録、文字記録などの視聴や読み取りを行う。読み取り学んだことを交流しながら、授業実践を授業で生起する事実に基づき検討する。
成 績 評 価 方 法	演習への参加状況、課題レポート、学期末のレポートをもとに総合的に評価する。
教 科 書	使用しない。
履修上の注意・備考	授業の形態がオンラインか対面かによって記録の共有や検討する協議などの方法が異なるので、授業の初回時に説明します。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-302-16	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	藤村 宣之				
授 業 科 目	教育内容開発・実践研究 (教育内容開発・実地研究)				
講 義 題 目	教科学習の実地研究 Fieldwork on Learning in Subject Areas				

授 業 の 目 標・概 要	学校におけるフィールドワーク(授業観察・調査など)の方法を学ぶとともに、それを研究としてまとめる方法について学ぶ。また、現場の教育に対する理解を深めることも目的とする。履修者は、自ら設定した研究テーマにもとづいてフィールドワークを行い、その研究レポートを作成して提出する。
授 業 計 画	初回にガイダンスを行って、授業の趣旨や実施計画、評価方法の概要を説明する。その後、履修者はそれぞれの研究テーマを定め、学校の選択を行って、履修計画を作成する。その計画に基づいて学校や教師と調整を行い、フィールドワークを実施する。
授 業 の 方 法	各自のフィールドワークを中心とするゼミナールであり、個人研究が基本となる。この実地研究の履修に関しては、修士課程の履修において特段の事情や要望がないかぎり、最低2単位は東京大学教育学部附属中等教育学校において実施することを基本とする。なお、専任、非常勤を問わず、勤務校におけるフィールドワークは認められない。
成 績 評 価 方 法	フィールドワークの実施状況および研究レポートによって評価する。
教 科 書	使用しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	フィールドワークを実施する際には、10時間以上実施することが必要である。修士1年の院生、および初めてフィールドワークを履修する博士1年の院生は、秋学期以降の履修を原則とする。初回の授業時にガイダンスを行うので、履修希望者は必ずそれに参加すること。本科目の受講は、教育内容開発コース所属の大学院生、および学校教育高度化専攻の副専攻を履修している大学院生のうち本科目の受講を指示された者のみ可能である。また、本科目を履修する際には、前学期(セメスター)までに、①基本研究または発展研究、②事例研究の、①および②を履
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-302-17	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	浅井 幸子				
授 業 科 目	教育内容開発・実践研究 (教育内容開発・実地研究)				
講 義 題 目	授業の実地研究 Fieldwork on Classroom Lessons				

授 業 の 目 標・概 要	各自研究テーマを設定し、学校において観察、記録、実習、調査等のフィールドワークを実施し、その報告を作成し提出する。
授 業 計 画	最初2時間程度、ガイダンスを行い、この授業の趣旨や実施計画、評価方法の概要を説明したのち、参加者はそれぞれ研究テーマ、対象とする学校の選択を行い、履修計画を作成する。その履修計画に基づき、依頼する学校や教師との協議ののち、フィールドワークを実施する。
授 業 の 方 法	各自のフィールドワークを中心とするゼミナールであり、個人研究が基本となる。この実地研究の履修に関しては、修士課程における履修において特段の事情や要望がない限り、最低2単位は東京大学附属中等教育学校において実施することを基本とする。なお、専任、非常勤を問わず勤務校におけるフィールドワークは認められない。中間報告会、最終報告会、附属中等教育学校の公開研究会(2月)への参加がもとめられる。
成 績 評 価 方 法	フィールドワークの実施状況および研究レポートによって評価する。
教 科 書	必要に応じて授業中に指示する。
履 修 上 の 注 意・備 考	時間割上の開講時間以外の活動が多くなることに留意されたい。受講希望者は必ず初回の授業に出席すること。出席のない場合は履修を認めないので、特別な事情がある時は事前に連絡すること。教職開発コースまたは教育内容開発コースの「事例研究」を事前に履修することを強く求める。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コ ー ド	23-302-18	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	斎藤 兆史				
授 業 科 目	教育内容開発・論文指導 (言語教育・論文指導)				
講 義 題 目	外国語教育論文指導 Dissertation Research in Foreign Language Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	外国語教育関係の研究手法を教授し、最終的に論文を書き上げるまでの指導を行う。
授 業 計 画	履修者それぞれの研究内容と進度に合わせ、適切な方法論や資料の扱い方を教授する。
授 業 の 方 法	基本的に面談指導を行う。
成 績 評 価 方 法	論文執筆に向けての計画、資料収集の状況、執筆の進度、論文の内容、面談への取り組みなどを総合的に評価する。
教 科 書	なし。
履修上の注意・備考	十分な計画、資料、草稿を準備して面談に臨むこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コ ー ド	23-302-19	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	斎藤 兆史				
授 業 科 目	教育内容開発・論文指導 (言語教育・論文指導)				
講 義 題 目	外国語教育論文指導 Dissertation Research in Foreign Language Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	外国語教育関係の研究手法を教授し、最終的に論文を書き上げるまでの指導を行う。
授 業 計 画	履修者それぞれの研究内容と進度に合わせ、適切な方法論や資料の扱い方を教授する。
授 業 の 方 法	基本的に面談指導を行う。
成 績 評 価 方 法	論文執筆に向けての計画、資料収集の状況、執筆の進度、論文の内容、面談への取り組みなどを総合的に評価する。
教 科 書	なし。
履修上の注意・備考	十分な計画、資料、草稿を準備して面談に臨むこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-302-20	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	北村 友人				
授 業 科 目	教育内容開発・論文指導 (人文社会教育・論文指導)				
講 義 題 目	人文社会教育論文指導 Dissertation Research in Humanities and Social Sciences Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	修士論文を執筆するための指導を行うことが、本演習の目的である。
授 業 計 画	論文執筆を進めるうえで、以下の項目についての理解を深めることを目指している。1. 研究テーマの確定と研究課題の設定 2. 先行研究のレビューならびに理論枠組みの構築 3. 研究方法論とデータの分析 4. 研究のオリジナリティ 5. 論文執筆のための心得
授 業 の 方 法	受講者と新年度のはじめに面談を行い、それぞれの研究関心に沿った論文執筆のための指導計画を考える。なお、個別指導を中心とするが、必要に応じて集団での討論なども行うことがある。
成 績 評 価 方 法	学位論文の執筆へ向けて、個別にどの程度達成できているかを評価する。
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-302-21	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	北村 友人				
授 業 科 目	教育内容開発・論文指導 (人文社会教育・論文指導)				
講 義 題 目	人文社会教育論文指導 Dissertation Research in Humanities and Social Sciences Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	博士論文を執筆するための指導を行うことが、本演習の目的である。
授 業 計 画	論文執筆を進めるうえで、以下の項目についての理解を深めることを目指している。1. 研究テーマの確定と研究課題の設定 2. 先行研究のレビューならびに理論枠組みの構築 3. 研究方法論とデータの分析 4. 研究のオリジナリティ 5. 論文執筆のための心得
授 業 の 方 法	受講者と新年度のはじめに面談を行い、それぞれの研究関心に沿った論文執筆のための指導計画を考える。なお、個別指導を中心とするが、必要に応じて集団での討論なども行うことがある。
成 績 評 価 方 法	学位論文の執筆へ向けて、個別にどの程度達成できているかを評価する。
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コード	23-302-22	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	杉浦 幸子				
授 業 科 目	教育内容開発・論文指導 (芸術教育・論文指導)				
講 義 題 目	芸術教育論文指導 Dissertation Research in Art Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	主に美術教育に関わるテーマで研究論文を執筆するための指導を行う。
授 業 計 画	授業初回に、履修者個別の研究内容・計画をヒアリングした上で、論文執筆計画を立てる。執筆を進める中で、研究目的、設定した問題、先行研究レビュー、研究の理論的構成、研究方法、資料・データ分析などについての理解を深める。
授 業 の 方 法	授業初回に、履修者個別に面談を行う、それぞれの研究内容に沿って、論文執筆のための指導を行う。状況に応じて、個別指導とグループ討論を組み合わせる。
成 績 評 価 方 法	それぞれの研究への取り組みを総合的に判断して評価する。
教 科 書	なし。
履修上の注意・備考	なし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-302-23	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	杉浦 幸子				
授 業 科 目	教育内容開発・論文指導 (芸術教育・論文指導)				
講 義 題 目	芸術教育論文指導 Dissertation Research in Art Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	主に美術教育に関わるテーマで研究論文を執筆するための指導を行う。
授 業 計 画	授業初回に、履修者個別の研究内容・計画をヒアリングした上で、論文執筆計画を立てる。執筆を進める中で、研究目的、設定した問題、先行研究レビュー、研究の理論的構成、研究方法、資料・データ分析などについての理解を深める。
授 業 の 方 法	業初回に、履修者個別に面談を行う、それぞれの研究内容に沿って、論文執筆のための指導を行う。状況に応じて、個別指導とグループ討論を組み合わせる。
成 績 評 価 方 法	それぞれの研究への取り組みを総合的に判断して評価する。
教 科 書	なし。
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	履修を検討している学生は下のメールアドレスまで連絡すること。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-302-24	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	藤村 宣之				
授 業 科 目	教育内容開発・論文指導 (教育内容開発・論文指導)				
講 義 題 目	教育内容開発論文指導 Research of Dissertation				

授 業 の 目 標・概 要	小学校・中学校・高校の教科等の教育や関連する認知過程に関する実証的研究について、修士論文執筆に向けての論文指導を行う。心理学的アプローチによる研究を中心に、研究の進め方、論文の書き方などに関する指導を行う。
授 業 計 画	各参加者の研究テーマに関して、先行研究の検討、研究目的・研究計画の設定、実証的研究の実施、研究結果の心理学的分析、分析結果にもとづく考察について、研究の進行プロセスに応じて指導を行う。
授 業 の 方 法	参加者は、一人ずつ自身の教育内容開発コース修士課程の研究題目についてのプレゼンテーションを行い、その発表内容について、参加者全員で集团的に検討を行う。
成 績 評 価 方 法	授業におけるプレゼンテーションの内容、および授業への参加度にもとづいて評価する。
教 科 書	特に指定しない。
履 修 上 の 注 意・備 考	教育内容開発コースの修士論文作成に向けての研究発表を行うだけではなく、他の参加者の研究発表にも参加することが必須である。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-302-25	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	藤村 宣之				
授 業 科 目	教育内容開発・論文指導 (教育内容開発・論文指導)				
講 義 題 目	教育内容開発論文指導 Research of Dissertation				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	小学校・中学校・高校の教科等の教育や関連する認知過程に関する実証的研究について、博士論文執筆に向けての論文指導を行う。心理学的アプローチによる研究を中心に、研究の進め方、論文の書き方などに関する指導を行う。
授 業 計 画	各参加者の研究テーマに関して、博士論文の構想にもとづいて、博士論文を構成する個々の実証的研究について、先行研究の検討、研究目的・研究計画の設定、実証的研究の実施、研究結果の心理学的分析、分析結果にもとづく考察について参加者は発表を行い、研究の進行プロセスに応じて指導を行う。
授 業 の 方 法	参加者は、一人ずつ自身の教育内容開発コース博士課程の研究題目についてのプレゼンテーションを行い、その発表内容について、参加者全員で集团的に検討を行う。
成 績 評 価 方 法	授業におけるプレゼンテーションの内容、および授業への参加度にもとづいて評価する。
教 科 書	特に指定しない。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	教育内容開発コースの博士論文作成に向けての研究発表を行うだけではなく、他の参加者の研究発表にも参加することが必須である。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-303-01	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	村上 祐介、橋野 晶寛				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (教育政策研究・基礎研究)				
講 義 題 目	教育政策基礎論 Foundation of Education Policy				

授 業 の 目 標・概 要	この授業の目的は、教育政策・行政の研究に関する理論的視点や知識を習得することにある。単に教育に関する法制度や政策について知るだけでなく、教育政策・行政に関する理念・価値や考え方としてどのような類型や対立軸があるのかを理解し、教育政策・行政を考えるうえでの分析視角を獲得することが目標である。
授 業 計 画	※受講者の状況により、順序は変更することがある。※前半を村上、後半を橋野が担当する。1 授業に関するガイダンス 2 事前統制と事後統制 3 権力の集中と分散 4 集権と分権 5 統合と分立 6 民主性と専門性 7 個別行政と総合行政 8 教育政策・財政の基礎Ⅰ 9 教育政策・財政の基礎Ⅱ 10 教育政策・財政の基礎Ⅲ 11 教育政策・財政における諸問題Ⅰ 12 教育政策・財政における諸問題Ⅱ 13 教育政策・財政における諸問題Ⅲ
授 業 の 方 法	内容について討議を行いながら授業を進める。事前に課題文献を読んでおくことを前提とする。発表者を設定する場合は、事前または授業時に発表資料を提出する。前半については、教科書の該当章及び各回ごとに指定する文献を講読する。後半については、教科書の内容をふまえて教育政策・財政に関する洋図書について輪読する。13 回全てをオンラインによって行う。
成 績 評 価 方 法	平常点(授業への参加)とレポートによる。
教 科 書	村上祐介・橋野晶寛(2020)『教育政策・行政の考え方』有斐閣 Lovenheim, Michael and Sarah Turner (2018) Economics of Education, Worth Publishers.Fishkin, Joseph (2014) Bottlenecks: A New Theory of Equal Opportunity, Oxford University Press.
履 修 上 の 注 意・備 考	・事前に文献に目を通す時間を確保することが求められる。・教育政策・行政に関して学部レベルの知識を有していることを前提に授業を進めるため、教育政策・行政をはじめて学ぶ場合は、早い段階で学部レベルのテキスト(参考書に挙げている文献など)に目を通しておくことが望ましい。
そ の 他	前半、後半ごとに Zoom の URL を設定する。URL は LMS を参照のこと。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-303-02	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	小泉 広子				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (教育政策研究・基礎研究)				
講 義 題 目	教育法の現代的課題 Contemporary Issues in Education Law				

授 業 の 目 標・概 要	「教育法」とは、教育ないし教育制度に固有な法的しくみをいい、「教育法学」とは、教育にとって望ましいそうした法のあり方を研究する学問である。また、近年では、子どもにかかわる法体系やそのあり方を包括的に検討することを志向した「子ども法」という概念も広がりつつある。本講義では、学校教育や福祉領域における子どもの権利保障の現状と課題を、裁判事例や法制度を素材に、検討し、あるべき法解釈や立法論を考えていく。また、演習として、子どもの人権裁判を中心に、判例評釈の方法を修得する。
授 業 計 画	1. 子どもの権利条約からみた日本の子ども2. 教育法の機能的3種別3. 子どもの人権裁判概論4. 体罰と子どもの権利5. いじめと子どもの権利6. 校則と子どもの権利7. 障害をもつ子ども・青年の学ぶ権利8. 子どもの宗教的自由と学校教育9. 学校事故と子どもの権利 10. 児童虐待と子どもの権利 11. 貧困と子どもの権利 12. 乳幼児期の子どもの権利 13. 保育と子どもの権利
授 業 の 方 法	講義と演習
成 績 評 価 方 法	レポートによる
教 科 書	特に指定しない
履 修 上 の 注 意・備 考	受講者の指定文献や判例の報告を中心に講義を進めます。子どもの権利条約に関する国連子どもの権利委員会による、日本政府への第4・5 回最終所見に目を通しておくとうよいと思います。外務省のホームページから政府訳を入手できます。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-303-03	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	勝野 正章				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (学校教育経営・基礎研究)				
講 義 題 目	現代学校改革の諸問題 Issues in Contemporary School Reforms				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	現代日本(及び諸外国)の学校改革に関する政策や制度改革、及びその学校教育に及ぼす影響について、考察を深めることを目的とし、そのために必要な理論や概念の獲得を目指す。授業は、その週でとりあげる理論・概念や課題について、指定された文献の内容を基に議論を行い、理解を深める形で進める。参加者は、指定された文献を読んで、内容に関する意見・疑問を整理して授業に臨み、議論に参加することが求められる。
授 業 計 画	文献リスト及びスケジュールは3月末までにITC-LMSに掲示するので確認すること。
授 業 の 方 法	予め指定された文献を読んで、感想・意見・疑問点などをA4で1枚程度にまとめ、授業日の3日前(月曜日)午後9時までにITC-LMSを通じて提出すること。授業日には、感想・意見・疑問点を基に議論を行う。
成 績 評 価 方 法	課題の提出、及び授業での議論への参加を総合して評価する。
教 科 書	なし
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	なし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-303-04	単 位 数	2	学 期	S1S2
担 当 教 員	橋野 晶寛				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (教育政策研究・発展研究)				
講 義 題 目	教育政策研究方法論 I Research Design and Methods of Education Policy Studies I				

授 業 の 目 標・概 要	この授業では、教育政策研究・政策評価において必要とされる実証分析の方法について学ぶ。教育行政・学校経営分野での適用を念頭において、教育政策研究で用いられる機会の多い計量的手法について基本的な考え方を理解することを目指す。また、そうした手法の適用が対象である教育政策に関する知見の課題設定・前提・含意に具体的に何をもたらすか、という点を考察する。
授 業 計 画	前半の回で、教育政策研究の実証分析における基礎的手法について学び、後半の回では、それらを応用した教育政策・行財政および学校経営分野における実証研究の検討を行う。扱うトピックについては以下を想定している。1)統計的因果推論の諸手法 2)様々な従属変数の回帰モデル(一般化線形モデル・生存分析)3)計量テキスト分析時間の制約上全てに触れることができないため、初回に受講者と相談の上で扱うトピックを決定する。授業実施形態については、原則として対面で実施する。1. 近年の教育政策研究の動向と課題 2. 既習事項の復習(線形回帰モデル等)3. 教育政策研究における実証分析の基礎 14. 教育政策研究における実証分析の基礎 25. 教育政策研究における実証分析の基礎 36. 教育政策研究における実証分析の基礎 47. 教育政策研究における実証分析の基礎 58. 教育政策研究における実証分析の基礎 69. 実証研究の検討 110. 実証研究の検討 211. 実証研究の検討 312. 実証研究の検討 413. 実証研究の検討 5
授 業 の 方 法	文献輪読(発表・議論)による。
成 績 評 価 方 法	平常点(発表および授業中の発言)に基づいて評価する。日程の都合等で発表を担当できない場合は、期末に相応のレポートを提出してもらう。
教 科 書	特に指定しない。都度関連資料を配布する。
履 修 上 の 注 意・備 考	データ分析に関する入門的事項の理解があることが望ましい。
そ の 他	扱うトピックの候補および検討文献の詳細は、第 1 回授業資料(事前に LMS「教材」にアップロードしておく)を参照すること。

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-303-05	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	宗前 清貞				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (教育政策研究・発展研究)				
講 義 題 目	教育制度の公共政策分析 Public Policy Studies of Education Systems				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	この授業は、公共政策学の基礎的知識を習得し、それを教育政策や制度の分析・評価に応用できることを目的とする。具体的な政策領域において、従来は固有の知識体系を前提として分析が行われる事例が多いが、制度や政策は「広義の政治」の出力なので、政治学に由来する政策分析の考え方を習得することは重要である。本講義を通じて、政策過程に対する基礎的かつ主要なアプローチを理解し、学術論文執筆に活用できるようになることが目標である。
授 業 計 画	1.序説: 公共政策学という考え方(対面講義)「利益アプローチ」2.キューバミサイル危機の事例研究(調査発表)3.アリソンによる3モデルの理解(講義、討論)4.アクターアプローチ論文読解(討論)「アイディアアプローチ」5.行政改革とは何か(調査発表)6.アイディアアプローチ萌芽期論文読解(討論)7.アイディアアプローチ論文読解(討論)「制度アプローチ」8.制度論の背景と概要(学説史・講義)9.制度アプローチ論文読解1(討論)「行政学と政策研究」10.自殺研究読解(討論)11.児童虐待研究読解(討論)12.医療制度研究読解(討論)13.まとめ(対面講義)
授 業 の 方 法	講義セッションと演習を併用する。講義セッションでは事前指定された課題(予習を含む)を行って講義に臨み、教員からの質疑や受講生同士の討論も行う。演習の場合は、事前に指定された学術論文(研究書の抜粋を含む)を読み、要旨メモの作成や論点整理を行い、討論によって論文のエッセンスを把握する。なお、初回と最終回は対面で実施するほか、適宜ゲストセッション(授業で扱った論文著者によるオーサートークなど)を設ける予定。
成 績 評 価 方 法	平常点(授業への参加度、要旨メモの完成度、欠席回数)および課題リポート(書評または政策過程分析)による
教 科 書	秋吉貴雄・伊藤修一郎・北山俊哉(2020)『公共政策学の基礎[第3版]』有斐閣
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	この講義では政治学的知識の習熟を前提としていないが、時間の制約がある大学院講義であることを考慮すると、講師による個別フォローには限界がある。そのため、もしも政治学・行政学の知識に不安がある場合には、上述の参考書を必要に応じて入手し、適宜参照されたい。そのうえで質問がある場合にはできる限り対応する予定である。また授業で用いる論文等は(レポジトリ等で電子的に入手できる場合を除き)教員側で準備し配布する。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-303-06	単 位 数	2	学 期	S1
担 当 教 員	高井良 健一				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)				
講 義 題 目	教師のライフヒストリー研究 Exploring life history research focused upon teachers' experience				

授 業 の 目 標・概 要	教師のライフヒストリー研究は 1980 年代に欧米で広がり、オーラルヒストリーやナラティブ研究への注目とともに、2000 年代以降、日本でも事例研究の蓄積が生み出されました。その一方で、各々の事例研究が依拠する方法論についての省察は、ライフヒストリー研究者のこれからの課題として残されています。この授業では、教師のライフヒストリー研究の歴史を共有するとともに、事例研究の作品の検討を通して、各々の方法論のもつ特徴と課題を学ぶことを目標とします。
授 業 計 画	第1回 オリエンテーション第2回 個人史と教師のライフヒストリー研究第3回 草創期の事例研究 第4回 草創期の方法論第5回 時代を教師の経験から探究する第6回 カリキュラムを教師の経験から探究する第7回 教師の人生に協働での語りを通してアプローチする 第8回 教師の人生に協働での語り直しを通してアプローチする第9回 ナラティブに対する批判第 10 回 教師のライフヒストリー研究に対する批判的考察第 11 回 教師の語りの様式を読み解く第 12 回 教師のライフヒストリー研究の省察と解釈学的アプローチ第 13 回 ジェンダーによる不平等、トップダウンの教育改革の実態を照射する第 14 回 教師のライフヒストリー研究を行うということ ― 物語の規範化ではなく、エンパワメントされるスペースをつくる
授 業 の 方 法	授業はゼミナールの形式で行います。受講生は、あらかじめ指定された論文やテキストを読んだ上で、授業に出席することが求められます。初回の授業を除いて、各回の授業では、コメンテーターを担当する受講生は、レジュメを作成します。レジュメには、論文やテキストの簡潔な概要とコメンテーターの観点からのコメントを記載します。具体的には、毎回の授業は、次のような形式で行われる予定です。まずは、受講生による「教育研究と私」のコーナーから始まります。これは、スターターを担当する受講生が「教育研究に至ったストーリー」を語るものです。
成 績 評 価 方 法	成績評価は、毎回の授業におけるコメントの交流、ディスカッション、学びあいへの参加ならびにコメンテーター、スタータとしての発表等によって、総合的にを行います。
教 科 書	課題論文やテキストを準備します。
履 修 上 の 注 意・備 考	ライフヒストリーの鍵は「聴く」という営みにあります。受講を希望する人には、自分の経験の外に踏み出して「聴く」構えを共有することを求めます。また、この授業は、担当教員が受講生に対して即効性のある研究方法論を伝えるものではありません。そもそも担当教員はそのようなものを持ち合わせていないのです。この授業は、多様な教師のライフヒストリー研究から学びつつ、教師研究の難しさと可能性について学びあうものです。教師の人生と経験世界に深い関心を持ち、先人のテキストを媒介として、ほかの受講生とともに学びあうことを求める方々の
そ の 他	* 原則として、全回対面での授業を予定していますが、新型コロナウイルスの感染状況や担当教員のスケジュールの関係でオンラインでの授業が行われる可能性もあります。その場合は、Zoom によるリアルタイムのオンライン授業を行う予定です。

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-303-07	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	河野 哲也				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)				
講 義 題 目	対話的教育の理論と実践 Theory and Practice of Dialogical Education				

授 業 の 目 標・概 要	昨年 2022 年、子どもの哲学国際学会が東京で開かれました。”P4C (Philosophy for Children)”、“P4/wC (Philosophy for/with children)”と呼ばれる、子どもとともに大人が一緒になって哲学的なテーマについて対話する教育的活動は、日本でもこの 10 年間でかなり知られるようになりました。この活動は、教育実践として大きな意味を持つだけでなく、教育の意味や目的、子どもの社会参加・シティズンシップについて問い直す機会を与え、さらに、対話と思考の関係、「子ども」の存在の意義、発達・成長という概念、大人と子どもの関係について根源的な再検討を迫るものです。本授業では、「子どもの哲学」について理論・実践の両面で紹介すると同時に、哲学あるいは教育哲学の観点から、「子どもの哲学」の哲学のもつ教育学的意義、さらにそれが突きつける教育学・哲学・倫理学・心理学の問い直しについて、みなさんと考えていきたいと思います。
授 業 計 画	1 ガイダンス、序論：子どもの哲学とはどういう活動か？歴史と現在2 子どもの哲学の意義と効果、世界での活動現状3 子どもの哲学の方法と実践上の課題4 哲学的テーマとしての子ども：哲学と子ども性、遊戯と存在5 教育哲学的テーマとしての子ども：子どもと大人の関係、発達とは何か、教育の新しい目的6 政治哲学的テーマとしての子ども：真理と民主主義、子どもの自由、探究の共同体としての民主社会7 対話の哲学：対話とは何か、ケアと思考との関係、何が思考を命じるのか、対話と二人称の根源性8 対話的教育：対話と教育、何が対話を可能にするか、対話と暴力、沈黙と間合い9 教育的タクト：タクトの概念、わざ・パフォーマンス・即興の関係について、教育におけるタクト 10 哲学対話の実践(1)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 11 哲学対話の実践(2)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 12 哲学対話の実践(3)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 13 哲学対話の実践(4)：哲学対話を実践し、場づくりとファシリテーションの方法を学ぶ 14 全体の振り返りとまとめ
授 業 の 方 法	1回～8回は、講義形態を取り、レクチャーの後に質疑応答の時間を十分に取ります。9回～14 回は、哲学対話を実際に実践して、場づくり、対話参加の仕方、ファシリテーションの仕方を実践的に学んでもらい、実践の振り返りを行います。
成 績 評 価 方 法	平常点(授業での質疑応答の参加度、実践部分への貢献度など)と最終レポートで判断いたします。
教 科 書	河野哲也『自分で考え 自分で話せる：こどもを育てる哲学レッスン』(増補版)、河出書房新社、2021 年
履修上の注意・備考	子どもの哲学に関心のある方のみならず、哲学カフェや対話的な活動に関心のある方に向いています。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-303-08	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	SarkarArani MohammadReza				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)				
講 義 題 目	比較授業分析と教師教育学研究 Cross-cultural Analysis of Pedagogy and Teacher Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	受講者は、教師教育学に関する基礎概念や知識・技能について理論的・実践的な視点から習得する。また、国際と国内文献・先行研究のレビューをもとに、受講者は、教師教育研究の方法論の理解を以下の視点から深める。①専門職としての教師の発達とそれを支える現職教育の基礎概念・知識および具体的な取り組みを習得する。②高度専門職としての教師、およびその育成にあたる教師教育者 (teacher educator) に必要とされる資質能力の内実を考察する。③学術的研究による教師教育に資する基礎的知見・研究方法論を創出する。
授 業 計 画	第 1 回 オリエンテーション・本授業の目的・方針・進め方第 2 回～5 回 「改善の科学」としての「日本型授業研究」というモデルと「比較授業分析」という学術研究方法を通しての教師教育学研究の発展についての検討・考察(授業観察・授業研究・授業分析・比較授業分析を通してより有力な事実を見つける)6 回～9 回 教師教育学に関する基礎研究・方法論の創出(国内のアカデミックカルチャー・海外のアカデミックカルチャー・国内と海外の対話の可能性と対策・手法等)第 10 回～13 回 教師のリーダーシップの発達のモデルの検討・考察(教師教育者の備えるべき資質能力・教員養成教育カリキュラムの評価と実証的研究方法論・教育大学、研究総合大学と私立大学の教員養成カリキュラムの特徴等)第 14 回 授業の総括、反省会と意見交換等
授 業 の 方 法	授業方法の特徴としては、具体的な実践の事例(エビデンス)を基に個人の考察、ペア学習・グループ学習を行い、全体討論や個人の発表の機会を通してさまざまな考え・アイデア・対策(国内・国際)の特徴・特色を交換し、教師教育学研究について理解を深める。
成 績 評 価 方 法	授業で課すレポート(30%)習得、②授業中のペア学習・グループ学習の活動、探究学習報告、発表など(30%)獲得、③最終レポート(40%)考察 で評価する。合計 100 点満点で 60 点以上を合格とする。
教 科 書	特になし。
履修上の注意・備考	(1)配布した資料を読んで自分なりの考え・意見・感想などをもち、それらを基に授業中で話し合いの活性化するための努力・協力すること。(2)これまで学んできたこと・体験してきたことを基に、教師教育学についての知識を再構築してほしい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他大学生(特別聴講学生等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-303-09	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	濱田 秀行				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)				
講 義 題 目	国語科教育の理論と実践 The Theory and Practice of Japanese Language Education				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	今日の学校教育における国語科の授業実践とその理論について学ぶ。教科「国語」の公式の枠組みである「学習指導要領」の学力観・指導観や実際の授業事例、教科書教材について検討することを通して、国語科教育の理論を踏まえながら実践について議論ができるようになる。／Learn about Japanese language class practice and its theory in school education.
授 業 計 画	1. オリエンテーション 2. 国語科授業実践の基本的な枠組 3. 国語科学習指導の実際 4. 国語科の教科内容(「読むこと」を例に) 5. 「読むこと」をとらえ直す(教科書教材の構成) 6. 「読むこと」をとらえ直す(教材分析) 7. 指導と評価の一体化 8-9. 授業事例1の検討 10. 言語活動を通じた学習指導 11. 国語科学習指導の在り方を方向付ける諸テキスト 12-13. 授業事例2の検討
授 業 の 方 法	グループワーク, グループディスカッションを中心とする。
成 績 評 価 方 法	授業中の議論への参加状況とレポートから評価を行う。
教 科 書	文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 国語編』東洋館出版社
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	テキストは、文部科学省の Web ページから PDF ファイルをダウンロードし授業中に参照できるよう準備すれば購入しなくても良い。

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-303-10	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	永田 佳之				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)				
講 義 題 目	地球規模課題と ESD Global Issues and ESD				

授 業 の 目 標・概 要	教育が普及すればするほど環境はなぜ悪化するのか。もしそうであればそのような教育にどんな価値があるのであろうー環境教育や ESD の論客である David Orr が私たちにこう問いかけたのは 30 年ほど前である('Earth in Mind')。この授業では、この問いを基層に据え、履修者が各々の答えを探究していく。上記の問いの他にも幾つかの(正答のない問い)を共有し、それぞれの思索を深める契機とする。講義内容のテキスタイルとして、縦糸として「教育開発」を、横糸として「環境」や「持続可能性(サステナビリティ)」などのグローバルな課題を設け、人類にとって喫緊の問題である気候変動(気候危機)などのサブトピックも織り込んでいく。また、ポスト・コロナ時代における教育の在り方を幼児教育から高等教育に至るまで国内外の理論や原理、実践も紹介しながら考察を深める。
授 業 計 画	1 基本的な問いの共有2 持続可能な社会と教育3 環境教育・ESD・EfS4 エコフォビアを超えて5 プラネタリー・バウンダリーと未来世代6 気候変動の本質的な課題7 不確実性の時代と学校教育8 ESD の来し方行く末①9 ESD の来し方行く末②10 ESD for 2030 - SDGs と教育 - 11 世界の優良実践①12 世界の優良実践②13 日本の教育を捉え直す 14 人新世時代の教育学の課題 15 ポスト・コロナ時代の学校をデザインする
授 業 の 方 法	〈正答のない問い〉を中心に進め、グループ討議も適宜、取り入れていく。
成 績 評 価 方 法	授業への参加状況(発表・発言など)60%、レポート 40%を目安に総合的に判断する。
教 科 書	リチャード・ダン『ハーモニーの教育: ポスト・コロナ時代における世界の新たな見方と学び方』山川出版社、2020 年
履 修 上 の 注 意・備 考	事前に文献をよく読んで授業に臨むこと。
そ の 他	以下の URL も参照: ・気候変動教育プラットフォーム https://climate-empowerment.nagatalab.jp ・ BE*hive (暮らしから捉え直す SDGs) http://kyosei.u-sacred-heart.ac.jp/event/201207/ ・ Operation Green. https://operationgreen.info/ecoshift_school/

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-303-11	単 位 数	2	学 期	S2
担 当 教 員	杉浦 幸子				
授 業 科 目	学校開発政策・理論研究 (学校開発政策・発展研究)				
講 義 題 目	生涯学習時代の美術教育における鑑賞のデザイン Designing Appreciation in Art Education in the Age of Lifelong Learning				

授 業 の 目 標・概 要	生涯学習時代において、美術作品の「鑑賞」は、学校教育においてのみならず、社会教育機関である美術館、芸術祭といったアウトリーチの場、さらには福祉、医療、多文化交流、ビジネスの現場といった、広い意味での教育的な、多分野にまたがる専門領域においても、その重要性が認識されている。「鑑賞」という形のない体験のデザインに、さまざまな可能性が見出されている現状を踏まえ、この授業では、鑑賞の定義や歴史を概観し、国内外の事例を取り上げ、ディスカッションを行った後、実際のアート作品や展覧会を鑑賞するプログラムをデザイン・実施し、さらにそれを検証し評価することを通して、多角的に鑑賞のデザインについて学ぶ。鑑賞のデザインの対象者は、学校教育に限らず、乳幼児から高齢者、障がいの有無、国籍など、生涯学習の観点から広く設定していく。
授 業 計 画	以下の 13 回の授業内容を予定している。1.美術作品の鑑賞の定義と歴史 2、3、4、5.鑑賞に関連する文献講読 6、7、8.鑑賞プログラムのデザイン 9.鑑賞プログラムの実施① 10. 鑑賞プログラムの分析とブラッシュアップ 11.鑑賞プログラムの実施② 12.鑑賞プログラムの評価 13.まとめ
授 業 の 方 法	講義とディスカッションの後、個別またはグループで(受講者人数による)美術作品もしくは美術展の鑑賞プログラムをデザインし、プレゼンテーションを行う実践的な授業となる。関連文献、関連作品/展覧会は受講生と相談の上、選定する。鑑賞プログラムのデザインのために、授業時間外で、グループでのディスカッションを行う可能性がある。また、鑑賞デザインの現場で活動を行う専門家(美術館学芸員、アーティスト)が授業に参加する可能性がある。履修人数やコロナ感染状況、オンラインの通信状況によって調整や変更が生じる可能性がある。
成 績 評 価 方 法	議論への貢献とプレゼンテーション(50%)、最終レポート(50%)で評価する。
教 科 書	なし。
履修上の注意・備考	コロナ感染状況次第となるが、学外の美術館の見学(授業内で/各自)を行う可能性がある。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-303-12	単 位 数	2	学 期	集中
担 当 教 員	村上 祐介				
授 業 科 目	学校開発政策・実践研究 (教育政策研究・事例研究)				
講 義 題 目	教育行政事例研究 I Case Study in Educational Administration I				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	この授業は、教育行政学に関する理論研究・事例研究を講読し、この分野における論点や課題を理解することが主な目的である。前半は、教育行政学の理論的側面を論じた基本文献を扱い、後半は教育行政の専門性に関する文献を取り上げる。
授 業 計 画	授業に関するガイダンス第 I 部 教育行政学の理論教育行政学の展開、理論、課題について、基本文献を検討する。第 II 部 教育行政の独立性・中立性・専門性教育行政の独立性・中立性・専門性に関わる諸問題(政官関係、中立性、教育行政機関の組織・人事など)について、最近の研究を中心に検討する。
授 業 の 方 法	受講者は、集中講義の期間中 1 日につき 1 回以上(受講者数によっては 2 回以上)、当該文献に関する簡単なメモ(意義や疑問点など)を作成する。上記の資料やメモを基に議論を行う。
成 績 評 価 方 法	授業への参加度と提出された資料・メモの内容により評価を行う。試験は行わない。
教 科 書	開講時までに指示する(履修上の注意を参照)
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	詳しい予定と取り上げる文献については、開講時までに LMS に掲載する。LMS からのお知らせメールの配信が届く設定にするか、開講前に定期的に LMS を確認のこと。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コード	23-303-13	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	福島 尚子				
授 業 科 目	学校開発政策・実践研究 (学校教育経営・事例研究)				
講 義 題 目	学校経営実践の開発 I Developmental Study of School Management I				

授業の目標・概要	本科目は学校経営政策の動向を踏まえ、様々な領域における学校経営実践について調べ、その特徴や促進要件・阻害要件を分析し、より自律的な学校経営実践を開発する基礎的知識や能力を養うことを目的とする。そのため、各受講生には調査、分析、発表、討議などへの積極的参加を促す。
授 業 計 画	講義の前半では中央教育審議会答申「今後の地方教育行政の在り方について」(1998 年)などの学校経営政策上重要なものに触れ、近年の学校経営政策上の動向について踏まえる。講義の後半では、学校経営上の諸領域について先駆的な実践についてとりあげ、各回で討議・分析していく。
授 業 の 方 法	初回授業において授業の方法を説明するとともに、受講生による発表の役割分担をする。受講生はその興味関心や専門分野に応じて学校経営上の諸領域について分担をし、発表担当回までにその領域での先駆的な実践について、活字資料や先行研究などからその概要・特徴・意義・問題点・促進要件・阻害要件などについて発表できるようにする。各々その実践を分析する上でポイントになる事柄について論点をひとつ立て、各回の担当者の発表後、全員でその論点を討議する。
成績評価方法	発表担当回の発表内容や論点の立て方 40 点担当回以外の授業における参加度 30 点期末レポート 30 点
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	授業の出席はもちろんだが、授業への積極的参加を高く評価する。担当回における発表に向けて、自分が専門ではない領域ではあっても、その実践をより良くするため、これまでの教育学で学んできた様々な規範論・権利論、条理論や権限論を踏まえた意見や、個別の生育歴や経験を踏まえた素朴で素直な意見を大事にして欲しい。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コース 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 可

時 間 割 コー ド	23-303-14	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	村上 祐介				
授 業 科 目	学校開発政策・実践研究 (教育政策研究・実地研究)				
講 義 題 目	教育行政実地研究 Fieldwork in Educational Administration				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	自治体や学校をフィールドとして実際の調査を通じて教育政策の課題、教育行政や学校の改革動態について理解を深めることを目標とする。テーマや調査対象は参加者の討議により自主的に決定する。調査結果を報告書にまとめる。
授 業 計 画	テーマの設定、先行研究の検討、調査の計画・実施、データ分析、報告書の作成を小グループを単位として行う。原則として対面で授業を実施する。第 1 回 オリエンテーション第 2 回 量的調査・研究例の検討第 3 回 質的調査・研究例の検討第 4 回 班・テーマ設定第 5～9 回 班での作業第 10 回 中間発表第 11 回 班での作業第 12 回 班での作業第 13 回 最終発表
授 業 の 方 法	グループで計画を立て、調査・分析を行う。時間割上に設定された時間以外に調査を行う場合も生じること留意してほしい。
成 績 評 価 方 法	出席状況と報告書による。
教 科 書	特に指定しない。
履修上の注意・備考	・時間割上に設定された時間以外に作業を行う場合も生じることありうるので留意すること。・学校開発政策コース修士課程 1 年、および博士課程からの入学者で学校開発政策コースの実地研究を初めて履修する者は、原則として教育行政調査演習 I (学部・S1S2)と本科目を履修すること。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-303-15	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	橋野 晶寛				
授 業 科 目	学校開発政策・実践研究 (教育政策研究・実地研究)				
講 義 題 目	教育政策実地研究 Fieldwork in Education Policy				

授 業 の 目 標・概 要	教育政策に関する調査を通して、研究の構想および調査の設計を深めることを目標とする。受講生それぞれの研究テーマに即して研究計画を作成し、調査を進める。
授 業 計 画	初回授業時に、実地研究の方法と進め方について説明する。受講生各自が研究計画書を作成し、それについて議論を進めながら各自で研究を進めた上で、中間報告と最終報告を行う。授業実施形態については、オンラインとする。1. オリエンテーション 2. テーマ設定 3. 調査の計画 4~8. フィールドワーク 9. 中間発表 10~12. 調査データの分析と討論 13. 最終発表
授 業 の 方 法	受講生による研究報告と討論による。
成 績 評 価 方 法	中間報告、最終報告(レポート)によって評価する。
教 科 書	特になし。
履 修 上 の 注 意・備 考	特になし。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コー ド	23-303-16	単 位 数	2	学 期	A1A2
担 当 教 員	勝野 正章				
授 業 科 目	学校開発政策・実践研究 (学校教育経営・実地研究)				
講 義 題 目	学校経営実地研究 Fieldwork in School Management				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	学校経営の現場におけるフィールドワーク(観察、調査、実習・インターンシップ的なものも含む)を通して学校経営の理論的・実践的問題を研究する。
授 業 計 画	最初に受講生各自の研究計画書に基づいて、研究目的・テーマ・方法・計画の適切性、妥当性について協議を行い、その後は研究計画にしたがって各自で研究を進める。12 月に進捗状況を確認するための中間報告、年度末に最終報告を求める。
授 業 の 方 法	受講生の研究テーマや対象となるフィールドによって異なるため、個別に相談しながら決めていく。現職者には自らの勤務する教育機関などで職務を行いながら、問題解決のための研究をアクションリサーチとして実施することを勧める。
成 績 評 価 方 法	中間報告、最終報告(レポート)によって評価する。
教 科 書	なし
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	なし

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

時 間 割 コ ー ド	23-303-17	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	勝野 正章				
授 業 科 目	学校開発政策・論文指導				
講 義 題 目	学校経営研究論文指導 Dissertation Research in School Management				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	修士論文の作成、執筆を目的とした指導を行う。
授 業 計 画	具体的な運営やスケジュール等については受講生と相談して決めていく。
授 業 の 方 法	教育行政研究論文指導(村上准教授)、教育政策研究論文指導(橋野准教授)との共同の論文指導となる。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	なし
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	なし

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コ ー ド	23-303-18	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	勝野 正章				
授 業 科 目	学校開発政策・論文指導				
講 義 題 目	学校経営研究論文指導 Dissertation Research in School Management				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	博士論文の作成、執筆を目的とした指導を行う。
授 業 計 画	具体的な運営やスケジュール等については受講生と相談して決めていく。
授 業 の 方 法	教育行政研究論文指導(村上准教授)、教育政策研究論文指導(橋野准教授)との共同の論文指導となる。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	なし
履修上の注意・備考	なし
そ の 他	なし

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コ ー ド	23-303-19	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	村上 祐介				
授 業 科 目	学校開発政策・論文指導				
講 義 題 目	教育行政研究論文指導 Dissertation Research in Educational Administration				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	修士論文の作成、執筆を目的とした指導を行い、その完成を目指す。また受講者の研究計画を全員で検討することを通じて、自らの修士論文の作成・執筆に役立てる。
授 業 計 画	具体的な運営やスケジュール等については受講生と相談して決めていく。
授 業 の 方 法	学校経営研究論文指導(勝野教授)、教育政策研究論文指導(橋野准教授)との共同の論文指導となる。オンラインで授業を行う予定であるが、1、2 回程度、対面で授業を実施する可能性がある。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コ ー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-303-20	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	村上 祐介				
授 業 科 目	学校開発政策・論文指導				
講 義 題 目	教育行政研究論文指導 Dissertation Research in Educational Administration				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	博士論文の作成、執筆を目的とした指導を行い、その完成を目指す。また受講者の研究計画を全員で検討することを通じて、自らの博士論文の作成・執筆に役立てる。
授 業 計 画	具体的な運営やスケジュール等については受講生と相談して決めていく。
授 業 の 方 法	学校経営研究論文指導(勝野教授)、教育政策研究論文指導(橋野准教授)との共同の論文指導となる。オンラインで授業を行う予定であるが、1、2 回程度、対面で授業を実施する可能性がある。
成 績 評 価 方 法	平常点
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	特になし
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-303-21	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	橋野 晶寛				
授 業 科 目	学校開発政策・論文指導				
講 義 題 目	教育政策研究論文指導 Dissertation Research in Education Policy				

授 業 の 目 標・概 要	修士論文の作成、執筆を目的とした指導を行い、その完成を目指す。また受講者の研究計画を全員で検討することを通じて、自らの修士論文の作成・執筆に役立てる。
授 業 計 画	具体的な運営やスケジュール等については受講生と相談して決めていく。
授 業 の 方 法	学校経営研究論文指導(勝野教授)、教育行政研究論文指導(村上准教授)との共同の論文指導として実施する。
成 績 評 価 方 法	平常点による
教 科 書	特になし
履修上の注意・備考	・受講は、学校開発政策コース所属大学院生に限る。・今年度はオンラインで実施するが、初回もしくは 4 月のいずれかの回において対面で授業実施する回を設ける。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履修 不可
本 学 他 研 究 科 学 生	履修 不可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履修 不可

時 間 割 コー ド	23-303-22	単 位 数	2	学 期	通 年
担 当 教 員	橋野 晶寛				
授 業 科 目	学校開発政策・論文指導				
講 義 題 目	教育政策研究論文指導 Dissertation Research in Education Policy				

授 業 の 目 標 ・ 概 要	博士論文の作成、執筆を目的とした指導を行い、その完成を目指す。また受講者の研究計画を全員で検討することを通じて、自らの修士論文の作成・執筆に役立てる。
授 業 計 画	受講者と相談し、決定する。
授 業 の 方 法	学校経営研究論文指導(勝野教授)、教育行政研究論文指導(村上准教授)との共同の論文指導として実施する。
成 績 評 価 方 法	平常点による。
教 科 書	特になし。
履 修 上 の 注 意 ・ 備 考	・受講は、学校開発政策コース所属大学院生に限る。・今年度はオンラインで実施するが、初回もしくは 4 月のいずれかの回において対面で授業実施する回を設ける。
そ の 他	

本 研 究 科 他 コー ス 学 生	履 修 不 可
本 学 他 研 究 科 学 生	履 修 不 可
他 大 学 生 (特 別 聴 講 学 生 等)	履 修 不 可

vii. 教員のオフィスアワー及び連絡方法一覧	削除
viii. 事務室のオフィスアワー及び連絡方法一覧	削除
ix. 地図	削除